

バカとテストと召喚獣
I F 優子ちゃん in F
クラス物語

鳳小鳥

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

原作第一巻のIF物語。もし振り分け試験で倒れたのが姫路瑞希ではなく木下優子だったら？という妄想小説です。基本優子メインですが全キャラ満遍なく出ます。

誤字脱字がございましたら感想かメッセージまでよろしく願います。

目次

第1章 試験召喚戦争

問1	振り分け試験	1
問2	AクラスとFクラス	19
問3	自己紹介	32
問4	2人だけの昼休み	45
問5	恋愛感情／意識	62
問6	ラブレター。ラブレター。ラブ レター？	80
問7	それぞれの思惑	93
問8	木下優子の憂鬱	107
問9	交渉	123
問10	開戦の狼煙	136

問11	宣戦布告	151
問12	開戦／Dクラス	165
問13	終戦会議	217
問14	放課後の教室／前	224
問15	放課後の教室／後	237
問16	FクラスとCクラスの対談	255
問17	異端審問会	272
問18	ランチタイム／明久side	284
問19	ランチタイム／優子side	298
問20	根本恭二の策略	315

問 2 9	Aクラスへ宣戦布告	542
問 2 8	坂本雄二の戦略	529
477		
問 2 7	バカとテストと優等生	
463		
問 2 6	異端者には死の鉄槌を	440
問 2 5	姫路瑞希の人生で一番の……	
問 2 4	吉井明久の決意	417
問 2 3	決着／Bクラス	399
問 2 2	開戦／Bクラス	348
335		
問 2 1	Fクラスの変わらない日常	

(完)

問 3 7	バカとテストと召喚獣 I F	715
問 3 6	最後の戦い／2	698
問 3 5	最後の戦い／1	668
問 3 4	Aクラス戦開幕	647
問 3 3	ボーイ・ミーツ・ガール・ラブ	625
問 3 2	木下秀吉の煩慮	614
582		
問 3 1	島田美波の思い出／後	
560		
問 3 0	島田美波の思い出／前	

第1章 試験召喚戦争

問1 振り分け試験

——『文月学園』。

この学校は科学とオカルトと偶然によって開発された『試験召喚システム』を導入し、学力低下が嘆かれる今時代に革命をもたらした学校として世間から大きく注目されている試験校だ。

テストの点数がそのまま自分の力となる『召喚獣』を使い、『試験召喚戦争』というクラス間の対決によって勉強のモチベーションとクラス内のチームワークの向上を図っているらしい。

元が進学校なのでここではA〜Fというランク別にクラスが分けられており昇順でAクラスが一番学力が高い。

が、それだけではなく、文月学園ではクラスが上がるにつれてその設備までも変わっていくという極めて異例の試みが行われていた。

上は高級ホテル並から最下層は老朽化寸前のボロ教室とその差はかなり大きい。

Aクラスになれば一年間の優雅な学校を生活を。

逆にFクラスになれば困窮こんきゆうな一年間を強いられる。

これにより、学校に入学した生徒はなんとか良い学校生活を送ろうと躍起になって勉強するのだ。

しかし、一度下位クラスになってしまったとはいえ絶望するのはまだ早い。

救済処置として先の試験召喚戦争では勝者は敗者と設備を交換することができる。

よりよい学園生活を送るため、下位クラスは上位クラスに挑み上の設備を奪う。というのが試験召喚戦争の簡単な概要だ。

そして、そのクラス分けを決める『振り分け試験』がついに明日開始される。

『木下優子』が日付が変わる間近まで復習をしているのも、その理由の一つだった。

——が、

☆

「38度7分。……はあ」

……やってしまった。

振り分け試験当日。

この先一年間の命運を分ける大事な日に、アタシ、木下優子は体調を崩してしまった。「さすがに連日夜明け前までテスト範囲の復習するのはやりすぎたか……」

過去を悔やんだって意味はないけど、それでも言わずにはいられない。

必要以上の努力が裏目に出た。というのは正直かなりシヨックだった。

症状は主に頭痛、喉の痛み、吐き気、視界も波に揺られているようでおぼつかない。

どこかに手をついてないとぺたんとな膝から崩れ落ちてしまいそうぐらい不安定な自分の体。

疑いようがないぐらい、完璧な風邪だった。

「はあ、体だるい……。なんでよりにもよって今日に風邪引くかな……。最悪」

病気時特有のネガティブ思考に陥り暗い気分で嘆息する。

とは言ってもいつまでも嘆いているわけにもいかない。

普段なら仕方なく休むところだけど、今日の振り分け試験だけは絶対に休めない。

なにせこの振り分け試験次第でこの先一年の生活ががらつと変わってしまうんだから。当然欠席なんてことなったら無得点扱いになり問答無用で最下位クラス行きだ。

努力して結果的にそうなってしまふのは仕方ないけど、何もしないまま本意な結果だけを受けるのは絶対に嫌。

半ば意地になりながらアタシは休息を求める体に鞭を打って登校の用意を始めた。

制服に着替えて一階に降りると偶然木下秀吉、アタシの双子の弟と鉢合わせした。

「おはよう姉上。今日は待ちに待った振り分け試験じゃな」

「……………ええ。そうね」

「うむ？ なにやら元気がないがどうかしたのか？」

「別に、何でもないわ」

「そうかの…………」

秀吉に悪気はないけど、今の状況だとどうしても引き止める秀吉が煩わしく思えてしまいつい不機嫌な口調になってしまふ。

そんなアタシを秀吉は不思議そうに見上げていた。

ちくちくと刺さる罪悪感を感じながら、アタシは無言で秀吉の脇を通り過ぎた。

できれば家族には風邪を引いたことを知られたくない。

アタシが体調を崩したことを知ったら、両親は間違いなく休ませようとするだろうか
ら。

今のアタシだとその甘言に素直に屈してしまいそうで怖かった。

「あ、姉上、もう行くのか？ 朝ご飯はどうするのじゃ？」

「早めに登校して試験勉強はするから今日はいらぬ。ママにもそう言っというて」

「むう、事情は分からぬが今朝は一段と不機嫌じゃな。試験前でピリピリするのは分からんでもないがもう少し落ち着かないと途中でダウンしてしまうぞ?」

「余計なお世話よ。アンタは自分の心配だけしてなさい。じゃあね」

一方的に言いつけた後、アタシは玄関の扉を開けて外に出た。

絶好の晴天である青空には雲一つなく。陽光は一際強く光を放っていてその眩しさに思わず目を細める。

「……熱い」

首筋をゆつたりと通り抜ける春の涼風は心地いいのに、それに反抗するように体の熱は徐々に上がっていくようだった。

☆

——カリカリカリ

重苦しい緊張感が支配する教室の中で、シャーペンを走らせる音がいたるところから聞こえてくる。

席に付いている生徒達は様子は様々だ。スラスラとペンを進ませている者や頭を抱えている者、難しい顔で机の上の用紙と睨めっこしている者など。

だがその全員に共通しているのが、みんな普段とは段違いなほど真剣な面持ちということ。

……なるほど、これが難しいと噂される振り分け試験か。

僕、吉井明久はそんな教室の風景の感想を比較的穏やかな心持ちで脳内で呟いた。

あまり周りばかり見ていると監督している教師に目を付けられるので、僕は眼下にある自分の回答用紙に視線を落とした。

名前の欄に『吉井明久』と書かれた解答欄は大体七割ほど埋まっている。最初こそ萎縮していけど、正直ここまでできるとは思わなかった。

自己評価であまり自分は勉強ができるほうではないと自覚しているけど、運が良いのか今日は思いのほかよくできている。

確かに難しかったけど、これなら——いける！

嬉しさのあまり内心でガッツポーズをとって口元を軽く綻ばせる。

この調子だと“20点”は堅いはずだ。

このままいければDクラスは行けるかもしれない。

ふつつつふ、もう誰にも僕のことをバカだなんて言わせないぞ！

そんな栄えある未来に悶々としてしていると、

……はあ、はあ、

「……………ん？」

唐突に息苦しそうな吐息が隣から聞こえてきた。

気になり声のした方へ顔を向けると、右側の机には見知った顔の人が席に付いていた。て、秀吉じゃないか。

肩にかかる程度の長さの髪と比較的小柄でしなやかな体躯。

間違いない。その姿は去年一年間同じクラスで過ごした友人の木下秀吉だ。

どうみても可愛らしい女の子にしか見えないその姿。一年間共にしていた僕ですら時々目のやりように困る出で立ちで『男子』だというのだから世間の常識というのはよくわからない。

おまけに今日は正真正銘女子の制服で試験を受けているんだから誰が見たって女子だと思えらう。

さつきから吐息が荒れているけどひよつとして風邪でもひいたのかな？

「……………」

……………あれ？

そこでおかしな違和感を覚えた。

よく見れば制服だけでなく今日の秀吉は前髪の分け方も微妙に違っている。

雰囲気もいつもは来るものに笑顔を与える天使の煌きがあるのに、今日の秀吉は何故

か人を寄せ付けけない針のような鋭さを漂わせていた。

姿こそ秀吉のそれだけど、何故か僕の中の秀吉と目の前の少女の姿が重ならない。ていうかそもそも大前提として、どうして秀吉は女子の制服を着てるのだろう？ もしかして本当に秀吉は女の子だったの？

今日の秀吉は謎だらけだ。

と、そこで僕は前に秀吉から聞いた話を思い出した。

そうだ。確か秀吉には双子のお姉さんがいるって聞いた事がある。

実際に会ったことは不思議となかったけど、もしかしてこの人がそうだったりするのかな？

——ふむ。

覗き見るなんて失礼な行為なのは分かっているが、つつい気になり横顔をじっくりと観察してしまう。

何度見ても、その姿形はやっぱり秀吉に瓜二つだ。

もし本当にこの人がお姉さんなら、うーむ、さすが双子。本当にそっくりなんだね。二人並んだらどっちがどっちだかわからなくなりそう。

なんて思っている。

——がたんっ！

「なっ!?!」

思わず絶句する。

突然、ふらつと体が横に傾き、まるで糸の切れた人形のように木下さんの体が床に崩れ落ちたのだ。

「き、木下さんっ!?!」

僕は驚きのあまり立ち上がって大声を上げる。

解答用紙と睨めっこをしていた教室内の生徒達も何事かと一斉に木下さんの方へ顔を向けてきた。

そのざわめきを無視し、僕は無我夢中で倒れ伏した木下さんの背中を軽く持ち上げた。

少し逡巡してから無礼を承知で、開いてる手で彼女の額に手を当てた。

「っ」

熱い。木下さん。すごく熱くなってる。

さつきは簡単に風邪かもなんて思ってたけど、これ高熱じゃないか!

「大丈夫!?! ねえ!?!」

「あ……」

眼下で顔を赤くさせている木下さんの目が微かに開き僕を見上げる。

だが、まるで焦点があつていないかのように、その瞳は虚ろだった。それから少しして、小さい口から壊れたラジカセのように途切れ途切れに言葉が紡がれる。

「……あな……た。たしか……よしい……くん？」

「うん。そうだよ」

よかつた。ちゃんと意識はあるんだね。

ともあれ今の状態がいいはずがない。早く保健室へ連れて行かないと。

東の間の安堵を得たと思つた瞬間、かつかつ、と上品な足音を立ててメガネをかけたインテリチックな男性教師がこちらへやってきた。

「先生！ 彼女を急いで保健室に！」

「分かつています。……木下優子さん。試験途中での退席は欠席と見なし無得点扱いになります。それでもよろしいですか？」

「なっ!! ちよ、ちよつと待つてくださいい先生！」

あまりに冷酷な言い様に堪らず口をはさんだ。

倒れたから無得点なんて、そんなの横暴すぎるだろ！

「なんですか吉井君？」

「木下さんだつて風邪をひきたくてひいたわけじゃないのに、それで0点扱いなんてあ

んまりじゃないですか！」

「それが本校のルールです。テスト前は自身の体調管理も試験勉強のうち。倒れるのはそれを怠った木下さん自身の責任です」

「んなっ!？」

一瞬で沸騰した激情に脳内が真っ赤になる。

衝動的にこの教師を殴りつけてやろうかと思つてしまった。

倒れたのは木下さんの所為じゃないのに、そんなの、そんなのひどすぎるじゃないか！

その時、何か弱い力が僕の制服の袖を掴んで引つ張つてくるのに気が付いた。

横になつてしている木下さんの手が、力なく僕の制服を掴んでいた

背を軽く持ち上げている木下さんを軽く見下ろすと、彼女は何か必死に言おうとして、けれどうまく言葉が出ない様子だった。

「……………だ、よし……………、めて」

「何？ 苦しいの？」

「……………」

耳を近づけても、発せられるのは蚊のように小さい声でうまく聞き取れない。

そして、噴火しかけた僕の怒りを知つてか知らずか、直立している教師は今度は僕に

矛先を向けてきた。

「吉井君。これ以上時間を掛ける様なら、試験妨害と見なし貴方も無得点にしますよ？」
「僕の点数なんてどうでもいいよ！でも彼女が無得点になるなんて納得できません
!!」

「やれやれ……」

僕の怒声をまるで子供の我儘を聞くような態度で溜息を付く教師。こ、この野郎
……っ！

でも何度抗議しても話は平行線のまま。

結局、後から別の教師が教室にやってきて、僕は教室からつまみ出され木下さんは保
健室へと連れて行かれた。

☆

そして、新学期当日。

「……先生」

「何だ吉井？」

桜舞い散る校門前で、僕は目の前のスーツを着た筋肉隆々の教師、西村先生と向かい

合っていた。

去年一年間、僕のいたクラスの担任教師だった人だ。

趣味はトライアスロンというなんとも暑苦しいこの教師を、僕は愛称も込めて鉄人と呼んでいる。

僕の手には一枚の封筒が握られていた。ついさっきこの鉄人から受け取ったものだ。

上の部分を破くと、中には二つ折にされていた紙が入っていた、手の平程度の小さい紙には、筆と墨を使った大きく掠れた字で、

『吉井明久、F』

と書かれていた。

「どうして僕がFクラスなんですか!？」

納得いかない! 振り分け試験ではそれなりにいけたと思つてたのに!

「うん? なぜお前がFクラスかだつて? 簡単だ。それはな——」

「(ゴ)くんつ) ……それは?」

「——吉井がバカだからだ」

「だわばっ!？」

身も蓋もねえ!

「俺は去年一年間お前のことを見て、もしかすると吉井はバカなんじゃないのかという

疑いも持つてしまった。すまないな吉井。生徒に疑心を抱くなんて俺はどうかしていた。お前は真正正銘。疑いの余地のないバカだ」

「追い討ち!? それって追い討ちだよね!! 教師が可愛い生徒をいじめるなんて最低だ!」

「違うぞ。間違えるな吉井」

「へ?」

「お前はブサイクだ」

「ひどい!? 教師の言葉じゃない!」

新学期早々ひどい仕打ちだった。

僕は機関銃のような会話に息切れになって肩を大きく揺らして呼吸を整える。

そんな僕を見下ろす鉄人は若干軽やかな口調で口を開いた。

「悔しいと思うのなら、その気持ちを忘れずしっかりと勉学に励め。そうすれば来年はもつといい結果が出せるだろう」

「えー……、そんな遙か先の目標なんて持てないですよ」

「なら二カ月後の中間試験を目指せばいい。努力すれば必ずそれ相応の結果が返ってくるものだ。それが本人の望むものでなくともな」

「む、中々哲学的。でも僕この通り勉強苦手だし」

「なら俺が指導してやる。毎日放課後指導室で日が落ちるまで付き合つてやろう」
「謹んで遠慮します」

鉄人とマンツーマンなんてお金もらつてもやりたくない……。

花の学園生活が一転、灼熱の地獄巡りに早変わりしてしまう。

キーンコーン——、

「お、予鈴だ」

「そろそろ行け。遅刻しても知らんぞ」

「そんな、ここから校舎まで五分もあれば余裕ですよ」

「どうせお前は寄り道するだろう。それを踏まえた上で言っているんだ」

さすが元担任、完全に見透かされていた。

うっ、分が悪い。ここは一時退散しよう。

「じゃ、じゃあまた」

鉄人に別れの言葉を告げて校門を通り抜けようとする。

その時、

「おはようございます」

背後から鈴の音を転がしたような軽やかな挨拶が聞こえてきた。

うん？ こんなぎりぎりの時間に登校なんて誰だろう。

気になって後ろを振り向く。

あれは——木下さんだ。

忘れるはずもない。つい数日前に僕は彼女のことで一悶着起こしたんだから。

驚き目を丸くする僕を他所に鉄人と木下さんは校門前で挨拶を交わしていた。

気のせいか、木下さんの表情は少し暗い気がする。

「おはよう。少し遅刻だぞ木下」

「……すみません」

「まあいい。今回は件はショックも大きかっただろうからな。こうして登校してきてくれただけで先生は安心だ」

「いえ」

「元気を出せ。なんて言う資格は教師である俺にはないが、俺個人としてはこれにめげず来年の振り分け試験も頑張つてほしいと思つている。木下には窮屈だろうがな」

「そんなことないです。ありがとうございます」

「うむ。……もうすでにわかっているだろうが、これがお前の新しいクラスだ」

そう言つて、鉄人は僕がもらったやつと同じ封筒を木下さんに手渡していた。

けど、まるで自分のクラスが分かっているかのように木下さんはそれを開かず、そのまま鞆にしまった後、鉄人に軽く会釈していた。

その一部始終を案山子になって眺めていた僕は鉄人の声で我に返った。

「ん？ 何だ吉井。まだいたのか」

「え、ええまあ……」

「そうか。ちようどいい。お前も無関係ではないしな。これから同じクラスになるのだから気さくに話せる相手がいれば少しは気も紛れるだろう」

「そ、それってどういうことですか先生？」

「この先一年間、木下とお前は同じクラスだからこれをきっかけにお互いの支えあつていつてほしいと言っているんだ」

「は？」

鉄人の台詞に僕は軽く放心してしまった。

理解不能な鉄人の言動と状況に頭が追いついていない。

え？ え？ それってどういうこと？

木下さんと同じクラス？ 誰が？ 僕？ 何で……？

気が付くと、木下さんは一歩前に踏み出し僕の前に来ていた。

そして、困惑状態の僕を無視して、挑戦的なつり目とは少し不釣合いの、淡々とした口調で告げてくる。

「はじめまして吉井君。アタシは木下優子。同じFクラス同士、これから一年よろしく」

これが、僕の最低クラス生活の始まりだった。

問2 AクラスとFクラス

「なんだろう。このバカでかい教室」

去年は学年の都合上あまり立ち寄りなかつた新校舎の三階に来ると、通常の数倍はありそうな広さの教室が目に入り立ち止まった。

「何してるの。早く行かないと遅刻するわよ」

校門から一緒にここまで来た木下さんが振り返って言う。

でも心配は無用だ。何故ならもうすでに本鈴は鳴り終わっているから。

校門の前で鉄人と木下さんの会話を聞いているうちにとつとに残り時間は終わってしまっていた。

そんなわけで、これ以上急いでも意味なしと諦めのんびりと校舎内を歩いてきたのだ。

「いや、それはもう手遅れだし。それよりこの部屋なんだろう。なんか無意味に大きいよね」

「そこ、Aクラスよ」

「へえ、ここがAクラスかあ——つてええつ!? Aクラスウツ!」

広っ！ 教室の規模じゃない！

「すごい……まるでホテルみたいだ」

思わず驚嘆の言葉が口から漏れ出る。

「当たり前よ。ここは学年最高ランクの成績を持つ生徒を集めた所なんだから。設備だつてその分豪華になるわ。まあ、アタシもこれはちよつとやりすぎだと思うけど」

「だよ。なんかこれだと綺麗すぎて逆に集中できなさそうだよ」

「貴方はどこにいても同じでしょ」

「う、うもつともです……」

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしくおねがいします」

ふいに教室内から女の人の声が聞こえてきた。

気になって窓から覗き込むと、髪を団子状に丸めスーツを着ている知的な女性教師の姿が見えた。

その背後のプラズマディスプレイには、高橋洋子と大きな字が表示されている。

「まず支給品の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他設備に不備のある人はいますか？」

うわあ、なんか漫画喫茶みたい。

冷蔵庫には飲料類が入っているしお菓子とかの食料も完備されてるなんて。

一回でいいからあの座席に座ってみたいなあ。

その後も長々と設備に関する説明をした後、クラスメイトの自己紹介へ移行した。

最初に立ち上がり教壇の前まで来たのは、Aクラスの代表らしい黒髪を腰の辺りまで伸ばし物静かな雰囲気を漂わせる女の子だ。

クラス代表ということはつまりこのクラスで一番成績が良かった人だ、さらにAクラストップとなれば学年トップと同位だ。

自然、視線がその子に集まっていく。

かく言う僕も何か神々しいものを見るかのごとくその光景を眺めていた。

「……霧島翔子です。よろしくおねがいします」

だがそんな視線など物ともしないで、緊張など皆無と言わんばかりに淡々と挨拶をして、一礼する霧島さん。

「あんな可愛い子が学年トップなんだ。すごいなあ」

「やっぱり代表になったのね。霧島さんは去年も学力テストの順位はすべてトップだったもの」

「……天才っているんだなあ」

米粒程度でいいのでその才能を僕に分けてほしいよ。

なんて感想を呟いているうちに、自己紹介は次の生徒に移っていた。

霧島さんと入れ替わる形で恥ずかしそうに壇上に立ったのは、僕もよく知っている人だった。

「はじめまして、姫路瑞希です。よろしくおねがいします。一年間、学年次席として恥ずかしくないよう努力していきたいと思っております」

小柄な体と霧島さんと同じぐらいの長髪で顔を赤らめて自己紹介する姫路さん。

「あ、姫路さんだ」

「知ってるの？」

「うん。住んでる家が結構近くで小中と同じ学校だったんだ。けど話した事はほとんどなくて知ってるって言うのも僕の一方通行なだけだね。そっか。多分そうだと思うんだけど姫路さんもAクラスかあ」

「……………」

感情の読めない顔で、木下さんは窓から姫路さんの姿を見ていた。

縮こまりながらも必死に口を開くその姿は非常に可愛らしく、また支えてあげたい保護欲を掻き立てられる。

あー、やっぱり綺麗だなあ姫路さんは。

軽く見とれていると、横で静かに教室を眺めている木下さんの顔が目に入った。

「……………」

窓を覗き込む木下さんの横顔を見て、ふと僕は先日の試験のことを思い出していた。そういえば、木下さんだつてきちんとテストを受けられていれば今頃この輪の中にいたはずなんだよね。

それが、たった一度の、小さなミスで仲間外れにされてしまった。

この窓を挟んだ一枚の壁の先は、彼女にとってどれほど遠い光景になっているんだろうか。

今更ながら、僕は興味本位でAクラスに立ち寄つた配慮のなさに後悔の念を覚え始める。

今も和気藹々とした教室内を覗く木下さんの心情は今の僕には理解できなかった。

「あのさ。木し——」

心配になつて声を掛けようとする、唐突に木下さんは窓から視線を外して口を開いた。

「そろそろ行きましょ。いつまでもここで盗み見してもしかたないわ」

「つと、そうだね」

出鼻を挫かれた。まあいいか。機会はこれからいくらでもあるんだから。

それより僕達もそろそろ自分のクラスへ行かないと。

先に歩き出す木下さんに遅れないよう、僕も走らない程度の速さでその後を追いかけた。

☆

渡り廊下を経由して旧校舎へ来た僕達を待っていたのは、腐った木材を集めて適当に作った寺小屋のような教室だった。

「なんだろう。このポロっちい教室は、ていうか——教室？」

「……………」

さつきとは打って変わって廃墟のような凄惨な教室に呆然とする。

『二年F組』と書かれたプレートの前で、僕達はしばし立ち尽くしていた。

「……………想像以上にみすぼらしい教室ね。本当にここであつてるのかしら？」

「さつき見たAクラスとは天と地以上の差だね……………でも確かにここにFクラスつて書いてあるし、中から声も聞こえてくるからここだろうね」

「……………はあ」

露骨に嫌そうな表情で溜息を付く木下さん。その気持ちは良く分かる。

僕も思わず回れ右をしたくなったほどだ。

外から見ただけで分かるこのボロさ。とても手入れがされているとは思えない。

「と、とりあえず入ろっか？」

引き戸に手を掛けながら先を促す。

唯でさえ僕達は遅刻している身、さらにこれ以上悪印象を持たれるのはお互いによくはないはずだ。

木下さんは若干不安そうな面持ちで扉の向こう側を見つめているようだった。

きつと最低ランクの成績者が集まるFクラスに自分が溶け込めるか心配しているんだろう。

校門で言われた鉄人の言葉を思い返す。

よし。こういうときこそ、僕がしっかりサポートしてあげないと。

「大丈夫だよ。きつとFクラスだってみんないい人たちで今頃は僕達が来てないことを心配してるはずだよ」

「……吉井君ってポジティブね」

「そうかな？　僕だってクラスに馴染めるかどうか心配だし嫌やつとかいかなかった不安だよ」

「……………」

「でもずっとそれだと前に進めない。——だからせめて信じようよ」

「……何を？」

「勿論、クラスのみんなを」

かっこよく決めて、僕は教室の扉を開いた。

ガラッ！

「すみません。ちよつと遅れちゃいました♪」

「早く座れ、うじ虫野郎！」

「おらあ!!」

「のあ!? 明久てめえいきなり何しやがる!」

「返せ! 僕の純情な気持ちと五秒前のかっこいいキメ台詞を返せ!!」

「入ってくるなり意味わからんことを抜かしてんじゃねえよ!」

扉を開けた途端に突然失礼な罵倒をしてきたのは、去年の同じクラスで僕の悪友でもある坂本雄二だった。

「な、なんなの……?」

入室後一秒で始まった乱闘に扉の前で木下さんが驚いている。

僕に意識を向けていた雄二は、そこで初めて木下さんの姿を発見した。

「あん? なんだ木下姉と一緒だったのか」

「うん——つてちよつと待って雄二。木下さんがFクラスだつて知ってたの!」

「当たり前だ。俺はクラス代表だからな。クラスメイト全員の顔と名前を知らなくてどうする。事情もそれなりに把握してるともりだ」

さも当たり前のように言う雄二。

でも、長い間この男の友人だった僕からして、その台詞はかなり意外だった。

「いや、雄二にしては随分真面目だなあと思ってた」

「俺だつてたまには真剣になるさ」

意味深に唇の端を吊り上げながら言う。怪しい。怪しすぎる。

昔は神童なんて呼ばれていたやつのことだ。絶対何か裏があるに違いない。

「ねえ、そろそろい——きやあつ!」

蚊帳の外に置かれていた木下さんが教室内を歩く途中、何か突起があつたのか目の前でバランスを崩した。

「おっと」

それを一番近くにいた僕が倒れないよう両肩を掴んで支える。

途端、手の先から伝わる女の子特有の柔らかい感触に思わず心臓の鼓動が一段階跳ね上がった。

ああ。それにしてもどうして女子ってこんなに良い匂いがするんだろう。

「だだ大丈夫、木下さん……?」

「え、ええ、ありがとう吉井君」

「怪我とかしてない？」

「うん。なんとか」

「そっか、良かった」

手で肩を支えているので自然、顔と顔が近くなる。

改めてみる木下さんの正面顔はやっぱりすごい綺麗で、見ているだけで幸せになれるような気持ちになれた。

僕の心臓はバクバクと音が聞こえるぐらい鼓動を打ってる。

この感情の正体はわからないけど、なんだかすごく嬉しい気分！

その時、

「吉井iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ!!!」

「ん?」

ゴスツ!

突然真横から頬に何か硬い感触がぶち当たって僕は豪快に吹っ飛んでいた。

悲鳴を上げる暇もない。

気づけば、僕は壁に全身をぶつけて床の上でのびていた。

「…………え？」

いきなり目の前から人が消えたように見えたのか、さつきまで目の前にいた木下さんは立ち尽くしたまま呆然と眩く。

そりゃあ人がいきなり壁にめりこんだら驚くよね——って、冷静に観察してる場合じゃない！

「誰だ今僕を吹っ飛ばしたのは！」

「ウチよ」

「え？ なっ!? し、島田さん…………」

「ハロロー吉井。新学期早々朝からお熱いことねー。なんだかむかついてつい蹴っちやっただわ」

まったく悪びれもなくそう答えたのは、雄二と同じく去年同じクラスで僕の天敵でもある島田美波さんだった。

「ついで人をふっ飛ばさないでよ！」

「うっさいわね。あんたが登校早々いちやいちやしてるのが悪いんでしょ！」

「ただ転ぼうとしてたのを助けただけだよ！」

「…………どうだか、どうせ肩に手を当ててた時に柔らかいな。とか思いながら興奮してたんでしょ」

それは否定できない。

「あの、島田さん——」

「えーと、ちよつと通してもらえますか?」

木下さんが何か言い出しかけた時、ガラリと音を立てて背後からさえない感じのおじさんが教室に入ってきた。

見た事ない顔だけど、ひよつとして担任かな?

「それと席についてください。これからHRを始めますので」

やっぱり教師か。

「はい」

「うーっす」

それぞれ適当な返事をしてから各々の席へ戻る。

……あれ? そういえば僕の席ってどこ?

「先生。僕の席はどこですか?」

「開いているところに適当に座ってください」

「席すら決まってるの!?!」

恐るべしFクラス。

生徒への配慮の適当さが手に取るように伺える。

「……本当に大丈夫なのかしら、このクラス」

ぼそつと呟かれる木下さんの言葉に、僕は内心で激しく同意した。

問3 自己紹介

そんなこんなで、ようやくFクラスのHRが始まった。

最初は例によって、クラスメイトの自己紹介からだった。

「……………土屋康太」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

この二人も僕の去年からの友人。

しかし、ここまで全員が一同に会しているともはや運命的な何かを感じずにはいられない。

それにしても、なんと男子が多い事か。クラスメイトの九割は男だった。

半ば予想していたとはいえなんともむさいクラスだ。

唯一の女子組が木下姉妹（誤字にあらず）だけだなんて、まったく潤いがない。

「……………今吉井の方から失礼な気配を感じたわ」

「あはは、やだなあ島田さん。僕が失礼なことなんて言う筈ないじゃないか」

向けられた殺気を笑顔で回避する。危ない危ない。危うく栄えある新学期初日が僕の命日になるところだった。

流れるように生徒達の紹介を済ませていって、次は僕の横の席に座っている木下さん（姉）の番になった。

何人かの男子の脇を通り過ぎながら、教壇の前に立った木下さんは機械のように抑揚のない声で言葉を紡ぐ。

「秀吉の姉の木下優子です。一年間よろしく」

用件だけを簡潔に答えた当たり障りのない自己紹介。

それだけ言うことやめることは終わったとばかりにあつさり自分の席に戻ろうとする。が、ここで今まで誰にもなかった反応があった。

「はい！ 質問」

クラスメイトの一人が手を上げて言った。

「………何？」

「どうしてここにいますか？」

聞きようによつては失礼な質問。

だが、この状況においてそれはクラスメイトのほぼ全員が感じていた共通認識だ。

何せ秀吉のお姉さん。木下優子さんは定期テストで常に上位ランカーにいる成績の持ち主だからだ。

事情を知らない人からすれば、そんな優等生が成績最低ランクが寄せ集められるFク

ラスにいる理由が思いつかないのだろう。

「振り分け試験の日に体調を崩してしまったからよ」

木下さんの言い分を聞き、教室内にいる生徒の大半がなるほど、と頷いた。

振り分け試験に欠席した人は0点扱いになる。

試験当日に倒れてしまった木下さんはそのままテストを受ける事ができず、結果的にFクラスになってしまったというわけだ。

僕は木下さんがまだ立っている壇上の前に顔を向けていると、ちよいちよいと横から袖を引っ張られた。

「うん?」

引っ張られた方に顔を向けると、そこに秀吉の姿があった。

「どうしたの秀吉?」

「ちよつとお願ひしたい事があつてのう。雄二、ムツツリー二も良いか?」

「あん? なんだ秀吉」

「……………」

声を掛けられた二人がひっそりと集まってくる。

ちなみにムツツリー二とは土屋康太の秘めた性癖を隠すむつつりスケベからとられたあだ名だ。

三人が一つのちゃぶ台に雁首をそろえると、秀吉は周りに聞こえないよう小さな声で言った。

「……あまり大声では言えないのじゃが、しばらく姉上を放っておいてほしいのじゃ」「放っておくつて……、どうして?」

僕が問い返すと、秀吉は難しい顔で、

「顔には出さぬが、姉上は今回の試験の結果で相当落ち込んでしまつてのう。シヨックの所為で部屋に引きこもつた時期もあつたのじゃ。ワシも慰めたのじゃがあまり効果はなかつた。……今はそこそこ回復してきたようじゃが、それでも完全に傷が癒えたとは思えぬ。だから今はそつとしておいてやつてほしいのじゃ」

「……なるほど、時間が木下の傷跡を直してくれるのを待つてくれということか」

「うむ。早々に試験召喚戦争を行つて姉上の愁いをてつとりばやく吹き飛ばすというのも考えたが、今の姉上がそれに頷いてくれるとは思えぬ。本人にその気がないので返つて逆効果になりかねんし、何よりそんな人間では戦力にならんじやろう」

「確かにな」

「……………心の傷は自分にしか治せない」

「そんな、僕木下さんがAクラスで勉強できるよう試召戦争をしない? つて相談しようと思つてただけだ」

こんなかび臭い教室にいるより、木下さんはふさわしい教室で勉強をすべきだ。

文月学園にある試召戦争は勝ったほうが負けたほうと設備を入れ替える事ができる。

もし僕達がAクラスに勝てれば、勝者の特権としてAクラスの設備を奪うことも可能だ。そうすれば木下さんはAクラスの設備で快適な生活を取り戻せると思っていたのに。

「済まぬな。その気遣いだけはありがたいのじゃ」

「つまり、木下の状態がよくなるまで試召戦争はできないってことか」

「姉上を加えぬ。というのであれば話は別じゃが」

「さすがにそれはきついな。明久もそうだが、俺も試召戦争をやろうと思っていたんだ」

「そうなの？」

「……………初耳」

「ああ。……世の中学力だけがすべてじゃないって、そんなことを証明してみたくてな」

ふっ、と苦笑しながら雄二は呟く。

「だがその要の戦力となる木下姉が不参加とあっちゃあ大分戦力が落ちる。木下がいないとなるとAクラスに勝てる可能性は万に一つもないだろう」

「そっか。召喚獣はテストの点数がそのまま強さになるもんね」

「ああ」

召喚獣の力は担当科目の点数によって変わる。

当然点がよければその分召喚獣も強くなるけど、逆に点数が低いとすぐにやられてしまう。

そんなルールの中で学力最低のFクラスにおける学年上位の成績の持ち主である木下さんは、ある意味Fクラスのジョーカーだったのだ。

秀吉の嘆願を聞き、雄二は少し考えるように間を置いた後、わずかに頷いて答えた。「わかった。痛恨の極みだが、事情が事情だ。しばらく試召戦争は見送ろう」

「ありがとうなのじゃ雄二」

「気にするな。別にずっとするなってわけじゃないんだ。いつか機会は訪れるだろうや」

雄二は悔しきなど微塵もないかのように、口を三日月にして言った。

こういう自由さ。自体をありのままに受け入れてそれに対して何の未練の感じさせない気遣いと度量の深さは数少ない雄二の長所だ。

でも、僕は雄二みたいにあっさりと頷く事はできなかった。

試召戦争ができないんじゃないやあ木下さんはFクラスのままで。時間が傷を癒してとは言うけど、Fクラスの中でそれができるとは思えない。

やっぱり木下さんはここにいるべきじゃない。ちゃんとした設備が充実したAクラ

スに行くべきだ。

何か、何か方法はないのだろうか。

「ねえ雄二」

「何だ？」

「……あのね」

「四人で一箇所に固まって何してるの？」

「つつつ?!」

突然意識の外から発せられた声に心臓が破裂するかと思うほど驚いた。

恐る恐る声のした方に顔を向けると、自己紹介が済んだ木下さんが席まで戻ってきているところだった。

まずい。さっきの密会の内容は秘密厳守だ。

ここで彼女に感づかれたら余計に悪影響を及ぼすのは必定。

僕は即座にアイコンタクトを三人に送ると、みんな一斉に頷いてくれた。さすが持つべきものは友人だ。

「い、いやー前に西村先生に没収されたゲームをどうやって取り返そうかなーってみんなで相談してたんだよ！ ねっ雄二！」

「ああ！ 俺もウォークマンをとられっぱなしだったからなあ！ やられっぱなしって

いうのは性に合わないんだよ」

「ワシも演劇の小道具が恋しくてのう！」

「……………秘蔵のデータが入ったメモリーを取り戻したい！」

慌てて口上を並べ立てる僕達。ここらへんのコンビネーションはばっちりだ。

「ふうん、そ」

特に言う事もないのか、それだけ言つて木下さんは席に戻つた。ふう、危なかつた。額に付いた汗を拭いながら胸を撫で下ろす。

畳の上にペタンと座つた木下さんは、別段変わったと所はないように見えるけど、秀吉が言うにはあれは演技なのだろうか？

……………そういえば、校門前で木下さんと会つた時、なんだか元気がなかつたように思へたことを思い出す。

あれがもし木下さんの“素”なのだとしたら、今の木下さんは無理して人前に立つてゐるのかな。

もしそうなら……………秀吉にああ言われたけど、やっぱり放つておくなんてできない。

僕程度の間でも何かできる事はあるはずだ。

決意を新たに、次は自分の番となつたこと告げられた僕は悠然と席から立ち上がった。

☆

そうして時間はゆったり流れていき、気が付くとお昼休みの時間になっていた。

ようやく重たいものから解放されたような気分です。僕は両腕をめいっぱい高く伸ばした。

「時間つてすぎるの早いよねー」

「吉井は授業中ずっと寝てたからじゃない」

「……いやー、先生の言葉って新手法の催眠術にしか聞こえなくてね」

授業中の先生の説明には睡眠欲を促進させる魔力が宿っているんじゃないと思う。

僕の台詞を聞いた島田さんは呆れるように溜息を付いた後どこからともなくお弁当をとりだした。

「まったく、それよりご飯食べましょ。ウチもうお腹ぺこぺこ」

「了解。ちよつと待ってね。今水と塩出すから」

「明久よ。それは世間一般で昼食とは言わんぞ」

横から秀吉が顔を出して言う。

「あんたまだそんな食生活送ってたの？ いい加減死ぬわよ？」

「し、仕方ないじゃないか。生活費がぎりぎりでもとにご飯買うお金もないんだから」
「それはお前がゲームを買いあさって生活費を削ってるからだだろう。完全に自業自得だ」

「……………(すつ)」

雄二とムツリーニがお弁当を持ってやってきた。

うう、みんながお弁当を広げると途端に僕の周りだけが寂しくなるよ。

「ん？」

なんとなく扉の方を見やると、木下さんがお弁当片手に教室を出て行く姿が見えた。
友達のとこへ行くのかな？ それとも一人で食べるのだろうか？

「……………」

勝手な推測だけど、今の木下さんの心境で友達と和気藹々とする光景が想像できない。
い。

となると、やっぱりどこか人のいない場所に向かったんじゃないかな。

そこで僕は閃いた。これは、もしかするとチャンスかもしれない。

「ごめん。僕ちよつとトイレ入ってくるよ」

ご飯を食べ始めた雄二達にそう言い残して、僕は走って廊下に飛び出た。

それほど時間差もなかったおかげか。探すまでもなく木下さんの姿は簡単に見つ

かった。

よし、これならいける！

後ろ姿を見失わないよう、僕は駆け寄りながら呼び止める声を上げた。

「ちよ、ちよつと待って！」

「……………」

足音が止まり、木下さんが後ろを振り返る。

その目が、走ってきた僕を不思議そうに眺めていた。

「吉井君、何か用？」

「その……………大したことじゃないんだけど……………えつと、木下さん。これからお昼……………だよ
ね？」

「そうだけど、だから？」

「誰かと食べるのか、そういう予定あるのかな……………」

「……………別にないけど」

「そうなんだ。良かった。じゃあさ、その……………よければ僕と一緒に食べない？」

「どうして？」

「どうしてって……………、なんて言えばいいのかな……………」

頭より先に勢いで口が反応してしまい正直自分が今何を言っているのかすら定かで

はない

やばい。これは想像以上に緊張する。

女の子を食事に誘うなんてこれまでしたことなかったしなあ……。

くうっ?! おかげでせっかく考えていた『吉井明久。女子をお昼に誘う10の方法』も全部忘れてちやったよ!

……女の子と会話するのってこんなに神経すり減らす作業だったっけ?

だが僕として一人の男。ここで引き下がるわけにはいかない。

ここは一つびしっと決めなければ!

「僕は木下さんのことが気になるんだ!」

やっちまった。

「……………」

「ああいやそうじゃなくて!! 僕は木下さんの様子が気になってと言うかなんというか

——!?!」

「……………いいわよ」

「だからその——え?」

「一緒に食べたいんでしよう。いいわよ。どうせ一人で食べる予定だったから」

それだけを言い残して歩き出す木下さん。

その横顔が少しだけ赤くなっていたのは、僕の見間違いだろうか？

歩き出す木下さんをぼんやりと見ながらそんなことを思った。

「なんていうか……。やった！」

ともあれ、これで第一関門突破だ。

僕はそのことに僅かに笑みを浮かべてから、置いていかれないよう木下さんの背中を
追いかけ始めた。

問4 2人だけの昼休み

木下さんに連れられるままやってきたのは、なんと校舎裏だった。

「え……、ここに食べるの？」

乾燥した硬い土に整備されず生い茂っている雑草。

ところどころペンキが剥がれた校舎の壁。

音や声というものは一切なく新学期初日のお昼の賑わいが嘘のようだ。

景色を楽しもうにも周囲は僕の身長の二倍ほどの高さにもなる塀と有刺鉄線に囲まれていて外で食べる醍醐味が完全に失われている。

いやむしろ狭い檻に閉じ込められような窮屈ささえ感じていた。

およそご飯を食べる場所としては明らかに適さないこの場所で木下さんはお弁当の風呂敷を開けようとしていた。

「何か不満なの？」

「不満っていうか不安というか……。どうしてここなの？ お昼ご飯を食べるならもっと良い所あるでしょ。ほら、屋上とか中庭とか」

「今の時期だと新入生が集まっついていてそういう穴場はどこも混んでるでしょ。今日は静

かて落ち着いた場所で食べたかったからここを選んだのよ。ここなら誰も来ないから丁度良いつてだけで特別な意味はないわ」

「確かに好き好んでこんな所来る人もいないと思うけど。でも……」

「嫌なら別の場所にいきなさいよ。アタシはついて来て良いつて言っただけで吉井君がお昼を食べる場所まで指定した覚えはないけど?」

梶子でも動かないといつた姿勢で言う。

仕方ない。ここは僕が折れるしかないようだ。

「う……っ。分かったよ。僕もここで食べる」

「そう」

「……隣、いい?」

「うん」

「ありがとう。じゃあ……失礼します」

断りを入れて僕は木下さんの隣に腰を下ろした。

「さーてご飯ご飯。いやーお腹空いた。いただきます」

「待つて吉井君」

「うん? 何木下さん」

「貴方……。それ何?」

木下さんの視線が僕の手の先に向けられている。

「何って。見ての通り。水と塩だけど？」

右手に塩の瓶。

左手に水の入ったペットボトル。

これが紛うことなき今日の僕のお昼ご飯だ。

「それがどうしたの？」

「いや、どうしたって……。明らかにおかしいでしょ。何、ひよつとしてうけでも狙ってるの？」

僕の昼食をお笑いのネタ扱いされた。

「ち、違うよつ。ただ……ちよつと最近では諸事情でお金がなくて、ご飯が買えないんだよ」

「買えないって、それにしたって限度が……あれ？ 吉井君って一人暮らしなの？」

「あ、うん。家族はみんな仕事で海外にいてね。僕は母さんが毎月送ってくれる仕送りで生活してるんだ」

「へえ。そうなんだ。やっぱり一人で生活するって大変？」

「うーん。そりゃあ最初は炊事洗濯から何まで全部自分でしなきゃいけないから苦労は多かったけど、慣れると気楽でいいよ。人目を気にせず友達と騒いだりもできるし」

「そうなの。なんだか楽しそうね」

「あはは。確かに楽しいかな。まあ目覚ましで起きれなかったりした場合起こしてくれる人がいないからその時は遅刻確定だけど。メリットもあればデメリットもあるよ」

食費とかね。

「それは吉井君が注意していれば済む問題でしょう。……でもそれじゃあその昼食はどうしたの？ お母さんが仕送りを忘れてるとか？」

「いやこれは……」

「??」

「……ここ最近、新発売で面白そうなゲームが多くて……その、ちょっとまとめ買いを」
「それってただの自業自得じゃない」

「うぐっ」

直球の台詞が心に刺さる。

さすがが頭脳明晰な木下さん。実心的を射た言葉だ。返す言葉もない。

「まったく、心配して損した。……まさかアタシのお弁当を分けてもらう為に声をかけたんじゃないでしょうね？」

「そ、そんな事思っていないよ！ だからそのお弁当を僕から見えないように隠すのはや

めて！」

「どうだか」

お弁当を隠したまま怪訝な表情で言う。

うう、まったく信用されてないなあ。

まあ仕方ないか。

振り分け試験をなしにすれば僕達は今朝に校門で話したのが初対面だし。それを数時間でいきなり信じてくれを言う方が無理な話だ。

諦めて手のひらに振りかけた塩を口に流し込む。

くう。今日の塩は一段と塩っ辛い気がするよ。

「はあ、……………はい」

「んぐつ（ごくん）。ん？ 木下さん、これは？」

木下さんはお弁当の蓋と思わしき物体の上に卵焼きとパセリのベーコン巻き、から揚げ、トマトに少量のご飯を乗せてそれを僕の方へ差し出してきた。

「仕方ないからあげるわよ。隣でそんな貧しいご飯食べられたらこつちのご飯まで不味くなるわ」

「くれるっ!?! いいのほんとに!?!」

信じられない言葉に思わず大声を上げる。

「か、勘違いするんじゃないわよつ。別にアタシは隣で食べる人が惨めな食事をされるのは嫌だからってだけでそれ以上の意味はないから」

「うん！ 勿論わかってるよ！ ありがとう木下さんっ！ いただきます！」

両手で分けてもらったお弁当を受け取る。

なんていい人なんだ木下さんは。塩と砂糖しか食べていないこんな僕に食べ物を恵んでくれるなんて。

こんなこと人生16年生きて一度もなかった。嬉しすぎて涙が込み上げてくる。まさに感動ものだ。

ああ、涙の所為か目下のお弁当がどんな高級料理よりも輝いて見えるよ。

これは最大級の感謝の念を込めていたただかないといけない。

「あれ？ でもどうやって食べればいいのか？ お箸は？」

「……………この変態」

「えっ!? いや違うよ！ 僕は木下さんの使用したお箸を使いたいって意味で言ったんじゃないって純粋に割り箸か何かはないのかなって思っただけだから！」

「こんなことになるなんて思ってたからそんなの用意してないわよ」

「……………だよね」

仕方ない。ちよつと汚いけど素手で食べるしかないな。

もう一度手を合わせ「いただきます」と言った後、僕は卵焼きを摘まんで口に入れた。

「ああ。美味しい。すごく美味しいよこれ！ 思わず天にも昇りそうなくらいだ」

「馬鹿。大げさすぎよ。ただの卵焼きでしょ」

「木下さんが作ったの？」

「ううん。作ったのはママよ。アタシはあまり料理つてしないから」

「そうなんだ」

「アタシが作ったものじゃなくて残念？」

「そんなことないよ。これだつて十分美味しいし。……ああ。でも、やっぱり残念かな」

「どっちなのよ」

「いやいや、料理のことじゃないよ」

「?? じゃあ何なの？」

口に入れたから揚げを飲み込んでから僕は言う。

「これだけのお弁当なら、やっぱり気持ちのいい屋上とか食べる方がもつと美味しいかなって」

「……………」

「あ。ごめん。別に木下さんを責めてるわけじゃないよ。ただ勿体無いなと思っただけで」

「お弁当が？」

「うん。それに木下さんも」

「えっ……？ アタシも？」

「勿論だよ。Fクラスの貴重な女の子要因である木下さんが一人こんな場所で食事をしているなんて、そんなの一男子として見過ごせないよ。やっぱりご飯は一人で食べるより友達と寄り添ってみんな食べた方が美味しいはずだよ」

「そうかもしれないけど、でもアタシがどこで食べようとそれはアタシの自由じゃない」「わかってるよ。木下さんさえ満足してるんなら僕も口を挟んだりしない」

けど、と僕は澄み渡る空を見上げながら言った。

「……確かに静かなのもいいけど、ここはやっぱりお昼ご飯を食べるには、寂しすぎるよ」

誰も来ない校舎裏。

生徒達の喧騒が届かない殺風景な空間。

そんな中で一人昼食を食べる木下さんの姿は、まるで周囲から切り離されたような孤独感が漂っていた。

約束されていたはずのAクラスという枠組みから突き放され、Fクラスに放り込まれたように。

そんなの、想像するだけで胸が苦しくて、気分が悪くなる。

「……………そうね。吉井君の言う通りだよ」

「木下さん……………」

「何もしなくても、ただここにいてだけで気持ちが悪くなる気がするわ。だからこんなところに来ちゃったのかもかもしれないけど」

まるで世界に一人取り残されたみたい。と感情の読めない声で呟く。

それは、きつとの気のせいじゃない。

木下さんの境遇を考えれば当然のことだ。

多分、木下さんはFクラスにいる自分に我慢できなくて、こんなところまで一人で来てしまったんじゃないだろうか。

「木下さん。振り分け試験で倒れた所為でFクラスになっちゃったこと、その……………まだ後悔してる？」

「……………どうしてそう思うの？」

「だって、朝廊下からAクラスを見てた時の木下さん。なんだかすごく悲しそうな顔をしてたから」

「……………あ……………」

「違う……………かな？」

込み入った事を聞いているという自覚はある。

僕がやっているのは他人の家に土足で踏み入っているのに等しい行為だ。けど、どうしても聞かずには入れられない。

同情心かもしれないけど、それでも木下さんのことが心配だったから。

「確かにそうね。……でも後悔というより無念かな」

「無念？」

「本音を言おうと、アタシは設備なんて何でもいいの。ちゃんと勉強が出来る環境を整えてさえくれればそれで文句はないわ」

「Fクラスはまともに勉強できる環境じゃないと思うけど……」

「う、確かにそうかも——って揚げ足を取らないでよ。……それはともかく。アタシが欲しかったのは設備でも環境でもなくてお互いの成績を競えあえるクラスメイトよ」

「クラスメイト？」

「うん。同じくらいの成績の人がいれば、自然と向上心が湧くでしょ。負けたくないって」

「なるほど、ライバルってヤツか。木下さんは努力家なんだね」

「そんなことないわよ。これがアタシにとって当たり前だったもの。でも一人じゃやっぱりモチベーションの限界があった。だからアタシはもつと上を目指すため自分に相

応しい相手がいるクラスへ入るために勉強してた」

それはやっぱりすごいと思う。

努力するのが当たり前。そんな風に考えられるのは本当にごく少数の人間だけだろう。

「本当は無理をせずともAクラスに入ることはできたかもしれないけど、万が一がないよう試験前日は寝る間も惜しんで問題を頭に叩き込んでいたのに、それが返って裏目に出てアタシは体調を崩し実力を発揮できなかった。それが無念よ」

「それは……、どうしようもないことだったじゃないか」

「そんなことないわよ。ちゃんと冷静になって登校前に風邪薬の一つでも飲んでいけば結果は違ったかもしれないのに。アタシは事を急いで失敗したんだから。先生の言うとおり試験途中で倒れたのは体調管理を怠ったアタシ自身のミスよ。それについては何も言えないし言う資格もない」

「資格なんてそんなの……。テストをやり直したいとは思わないの？」

「試験の結果に文句を言っても、そんなの誰も聞いてくれないわ。どれだけ頑張っても、努力しても本番で実力を発揮できなかったら意味がないんだから。受験と同じようにね」

「そうだけど……いくらなんでも試験を一回体調不良で退室した程度で一気にあんなF

クラスまで落とされるのは酷すぎるよ。クラスで設備に差を設けるならもう少し何かチャンスがあっても良いじゃないか」

「吉井君……」

体調管理も試験のうち。それは僕だって一応分かってる。

けど、だからって理性では分かっているけども感情が納得できない。

僕や雄二は実力でFクラスになってしまったんだからしょうがない。でも木下さんはそうじゃないんだ。

彼女には彼女にふさわしいクラスと設備があるのに。

振り分け試験の時に感じた怒りが再びふつふつと湧き上がる。

無意識に手に力が入り、気がつくも持つていた水入りペットボトルが悲鳴を上げていた。

「ご、ごめん。さっきからお節介なことばかり言って。まったく、何やってるんだろう僕」

「ううん。そんなことない。……寧ろアタシの方こそごめんなさい。吉井君をそんな気持ちにさせちゃったのはアタシの所為よね」

「ち、違うよ!! これは僕が勝手に思い込んでただけだから! 木下さんは何も悪くないよー!」

「ありがとう。ふふ。……吉井君って、案外優しいのね」
「え!？」

その台詞に僕は思わず心臓が跳ねたような衝撃を受けた。

な、なんだこの気持ちは。何故か木下さんの顔を直視するだけで胸がドキドキする。嬉しそうに小さく口元を緩めた表情は、まるで僕の眼球に補正が掛けられるかのように通常の何倍も可愛くみえた。

今までは平気だったのに、すぐ隣に木下さんがいる改めて理解した途端にだんだんと頭がくらくらしてくる。これ以上木下さんを意識したら理性がおかしくなりそうだ。

「??? どうしたの? 顔赤いわよ? まさか吉井君も風邪?」

「なっ!?! なんでもないよ! ちよつと体が暑くなってきちゃったんだ! あ、あははっ!」

「もう。気持ちは嬉しかったけど熱くなりすぎよ。水でも飲んで落ち着きなさい」
「そうするよ……」

どうやら僕は憤った所為で赤くなっていると思われているらしい。

そうじゃないんだけど、まあそれでもいいか。僕自身この感情をうまく説明できないし。

でも少しだけ分かった事がある。

木下さんはすごい努力する人なんだ。それこそ僕なんて比較するのも失礼なぐらい頑張ってる。

だから、試験召喚戦争でAクラスの設備を手に入れたとしても、きっと彼女は満足できない。

木下さんが求めているのは自分に相応しいクラス。お互い努力して常に競い合う相手だ。

けど、万が一Aクラスの教室を手に入れたとしても、あくまで教室を入れ替えるだけでクラス自体はFクラスのまま変わらない。

環境面の問題は解消されても肝心のクラスメイトが自堕落で勉強嫌いな集まりのFクラスでは、木下さんにとって意味がないんだ。

この問題。思っていたほど簡単じゃないかもしれない。

悩みながら残った水を一気に飲み干した後、僕はもらったお弁当をすべて食べ切った。

「ふう、ありがとう木下さん。ご馳走様。すごく美味しかったよ」

「はいお粗末様。アタシが作ったわけじゃないけど、お礼は受け取っておくわ」

お弁当の蓋を木下さんに返す。

うーん、当初は木下さんと話しをしようと思ったただけなのに思わぬ収穫があったよ。

まさかお弁当を分けてもらえるなんて、これは嬉しい誤算だ。

これが一週間ぶりのまともなご飯だと知ったら木下さんはどんな表情をするだろうか。

少しだけ気になったけど、十中八九引かれるだろうから言わないでおこう。

お腹いっぱい満足感に至福を感じていると、木下さんは口元を少し緩め柔らかな表情で言った。

「少し意外。吉井君が観察処分者って聞いた時は正直自分勝手に自意識過剰なろくでもない人間だと思ってたわ」

「あ、あーまあ間違つてもいいかも……。実際褒められた行為は全然してないしね。一年生の頃はいつも雄二達と一緒に西村先生に怒られて指導室に連行されてたし」

「ちよつとは自制しなさいよ。でないと今度は停学か退学になるかもしれないんだから」

「き、気をつけます……」

確かに停学はともかく退学はちよつと拙い。

これから少し控えめに暴れる事にしよう。

そんな話をしていくうちに、木下さんも食べ終わりお弁当を仕舞った。

それと同時に予鈴を告げるチャイムが鳴り響き僕達は校舎裏を後にした。

☆

二人で旧校舎を歩きFクラスへ向かう途中、Fクラスの教室の前に少し意外な人物がいた。

「ん……？ ねえ木下さん。あれって霧島さんと姫路さんだよね」

「え？ あ、本当ね。何してるのかしら」

学年主席と次席のコンビ。

Aクラスの霧島翔子さんと姫路瑞希さんが何故かFクラスの前でひそひそと会話をしていた。

『……が、ゆ……じの』

『そんな感じには見えませんが……』

『……そう。それで、瑞希の好きな人はどこにいるの？』

『ええっ!? えと——うーん。……今はいないみたいです。ほら、予鈴も鳴りましたし教室に戻りましょう翔子ちゃん』

『……わかった』

あ、二人がこっちに来る。

「あ……。よ、吉井君!？」

「う、うん。こんにちは姫路さん」

姫路さんは僕を見た途端、何故か驚いた顔で名前を呼んだ。
ど、どうしたんだろう。

「えと、じゃあまたね」

「は、はい。失礼します」

「……瑞希?」

「ごめんなさい。今行きます」

姫路さんは僕たちに一礼した後、すたすたと横を通りすぎ新校舎の方へ向かっていった。

「なんだったんだろう?」

「さあ、それより教室に入りましょう」

「……そうだね」

気になったけど、今は取りあえず考えない事にして僕は教室の扉を開いて中に入った。

問5 恋愛感情／意識

お昼休みの後、何事もなく時間は進み、ようやく放課後の時間になった。

「おい明久」

「ん？ あー、何雄二？」

「何じゃない。どうしたんだお前」

「?? どうしたって、何が？」

「お前、昼からずつと上の空で窓ばっかり見てぼーつとしてるじゃねえか。昼休みの時間も帰ってこなかったし何かあったのか？」

雄二が卓袱台に頬杖をつきながら聞いてきた。

あー、なんだ。そのことが。

「うーん、あつたといえはあつたし。なかつたといえはなかつた」

「はあ？ なんだそりゃ」

「ごめん、なんかうまく説明できない」

ぼんやりと黒板を見つめながらうわ言のように答える。

そうか。自分でもなんかふわふわしているなあつて感覚はあつたけど滅多に他人に

興味を抱かない雄二が訝しむのだからよっぽどおかしな様子だったんだろう。

昼休み以降、僕はなんとか木下さんをAクラス入りさせる方法はないかとずつと考えていた。

授業もまったたく頭に入らないぐらい思考に没頭していたけど結局最後まで良い方法はないつかず、結果的にこんな無気力になってしまっていたようだ。

「うん？ なんじゃ、今の明久はいつも以上に變じやのう」

「あ、秀吉。……いつも以上に變つてつまりいつも變つてこと？」

「……………何があつた」

秀吉とムツツリーニが鞆を持ってやってくる。

しかしなんだかんだ言つて心配してくれるなんて、みんな友達思いだな。

ここはその氣遣いに感謝して元氣に振舞わねばなるまい。

「別に大したことじゃないって、そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「心配じゃない。不氣味なんだ」

「(ハ)くん」

ひどい友達だ。

「ほら、さつとと企みを吐け。そうしたら楽になるぞ」

「やれやれ、明久よ。今度は一体何をやらかすつもりなのじゃ？」

「……………黙っていても自分の為にならない」

「あのねえ。ただぼーっとしてただけで何で取り調べみたいなの尋問されてるのさ僕は。別に何も企んでないよ。大体——あ」

文句の一つでも言つてやろうかと思つていると、偶然鞆に教科書を詰めて帰り支度をしている木下さんの姿が目に入った。

彼女はそのまま寄り道せず帰るのだろうか。

「どうしたのじゃ？」

「あ、いや、なんでもない」

秀吉の問いかけを曖昧に濁して僕はぼんやりと木下さんの姿を眺める。

と、そこで鞆を持つて立ち上がった木下さんはあろうことか、僕の方を見てゆっくりと歩いてきた。

慌てて視線を切るも、もう遅い。

ま、まさか黙つて見ていた事がバレたのかつ。

「それじゃ。吉井君、また明日ね」

「へっ？ あ、うん。バイバイ木下さん。また明日」

それだけを告げると木下さんは踵を返し教室を出て行く。

半ば条件反射的に別れの挨拶を交わした僕は軽く驚きながら手を振り木下さんを見

送った。

な、なんだったんだ。

「……………ほほお」

その会話を隣から聞いていた雄二が口の端を吊り上げながら小さく呟いた。

「な、何さ雄二……………」

「いや別にいい。ただいつものまにお前と木下優子が帰りの挨拶を交わすほど仲良くなったのか」友達として気になっただけだ」

友達。をいやに強調して言う。コイツ絶対わざとだな！

くつ、なんてやつだ。そんなこと教室内で言ったら——、

「吉井いつ！ さっきのはどういうことよ！」

「ほらやつぱりいつ！」

怒り狂った島田さんが僕に向かって駆け出し勢い良く足を振りかぶった。

狙いは——首っ!?

「おわつ危なっ!?! 島田さん！ 今の確実に殺りに来てたよね?」

鈍器で殴るのと同じ威力のありそうな蹴りを後ろに飛び引いて回避する。

攻撃が外した事を理解した島田さんはあからさまな舌打ちを打った。

「ちっ、避けるんじゃないわよ」

「避けなきや死ぬから！」

「だったら死になさい！」

「無茶苦茶だー！」

さすが僕の天敵島田さん。嬉々として僕の命を奪ってくる。

「す、ストップストップ！ 本当に僕は何も疚しいことはしてないってば！」

「じゃあ昼休みに何をしてたか言いなさいよ」

「校舎裏で一緒に弁当を食べてただけだよ！」

「はあ？ 嘘も大概にしなさい。大体お弁当なんてどこにあるのよ。アキの昼食は塩と水だけでしようが」

うっ、否定できない。

「それは……僕のお昼ご飯を見た木下さんが哀れに思っただけのお弁当を少し分けてくれたから」

「言っただけ悲しくならないか？」

「……少し」

あれ、おかしいな。目から汗が。

「しかし校舎裏とは、どうして木下優子はまたそんな辺鄙な場所で昼食を摂ってたんだ」「恐らくじゃが、まだFクラスという環境に慣れておらんのだろう。まあ姉上の心境

を考えれば居心地の悪さを感じるのも無理はなからうて」

「うん……。僕が見た時もなんだか哀愁が漂ってる気がしたよ。僕もなんとか元気付けてあげたいと思うんだけど。……ねえ島田さん。何かいい方法ってないかな？」

「えっ、なんでウチに聞くのよ？」

「だって島田さん。同じ女の子だし。こう、女子がされて思わず嬉しくなるようなことってない？」

「……女の子……」

僕の質問が聞こえていないのか、島田さんはポツと顔を赤くして何度も『……女の子……』と反芻している。どうしたんだろう。

「島田さん？」

「はいっ!? え、えっと! ……なんだっけ?」

「だから、木下さんを元気付けるいい方法は何かないかなって質問したんだけど」

「そ、そうね。うーん……」

顎に手を当てて首を傾げる島田さん。

そのまま難しい顔でしばらく目を閉じて考え、ぶんぶんと首を振った。

「んー! 急に言われても思いつかないわよ!」

「そっか……。島田さんでもわからないか」

まあ根が男子っぽいからなあ島田さんは。期待した僕が間違っていたかもしれない。

「今吉井から悪意を感じたわ」

「ははは、きつと気のせいだよ」

「そうかしら……」

疑いの目で島田さんが僕を見る。むう、今日の彼女はいやに鋭いな。

「それより島田。お前どうして今日木下姉に一言も声を掛けなかったんだ。Fクラスで自分以外の唯一の同性なのに」

「ウチだってそうしようと思ったわよ。でも木下——ていうと弟と混ざって紛らわしいわね」

「済まぬ」

「あ、別に怒ってるわけじゃないわよ？ まあ——木下さんって授業中も休憩時間の間もずつと刺々しくてなんだか近寄りがたかったのよね」

「……………今の木下優子には周囲を遠ざけるオーラがある」

「そういうえばウチのクラスの貴重な女子なのに他のクラスメイトもほとんど木下さんに近づかなかったね」

「触らぬ神に祟りなしってか。新学期初日から孤立とはなんとも不幸なことだな」

どこか他人事のように空を見ながらポツリと零す様に言う雄二。

けれど、僕はそんなみんなの言葉に首を傾げた。

「そうかな……。確かにツンケンしてたような気はするけど別に話しかけづらいことはなかったよ」

「お前はバカだから人の機敏に疎いんだよ」

「む。そんなことないよ。僕だって女心の一つや二つ余裕で——」

ドスッ！

「目か耳を選びなさい」

「心の底からごめんなさい」

片手に4本、計8本のカッターナイフを指に挟んで構える島田さんに土下座する。

あれ？ 何で僕怒られてるんだ？

「ま、朝にも秀吉が言ったが、木下優子に関しては今の所放置するしかないだろう。俺達にできることなんかねえ」

「こればかりは心の問題だものね」

「そんな……」

「……………木下優子をAクラスに戻すというのは？」

「そうそれ！ 丁度僕もそれを提案しようと思ってたんだ！」

「具体的にどうするんだ？」

「えっ？ それは……、みんなで考えて……」

「つまり何も考えていないのじゃな」

「考えてただけけど何も思いつかなかったんだよ」

「なるほど、お前が昼からうんうん唸ってたのはそれが原因か」

「うん……。雄二、何か良い手はないかな？」

「そうだな。……方法としては、一番堅実なのは試召戦争でAクラスに勝って設備を奪う事だな」

「それはちよつと、駄目」

「え？ なんでよ？」

「えつとね——」

僕は校舎裏で木下さんと話したことを（かいつまんで）みんなに説明した。

「……そういうことじゃったのか。それなら確かに試召戦争だけでは不十分じゃな」

「設備は変えられてもクラスメイトは変えられないものね」

「……クラス自体を変えらるとなると、正当法では限りなく難しい」

「特にこの学校ではな」

「そうだよね……。うーん、振り分け試験をもう一度やり直してもらうのは駄目かな……？」

「無理だろ。クラス別に設備のランクを設けるなんて制度を作った学園長がそんなこと許してくれると思うか？」

「……………だよね」

雄二の言う通りだ。

結果がすべてのウチの学園では、ただお願いした程度で言う事を聞いてくれるとは思えない。

だけど、どうしても僕の心にわだかまりが残る。

このままでは納得できない。

「……………でも、何でもやらないよりやる方が良いと思うんだ」

一度試して、駄目なら駄目でいい。

また次の方法を考えて、成功するまで続ければいいんだから。

頭は悪いけど、諦めも悪いのがFクラスの強みのはずだ。

「……………」

と、そこで雄二がじつと僕に視線を向けている事に気がつく。

「ん、どしたの雄二？」

「お前、今日はやけに木下優子の件に突っ込むな」

「そ、そうかな……………？」

「まさか、……惚れたのか？」

「ぶふっ!？」

予期しない方向からの攻撃に思わず吹き出した。

「い、いきなり何を言いだすの!」

「いや、適当に言ってみただけなんだが、この反応はまさか」

「……………取り乱すということは、多少は意識している可能性あり」

「っ! 吉井! どういうことよ説明しなさい!」

「し、島田さん……………。僕まだ何も言っていない……………」

顔を真っ赤にした島田さんに胸倉を掴まれてままぶんぶんと揺さぶられる。の、脳が、脳が掻き乱される……………っ!

「僕は単純にクラスメイトの一員が心配であって、別のそういう感情を抱いているわけでは——!」

「そうか。……………秀吉」

「何じゃ」

「髪留めを外してくれ。——それで、ムツツリーニ頼んだ」

「……………任せろ」

僕が島田さんに絞められている横でムツツリーニが秀吉の顔の前で素早く手を動か

している。

「……………完成」

「よし。島田、その辺りで明久を離してやれ」

「……………仕方ないわね」

足が浮いた状態のまま手を離される。

何の支えもない僕は空中で放り出され地球の重力の従い畳の床の落ちて尻餅をついた。

「あいてて、下が畳でよかった…………」

「明久、秀吉を見ろ」

「えー、秀吉が何——ぬほお!? どうしてここにお姉さんがっ!」

さつきまで秀吉のいた位置にいつのまにか木下さんがいた。ど、どういうことだ!

いつのまに!

どうしよう! まだ心の準備とかいろいろできてないのに!

唐突すぎる登場に頭が追いついていかない。

驚き慌てる僕に、木下さんは困ったような顔で見て、

「いや、ワシは秀吉じゃぞ…………」

「へ? あ、髪型を変えただけか。さすが双子。そっくりだね。はあ…………びっくりした」

「ふむ、ムツツリーニ、感想は？」

「……………自覚はないものの、意識はしている模様。脈はあり」

「なるほど。して……………刑は？」

「……………顔に一発」

「よし」

「痛っ!? 雄二! どうしていきなり僕の顔を殴るんだよ!」

「他人の不幸は蜜の味だ」

「なんのことっ!？」

「ワシはいろいろと複雑なのじゃが……………」

い、意味がわからない! 一体どうなっているんだ!

「坂本やりすぎよ。吉井の顔が腫れてるじゃない。大丈夫吉井?」

島田さんが心配そうな顔で僕を見てくる。

ああ、正直彼女も人のことは言えないと思うけど、今はこの気遣いが嬉しい。

「ありがとう島田さん。なんとか平気だよ」

「そう。ならまだウチが殴っても問題ないわね」

「はい? い、いや! そういう意味じゃなくて!?! ぶはあっ!?!」

雄二に殴られた箇所と寸分違わず同じ箇所に島田さんの拳が穿たれる。

くそお、一瞬でも信じた僕がバカだったあ！

「……さすが島田。休み明けの新学期早々でも腕は落ちてはいないみたいだな」

「それほどでも」

「二人とも……、感心するより前に僕の心配をして……うつ」

顔を合わせて話す二人の姿を最後に、僕の意識は闇に落ちた。

☆

意識が回復すると、教室には誰もおらず僕は一人玄関先の下駄箱までやってきた。

「……まったく。僕一人残して帰るなんて白状な友達だな」

今度雄二やムツツリーニの下駄箱の中に偽のラブレターでも入れてからかってやろうか。なんて考えながら歩いていると、

『……………!!』

「ん？」

それほど遠くない場所から女子の話し声が聞こえてきた。こんな時間になんだらう？

ひっそりと顔を覗かしてみると3人の女子が円上に囲んで談笑をしている姿があつ

た。

うーん、あの女子達のいる付近が僕の靴箱なんだけど、なんだか出難いな。あの3人が離れるまで待とうか。

『……ねえ、ほんとなの?』

『マジマジ。私この目でバッチリ見たもん!』

『でも弟の可能性だってあるんじゃない?』

『そんなことないって。ちゃんとスカート履いていたし。間違いないよ』

『ふーん。でも、本当にそうなら朗報よね』

『証拠だってあるよ。ほら、これ今日の昼休みに偶然撮ったんだけど』

『……あ、ほんとだ。でもこの横で一緒に歩いてる男子って誰?』

『えーっと、ほら、吉井って人よ。観察処分者の』

『あー、例の。彼、Fクラスだっけ?』

『そうそう。だからそんなヤツと一緒にいるってことはもう確定でしょう』

『あははー。本当だ』

『でも肝心の靴箱はどこなのよ?』

『え? うーんと、どこかしら?』

『えー、ここから探すのお? 男子の靴箱って臭くて嫌なんだけど』

ふーむ、一体彼女ら何の話をしているんだろう。

なんだか僕の名前も出てみたいだけ。

なんて隠れながら考える僕を他所に女子達は上から一つずつ靴箱を開けて何かを確認している。

どうやら何か用事があり、誰かの靴箱を探しているようだ。

雰囲気から見ればらくはあそこから動きそうにないし、仕方ない。ちよつと恥ずかしいけど出て行くでしょう。

少しだけ萎縮しながら、僕は隠れるのをやめ。いかにも今来ましたと言わんばかりの調子で女子生徒の一人に声を掛けた。

「あの、ちよつといいかな？」

「はいっ!? あ! 貴方確か吉井君！」

「う、うん……。あのさ、僕の靴箱ここだからちよつと開けて貰ってもいいかな？」

「あ、ごめんなさい。どうぞ」

「ありがとう」

「ちよつと待って、吉井君に聞きたい事があるんだけど、いい？」

「うん、何？」

「木下さんの靴箱ってどこかわかる？」

「秀吉？ 秀吉なら多分僕の2つ隣だと思っけど」

「あーそうじゃなくて。姉の」

「あつ。お姉さんか。それならきつと秀吉の下だと思っよ？」

基本的に靴箱は出席番号順に決まる。

だから僕の推理は間違っていないはずだ。

「木下君の真下……。ほんとだ女子の上靴がある」

「ほんとだー！ やった」

「一つずつ探す手間が省けたわね」

木下さんの靴箱の前で3人がそれぞれ感想を漏らしている。

「あの、僕からも聞いていいかな？」

「何かしら？」

「どうして3人は木下さんの靴箱を探しているの？」

「……それは」

「これよー！」

大きな声と共に女子生徒の一人が制服のポケットから何か薄い手紙のようなものを取り出した。

手紙を靴箱——つてもしかして、ラブレター!?

「そ、それって……。でもどうして女子が」

「それは秘密。まあそういうわけなの」

「だから男子は禁制よ」

た、確かに人のラブレターを盗み見るのはよくないな。

うーむ、しかし、一体誰が書いたんだらう。

「そ、そうなんだ。じゃあ僕は見なかった事にして帰るよ」

「わあ、吉井君って優しい」

「あはは、それじゃまたね」

「バイバーイ！」

3人に手を振って学校を後にする。

帰り道も、僕はずっとラブレターのことを気にかかって頭から離れなかった。

どうしよう、明日早起きして靴箱を見張ってみようか？

いやいや、そんなことして万がバレて一僕が出したなんて勘違いされたら勇気を出してラブレターを書いた人に申し訳ないじゃないか。

でも、しかし――、

「うわあ！ 気になってしょうがないよー！」

結局、このもやもやは自室のベッドで横になって眠るまで離れなかった。

問6 ラブレター。ラブレター。ラブレター？

翌日。

昨日のラブレターの件で悶々とした感情を胸の内に感じながら下駄箱に着くと、またも僕の靴箱の前に人がいた。

昨日はまったく知らない顔だったけど、今度は僕の知っている人だ。

「あれ、姫路さん？」

「ひゃうつつ!!? よ、吉井君っ!!?」

小柄な身体にふんわりとした長髪が振り向き際に浮き上がる。

目を見開き顔を紅潮させて驚いているのは姫路瑞希さんだ。

Aクラス所属で学年次席。頭脳明晰で容姿もすごく可愛い。

そんな彼女と朝からこうして出くわすなんて、僕はなんて幸運なんだろう。

「うん。おはよう姫路さん」

「あ、はい。おはようございます。吉井君」

ぺこりと僕の前で一礼して挨拶する。

ん？ 姫路さん。手に何か持ってるな。

何か小さい、封筒のような……。手紙？

「姫路さん、それは？」

両の手のひらで隠すようにして持っている手紙を指差して問う。

「えっ!? っ、これはその——!?」

わたわたと慌てて答える姫路さん。

どうしたんだろう。ただの連絡程度の手紙ならそんなに慌てる必要はないはずだ。

しかもこんな朝から、自分とは違う靴箱にいますという状況から察するに……。ま、まさか。彼女もラブレターを出そうとしているんじゃないか——!

どういうことだ! 昨日といい今日といい、どうしてこんなにラブレターが流行っているんだ。桜咲く季節に想い人に告白すると想いが通じるなんてジंकスでもあるのか!

「ひよ、ひよつとして、ラブレター……。だったりするのかな？」

「あの……。はい」

「あはは、そうなんだ。ここにいてってことは、相手はFクラスの誰かなのかな？」

「は、はい……」

視線を右往左往させながらしおらしく呟く。

まさか本当にラブレターだなんて。しかも相手は僕のクラスメイトときた。

これは気にならない方がおかしい。

一体相手は誰なんだろう。僕の知ってる人なのかな。

Fクラスの男どものなかで特にモテそうな人間といえば、やっぱり一番最初に思い当たるのは僕の悪友である坂本雄二だ。

普段は粗暴で野蛮で暴力的なゴリラ男だけど、逆に言えば腕っ節は立つしかつては神童なんて呼ばれていただけあって頭も良い。

それに、認めたくないけど背は高いし顔は鼻筋が通っていてキリつとしているから見た目だけなら女子受けしそうではある。

もし本当にそうなら至急Fクラスでヤツを肅清する準備をしなければならない。

「そっか。姫路さんはそいつのどこが良かったの？」

「それは、いつも元気で周囲を明るくさせる雰囲気とか……」

雰囲気？ んー、確かにやる気を出した時の雄二の活力は周りを勇気付ける力強さがあるけど。

「普段は少し気が抜けていて、その……可愛い顔をしてるのに、いざという時には男らしいところが魅力的で」

可愛い!! あの野性味たっぷりの顔を可愛いなんて、姫路さんは一体雄二をどういう風に見ているんだ!

「ど、どうしたんですか吉井君!」

「な、なんでもないよ。ははは……」

待て待て落ち着くんだ僕。まだ雄二だと決まったわけじゃないじゃないか。

秀吉とかムツツリーニ、………もしくは僕、という可能性もあるし。

うぐ、なんか頭の中がぐちゃぐちゃになってきたぞ。

「——それが、私の憧れなんです」

そう言う姫路さんの表情には、本当に心からそう想う強い気持ちを感じられた。

いろいろ疑問はあるけど、相手のことはともかく、ここまで言い切った姫路さんの想いを邪魔する事なんてできない。

「……そうなんだ。ラブレター。良い返事がもらえると良いね」

「はいっ」

嬉しそうに姫路さんは微笑む。

「お、明久。今日は早いな」

そこで図つたように下駄箱の入り口から雄二がやってきた。

「あ、雄二。おはよう」

「坂本君。おはようございます」

「おう。……ん? お前は……Aクラスの姫路か」

雄二の視線が姫路さんの方へ向く。

「どうした。明久が何か粗相でもしたのか」

「ちよつと雄二。どうして僕が問題を起こしたことが前提なの？」

「ま、まだ何もされてません」

「姫路さんっ。それだとこの先何かされるみたいじゃないか」

「あつ、ごめんなさい」

姫路さんつて、妙なところで天然だな……。

「……姫路はわりと明久に似てるのかもな」

僕たちのやり取りを見た雄二は呆れたような顔で靴箱を空けて上靴を取り出す。

そして首を傾げた。

「ん……？」

「どしたの雄二？」

「いや、靴箱になんか……。なんだこりゃ？」

雄二は訝しげな表情で靴箱に突っ込んだ手を戻すと、手に一枚の封筒が握られている。た。

それは、丁度姫路さんが持っている封筒と同じサイズぐらいの——ってまさか!?

「そ、そそそそれって——っつ!?! ルアブレアトアーツツ!?!」

「落ち着け明久。日本語が崩壊してるぞ」

「だ、だつてだつてだつて!!」

まさかの3通目のラブレター!?! しかも雄二宛て!

なんだこれは! 今日のはラブレターのバーゲンセールなのか!

「これは、も、もしかして僕の靴箱にも誰かがラブレターを入れてくれてるかも!」

あの雄二にあつたんだ。僕にだつて十分可能性はあるはず! いやあらなければならぬ!!

「来い! 僕の運命の人!」

期待に胸を膨らませて靴箱に手を掛ける。

自然と手に力が入り、小さい扉は壊れんばかりの勢いで開いた。

バン!

.....。

「.....」

「よ、吉井君.....? どうして靴箱に手を突っ込んだままさめざめと泣いているんですか?」

「よせ姫路。放っておいてやれ」

「は、はあ.....」

どうして……、どうして僕には春が来ないんだ
!!!!

「それで、坂本君の手紙は」

「そうだ！ 雄二、その手紙にはなんて書いてあるの？ 愛の告白？ それとも決闘の

申し込み？」

「落ち着けよ。焦ったって手紙は逃げねえぞ」

余裕綽綽といった態度で僕の言葉を流す雄二。なんかムカつく！

「ま、決闘なら決闘で俺は別に良いけどな。丁度試召戦争ができない間の暇つぶしがほしかったし」

「暇つぶしに喧嘩って……まあ雄二らしいけど」

「??? 吉井君達は試召戦争をしようとしてるんですか？」

「まあね。でもいろいろあって、今は延期状態なんだ。それで——」

「おっとそこまで明久。あまり敵に情報を与えるなよ」

あ、そうか。姫路さんはAクラスなんだから僕達が試召戦争するなんて知ったら対策を立ててくるかもしれないよね。危ない危ない。

「ごめん姫路さん。今のは——」

「ふふ。分かっています。この事はクラスのみんなには内緒にしておきますから」

「本当！ ありがとう！」

なんてやさしいんだ姫路さんは！ ひよつとして彼女は天使の生まれ変わりか何かなのか!？」

「やれやれ。まあ姫路は素が天然っぽいから大丈夫か……」

「どうかしましたか？」

「なんでもない。気にするな」

「雄二。手紙は？」

「ん？ あーそうだったな。ちよつと待て、一応差出人の名前がないかチェックしておかないとな」

雄二は手に持った封筒に視線を落とし裏返す。

そして――、

ぐしや

そのまま、封筒を握りつぶした。

「え……?」

予想だにしない突然の行動に呆気にとられる僕と姫路さん。

「ちよ、何やってるのさ雄二!」

「そうですよ坂本君！ せつかくもらったラブレターを握りつぶすなんて!」

「バカを言うな。……これはラブレターなんかじゃない」

責める僕らに目を向けず、雄二は沈痛な面持ちで呟いた。

心なしか、声が震えている。どうしたんだろう。

「……もしかして、本当に果たした状態だったの？」

「いいや。断じてそんな生易しいものじゃねえ！ ……これはもつと醜悪でおぞましい、そう……不幸な手紙だ」

「はあ？」

……いきなり何を言ってるんだろうコイツは。

「不幸な手紙……ですか？」

「そうだ。これを読むが最後、俺の選択権は剥奪され今後一生身を縛られたまま生を過ごす事になってしまう。呪いの文書が綴られているんだ」

「ごめん雄二。言ってる意味が全然わからない」

「要約すると、人生の終わりだ……」

「ごめん雄二。言ってる意味がもつと分からなくなった」

とりあえず雄二が何かに怯えているようだということは理解できた。

悪鬼羅刹なんて異名を持つほど喧嘩強いあの雄二を怯えさせるなんて、一体誰からの手紙だったんだろう……。

名前さえ分かるなら是非ともこの男の弱点を教えてくださいものだ。

「とにかく！ この件は忘れろ。俺の靴箱には何も入ってなんていなかった。いいな」
それは、僕たちよりも自分に言い聞かせているように感じられた。

「別に僕はラブレターじゃないならどうでもいいけど」

「わ、分かりました……」

「よし、それでいい」

ようやく雄二の表情に余裕が出始めた。その時、

「ちよつと。下駄箱で固まられると通行の邪魔よ」

背中から非難の声が聞こえてきた。

後ろに振り返ると、入り口から木下優子さんが手に鞆を提げてやってきていた。

「あん？ ああ、木下姉か」

「き、木下さんっ!? お、おはよう!」

昨日のラブレターの件が脳裏を過ぎり思わず心臓が高鳴る。

なんてことだ!?! 立ち話してる間に木下さん来ちゃったよ!

どうしよう! まだ心の準備とかしてないのにつ。——つてちよつと待て。どうし

て僕が出したわけじゃないのに僕がこんなにドキドキしてるんだ?

「ええ、おはよう吉井君、坂本君。それに——姫路さん」

「あ、おはよう……ございます」

木下さんの登場に驚いたのか、姫路さんの態度はどこか余所余所しい。

うーん、見た感じ二人は友達って感じにも見えないし、これは距離感を凶っているのかな。

「それで、どうして二人と姫路さんがこんなところで一緒にいるの？ 姫路さん、二人に何かされた？」

「どうして雄二といい木下さんといい最初に疑いを掛けて来るのさ……」

「まったく。明久はともかく俺が自分から女子に何かするはずがないだろうに」

「だよ。野蠻な雄二ならしょうがないけど紳士の僕が女の子に対して失礼なことをするはずがないじゃないか」

「……………!! (ガンのくれあい)」

「どうせ否定するならもつと説得力のある台詞を言いなさいよ……。姫路さん、本当に何もされてない？」

「だ、大丈夫です。二人とは偶然お会いしただけですから」

パタパタと手を振って否定する姫路さん。

どうやらラブレターはすでにどこかに仕舞ってしまっただけらしい。さすがに時間も押してきたしこれ以上は衆人環視に見られる可能性もあるからひっそり靴箱に入れるのは難しいだろう。ちよつと悪い事しちゃったかな……。

「そう。ならいいんだけど」

そう言った後、木下さんは僕たちから顔を逸らし靴箱に手を掛ける。

その中に君宛の恋文があるとも知らずに。

不思議だ。別に僕が出したわけじゃないのに、僕の中に緊張と不安が湧き上がる。

「……………」

上履きを取ろうとした手が止まり、木下さんは靴箱の中を覗き込むように凝視した。

そうして、ゆつくりと腫れ物を扱うような慎重な動作で、靴箱の中から手を引き抜く。

その手に一枚の封筒を握り締めて。

皺一つない清潔感漂う白い封筒、封の所には女の子が使うような可愛らしいハート型

のシールが張られている。

客観的に判断すると、それはどうみてもラブレターだった。

「き、木下さん！ あの、それってもしかして……」

「えっ!? な、何!?!」

「マジか。なんだ今日は手紙を出すの良いことでもあるのか?」

「ち、違うから!?! 別にこれはそういうとは——! とにかくこの事は絶対他言無用だ

からね!」

顔を赤くしながら慌てて手紙を鞆に仕舞う木下さん。

こんな動揺している木下さんは始めて見る。

「……………」

変だ。予め知っていたからか僕は雄二や姫路さんのように驚いたりアクションは取れなかった。

寧ろ、ラブレターに一喜一憂する木下さんを見る度にどこか心が冷たくなっていく。

「ん？ どうした明久。いつもならここぞとばかりに大げさなりアクションをとるお前が静かに黙ってるなんて、風邪でも引いたか？」

「別にそういうわけじゃないけど……、うーん、なんだろ」

「吉井君。もしかして……」

「ああもう！ ほら！ いつまでもこんな場所いないで早く教室行きましよー！」

姫路さんの言葉を遮るように木下さんが大きな声で言っつてそのまま歩いていった。

「んじや俺達も行くか。それじゃあな姫路」

「あ、……そうだね。またね姫路さん」

「はい、また」

校舎の渡り廊下で姫路さんと別れ、僕達は旧校舎のFクラスへ向かった。

問7 それぞれの思惑

ラブレターの待ち合わせといえは昼休み、もしくは放課後の校舎裏が定説だ。

そんなわけで、僕は四時間目の授業が終わると同時に木下さんの動向をじっくり観察していた。

今朝のラブレター。あれは間違いなく木下さんに好意を抱いた誰かによる犯行だろう。

ただでさえムサイFクラスの中で咲いている一輪の花を独り占めしようだなんて、断じて許せない行為だ。相手を確実に見つけ出して然るべき刑に処さねば。

ラブレターを出した相手に殺意を募らせながら様子を伺っていると、件の木下さんは鞆から袋を取り出して立ち上がった。

「美波、ご飯食べましょ」

「うん。いいわよ」

笑顔で同意して島田さんはお弁当を卓袱台の上に置く。いつのまにかあの二人もすっかり打ち解けているみたいだ。

「島田さん。木下さんと仲良くなったんだね」

「まあね。優子に授業でわからなかったところで悩んでる時に教えてもらってたのよ。彼女すつごく頭良くてびっくりしたわ」

「あはは、ありがとう。でも美波だつて日本語がわからないだけで教えればすぐ理解してくれるからアタシも教え甲斐があつたわ」

「そういえば島田さんはドイツからの帰国子女なんだっけ。」

「だからまだ日本語に慣れてないだけで別に頭は悪くないってことなんだろうか。確かに去年も数学とかの理数系の点数はそれなりによかつたし。」

「へえ、島田さんに勉強教えられるなんてやっぱすごいね木下さんは」
「それどういう意味よ吉井」

「え？　ち、違うよ！　僕は暴力的だけどFクラスの中で頭のいい島田さんに勉強を教えて上げられるのはすごいと言っただけで、別にバカにしたわけでは僕の肘関節が捻じ切れるように痛いぃーっ!？」

「余計な言葉まで付け足さなくていいのよーっ!」

「おかしい！　どうして褒めたのに怒られるんだ!？」

「こら！　教室内で暴れないの！　他のクラスメイトに迷惑でしょう」

「僕の腕に絡み付いている島田さんを見て注意する木下さん。」

「このクラスで常識的な台詞を聞いたのは初めてなような気がするな。」

「そ、そうね。ごめん……」

怒られて冷静になったのか島田さんの動きが止まる。た、助かった……。

「ありがとう木下さん。おかげで助かったよ……」

「はいはい。でも吉井君も悪いんだからね。あんまり美波を挑発するんじゃないの」

「ご、ごめんなさい」

僕まで怒られた。なんだろうこの逆らえない雰囲気。今の木下さんは雄二よりも代表っぽい。

「ところで吉井、ご飯は？ まあどうせ塩とか油なんでしようけど」

「失礼な、そんなことないよ」

「あれ？ そうなの」

「ちゃんと砂糖もある」

「吉井君、それは反論のつもりなの……？」

あれ、変だな。

「ま、まあそれはともかく、昨日木下さんがカロリーを分けてくれたからもうしばらくは大丈夫だよ」

「……………言っておくけど、今日はあげないからね」

持ってきたサンドイッチと紙パックの紅茶を両手で隠しながら木下さんは口を尖ら

せて言う。

木下さん、君は僕という人間を激しく誤解している。

「だ、大丈夫だよ。今日は一応ちゃんとした食べ物も持ってきたんだから」

「ふうん、——それって、あんばん？」

「うん。今日登校中にコンビニに寄ったんだ」

「……吉井、知ってる？」

「？ 知ってるって……何を？」

「万引きって犯罪なのよ……？」

「知ってるよ！ というかそもそもそんなことしてないから！ これはちゃんと自腹を切って買ったんだよ！」

なんて失礼なことを！ 僕は生まれてこの方万引きや盗みなんて働いた事はないというのに！

「へえ。……あれ？ でもどうして今日に限って普通の食事なの？ 今日って何か特別な日だっけ？」と島田さん。

「うーん、特別といえば特別かもしれない」

何せ一日で3通もラブレター（一部不明）を見たぐらいだし。

「それはともかく——まあ偶には僕だって贅沢したいしね」

「吉井君、あんぱん一個は別に贅沢でもなんでもないと思うんだけど……」
価値観って人それぞれだよな。

「木下さんは？ 今日はお弁当じゃないみたいだけど」

「ああ、これはね——」

「んむ？ ワシを呼んだかの？」

木下さんに質問をすると、別の場所から秀吉の声が聞こえてきた。

「秀吉、どしたの？」

「どうしたもなにも今ワシの名前を呼んだのではなかったのか？」

「？ 別に呼んでないけど？」

「変じやのう、今確かに木下と聞こえたのじやが……」

「ああなるほど、そういうことか。僕が声を掛けたのはお姉さんの方だよ」

「なんと、そうじやつたのか」

「うん、それに秀吉を呼ぶときはちゃんと秀吉って言うじやないか」

「それはそうじやが全員が全員そう呼んでおるわけではないのう……、一応ワシの苗字も木下じやから。苗字で呼ばれるとつい反応してしまうのじや」

「そういえばそつか。昨日島田さんも言ってたけど、クラス内に同じ苗字の人がいるとどっちがどっちだかわからなくなるよな。」

双子ともなれば尚更だ。小学校や中学校の時とかでも双子つて意図的に同じクラスにならないように調整されてたし。

困ったような顔をする秀吉に、お弁当の蓋を開いてる島田さんは双子を交互に見ながらポツリと言ひ放った。

「双子つて大変なのねえ」

「ええ。小学校の頃とかもよく秀吉と間違えられたりして困ったわ……」

溜息を吐きながら呟く木下さん。妙に感情が籠つてたけど余程のことがあつたんだろうか？

「姉上はまだ良いほうじゃろう。ワシなんて男子便所や男子更衣室に入るたびに騒がれたり男だと認識されず同性に告白されたりと散々じゃ」

「それは今もだよね？」

秀吉は早く自分の魅力に気がつくべきだと思う。

「それは普段から女々しいことばかりしてる秀吉の自業自得でしょう。その所為でアタシまで迷惑してるんだからね」

「しかし姉上。ワシとて好きでやっているわけではないぞ。それにいくら頑張ったところで顔は変えられぬ」

「なら髪をばつさり切つてしまえばいいじゃない。そうすれば少しは男っぽくなるん

「じゃない?」

「それは無理じゃ。この髪は演劇に必要なじゃから絶対に切れん」

「なによそれ。……はあ、まったく面倒ね」

「それはワシの台詞じゃ」

「なによ」

「なんじゃ」

「ま、まあ落ち着いて二人とも。喧嘩は良くないよ」

微妙にギクシヤクとしている姉妹の会話の慌てて口を挟む。

この二人、家ではあまり仲が良くないのかな?

「でも確かに面倒よね。今までは木下って呼んでたけど、ウチもこれから秀吉って呼んだ方がいいのかしら?」

「ワシはそれでも構わぬが」

ふむ、名前か。それなら間違えることもないな。

「じゃあ、僕は優子さんって呼べばいいってことだね」

「はひっ!」

「ちよ!?! 吉井、何言ってるのよっ!」

「え、なんで?」

「……明久、お主は自分が何を言ったのか理解しておらぬのか？」

何を言ってるんだらう秀吉は。

別に苗字が同じで間違えやすいなら名前で呼べばいいだけで——つてうおおお
おっつ!?

そういうことか！ バカア！ 僕のバカ!!

何やつてるんだ僕は！ まだ友達になつて間もない、しかも女の子に対していきなり
馴れ馴れしく名前で呼ぶなんて失礼にもほどがあるじゃないか！

現実に頭が追いついた途端、自分のしたことが猛烈に恥ずかしくなつて慌てて口を開
いた。

「違うんだよ木下さん！ こ、これは秀吉と明確に区別するために思つて試しに言った
だけで決して邪な思いがあつたわけではなくて——!」

「あ、アタシは別に……それでも、いいけど……!」

「あ?」

予想外な返答に思わず間拔けな声が出た。

いいつて、名前で呼ぶことが? ほんとに?

「あれ、いいの?」

「あ、あくまで秀吉と間違えないようにするためだからねっ! それだけだから!」

「う、うん……」

顔を赤らめてぷいっとそっぽを向きながら言い放つきのし——優子さん。

うう、自分から言ってしまった事とはいえなんとも照れくさい。ちゃんと慣れる事ができるかな。

「むー」

と、そんなやりとりを見ていた島田さんは何故か不満げな表情を浮かべていた。

「ちよつと吉井」

「ん、何島田さん？」

ポキリ

あ、嫌な音。

「があああああああ僕の腕が曲がってはいけない方向に曲がってるうーっ!」

「どうして優子は名前でウチは苗字のままなのよーっ!」

僕の腕を（締め付けるぐらい）強く抱きしめたまま顔を真っ赤にして声を荒げる島田さん。

意味が分からない! 彼女は一体何を言ってるんだ!

「だって島田さんは同じ苗字の人なんていないじゃないか! だから名前で呼ぶ理由もないしっ!」

「理由？ 理由ですって？ ……そう、理由があればいいのね……」

「へ？」

「吉井——いえアキ。——そう、ウチからこれからあんたのことアキって呼ぶからあんたはウチのことを美波と呼びなさい」

「なんでっ!？」

「なんでもよ！ さもないと——」

「さもないと？」

「このまま腕を折るわ」

それは僕に選択肢がないじゃないか！

「わ、わかった！ 美波！ 美波って呼ぶからお願いだから腕を解放してえっ！」

「ふん、……バカ」

ようやく美波の魔の手から解放されすつと腕が軽くなる。

腕の調子は——よし、なんとか無事だ。よかった。

途中で指先の感覚がなくなった時にはもう駄目かと思つたよ。

「……ねえ秀吉。吉井君と美波っていつもこんな感じなの？」

「まあ、そうじゃな。去年からずっとワシは見てたのじゃが、二人の間柄はいつもこんな感じじゃ」

「……ふうん、吉井君も大変ね」

「それに関しては同意するのう」

僕と美波が言い争っていた傍で木下姉妹は静かに僕たちを観察しながらぼつぼつと感想を述べていた。

「相変わらずお前らは見てて飽きないな」

「……………(こくん)」

「あ、雄二、ムッツリーニ」

いつのまにか教室からいなくなっていた二人が僕達の傍にやってきていた。

「どこ行つてたの?」

「なに、ちよつとした敵情視察だよ」

「敵? 坂本君、どこかと戦つてるの?」

雄二の台詞に優子さんが首を傾げて問う。

多分だけど、雄二が言つてるのは試召戦争の件じゃないかな。

クラスの数やクラス間の廊下の広さ、実戦を想定した守備配置の想定とか、きつといろいろ作戦を練っていたんだろう。

普段は墮落して何もしない癖に、こういうことに人一倍真剣なコイツらしい行動だ。

「まあな。代表は何かと忙しいんだよ」

それを曖昧に濁す雄二。

昨日、秀吉からお願いされたことを一応は守っているらしい。

優子さんの質問に横柄な態度で返した雄二は、そのままどっかかりと畳の上に腰を下ろした。

そして、何故か僕の肩に手を置いて耳に囁きかけてくる。なんだ？

(で、そつちは何か進展あったのか?)

(進展? 何それ?)

(今更誤魔化すなよ。ずっとラブレターのことを気になってたんだろ?)

(ぶふうつつ!!)

「ん? どうしたのアキ?」

「な、なんでもないよ!」

ちよ、雄二! どうしてそれを!

(なんだ、その様子だと何も進展なしか)

(……進展もなにも、ついさっきまですっかり頭から離れてたよ)

(ほお、つまりお前にとつてもそれほど気になるレベルのことじゃなかったってことか)

(そういうわけでもないんだけど……)

痛かったり恥ずかしかつたりで全然考えてる暇なかったからなあ。

「……坂本君と吉井君。さつきから何をひそひそと話してるの?」

「あの二人にことじやから、また何か悪巧みでも考えておるのじやろうて」

「……………(パシャパシャ)」

「どしたの土屋。ウチらの写真なんて撮って」

「……………姉妹揃った品は珍しい。今ならまだプレミアとして価値あり」

「秀吉、彼は一体何を言ってるの……………」

「気にしたら負けじや姉上。あとムツツリーニ、ワシは男じやぞ」

「……………戸籍上の性別に意味はない。目に見えているものだけが真実だ」

「かっこいいことを言っておるように見えるが全然違うからの!　ワシは生物学的にも

正真正銘の男児なのじやから」

「……………俺は騙されない」

「駄目じや。これはもはや言葉では説得できん」

「……………Fクラスって、わからないわ……………」

僕と雄二が話している脇で、みんなで各々の会話を繰り広げていた。

(雄二こそどうなのさ。試召戦争、随分やる気みたいだね)

(当たり前前だ。Aクラスの勝つのは俺の悲願でもあるからな)

(へえ……………、雄二がどうしてそこまでAクラスに勝ちたいのか知らないけど、どれだけ前

準備したって優子さんが参加してくれないとどのみち試召戦争で勝ち目はないんじゃないの?)

(わかってている。………だが、それはあくまで上位クラスに挑む場合の話だろ?)

(へ?)

(別に、下位クラス程度なら木下の手を借りる必要はない。)

ニヤリと口の端を吊り上げながら雄二は呟く。

(ど、どういふこと!?)

(そのうちわかるさ。それまで楽しみにしとけ)

意味深な台詞を最後に、雄二はまた教室を出て行った。

うむう、ラブレターも気になるけど雄二の目論見も見過ごせない。

一体、これからどうなるんだろう……。

問8 木下優子の憂鬱

——『木下優子さんへ

突然のお手紙をすみません。

このようなお手紙を受け取り大変困惑しているかと思えます。

私自身心が痛い想いですが、もう、自分の気持ちを抑えられないと悟りこうして筆を持たせていただきました。

手紙にてお伝えするにはとても面映いので、直接言葉にしてお伝えしたいです。

お忙しい中恐縮ですが、放課後、校舎裏で貴方が来るのをずっとお待ちしております。』

☆

「……はあ」

無意識に溜息が漏れた。

「——では、以上でHRを終わります。皆さん、家でも予習復習を怠らないよう。気をつけて帰宅してください」

『やっと終わったー』

『地獄のような授業もこれで終わりだ。なあ、この後ゲーセンでもいいかね？』

『おいしいねいいね！ 今月は財布も暖かいから存分に遊べるぜ』

『へっ、百戦錬磨のゲームマスターと呼ばれた俺の出番か』

『嘘吐け。お前先週カードゲームで小坊に負けて泣きべそかいてたじゃねえか』

『あ、あれは手加減してたんだっつ！』

『腹減ったー』

担任の福原先生が退室すると同時に賑やかになる教室。

「……はあ」

そんな喧騒の中で、アタシはもう一度溜息を吐いた。

今、アタシの手には一通の手紙が握られている。

今朝下駄箱で手に入れた手紙。

文面から察するに、どう考えてもラブレターなんだろうけど、今のアタシはどうして

も気乗りしなかった。

……やっぱり、行かないと駄目よね。

別に嬉しくないわけじゃない。

朝一番でラブレターをもらったって自覚した時は内心で舞い上がったし、中身を確認

する時はガラにもなくドキドキした。

好意を持つてくれるのは素直に嬉しいし、こうして手紙越しに気持ちを伝えてくれるのもありがたいと思ってる。

……だけど、今は異性と付き合うとか、そういう気になれない。

今は、Fクラスという環境に慣れるのに精一杯で、とても恋愛に意識を割く余裕がないのだ。

そういう事情もあって、朝に感じた喜びは、時間が経つにつれ徐々に憂鬱という感情に押し流されていってしまった。

いつまで悩んでも仕方ない。

この手紙の差出人の人には申し訳ないけど、早く断りの返事を告げてアタシのことは忘れてもらおう。と陰鬱な気持ちを切り替えて手紙を制服のポケットに仕舞う。

そして、帰り支度を終え鞆を提げて立ち上がった時、

「あの、優子さん」

「え、……吉井君、何？」

隣の席から吉井君が声を掛けてきた。

「えっと、……んー、その」

「……？」

唸る吉井君。自分から話しかけたきた割には妙に歯切れが悪い。まるで親から怒られることを怖がる子供のよう。

何なのかしら、こつちも用があるから用件があるなら早く言っほしいんだけど。

「……言いたいことがあるならハッキリ言ってくれない？ アタシこれでも急いでるのよ」

「ご、ごめんつ。……実は、今朝の手紙のことなんだけど」

「えっ」

「ま、間違つてたらごめん！ でも気になって……。あれってやつぱり、ラブレター……。だつたりするの、かな？」

おどおどしく訊いてきたのは、アタシはついさつきまで頭を悩ませていたことだつた。

どうして吉井君がそれを——って、あの時は吉井君もいたんだっけ。

「……そうだけど、それが何？」

予想外な質問に驚いたけど、素直に照れるのもなんだか恥ずかしかったので、内心の羞恥心を隠すように無感情を装って返事を返す。

すると吉井君の顔はますます歪み、

「うぐっ!?! じゃ、じゃあまさか優子さんはその人と——」

「? 何を考へてるか知らないけど、これから手紙の差出人に会いに行くのよ」
「つ、付き合おうの……?」

「……………、まあ、それもいいかもしれないわね」
嘘だ。本当はそんな気ない。

だけど、子犬のように瞳をうるうるさせながらアタシを見る吉井君の姿を見て、つい虐めたくなつてしまった。

吉井君、男の癖に偶に妙に可愛くなるときがあるのよね。なんだか憎らしい。

まあ、あまり信じられて変な噂が立つても困るし、後で誤解を解くついでに謝ればいいでしょう。

と、

「ぐはあつ!」

吉井君は口から血を吐いて畳の上に倒れた。えええつ! 何でつ!

「ちよつ!?! 吉井君! 大丈夫つ!」

「……………おのれ、憎しみで人を殺せたなら……………」

「いや、今は吉井君の方が死にそうなんだけど……………つて、それより保健室に——つ」

「あー、気にするな木下。それは明久の病気みたいなやつだ」

倒れ伏した吉井君を見下ろしていると、坂本君が横から溜息交じりにやってきてそん

なことを言ってきた。

「病気?」

「ああ、突発性吐血症候群っていう病気でな、シヨックを受けるたびに血を吐くんだ」

「あのね坂本君。こんな時にさらつとホントにありそうな嘘言わないでくれる?」

「……………吐血する量はシヨックの大きさに比例する」

「補足もいらなからつ!」

ふらつとやってきた土屋君に突つ込みを入れる。

その後ろから秀吉と美波も足並みを揃えて集まってきた。

「何々、何でアキ倒れてるの?」

「それは、アタシにも何がなんだか」

「気にするでない姉上。確かに病気というのは嘘じゃが明久がおかしい行動をとるの

はいつものことじゃ。このクラスにいる以上、そんなことに一々驚いていると身がもた

んぞ」

「まあアキだしね」

「寧ろ貴方達が平然としてる方が不思議なんだけど」

何、アタシがおかしいの?

「……………はあ、もういいわ。それで、吉井君はどうするの? 保健室連れてく?」

「放つておいてもそのうち蘇るが、まあこれ以上床がコイツの血で汚れるのは嫌だしな。適当なベッドに放り込んでおくか」

「友達とは思えぬほどぞんざいな扱いじゃのう」

「何を言う秀吉。放置しないだけでも破格の待遇だろ」

この二人の友達という言葉の意味について疑問を感じずにはいられない。

「そ、それならウチがアキの看病するわっ」

そこで美波が坂本を見ながら顔を紅潮させて慌てたような調子で言った。

「それは構わんが。島田、明久がつまらん寝言を吐いても殴りかかったりするなよ。余計重症になるからな」

「……………穢れのない清潔な白い保健室が明久の出血で殺人現場に様変わりする」

「ど、努力するわ」

別に努力はしなくてもいいと思うんだけど…………。

アタシは声が漏れないよう秀吉にこっそりと耳打ちをして疑問を聞いてみた。

（…………秀吉。美波つて吉井君に恨みでもあるの？ 美波の明久に対する態度つてなんだか異常な気がするんだけど。何か酷いことされたとか）

（うむ？ ……そうじゃな。島田の感情はワシにも量りかねぬが、察することはできるぞ。島田が明久に暴力を振るうのはじゃな）

(振るうのは?)

(まあ、家で姉上がワシに関節技を極めるようなものじゃ)

……いい度胸ねアンタ、家に帰ったら覚えてなさいよ。

「ところで姉上、いつまでも教室にいて良いのか? 待ち合わせをしておるのじやろ」

「っ。 そうだったわ。 吉井君に構ってる場合じゃなかった」

「うむ。 明久のことはワシらに任せて行つて来るがよい」

「ええ、お願いね」

気を失つた吉井君を放つて行くのは少々気が引けるけど、今は自分の用事を優先したい。

多分大丈夫よね。 美波や一応秀吉もいるんだし。

逸る気持ち抑えながらアタシは早足に教室を出て、指定されている場所に向かった。

途中、ドリルのような縦ロールツイントール少女とすれ違いながら……。

ドドドドドドドド

ガララッ

『おつねえさまあーっう!! お迎えにあがりましたあーっ! (げしっ)』

『ぎゃああああ美春っ!! 何でDクラスのあんたがここに居るのよっっ!! しかもアキを踏んでるし!』

『決まっています！ 美春とお姉さまが愛し合っているからです！ ですから登下校も一緒にするのは当然です！（げしげし）』

『朝から家の前で待ち伏せしてたのはそういうことなの!? そもそもウチと美春は愛し合ってるなんか——きやあ離して！ ウチにはアキの看病をする大事な役目があるのに！』

『……その明久は清水に踏まれてさらにボロボロになつておるがな』

『そんな豚野郎なんて簀巻きにして窓から捨ててしまえばいいのです！ さあさあ行きましようお姉さま。今日は家でとっておきのデザートを用意しますから』

『もうっ！ どうしてこうなるのおおっ！』

背中から美波の絶叫が木霊してきた。

……本当に大丈夫なのかな。

☆

「……………でいいのかしらっ？」

昨日、吉井君と一緒に昼食をとった場所で足を止め、独り呟いた。

周りを見渡すがアタシ以外人影は見当たらない。よかった。……まだ来ていないのかな？ ……まさかもう帰ったなんてことはないよね？

「うわ、なんかドキドキしてきた」

胸に手を当てると心臓がいつも倍ぐらいに鼓動していて驚く。

ど、どうしよう。まだ会う前なのにこんなに緊張してアタシ大丈夫なの……？

落ち着けアタシ！ 別にラブレターをもらうなんて秀吉より少ないけど初めての事じゃないでしょうっ。て、なんか言つて悲しくなるけど……。

「すう……はあ。すう……はあ。よし」

目を閉じ気持ちを落ち着かせる。

冷静になれ。こういうときこそ平常心よ。

何度かそんな風に自分に言い聞かせながら相手が訪れるのを今か今かと待っている。と、不意に背後から弱弱しい声があった。

「あの……すいません」

き、来た！

「は、はいっ！」

「きゃっ!!」

アタシの声に驚いたのか、後ろにいた女生徒は軽い悲鳴と共に一歩後ずさった。

あ、あれ？ 女の子？ ふう、何だ別人か。びっくりした。

「あ、ごめんなさい。突然声を掛けられたものだからちよつとびっくりして」

「だ、大丈夫ですつ。私こそ不注意で、ごめんなさい」

怯えた様子でペコリと頭を下げるおさげの女の子。

うーん、見たことない顔だけど下級生かな？ こんなところに来るなんて道にでも迷ったのかしら？

アタシは、明るい外用の顔を取り繕って言葉を紡いだ。

「それで、アタシに何の用なのかな？」

「え？」

おさげの少女は頓狂な声を上げる。

「あの、木下優子さん……ですよね？ もしかして弟の秀吉君？」

「？ ううん、アタシは木下優子だけど、ごめんなさい。どこかで会ったことがあったかしら？」

「いえつ。初対面です。そういう意味でなくて……、ひよつとして手紙受け取ってないんですか？」

「手紙？」

その言葉にアタシはハツとして自分の制服のポケットに視線を落とす。

まさか……。でもこれはラブレター……。つまり男子が書いてくれたものじゃないの？

じゃないといろいろ辻褃が、内容だつてどう見ても告白文だし。でもこれが目の前のおさげの子がくれたものならいろいろ前提からおかしいことになる。ど、どうなつてるのよ！

頭の中に浮かんでいた告白から返答までのビジョンががらりと音を立てて崩れる。急転直下の状況に頭が追いつかない。

とにかく確認をとるしかない。この手紙の差出人が本当に彼女なのか。

恐る恐る、ポケットに手を入れて例のラブレターを取り出して見えるように胸の前まで掲げた。

「まさか、これを書いてくれた人……。？」

「あー！ はい。それです！ よかった。ちゃんと受け取ってくれてたんですね」

不安そうな顔から一変、ぱあっと明るい笑顔で胸を撫で下ろすおさげの少女。

え、ええええっ!!

「ちよ！ ちよちよちよちよつとまって！ じゃ、じゃああの文面も貴方が書いたの？」

「そうですけど、何か変でしたか？」

「変じゃないけど……。ごめんなさい。ちよつとだけ考えさせて」

待つて待つて、それじゃあこれを出してくれたのはあの子で内容的にこれからこの子はアタシに告白を――。

ええっ!?! そんな! 彼女は女の子なのよ! それなのに告白つて! 女と女、つまりこれつて同姓愛……。

だ、駄目よつ。男同士ならともかく女同士なんて……。そんなの不健全だわ。いくらなんでも認められないつ。でもでも彼女だつてきつと悩んでここまで来てくれるんだからこつちだつてちゃんと誠意を持つて応対してあげないと失礼よね。

大きく息を吐き、アタシは真剣な眼差しでおさげの子の目を見つめて頭を下げた。

「ごめんなさい。アタシ同姓とはお付き合ひできません」

「何の話ですか?」

あれ、違うの?」

「え、この手紙つてラブレターじゃないの?」

「ええっ!?! ち、違います! 何を言つてるんですか!」

「だつて、この文面からだとそうとしか……」

「私はただ同じクラスの木下さんに相談したいことがあつただけで……」

「相談? ああ、そ、そうなんだ。そう、相談なのね……。あははは」

感情の起伏が一気に下がる。

持っていた手紙を開け文面をもう一度よく確認すると、確かに相談ごとがある。という風にも読み取れなくもない。

何？ ということはつまり、アタシの勘違い？

「どうかしましたか？」

「え!? ううんなんでも！ あは、あはははは」

「？」

……なんだろう、このホツとしたようなガツカリしたような微妙な気持ち。

そして数分前まで勘違いして恋する乙女のようにドキドキしてた自分を怒鳴りつけた。たい。

ていうか貴方もこんな意味深な文を書かずに素直に相談があるって書きなさいよね。紛らわしい。

なんて文句は当然顔に出さず、あくまで寛容でやさしげな微笑を浮かべながら続きを促す。

「で、何の相談なの？」

「はい。聞いていただけますか？」

「勿論。何でも言つて。アタシにできることなら協力するわ」

ともかく、ことがただの悩み相談なら何も心配する必要はない。

ここからは面倒見の良い木下優子として話を聞いてあげましょう。

おさげの少女は、アタシの顔を不安そうに見つめ僅かに間を空けた後、零すように告げた。

「……………木下さんと同じクラスにいる、吉井明久君のことです」

「えつ、よしい、くん？」

「はい」

こくん、と頷く。意外な名前の登場に少なからずアタシは驚いていた。

どういうこと？ 吉井君の相談って……………彼女は吉井君の知り合い？ 一体どういう

関係なのかしら？

しかも直接吉井君を呼び出さずにアタシを通して相談してくるなんて、何か言いづらい相談なのかな？

「その……………とても言いづらいことなんですけど、このことは誰にも言わないでくださいね」

「安心して。秘密は守るから。ここでの会話は貴方とアタシの二人だけの内緒よ」

「ありがとうございます。……………あまり驚かずに聞いてくださいいね」

「ええ。大丈夫よ」

もう十分驚いてるからね。これ以上何に驚けというのか。

そして、おさげの少女は神妙な表情で告げた。

「……Fクラスにいる吉井君と代表の坂本君って、付き合ってるって聞いたんですけど本当なんですか？ 恋人的な意味で……」

「……………は？」

え……………？ 何それドウイウコト？

問9 交渉

「——はっ」

ガバツ——と飛ぶように起き上がった僕。

……今、とてつもなく不本意な噂を立てられた気がする。なんだろう、悪い夢でも見たのかな。

「あれ？　(´)(´)(´)(´)(´)？」

辺りをキョロキョロと見回しながら呟く。

周囲を観察すると壁、床が白一色で身長計と体重計が目に入る。そして鼻につく消毒用のアルコールの匂い。

察するに、どうやらここは保健室らしい。僕はそのベットの一つを借りて眠っていたようだ。………何で？

おかしいな。……確か僕、最後のHRが終わってからすぐ帰らず教室にいたはずなんだけど。

軽い眩暈を感じながら腰に掛かった毛布を手で退ける。慎重に足で床に立つとまだ意識がはつきりとしていないのか少し足元がふらついた。

「うーん、僕は何をやっていたんだろう……」

意識を内側に向けて記憶の海を探る。

えー……、朝に3通もラブレターを見て、そのうち一通が僕と同じクラスの優子さん
充てで、ただでさえ女子の少ないFクラスからさらに華を奪うなんて憎たらしい相手を
いかに惨殺するかじっくり作戦を練ろうと――。

「っ!? そうだ! ラブレターだ!」

こんな大事なことを忘れてたなんて、しかも気絶してた所為で時間も経ってるし――
っ。

「ちよつて待つて。今何時……?」

ハツとして壁の時計に目をやると、すでに時刻はLHRから30分以上過ぎていた。
「えええっ!? もうこんな時間経つてたのっ!?」

驚きに廊下まで聞こえるぐらいの絶叫を上げる。

気絶からの覚醒という意味では十分早い時間だが、今の状況で30分もの空白は開け
たのは最悪だった。

バカッ! 僕のバカ! 何暢気に寝てるんだよ! これじゃ大事な告白の場面に立
ち会えないじゃないか!

「はあ、これじゃもう終わってるよね……」

告白から返事なんて30分も掛かるわけがない。今頃はすでに何かしらの返事を返しているだろう。

「……優子さん、なんて返事したのかな」

放課後に最後に会話して記憶では優さんはラブレターに対し肯定的な反応をしていた。

振り分け試験の所為で不本意な学校生活を強いられている彼女にとっては、恋をするというのは一種の清涼剤になるのかもしれない。

そう考えると、僕にはどうこう言える資格はない。いや、もともとそんなものはないと思うけど……。やはり相手のことは気になる。明日にでも聞いてみようか。

そんなことを考えながら、僕はがつくしと肩を落としながら保健室から出ると。

「うん、吉井じゃないか」

「あ、西村先生」

廊下に出たところで、ぼったり鉄人——もとい西村先生と出くわした。

「保健室から出てきたのか。……また何か悪さをしたんじゃないだろうな？ まったく、新学期早々から問題を起こすんじゃないぞ」

「いやいや別に何もしてないですつて。ただちよつと気絶してただけで」

「普通、学校で気絶するということが自体おかしいのだがな」

確かに。

「まあいい。だがあまり問題を起こすんじゃないぞ吉井。お前ももう二年生だ。これからは下級生に恥ずかしくないよう行動には気をつけるように」

「別に僕は何もしてないですって、いつも雄二達が無駄に騒ぎを大きくしてるんですから」

「それでもお前が騒動の中心にいることにはかわらんだろう」

「うぐっ!？」

「あまり俺の手を煩わせないようにな」

握り拳を作りながら言う鉄人。その拳は一体何に使うつもりなの？

「先生、学校での体罰って、禁止されてるんですよ？」

「安心しろ。お前は特別だ」

「そんな特別はいりません!」

「なら目をつけられないよう気をつけるんだな」

なんか言い含められたような気がする。おのれ鉄人! 話術もうまいなんてコイツに弱点はないのかっ。

「……ところで、木下の様子はどうかだ？」

と、そこで少し神秘的な顔で西村先生が尋ねてきた。

「? 秀吉なら元気ですよ」

「そつちじゃない。俺が気にしてるのは双子の姉の方だ」

「優子さんを?」

「ああ」

「……別に、今の所はおかしな様子とかはないと思いますけど。今日も美波と楽しそうに話してましたし」

昨日のお昼休みでの会話が一瞬、脳裏を過ぎったが口には出さなかった。

理由はないけど、なんとなく人に話しても良いのか迷ってしまったからだ。

鉄人のことだ。もしかすると僕の隠し事なんてお見通しなのかもしれない。しかし、

西村先生は少しだけ間を挟んだ後、

「そうか」

と一言だけ応えた。

「先生。優子さんのこと心配してたんですか?」

「当然だ。俺は教師だぞ。生徒の状態を常に気にかけて当たりまえだ。……今回の件は俺だけでなく、多くの先生方が気に病んでいる。まだ一年生だった頃から社交的で明るい木下は多くの先生や生徒から慕われていたからな。このような結果になって衝撃を受けているんだ」

本気で落ち込むように西村先生は言う。この先生が嘘を吐くとは思えない。きつと先生は本気で優子さんのことを心配しているんだろう。だけど、その顔を見て、僕はついムツとしてしまった。

「……そう思うなら優子さんだけでも振り分け試験をやり直しさせてあげれば良いじゃないですか」

「それはできません。学校は公平の場だ。例外は認められん。一度でもそれを許してしまえば他の生徒に示しがつかなくなるからな」

「この学校って公平って言葉から一番縁遠い位置にあると思うんですけど……」

公平を期すなら教室の設備を統一すべきだ。

「否定はできません。だが設備に関してなら、文月学園にはちゃんとした手段があるだろう」「試召戦争……ですか」

「そうだ。試召戦争に勝ち、上位クラスに勝ち上れば今よりランクの高い設備を入れ替える事ができる。さすがに振り分け試験直後の今すぐには無理だろうがな。少なくともチャンスは残されているだろう」

すでに雄二が試召戦争に向けて動き出していると言ったら鉄人はどんな顔をするだろうか。少しだけ気になった。

「そうですね」

「……実を言うとな。俺はお前達に期待しているんだ」

「へ？」

意外な発言に変な声が出た。期待？ なんのことだろうか？

「うむ。こう言うると他のクラスへの鼻屑になつてしまうからあまり大声では言えんが、俺はお前達ならきつと何か仕出かすだろうと踏んでいる」

「それは……」

さすが鉄人。勘がするぞい。

「勿論問題行為になるような真似なら許さんが、それ以外の行動なら先生は極力応援したいと思つている。お前はバカだが、人に対する思いやりは人一倍あることも知つている。だからこそ俺は昨日、校門前でお前に木下の事を任せただ」

珍しい鉄人の褒め言葉。なんだか恥ずかしいなあ。

「そ、それは嬉しいですけど、僕には特別なことなんてできませんよ？」

「そうだな。確かにお前一人では無理だろう。だがお前は一人じゃない」

「む」

「そうだろう。吉井、お前がその気になればいつも一緒に問題を起こす坂本や土屋を巻き込んで、先生も想像できないことをやらかすかもしれん」

わざわざ最初に試召戦争の話を持ち出してこんなこと言うなんて、鉄人はこう言いた

いのか？

「……………それって、つまり試召戦争でAクラスに勝って設備を手に入れろということですか？」

「そこまでは言っておらん。いくらなんでもFクラスがAクラスに勝てるわけがないからな。だが、もしかするとお前ならそれすら——」

「おや、西村先生。そんなところでボケーと突っ立って何をしているんだい？」

「…学園長」

何か言いかけた西村先生の声を遮るように、先生の背後から初老のおばあさんのような人がやってきた。どうやら学園長らしい。

西村先生は僕に向けていた視線を切って、学園長の方へ体を向け背筋を伸ばしながら口を開いた。

「いえ、ちよつと生徒と軽い世間話を」

「ほお、そうかい。……おや、そつちのは確か、観察処分者の吉井……だったか」

「えーつと、はい。どうも」

なんとなく居心地悪く感じるが学園長、ということらしいので一応頭を下げる。

それが御気に召したのか、学園長は「ほほお」と表情を緩めた。

「関心だねえ。観察処分者になんて認定されるヤツだからどんな頭の悪い糞ガキかと

思つたが中々礼儀が出来てるじゃないか」

な、なんかムカツク——つ。

何様なんだこのババアは——つて、学園長か

しかし生徒に対してこの横柄な態度、本当に学園の長なのか？

「いえいえ、年上は敬わないといけませんから。決して胡散臭そうなババアだなどか思つてませんよ」

「……前言撤回。やっぱり生意気な糞ガキだね」

「なんだと糞ババア！ 僕のどこが生意気なんだ！」

ごっつん

「あ痛っ!？」

「学園長だ。馬鹿者」

鉄人が僕の頭に拳骨を落とした。くう、ここは分が悪い。

「ふんっ。西村先生、その生意気な生徒をしつかり指導するんだよ」

不機嫌そうな面を下げて学園長は僕達の横を通り過ぎる。

……そこで、僕はハツと思ひ浮かんだ。そうだ。学園長ならなんとか振り分け試験を再考する手段を知っているかもしれない。いや、知らなくても何か条件付きで再試験を申し込む事ができるかもしれない。

生徒に対する思いやりを欠片も感じられないほど仏頂面だが、こんな顔でも仮にも学園の長だ。話ぐらいいは聞いてくれるはず。

「学園長！ 待ってください！」

孔明を閃いた僕は衝動的に、学園長の背中を呼び止めていた。

「なんだい。まだ何かあるのかい？ アタシしや忙しいんだよ」

面倒くさそうな態度を隠そうともしない学園長。……なんだか駄目そうだなあ。

ええい、こうなったら駄目の駄目元だ。

「どうしても聞いてほしいことがあるんです。少しでもいいんで」

「……仕方ないね。早く言いな」

「はい。——振り分け試験をもう一度やり直す方法ってありませんか？」

「なに……？」

怪訝な顔をする学園長。どうやら話を聞く気にはなっただらしい。

「実は、僕の友達がAクラスの学力があるのに、振り分け試験の日に体調を崩して0点扱いになってしまったんです。その人、Fクラスになった所為で今もシヨックを受けて」

「吉井、お前……」

「あー、なんか職員会議でそんな話を小耳にしたね。それで？ その子の為に再試験を

してほしいと?」

「はい」

「却下だね」

「ぐ……………」

分かつていたとはいえ、こうハッキリと学園の最高責任者に切り捨てられるとくるものがある。

「だけど、ここまでは想定内だ。」

「そんなバカな要求が通るわけじゃないじゃないか。試験は遊びじゃないんだよ。まったく、学校はアンタ達の馴れ合いの場じゃないんだ。友達と一緒にじゃなきゃ嫌なんて我儘なんて聞いてられないよ」

「我儘なんかじゃありません! 振り分け試験は別に受験じゃないじゃないですか。優子さんは実力もあるし、一回くらいやり直したって誰も文句はないでしょう!」

「その振り分け試験で力を出せないようじゃ、受験でも結果を残せるとは思えないけどね」

「くっ」

顔が熱くなる。学園長の言ってる事は正しい。けど、理屈じゃない。これは感情の問題だ。

「自分がおかしいことを言っている自覚はある。でも僕にも譲れないものが出来た。だからこそこで挫けるわけにはいかない。」

学園長は正論という武器を振りかざし僕を説き伏せようとする。それに対し、僕はなんとか付け入る隙がないかと学園長の言葉を一字一句聞き逃さず耳に全神経を傾ける。

「文月学園は実戦主義だ。いくら普段勉強ができればようと本番で結果の出せないヤツに意味はないよ。Fクラスに不満があるなら試召競争を仕掛けて手っ取り早く他のクラスの設備を奪ってやりな。その程度もできないようじゃ何を言う資格もないね」

「だけど、それじゃあ設備は良くなってもクラスメイトは変えられないじゃないですか」
「それは仕方ないよ。大事な試験の前に体調管理を怠ったその生徒の責任だ。それをこつちに文句を言われても筋違いさ。何にせよ、口ばっかりで実力を伴わないヤツの言葉なんて聞く気はないよ」

どこまでも冷たく言い放つ学園長。だからこそ、針の穴ほど小さい隙間を付く事が出来た。

「……………それなら、実力があることを示せば、要求に答えてくれるんですか？」

「吉井？ お前、なにを考えている？」

「……………まあそうさね。アンタ達がそれ相応の力があると判断できたなら、ある程度の要求は聞いてやってもいい」

「わかりました。じゃあ——」

問10 開戦の狼煙

ダンツツツツ!!!

「俺達Fクラスは、Aクラスに宣戦布告を行う——つつつ!!!」

朝のHR後、教壇に立った雄二が両手を教卓に叩き付けながら、雄雄しくそう宣言した。

『なっ、宣戦布告!? Aクラスを相手に試召戦争するのかっ』

『そんな! 無謀だ!』

『勝てるわけないだろ!』

『木下姉弟がいれば何もいらぬ!』

悲鳴にも似た絶叫が教室内に響き渡る。

Aクラスは学年最高成績者の集まるクラス、対してFクラスといえは勉強嫌いが集まる最低クラス。

優等生VS劣等性。

召喚獣が点数を武器に戦う性質上、誰から見てもその戦力差は明らかだろう。クラスの非難は至極当然のことだった。

「……………」

ざわめき立つクラスメイトを黙らせようとはせず、雄二は自然と喧騒が静まるのを持っていた。

しばらくして教室内に静寂が訪れると、改めて雄二は口を開く。

「みんなの不満はもつともだ。だが俺は勝てない勝負はしない。やると決めたからには勝つ」

『どういうことだ?』

『何を根拠に』

『勝てる見込みなんてないだろう』

「ある」

押し寄せる非難の波を雄二は一言で相殺させる。

「何の策もなく試召戦争をしようなんて言わない。このクラスにはきちん勝てる要素がそろっている。今からそれを説明しよう。まずは——」

「……………」

雄二がどこかに視線をやると同時に、ムツツリーニが席を立ち壇上まで歩いていった。

そして雄二の横に並ぶ。

「すでに何人かは知ってると思うが、こいつがかの『寡黙なる性識者』だ」

『なに!? あいつが!』

『信じられない』

『だが見ろ! 良く見ると頬に畳の後が残っているぞ! あれはきつとスカートの中を覗いていたに違いない』

「……………(ぶんぶん)、そんなことはしていない」

『顔を真っ赤にして否定した!』

『なるほど、確かにムッツリーニの名に恥じないむつつりスケベぶりだ』

しようじき、その認識のされ方はあんまりだと思う。

「ムッツリーニにはこの二日間、他のクラスの情報収集をやってもらっていた。すでに敵の情報はすべて把握していると言って良い。情報は戦の要。その大部分をすでに握っている我々が他のクラスより一歩リードしていることは説明するまでもないだろう」

『『おおおっ!!』』

「次に木下姉弟。姉の方は、説明するまでもないだろう」

「……………」

雄二に意味ありげな視線を向けられた優子さんが無言で見つめ返す。

「Aクラスレベルの学力を誇る木下姉は現在俺達の最大戦力だ。弟の秀吉も演劇の才能をフルに生かして敵を霍乱してもらうことができる」

『おお、なんだかすごそうだな』

「あまり期待をされても困るが、ワシなりに全力を尽くそう」

「……質問、いいかしら？」

優子さんが手を上げて言った。

「何だ？」

「クラスの総意としてAクラスに試召戦争を仕掛けるのはいいわ。決まった以上はアタシもクラスの一員として本気で戦う。でもアタシの点数は主席どころか次席ですらないのよ？ そんなアタシをAクラス相手の要にしたいの？」

その質問にクラスの視線が一斉に雄二に向けられる。

確かに今僕らの学年で一番頭がいいのはAクラス代表、霧島翔子さん。そして次席が姫路さんだろう。

その下は確か男子の久保君だったと思うから、優子さんの点数の順位は良くて4位、最悪もつと下の位置にいる。

つまり、いくら優子さんの点数が高くても、Aクラスにはそれ以上の学力を持つ生徒が最低三人はいることになる。これは間違いなく不利だ。

「わかってる。それも織り込み済みだ。その上で俺も点数差をフォローする作戦を考えている。そもそも前提として有利不利を言うなら俺達は点数では全面的に負けているんだ。どの道、木下以外にAクラスとまとも相対できるのはいないんだからそこはあまり問題にしないでいい」

ようはやりようだ。と雄二は不敵に笑う。

「……分かったわ。いろいろ疑問は残るけど、今はそれで納得しておいてあげる」

「感謝する。木下は行動派のようだから、なるべく現場での指揮も執ってもらうことにする。いろいろ役割が多くなると思うが、よろしく頼む」

「ええ」

「勿論、俺も代表として全力を尽くす」

『おお。なんだかんだで坂本もやる時はやるよな』

『坂本って……確か小学生の頃は神童って呼ばれてたらしいぞ』

『ってことは学力もAクラス並になるってことか』

『振り分け試験では手を抜いていたのか』

『すげえ。考えてみればこれってすごい面子じゃないか。な、なんかいける気がしてきたぞ』

クラス中がやる気に満ちてくる。

壇上に立つ雄二の弁一つで、今間違ひなくクラスの士気は上がっていた。「それに、吉井明久もいる」

.....シン

一瞬で下がる士気。ちいっ！ 僕の名前はオチ扱いかっ！

『.....誰だ吉井って？』

『知らんが名前からしてなんか馬鹿そうだ』

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を挙げるのさ！ そして今名前をバカにしたやつ表出ろ！」

雄二やムツツリーニと違って僕はいたって普通の生徒だ。妙な期待をされても困る。名前を聞いたことがあるといっても、大抵ろくなもんじやないだろう。

「知らないやつに教えてやろう。この吉井明久は、『観察処分者』だ」

あ、それ言っちゃうんだ

『観察処分者？ それってすごいのか？』

クラスメイトの一人が手を上げて聞いた。

「そうだな。誰にでもなれるものじゃない。慎重な選考の末、特別に選ばれたものだけに与えられる称号だ」

「そのおかげで明久は毎日いろいろな先生に呼び出されるぐらいの人気者じゃからの

う」

「……………引く手数多」

「ホント、アキは先生に頼りにされてるもんね」

「なんかそれだけ聞くと僕、すごい優等生みたいだね」

「実際はバカの代名詞だけどな」

「雑用係よね」

雄二と優子さんがバツサリと言い捨てた。な、なんかヒドイ……。

「《観察処分者》っていうのはつまるところ木下の言う通り教師の雑用係だ。主に力仕事なんかを特例として物に触れる召喚獣を使ってこなしたりしている」

召喚獣は原則として、現実の物に触ることが出来ない。

それは召喚獣が人間より数倍もの力を持つているからだ。だから試召戦争の際には先生に特別な《フィールド》を展開してもらいその中で勝負する。それが試召戦争における召喚獣勝負の大まかなルールだ。

だけど、例外として普段から雑用係として召喚獣を使わなければならない《観察処分者》だけは、その分のペナルティからはずれ召喚獣が物体に触れることができる。

勿論、その分のペナルティもあるんだけどね。

「でもアキの召喚獣って本人と感覚を共有してるんでしょ？」

「うん。だから重たいものとか持つとフィードバックで体中が痛くなるんだ」

それが副作用。《観察処分者》の召喚獣は物に触れる代わりに、痛みのフィードバックが発生する。これが結構キツイんだよね……。

『それって試召戦争で役に立たなくないか？ だって戦うたびに痛い思いするんだろ』
『おいそれと召喚できないよな』

そう、その通り。

僕の召喚獣はフィードバックの仕様の所為で召喚者である僕までダメージを受けてしまう。

さすがに僕だって痛いのは嫌だから、なるべく召喚する機会は少なくしたいものだ。

「大丈夫だ。明久でも立派な長所はあるぞ」

「えっ、長所ってどんな？」

意外だ。あの雄二が僕をフォローするようなことを言うなんて。

「ああ。お前の良さは”いてもいなくても戦力に影響しない”ということだ」

「それ遠まわしに役立たずって言うてるよね!？」

「とまあ長々と前口上を述べてみたわけだが」

「無視!？」

ひどい！ あんまりだ！

「正直言おう。こんなのは建前でしかない」

今までの自分の言葉を否定するように雄二は突然そんなことを言い出した。

「みんな、この春から二年生に進級し二日が経った。最初は戸惑うだけだったこのボロイクラスにも慣れたヤツもいるだろう。当然、他のクラスの設備も見たはずだ。その上で今一度、自分の教室を見渡してほしい」

『……………』

「卓袱台に腐った畳。隙間風だらけの窓。汚い埃。恐らくみんなの知りうる限りここは最低の教室だろう。——それに比べて、Aクラスはシステムデスクにリクライニングシート。お菓子食べ放題にジュース完備。さらに超巨大なプラズマディスプレイときた。教室の面積だけでFクラスの約6倍だ。教室格差もここまでいくといっそ清清楚楚いよな」

新学期初日にAクラスを覗いた時のことを思い出す。

あの時は自分のクラスの設備の差に軽く絶望したものだ。

「それを踏まえて、俺はみんなに聞きたい」

そして、雄二はすう、と一息吐いた後、はつきりと言った。

「——不満はないか？」

『『『おおありじやあああああああああああああああああああああああああああああああ

あつっつっつ!!!
『』

クラスの慧思が一つになった瞬間だった。

『なんだよあの設備!!? 俺達って同じ学費払ってんだろ! それでこの待遇の差はあんまりだ!』

『こんなの差別じゃないか!』

『そうだ! 改善を要求する!』

『俺達に必要なものはなんだ? 卓袱台か? 違うだろう!』

『』『』

『この境遇に大いに不満だろう』

『』『』

『ならば全員ペンを執れ! 出陣の準備だ! 今もなお上でふんずり返っているAクラスを蹴り落とす為に!! そしてシステムデスクを俺達で手に入れるんだ!! その為にまずはDクラスを落とすぞ!!』

『』『』よっしやあああああああつっつ!!!
『』

『……うわあ』

クラスの勢いに圧されたのか優子さんは軽く引いていた。

まあ無理もない。Aクラスに入るはずだった彼女はからすれば、目の前でこんな喝采

を上げられるのは完全に未体験ゾーンだろう。

思わず守ってあげたくなる衝動に駆られるが、グツと堪えた。何せ、彼女にはもう心に決めた男性がいるんだから。

「ところで明久。お前振り分け試験で一番良かった科目はなんだ」

そこに雄二が間に入るように質問を投げかけてきた。

「それって点数って意味だよな? ……うーん、一番は多分日本史だと思う。ほとんど分からなかったけど、日本史だけはある程度自信があったし。ていつても80点ぐらいだけ」

召喚獣の戦いにはテストの点数を使用する。当然点数が高ければその分召喚獣は強くなるし、ある程度の点数を超えると特殊な『腕輪』が使えるらしい。

きつと雄二はクラス代表として使える戦力を調べまわっているんだろう。

その雄二は僕の点数を耳にすると、顎に手を当てて何かを考え始めた。

「80か……。悪くはないが確実性に欠けるな」

「? 何の話?」

「ん、ああ、ちよつとな。——木下、少し良いか」

「なにかしら」

「さっそくで悪いが頼みがある。これから昼までの時間になんとか明久の日本史の点数

を100点以上にしてくれないか」

「ひゃくうっ!?!」

100点って、今の点数よりさらに20点も上げないといけないの!?!

いくら他の科目よりマシだったからって、それはいくらなんでも無茶じゃないかな?!

「100点以上? しかもお昼までなんて……、そんな短期間に点数を上げられるわけないでしょう」

「無理は承知だ。別に100点じゃなくてもいい。とにかく今より少しで良いから点数を引き上げてほしいんだ」

「どうしてアタシが……」

「お前しか適任者がいないんだ。知つての通り、Fクラスは勉強嫌いな連中の集まりだからな」

「……はあ、仕方ないわね。……ただし、やるなら徹底的にやるからね」

「ああ、登校時に試召戦争をやるってことで朝は全部自習にしてもらったから、思いつきりやってくれ」

あの、僕を介さずに勝手に僕の予定を決めないでほしいんだけどなあ……。

「開戦は放課後を予定している。午前はみっちり自習、午後にテストを受けてもらう手筈になっているからしつかり勉強しておけよ」

「雄二は?」

「俺は総大将として試召戦争の作戦を練らないといけないんだよ」

「どうやら午前はデスマーチ決定らしい。分かっていたけど、いざ決まってしまうとなんだか憂鬱だなあ。」

「これから勉強漬けになることに途方に暮れていると、雄二が僕の肩に手を回して耳に囁きかけてきた。」

「(そう肩を落とすな。これも愛しの木下の為だと思つてがんばれ)」

「(ぶふっ!? な、何を言うのさ雄二は! 僕は別にそんなこと考えてなんて)」

「(あーはいはい。とにかく、朝は歯を食いしばってそのスカスカな脳に知識を叩き込んでおけよ)」

「軽く流すようにあしらわれる。なんか子ども扱いされた気分だ。」

「……仲良く肩を組んで……。やっぱり、美紀の言うとおりあの吉井君と坂本君は……」

「(ぶるるるっ)?!?!」

「な、なんだ! 今物凄い寒気が!」

「明久、やけに震えておるがどうかしたのかの?」

「ひ、ひでよしっ!? な、なんでもないよ! ただいきなり悪寒がただけだから」

「? そうか」

「多分気のせいだと思っけど。……さて、僕も勉強しないと——ってあれ」

「……………(ぶつぶつぶつ)」

「優子さん?」

「えっ!? 吉井君!? な、ななな何かしら!」

「いや、何って……。雄二に言われたとおり勉強教えてもらいたいんだけど」

「勉強? あ、ああそうね。そうだった。それじゃあはじめましょうか。時間もないし

ね」

「?!」

なんだか様子がおかしい。どうしたんだろう。

顔を赤くして何か独り言を言っていたみたいだけ——はっ! ひよつとして

昨日のことか!?

せつかく彼氏ができたのにさっそく僕のような駄目人間と二人つきりで勉強する状況に内心で彼氏に対して申し訳なく思っているとか。そんなだったら僕はショックで窓からダイブしてしまいそうだ。

「不幸指数120%……。この世には神も仏もいないのか……」

暗い気分のまま、僕は試験勉強を開始することになった。

はあ……。こんなを僕を迎えてくれる温かい天使のような女の子はいないかな……。

問11 宣戦布告

「……づかれた〜」

ボタン、と卓袱台の上に突つ伏す僕。

朝のHRから昼休みまでの計四時間、ずっと日本史の教科書の暗記作業に明け暮れた僕の頭は完全にパンク状態だった。

うう、頭が痛い。これ以上は一語も覚えられないよ……。

「これぐらいでへばるなんて、情けないわね」

僕の対面、卓袱台の向こう側で今までずっと僕の勉強を見てくれた優子さんは頬杖をつきながら悪態を吐いていた。

「たかが教科書の丸暗記じゃない。公式覚えて計算するわけでもないのに何でそんなに疲れるのかしら」

「……いや、普通教科書の丸暗記なんてしないと思う。しかもこんな時期に」

まだ季節は新春芽吹く四月の頭。新学期が訪れて三日しか経っていないのに一科目の教科書を全網羅するなんて夢にも思わないだろう。

それをさも当然のように言う優子さんは、やっぱり優等生なんだと改めて思い知っ

た。この辺って、やっぱり育ちの差なのかなあ……。

当然ながら、教科書の内容は半分も覚えていない。ていうか無理！ 不可能だって！ 常識的に考えて数時間で百ページ以上ある内容なんて覚えられないよ！

「僕の記憶領域のプールはすでに容量オーバーだよ……。これなんて一夜漬け大作戦？」

「急場だから仕方ないじゃない。まあさっきの模擬テストの時で一応^{ポイント}及第点は取れてたし。後は本番でミスしなければ大丈夫でしょうね」

「ほんとに！ よかった……。それならこの頭痛を我慢した甲斐があるよ」

「テストが終わるまで油断しちゃ駄目よ。どれだけ努力しても結果に反映されなきゃ意味がないんだから」

怒られてしまった。真面目だな優子さんは。

「……そうだね。気をつけるよ。これだけ頑張ったんだからちゃんと結果を残したいしね」

「当然、このアタシがマンツーマンで監督したんだから、これで目標に届かなかったら承知しないからね」

「も、もし百点未満だったら……？」

「あはは、その時はその頭を開いて教科書を直接脳みそにねじ込んであげるわ」

笑顔で言うのはやめてほしい。新聞みたいに手で丸めた教科書が割と本気で怖いです優子さん。

「絶対点数取るよ！ 約束する！」

「ん、よろしい」

満足げな顔で丸めた教科書を解く優子さん。こ、これは全力で取り掛からないと命に關わるぞ僕！

お昼休みで徐々に周りが騒がしくなったところで、優子さんは教科書とノート、さっきまで使っていたプリント類をまとめ始めた。

「個人的にはまだまだ教えたりないけど、もうお昼だしそろそろ終わりにしましょう。根詰めすぎても良くないから」

「ん、了解。勉強付き合ってくれてありがとう優子さん。おかげですごい捗ったよ」

「アタシはクラスメイトとして協力しただけだから、お礼を言われるほどのことじゃないわ。人に教えることだって立派な勉強だしね」

気負う素振りもなくきつぱりと言う。きつと本心からそう思ってるんだろなあ。

気にした様子のない優子さんとは逆に、僕は昨日の彼氏の件がちりちりと脳裏を掠めるが、優子さんの勉強を教えるのはノーカンなんだろうか。

それとも彼女が鈍感なだけ……？

「どうしたの真剣な顔して。ご飯食べないの?」

「あ、いや……」

悩む僕を尻目に優子さんはいそいそとお弁当を広げ始める。

うーん……、彼氏からすればどんな理由であれ彼女が他の男性と仲良くするのは気に入らないだろうし、この事で変な騒動を起こすのは避けたい。

男の味方をするように不本意だけど、ここは一つ優子さんの為を思つて釘を刺しておこうか。

「あの、優子さん。勉強を覚えてくれたのはすごくありがたいんだけど、今後はあんまりこういうことをしないほうが良いと思うな」

「え、どうして?」

「どうしてつて……そりゃあ、」

『彼氏がいるんだから僕と一緒にいたら変に勘ぐられちゃうよ?』と言おうとしたのに、何故か肝心な部分がどうしても口に出せなかった。

なんだろう。ここはきちんと言わなきゃいけないのに、言わなくていいような……言いたくないような。

水と油みたいに、絶対に混ざらない二つの想いが僕の頭の中で渦を巻く。いけない。ここで迷ったらますます辛い辛くなる。

「——！」

ええい！ 拘泥するな吉井明久！ 辛いのも最初だけ。ここは清水の舞台から飛び降りるようになにに言つてしまえ！

「僕と d a t t g 一緒 d e t 彼氏が g e t f d g b !!」

「ごめんなさい。できれば英語か日本語で言つてくれないかしら」
しまった。勢い余つて噛み噛みになつてしまった。

よし、もう一度。

「僕と一緒にいる彼氏が変態だよ！」

ダッ！（廊下に向かつてダッシュ）

「あ！ ちょっと吉井君!? どこ行くのよっ！」

僕のバカア！ 緊張してるからつて何言つてるんだ僕は！ 混乱して自分でも何言つてるかわからないよ！

「あ痛っ！」

教室の扉を開けたところで誰かいたのか勢い良く鼻をぶつけた。

相手は相当ガタイがいいのか、ぶつかった僕の方が後ろに倒れる。

「くっ、誰だ——っ」

「あん？ 明久、何してるんだお前」

「あれ、雄二……？　じゃあ僕がぶつかったのは」

「俺だ。まったく、教室に入ろうとしたらいきなり飛び出してきたから驚いたぞ」

「何じゃ。随分焦っていたようじゃがどこかに行くつもりだったのかの？」

「秀吉まで、二人ともどこに行つてたの？」

「作戦会議が^{ブリーフィング}てら購買まで昼飯を買いに行つてたんだ」

「ビニール袋を胸の前に掲げる雄二。ふむ、昼食か。」

「へえ、そうなんだ。ところで僕の分は？」

「はあ？　アホか。何で俺がお前の分の昼食を買わなきゃならん」

「そんな！　ひどいよ雄二！　僕の家庭環境を知っているのにパンの一つも恵んでくれ

ないなんて！」

「お前の家庭環境のどこに同情の余地がある」

まったく、冷たい友人を持ったもんだ。

「もうっ。いきなり走り出して、なんなのよ一体」

背後で不満声を上げながら優子さんが追いついてきた。

「おう木下。明久の調教は順調か？」

「雄二、そこは普通教育じゃないの？」

「似たようなもんだろ」

意味は似てるけどその言い方はひどい誤解を招くからやめてほしい。

「あら、坂本君に秀吉じゃない。——はっ！　もしかして坂本君が近づいてきたことを敏感に気づいて急いで迎えに行つたつてこと!?　ま、まさか二人は本当に——」

「おい明久。なんか全身から鳥肌が立つたんだが」

「奇遇だね雄二。僕もだよ」

「お前木下に何吹き込みやがった。なんかアイツの脳内で激しく気持ち悪い妄想が繰り広げられている気がするんだが」

「ぼ、僕は何もしてないよ」

「だ、大丈夫よ。坂本君が変態だつてことはよく分かつたから」

「全然分かつてねえぞ！　何だその認識は！」

くつ。さつそくFクラスの悪影響が。優子さんがこれ以上毒されないように一刻も早くAクラスに勝たないと！

「いや、これは単に姉上の趣味の——」

「秀吉、サツカーをしましょう。アタシがプレイヤーでアンタはボールね」

「——なんでもないのじゃ」

おかしいな。今、優子さんの方から殺気を感じたような。

——と、そんな僕達を尻目に雄二は顎に手を当てて考え事をしていた。

そして僕に視線を向けておもむろに、

「明久。パンを分けてやろうか？」

「え!？」

掌を返したような雄二の言葉。さっきは罵倒した癖に、一体どういふつもりだろう。

「勿論条件付きだがな」

「……だよ。そうだと思った。雄二が何の見返りもなく人にご飯を分けてくれるわけではないし。それで、僕に何をさせたいの？」

「そう硬くなるな。簡単なことだ。今からDクラスに宣戦布告に行ってきたほしい」

「宣戦布告——ってまだしてなかったの？」

「ああ。向こう側に作戦を考えさせる時間を少しでも無くしたかったからな」

なるほど。実の姑息な雄二らしいやり方だ。

「それで、やるのか？」

「……やりたいのは山々だけど、下位勢力の宣戦布告の使者って大抵ひどい目にあうよね？」

「おいおい、お前はいつの時代の話をしてるんだ。日本史の勉強に集中しすぎて記憶が過去に逆行してるのか。この現代日本でひどいことなんてされるわけがないだろう。寧ろ歓迎して迎えてくれるはずだ」

「そう思うなら雄二がいけばいいんじゃないやあ」

「俺はFクラスをまとめる作業で忙しいんだ。それで、やるのか、やらないのか？」

「痛いのは嫌なんだけどなあ」

「大丈夫だ。俺を信じろ。大事な戦力をこんなところで騙したりしない。それに、試召戦争はお前の希望でもあるんだろ」

その一言が胸に来た。そう、優子さんをAクラスにするためにも、絶対に試召戦争で勝ち上がらないといけないんだ。それをこんな前座で立ち止まっているわけには行かない。

「——っ！ これも僕のカロリーの為！ わかった！ やるよー！」

「よく言ってくれた。それじゃ頼んだぞ。お前はFクラス全員の意思を背負っているんだ。堂々と宣言してこい」

そうだ。これは僕一人の戦いじゃない。クラスが丸となって戦う戦争なんだ。

ここで僕が下手に出たら確実に舐められる。そうならないよう胸を張って手袋を投げつけなければ。

「それじゃ、行ってくるよー！」

友人の見送りを背に、僕は勇猛果敢と教室を飛び出した。

「坂本君、人を誘導するの上手いわね。それとも吉井君がバカなだけかしら」
「多分両方じやろう」

「……はあ、せっかく作ったのに」

「んむ？ それはお弁当かの？ ひよっとしてワシの分か？」

「アタシのに決まってるでしょ。どうしてアタシがアンタの分のお弁当を作らないといけないのよ」

「少しは弟に対する愛情がほしいのじゃ」

☆

「騙されたよっ!？」

満身創痍になりながら教室に転がり込む。

し、死ぬかと思った。Dクラスの連中、思い切り首を締め上げてきたよ！

「やっぱりな」

パンを口に入れながら平然と言う雄二。ブチ殺すぞコラ。

「やっぱりってなんだよ！ 宣戦布告の使者は結局ひどい目に合うんじゃないか！」

「安心しろ。すべて作戦通りだ」

「ちよつとは悪びれろよ！」

コイツは僕のことを一体なんだと思ってるんだ。

「はあ……。——ともかく、ちゃんと宣戦布告はしてきたんだから、報酬のパンがほしいんだけど」

「おう。ほらよ」

↓ハンバーガー（上だけ、具なし）。

喧嘩売ってるのかオイ。

「ちよつと雄二。これ中身は？」

「気にするな。ちゃんと俺が食べてやった」

「なんでさ！ これじゃハンバーガーじゃなくてただのバンズだよ！ これじゃいくらなんて物足りなさ過ぎる！」

「人が用意した報酬にケチをつけるなんて我儘なヤツだな」

「どう見てもただの食い残しじゃないか！」

立派に活躍した部下を労わないなんて指揮官失格じゃないの!?

こうなったら今からでも購買に買いに行かせるか。

「言つとくがもう昼休みも終わるから今から購買に行つても何も無いぞ」

「最後の希望がぁー!?!」

くそ！ それならせめてこのパンツをちびちびと味わって食べてやる！

「吉井君、大丈夫？」

そうしていると、優子さんが怪訝そうな顔をしながらやってきた。

ボロボロになった制服の有様の僕を見て心配してくれたのだろう。

「うん、大丈夫だよ。ほとんどかすり傷だから」

「アキ、本当に無事なの？」

美波まで来てくれた。なんて優しい二人なんだろう。

「全然平気だよ。心配してくれてありがとう」

「良かった。ウチの殴れる場所はまだ残ってるみたいね」

「あーもう駄目！ 全身痛くて動けない！」

島田美波。なんて恐ろしい女なんだ。

「美波、吉井君は怪我してるんだからあんまり苛めちゃ駄目よ」

そこで優子さんが美波を注意する。

「そ、そうね。ゴメン」

さすがに同姓の優子さんに怒られるのは気まずいのか、美波は素直に謝った。

優子さん、なんて頼りになるんだろう。

「ありがとう優子さん。おかげで助かったよ」

「……あんなこと言われたら、ね」

「? あんなこと?」

「つ! こ、これぐらいなんでもないわよ! それより次はテストなんだからしつかり準備しなさいよ」

あーそうだった。

午後は丸々テストだから早く準備しないと。はあ、あんな昼食じゃ力出ないよ……。

☆

遡る事、10分前——。

「坂本君、少し良いかしら?」

「うん? なんだ木下」

「……大した用じやないんだけど、坂本君、さつき吉井君に『試召戦争はお前の希望』って言ってたわよね」

「あー、そうだな。それがどうしたんだ?」

「別に。ただ……ひよつとして貴方達つてずつと前から試召戦争をやるつもりだったんじゃないかって思っただけ」

「なるほど、そういうことか。少なくとも俺はそのつもりだったな。その為にこの学校に入学したと言っても良い」

「そうなの。……じゃあ、吉井君は？」

「アイツの口から試召戦争をしようって言い出したのは、新学期の初日だったな。丁度お前が自己紹介してた時だ。詳しい目的は聞いてないが、召喚獣を出すのが嫌なあいつが自分から試召戦争をしたいつて言ったんだ。あいつなりに何かどうしても譲れないものでもできたんじゃないか。何かとはあえて言わないが」

「……………」

「俺からはこれ以上は言えん。後は勝手に察してくれ。まあ多分、お前の考えてる事は間違いじゃないと思うぞ」

「——本当に、坂本君って詐欺師よね」

「人を騙せなきゃ、人の上には立てねえよ——」

問12 開戦／Dクラス

『『試召獣^{サモモン}！』』

前方から一斉に召喚獣を呼び出す合図が声高に響いた後、キーン！ガギンツ！と鉄と鉄が鏝迫り合う金属音が廊下を走る。

どうやら前線部隊がついにDクラス陣と戦闘を開始したみたいだ。

前線の一步後ろ、中堅部隊に配属された僕では、最前線の状況がよく見えないが、視線の向こう側では激しい戦いが行われていることがピリピリと肌で感じ取れた。

僕の隣では同じ部隊の美波が緊張感漂う中、初めて試召戦争を目の当たりにしたことで感嘆の声で上げていた。

「ついに始まったみたいね。試召戦争が」

「そうみたいだね。なんかドキドキしてきたよ」

体の深から湧き上がるこの高揚。これが武者震いというヤツだろうか。

「アキ、ちゃんとウチらの役割は覚えてる？」

「うん。僕達中堅部隊は前線で戦ってる人達のサポートだよ」

「そうよ。前線で戦ってる人達が点数を消費して補給する間、ウチ達が交代で先行部隊

と入れ替わって前線を維持しなくちゃいけないの。アキは部隊長なんだからしつかり指示だしてよね」

そうである。別に引き受けた覚えはないが、雄二が勝手に僕を中堅部隊の部隊長に任命した。

僕としては、あまり肩が重たくなることはしたくないんだけど、決まった以上はしつかり役割を果たさなければ。

自分のおかれた状況の重さを改めて認識し、気を引き締める。

『戦死者は補習だ!』

その時、渡り廊下の先にある新校舎から、聞いたことのある野太い声が響いてきた。

この声——鉄人か!

『なあっ!? 鉄人!?!』

『召喚獣の点数をすべて消費した者は試召戦争終了まで補習室で特別講習を行う。さあ来い敗残兵!』

『そんな!?! ま、待ってくれ! 鬼の補習は嫌だあ!』

『心配するな。補習が終わる頃には趣味は勉強、尊敬する人物は二宮金次郎という理想的な生徒に仕立て上げてやろう!』

『それは補習じゃなくて強制——あ、うわあああああつっ!!』

『……田中が連れて行かれた。鉄人の拷問なんてごめんだ。この戦争、絶対に負けられないぞ……』

『俺達も負ければあの生徒と同じ運命を辿るのか……。くつ、俺の点数もそろそろヤバイし、ここは引き上げるべきか』

ふむ。話を聞く限りさっそくクラスメイトの一人が戦死してしまったらしい。

その影響でFクラスだけでなく、Dクラスも鉄人に恐れ戦いている。恐らくよほど酷いものを見たのだろう。

点数をすべて失った生徒の悲惨な末路を目の前で目の当たりにした前線部隊の連中の心中は凶りきれない。

試召戦争で点数を失った——戦死した生徒は西村先生に補習室に連行され終結まで監禁される。試召戦争のルールの一つだ。死して屍拾うものなし。田中君、君の頑張りは決して無駄にしないよ。

亡き同胞の想いを胸に、僕はひっそりと戦場から背を向ける。

「美波、僕ちよつと急用ができたから保健室に行くてくる。後のことは任せたからね」

「……あつ！ 部隊長が一番ビビッてどうするのよ！」

背中から美波に襟元を掴まれる。

仕方ない、僕には荷が重かったんだ！

「離して美波！ 鉄人とマンツーマンで補習なんて耐えられない！」

「落ち着きなさいアキ。試召戦争はまだ始まったばかりでしょうが！ ここで中堅部隊長のアンタがいなくなったら前線で戦ってる連中はどうなるのよ！ あっちには木下だっているのよ！」

「——っ」

美波の台詞に体がピタリと停止する。

そうだった。今も前線で戦ってる秀吉達をサポートするのが僕達の役割。それを放棄したら先行部隊が全滅してしまう。

それはイコールFクラスの敗北と同義。目の前の恐怖に怯えてその事をすっかり忘れていた。

「ご、ごめん美波。ちょっと気が動転してたみたいだ」

「まったく、すっかりしてよね部隊長」

皮肉げにそう言つて口を尖らせる美波。

僕達がそんな言い争いをしている間にも、渡り廊下の向こう側の新校舎では熾烈な戦いが繰り広げられている。

DクラスとFクラスの点数差ではすぐに押し切られると思つていたけど、予想外に踏ん張れているようだ。

旧校舎からでは新校舎の様子がイマイチ分からない。できれば現状の詳細な情報が知りたいな。

「美波。前線の様子はどうなってるの?」

「え? んーと、ここからだ見え難いわね。ちよつと待つて、確かめてくるから」

美波は足早に渡り廊下まで様子を見に行つた。

Dクラスに見つかるのを避けるためか、身を小さくして最前線の只中に飛び込む姿がここから確認できる。……なんというか、美波つて偶にすぐく男らしい所があるよね。勝気な性格とかボーイツシユな雰囲気とか、運動神経がよかつたり、胸が小さかつたり。僕は美波が帰つて来るのを首を長くして待つていると、程なくして美波が帰つてきた。

「あ、お帰り美波」

「……ただいま」

妙に不機嫌そうな声。どうしたんだろう。

「? どうしたの。もしかしてかなり押し負けてたとか?」

「そうじゃないけど、……なんかこの辺でとても失礼な事を言われた気がするのよね。アキ、何か知らない?」

「えっ!? そ、そうなんだあ……。僕は何も聞いてないけどなあ。はははっ」

「うーん、まあいいか」

危なかった。もし口に出していたら今頃僕は冷たい床の上に転がされていた事だろう。

まさか心の声にまで反応するなんて。美波の胸に対するコンプレックスは常人の域を超えているな……。

「それで、前線の様子はどうだった？」

急いで話題を変えるべく僕は偵察結果を伺う。

「それが——。今のところは戦力は拮抗してるのよね。寧ろこつちが押してる感じ」

美波は前線で見た状況をつらつらと説明する。

押してるってことは、今の所は前線部隊の連中はDクラスと対等以上に戦えてるってことだろう。

それは、戦況的には僕達が有利なはずだが、どうしてか美波の表情は暗い。

「他に何かあったの……?」

「んー。……ウチの気のせいかもしれないんだけど。Dクラス側はあんまり前線に力を入れていないっぽい気がするのよね。敵部隊の人数もウチらよりかなり少なかったわ」

「敵の人数が少ない? それって先行部隊が頑張つて数を減らしたんじゃない」

「それならもつとこつちにも戦死者が出てるはずよ。何人かは戦死しちゃったけど想定

よりは全然生き残ってるもの」

「うーん、じゃあ僕達みたいに後方に待機させているってことかな」

「そこまでは分からないわ。ただDクラスは攻めよりも守りを固めているみたい。まるで何かから身を守るみたいにな」

「どういうことだろう。初めての試召戦争ということでもまずは様子見を決め込んでいるのだろうか。」

「僕達みたいに点数で負けているならともかく、全体的に戦力が勝っているDクラスが攻めを躊躇う理由はないような気がするんだけど。」

「妙に消極的なDクラスの動きに返って不安を覚える。」

「なんだかきな臭いね。Dクラスは何を考えているんだろう」

「もしかしたら奇襲を狙ってどこかに隠れてるかもしれないわね。とにかく周囲にも注意を払った方がよさそうよ」

「そうだね」

「島田！ 吉井！」

と、そこで前方から先行部隊の一人である芝崎君が息を切らして走ってきた。

「どうしたのよ。前線で何かあったの？」

「ああ。Dクラスのやつら、急に人員を増やしてきやがった。その所為で戦線が徐々に

後退してきてる！　なんとか生き残っちゃいるが俺達の点数も限界が近い」

「なんですって！」

Dクラスもバカじゃない。さすがに前線が押されていると知って人が増やしてきたか。

新たに戦力が投入されたとあつては消耗した先行部隊ではかなり分が悪いだろう。

ここは一旦離脱して点数の補給をするべきだ。

「了解。ありがとう芝崎君」

「気にするな。とにかく先行部隊はここで後退する。すまんが点数補充の間前線を頼んだ」

「みんな！　聞いた通り前線部隊が補充試験に入るよ！　中堅部隊は前線の間前線の下がると同時に全員突撃しろお！　なんとしても最前線を守り抜くんだ！」

「「おおおおおっ!!!」」

僕の号令の下、先行部隊と入れ替わる形で僕達の戦隊がドドドドドオと砂煙を巻くような勢いで一齐に渡り廊下に押しかけた。

みんなの後の続く形で、僕と美波も新校舎へと走り出す。

「明久！」

その途中、今まで戦っていた前線部隊の方から僕を呼ぶ声が聞こえた。これは、秀吉

だ。

女の子のように可愛い顔に汗を滴らせながら、秀吉は十数人ほどの中堅部隊と入れ替わるようにこつちに向かつて走ってくる。

「秀吉！ よかつた。まだ無事だったんだね！」

「なんとかの。じゃがワシの召喚獣の点数も風前の灯じゃ。これ以上の戦闘はとちとキツイのう」

「それじゃあ早く補充試験を受けないと」

「そうじゃな。さすがに全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一、二科目でも受けておこう」

そう言うのと、秀吉は背後に控えた先行部隊を連れて教室へ引き返していった。

最初より人数が減ったところを見ると、結構苦戦していたんだろう。

秀吉達の離脱を最後まで確認し終わると、僕も主戦場まで足を運ぶ。そこではすでに中堅部隊がDクラスと交戦を開始していた。

「アキ！ 前線部隊は全員撤退した？」

廊下の端の方にいた美波が僕を見つけて駆け寄ってくる。

「うん。全員教室まで逃げ込んだよ。美波は？ もうDクラスの誰かと戦った？」

「ええ、かなり苦戦したけど一人補習室に送ってやったわ」

さすが美波。点数の差をものもしないその胆力さには恐れ入る。

「ウチは理数系ならまだ点数はあるほうだからね。今の所はなんとか持ちこたえているわ。けど、あっちは化学教師の五十嵐先生と布施先生を引つ張ってきてる。それとその後ろに学年主任の高橋先生がいたわ」

「学年主任ってことは総合科目か。それだけの数の教師を配置してることば、Dクラスも勝負に出てるね」

きつと秀吉達引き返してきたのはこれが原因だろう。

個人の勝負では勝ち目のない僕らにとって、戦力を分散されるのは何よりも痛い行為だ。Dクラスは方針を変えたのか立会人を増やして一気に片を付けに来ている。

「なるべく一対一で戦わないように！ 周りを囲んで多数で仕留めるんだ！」

後方から今も召喚獣を呼び出して交戦している味方に指示を飛ばす。一応指揮官なんだから、それらしいことはしておかないとね。

最底辺クラスである僕達の戦力は最弱だ。基本能力で負けている以上、どう戦っても僕達はジリ貧になる。

点数で負けている僕らがDクラスの召喚獣に勝つには多対一で取り囲むのが一番効果的だ。この際一人や二人戦死になっても捨身になって相手召喚獣を討ち取るしかない。

幸いDクラスとFクラスの点数差はそこまで絶望的じゃない。うまく立ち回れば十分戦える範囲内だ。

「囲まれるな！ 個人の勝負なら俺達に負けはない！ Fクラスに包囲網を作らせるな！」

向こう側の指揮官の塚本君も僕に追従するように指示を送っている。

美波の話では前線部隊の数が少ないって聞いたけど、今は僕らと同等——もしくは少し少ない程度の人数に増えている。

短期戦は間違いなく不利。とすれば戦死者を増やさないためにはなるべく時間を掛けるの長期戦が望ましい。ここは僕達も戦闘に加わるべきだろう。

「美波。化学の点数は何点ぐらい？」

「60点ぐらいよ。だけどさっきの戦闘で少し消費したから後40点ぐらいしかないわ」

やはりFクラス。万全の点数でも心もとないことこの上ないなあ。

「それじゃあ布施先生と五十嵐先生は避けた方がよさそうだね。校舎の端を移動して奥にいる高橋先生のところまで行こう」

「わかったわ」

「はっ！ そこにいるのは！ 見つけましたよお姉さま——っ！」

移動を開始しようとした瞬間、そんな声と共にDクラスの包囲から女生徒が一人僕達に向かって飛び出してきた。

「なっ!!? 美春! ——— 面白いえば美春もDクラスだったわね! すっかり失念してたわ」

「そうです! 美春はお姉さまが他の豚野郎にやられてないかと冷や冷やしておりました。お姉さまを倒すのはこの美春です!」

ふむ、どうやら美春という子は美波に用があるらしい。

「じゃあ美波。この場は頼んだからね」

「んなっ! ちよつと待ちなさいよアキ! ここは男としてウチを守ってくれるんじゃないの!?!」

「——— そうしてあげたいのは山々なんだけど」

「コロシマス。美春とお姉さまの愛を邪魔する豚野郎は捌いてミンチにしてヤリマス」

「この殺気の中飛び込む勇氣は僕にはないんだ。じゃあ頑張つて———!」

「こ、この裏切り者———!」

美波の悲鳴を聞き流しながら僕はゆつくりと召喚範囲外である10メートル先まで下がる。ここならフィールドがないから勝負を申し込まれることはない。

「さあお姉さま! 美春と一緒に愛の逃避行と行きましょう——— 試^サ獣^モ召喚!」

「く——っ、やるしかないのね。試獣^{サモ}召喚^{モン}——！」

二人は召喚獣を呼ぶ言葉を声高に叫ぶ。

その瞬間、二人の足元から幾何学的な模様が浮かび上がる。教師の立会いの下、召喚獣のシステムが起動した証だ。

そして魔方陣の中から、それぞれの召喚獣がゆっくりと姿を現した。

美波の足元から出てきたのは軍服にサーベルという装備以外、美波にそっくりな外見の召喚獣だった。

ただしその大きさは床から肘程度のサイズで、言うなれば『デフォルメされた島田美波』という感じである。

相手も召喚獣の呼び出しを終わっており、手に持った剣を構えながら腰を低くしている。今にも襲つてきそうな体勢だ。

「あんたもしつこいわね——！　ウチは同性になんて興味ないって行ってるでしょっ」
「嘘です！　お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「ウチは普通に男が好きなの！」

「美春とお姉さまの間に豚野郎の入る隙間など1mmもありません！　美春がお姉さまの目を覚まして差し上げます！」

「——っ」

まるで肉食獣を思わせる疾走で相手召喚獣が一気に美波の召喚獣に肉薄する。

逃げ切れないと瞬時に悟り、美波が咄嗟にサーベルで振り下ろされる剣を防いだ瞬間、二体の召喚獣の間に小さな火花が散った。

「は——っ！」

そのまま美波は力任せに武器を振りかぶり相手の剣を弾き返す。さすが美波、すでにDクラスの一人を下した実力はあるな。

僅かに後退した相手の召喚獣は弾かれた剣を持ち直し体勢を整える。美波もそれに合わせて僅かに前に進んで距離感を図っていると、それぞれの召喚獣の上に点数が表示された。

Fクラス 島田美波

化学 42点

VS

化学 90点

Dクラス 清水美晴

うわっ。倍以上の点数差だ。これはかなりヤバイかも。

「行きますー！」

「くうー！」

再び相手は美波の召喚獣の前まで詰め寄り左から右へ、剣を一閃する。

さつきは力を抜いていたのか、美波の召喚獣はその勢いを殺せず吹き飛ばされてしまった。

無理もない。この点数の差は絶望的とも言えるだろう。

「さあお姉さま。これで美春の勝ちです」

倒れた召喚獣に剣を突きつけ勝利宣言を告げる。

「——っ！ い、嫌よ！ 補習室だけは嫌あ！」

亡き田中君の断末魔を思い出したのか、美波は子供のように騒ぎ出した。だがこのままだと間違いなく美波は補習室へ連行されるだろう。

……あの子に近づくのすごく怖いけど、ここで大事な戦力を失うのは痛いし——仕方ない！

「試^サ獣^モ召喚^シ！」

召喚フィールドに足を踏み入れ召喚を開始する。

学ランに木刀というなんとも頼りない出で立ちの僕の召喚獣は、現れると同時に今も美波の召喚獣に剣を振り下ろそうとしている敵に突進をかました。

完全に美波しか見ていなかったのか、相手は防御の体勢もとらず攻撃を受けた。

Fクラス 吉井明久

化学 49点

V S

化学 68点

Dクラス 清水美晴

うわあ。分かってたけど僕の化学の点数も他に負けず劣らず弱いなあ……。

「っ!? アキー！」

「んなっ!? こ、この豚野郎……。よくも美春とお姉さまの愛の語らいを潰してくれましてね……。許しません——！」

「悪いけど、ここで美波を死なせるわけにはいかないんだ」

今後の戦いに支障をきたすしね。

「アキ……。そんなにウチのこと……。…」

「!? 殺します！ この害虫！」

親の仇を見るような殺気を纏わせながら僕の召喚獣に剣を向けて突撃してくる——
！ 怖い！ やっぱりこの子怖いよ！

「うわあつと！」

振り下ろされる剣を後ろに下がってかわす。

しかし相手は止まることなく、まるで暴風みたいに剣を振り回して攻撃してくる。あ

れを一発でも受けたらどんな激痛が走るやら、想像もしたくないな。

こつちが攻撃する暇もないほど連続で繰り出される剣戟をこつちは紙一重で交わし続けるしかできない。くそ、なんて激しい攻撃なんだ。この子、完全に僕を殺りにきてるよ。

「この——大人しく切られなさい！」

「無茶言わないでよ！」

「大丈夫か島田、吉井！ 援護するぞ——試^サ獣^モ召喚！」

「君は——須川君っ！」

同じ部隊の須川君が召喚獣を召喚して相手に切りかかった。

Fクラス 須川亮

化学 76点

VS

化学 39点

Dクラス 清水美晴

「く——っ。しまった。点数が」

不意打ちが効いたのか召喚獣の点数はかなり減っていた。ナイスだ須川君！

「これで終わりだよ！」

「させません！」

間髪いれずに振りかぶった木刀が剣に受け止められる。さすがに素直に倒れてはくれないか。

「豚野郎が二人になったところで美春を止められると思っただら大間違いです。地獄に落ちなさい！」

すでに瀕死だというのにこの気迫。一体何が彼女をこんなに突き動かしているんだ！

「残念だったわね美春。ウチを忘れてるわよ」

「え——？」

ザシユ、という音と共に、相手の召喚獣の胸からサーベルの刃が飛び出していた。どうやら後ろから美波がトドメを刺したらしい。

召喚獣も人と同じく弱点が存在する。腕や足を切られた程度じゃ大して点数は減らせないが、首や心臓のある胸辺りを攻撃すれば運がよければ即死させることもできる。

美波にその部分をダイレクトに攻撃され点数を失った召喚獣は霧のように霧散して消えていった。

「あ、危なかった。危うく僕達まで戦死するところだったよ。須川君ありがとう」

「助かったわ須川。さあ西村先生！ この戦死者をさっさと補習室へ連行してください

「！」

「うむ、さあ行くぞ清水」

「召喚獣勝負に敗れた生徒は補習室に連れて行かれる。これが『戦死』というヤツだ。

「み、美春は諦めませんか！ 絶対にお姉さまの愛を手に入れて見せます！」

「いい加減諦めなさいよもうっ！」

「なんていうか。変わった子だなあ。」

「ブタヤロウ……。いつか必ず血祭りにアゲテやりますカラ。カクゴしていなさい

「……」

「最後に危険な捨て台詞を残して清水さんは補習室に連行されていった。

「今日は夜道に気をつけたほうがいいかもしれないな……」。

「あ、アキ……」

「うん？ どうしたの美波？」

「……さつきは助けてくれてありがとう……。ウチ、すっごく嬉しかった」

「すたすたと僕の前までやってきた美波は顔を赤くしてモジモジしながらお礼を言ってきた。うーん、嬉しいけどこうして改まって言われるとなんだか照れくさいな……」。

「き、気にしないで。化学の点数も消費しちゃったし本陣に戻って補給試験を受けてく

「るといいよ」

「うん……………そうする」

「……………」

やけにしおらしい美波の態度に返って疑問を抱く。

あ、ひよつとして僕が危ない所を助けたことで変な気を抱かせちやつたのかな。天敵とはいえ美波も一人の女子。こういう色恋沙汰には滅法目ざといに違いない。

うーん、これは後々の誤解を無くすために言っておいた方がいいかな。

「あのね美波」

「な、なに……………」

「僕が美波を助けたのは試召戦争に勝つためであつて、別に美波のことなんてなんとも思っていないから大丈夫だよ」

バキッ！

「つて痛だぁー！つ！ どうしてそこで僕の関節を外すのー！？」

「あんたは毎度毎度一言多いのよおー！」

「(ボキボキッ) んぎやああつ！? 僕の脊椎が人体にあるまじき方向へ曲がつていくうっ!?」

「落ち着け島田! 吉井隊長は味方だぞ!」

「敵! やっぱりコイツはウチの敵よおーつ!」

否定できない……っ。

「す、須川君！ 美波を早く本陣に連れて行って！」

「了解」

「こらあ待ちなさいよアキイ！」

須川君に羽交い絞めにされながら、美波は本陣であるFクラスへと戻っていく。危うく味方に殺されるところだったよ……。

「さあ、秀吉達が補給試験を終えるまで耐えるんだ！ 前線を守りきれるように！」

剣戟や怒号が飛び交う戦場に負けないよう大声で呼びかける。

こっちも疲弊しているけど、向こうだってかなりダメージを与えられている。

先行部隊が回復すればまだなんとか乗り切られるレベルだ。ここからが僕達の正念

場だ——！

☆

「吉井隊長！ 横溝がやられた！ 布施先生側は残り二人だ！」

「隊長！ 五十嵐先生側が俺一人しかいない！ 誰か援軍を頼む！」

「総合科目側の藤堂が戦死しそうだ！ 誰か助けてやってくれ！」

が、戦況は想像以上に劣勢だった。

部隊の人数はすでに半分以下まで減らされて、残りの戦力の点数もそこを尽きかけてる。

できれば本陣の方へ援軍を求めたいけど、そうしたら作戦につき込む戦力がなくなってしまう。

「ここは僕達だけで喰い止めるしかない——！」

「布施先生側は防御に専念して！ 五十嵐先生側の人は総合科目と切り替えながら臨機応変に戦うんだ！ 藤堂君は可愛そうだけど諦めて！」

「了解！」

戦いの喧騒の負けないよう大きな声で指示を出すと、みんな僕の言う通りの行動に移ってくれる。一応隊長として認めてくれていているらしい。

「Fクラスのヤツ、明らかに時間稼ぎが目的だぞ」

「思い通りにさせるな！ 力はこっちの方が有利だ！ Fクラスを切り崩していけえ！」

「くそお！ もうもたねえ！」

「戦力が足りねえ！ このままじゃ全滅だ！」

Dクラスがこちらの意図に気がつき始めた。これはますますやりづらくなる。

加えて僕達の点数ももうギリギリだ。これ以上は戦死を覚悟して持ち越えないといけない。

どんどん不利になる状況に下唇を噛んでいると、美波を本陣に連れて行った須川君が血相を変えて戻ってきた。

「吉井！ Dクラスのやつら、数学の木内を連れ出したらしい！」

「なんだって!？」

数学の木内先生といえ、採点がきびしい変わりに採点の速さが群を抜いていることで有名な先生だ。

Dクラスのやつら。ついに決着に踏み込んできたか。

——雄二に託された僕達の作戦はとにかく時間を稼ぐ事。前線を長く保つこと。だが、すでに部隊は敗戦濃厚状態だ。長くても後10分持つかどうか……………。

まったく！ 雄二のヤツは何をやっているんだ！ 早くしないと間に合わないよつ！

「吉井隊長！ 布施先生側が後一人だ！ もう後がねえ！」

『Dクラス！ このまま敵部隊長の吉井を攻め落とせ！』

『西村雄一郎、戦死！』

「くそおつ！ ここまでなのか！」

生き残った味方も残り数人。やばい。このままじゃ本隊が到着する前に全滅してしまおう！

「く、くっそおおっつ!!」

絶体絶命の窮地かと思われた、その時――、

「試^サ獣^モ召喚^ン——っ!」

僕よりも後方から召喚獣を呼ぶ声が聞こえてきた。この声は――!

「吉井君! 無事!?!」

「優子さん! 良かった! 間に合ったんだね!」

待ちに待った人。木下優子さんが渡り廊下から召喚獣を呼び出して走ってきた。

「明久! またせたな!」

その遙か後ろ、旧校舎側から聞きなれた大声が響き渡る。

声のした方に顔をやると、雄二が補充試験をしていた前線部隊も加えた本隊を引き連れてきていた。やった! 援軍だ!

「雄二っ!?! 遅いよもう!」

「悪かった。だがここからもう大丈夫だ。Fクラス本隊! 中堅部隊が守ってくれた前

線をここで突破する。道を阻む敵Dクラスを殲滅しろ——!!」

「了解!!」

『くっ!! Fクラスのやつら、まだこれだけの戦力を——!』

「よそ見していいのかしら——っ!」

戦くDクラスの一人に優子さんが召喚獣で攻撃する。

『なっ!? うわああっ!』

Fクラス 木下優子

化学 356点

V S

化学 102点

Dクラス 鈴木一郎

今まで僕達が苦戦していたDクラスの召喚獣が、優子さんの一撃で紙のように吹き飛ばされた。

……すごい。とんでもないパワーだ。そしてこの点数。これがAクラスの実力なのか!?

「点数が残り少ない人は戦線を離脱して補充試験を受けて! 本隊は半分は坂本君の護衛! まだ余裕がある人と本隊のもう半分はアタシと一緒にDクラスの戦力を一掃す

るわよー!」

「「おおおおおおおっ!!」」

優子さんの指示と共に味方の部隊がこれまでにないほどの声を上げた。

まだ出てきて間もないというのに、優子さんは一瞬で状況を判断して的確な指示を送っていた。

そして他を圧倒する点数で、相手の召喚獣をゴミのように蹴散らしていく。その光景に僕は思わず圧倒されてしまった。

この人が敵でなくて本当によかったなあ。

「Fクラス近藤! Dクラス中野に世界史での勝負を申し込む!」

『なっ!? 世界史だと! くそ! Fクラスめ、田中先生を連れていたのか——!』

「こつちにもいるぜ。俺はDクラス塚本に日本史で勝負を申し込む!」

「俺は地理だ!」

「なら俺は英語でやるぜ!」

『く——っ』

敵の部隊長である塚本君の周辺にたくさんのFクラスの本隊と教師が集まる。

部隊の点数が回復したおかげで、優子さんを筆頭に復活したFクラスの戦力は確実にDクラスの前線部隊の数を減らしていった。

今、確実に不利な形勢だった陣営は逆転している——！

「Dクラス塚本。討ち取ったり——！」

一際大きな声が上がった。今まで散々苦戦させられていたDクラスの前衛隊長をようやく倒せたらしい。

今まで温存して教師をここに来て一気に呼び出したおかげで、以前に比べかなり戦いやすくなっているようだ。

放課後という時間もあることで、下校中の生徒の人ごみに紛れ奇襲しやすかったというのもあるだろう。

「遅れるな！ まだここまでは予定通りだ！ Dクラス本陣！ これ以上前線を進ませないよう木下さんを取り囲め！」

いよいよFクラス優勢かと思われた時、新校舎の前線より向こう——Dクラスの教室の近くでそんな大声が廊下に響き渡った。

「この声——平賀君かっ」

僕は驚きながら声のした方へ振り向く。

Dクラス代表、平賀君が本隊を連れて新校舎に現れていた。前線の陣形を崩されてついに姿を現したのか。

平賀君の前には、前線に立っていた部隊の倍ほどの本隊が集まっていた。

その数——ざっと二十人以上——。

.....ん？

「って何あの人数——っ!？」

「どういうこと!? 明らかに人員過多だと思うんだけど!? クラスの3分の2が本隊ってちよつとおかしくない!？」

「Fクラスも多くの本隊を連れているが、それは先行部隊も加えての人数だ。だが向こうはさらにその1.5倍ほどいる。異常とも言える光景だった。」

「美波が妙に敵の前線の人数が少ないって言っていたのはこういうことだったのか。でもどうして.....?」

「なんだありやあ。ちよつと数多すぎねえか.....?」

「Dクラスが戦力配分をミスったとか?」

「いや、いくらミスってもこの人数は変だろ。Dクラスのやつら、何考えてんだ」

「.....なるほど、そういうことだったの」

「驚く僕や周囲のFクラスの仲間と対照的に、優子さんは何か納得がいったような表情を浮かべていた。」

「どういうこと.....?」

「それは——」

「FクラスにAクラスレベルの学力を持つ木下さんがいることは、すでに把握していただよ。《観察処分者》クン」

優子さんに向けた僕の問いかけに、遙か遠くにいるはずのDクラス代表の平賀君が直々に答えた。

「なっ!? 知ってたつて……じゃあそれを承知でDクラスは部隊を組んでたつていうの？」

「そういうことだ。新学期始まつて早々ならともかく、三日も立てばいろんな噂が耳に入るんでね。例えば——振り分け試験で途中退席して0点になった生徒がいるとか」

「……………」

平賀君の台詞を聴いた優子さんが僅かに顔を曇らせる。

心配して声を掛けようかと一瞬迷つたが、断腸の思いで喉まで出掛かった言葉を飲み込み、平賀君に続きを促した。

「それじゃあ——」

「ああ。元々前線部隊は木下さんを引きずり出すための囿。Fクラスの点数程度じゃあ多人数で包围でもしない限り、代表を討ち取る事はできないからな。だとすればFクラスは必ず高得点者である木下さんを切り札に出すであろうことも踏んでいた。だつたらこつちは木下さん一人さえ封じ込めてしまえば勝利は確定する。あえて前線を薄め

にして本隊の人員を増やしたのはその為だ。Aクラスレベル学力を持つ木下さんを討ち取るんだ、念には念を入れておかないと危ないだろ？ 分かったかい？ FクラスとDクラスじゃ、そもそも勝利条件が違うんだよ」

余裕ぶつた態度で平賀君はぺらぺらと口上を並べ立てる。悔しいが、確かにその通りだ。

僕達はなんとしても道を切り開いて優子さんを敵代表の下まで送り届けなければならぬ。

対してDクラスは優子さんさえ無力化してしまえば後は怖いものなんてない。Fクラス程度ならば点数に物を言わせた力任せで突っ込んでいっても勝利を手に入れられる。

堅実に勝つなら、急いで王手を掛けるより、じっくりと兵隊を潰してしまえば良い。それが何より安全で確実だから。

——つまり、はじめからDクラスの標的は代表である雄二ではなく、僕達の切り札である優子さんだったんだ。

僕達の部隊が消耗して優子さんが出てくるところまで、すべて向こうの思惑通りだったってことか——！

「——っ」

まんまと敵の策に溺れたことに齒噛みしているうちに、どんどん僕達の周囲にDクラスの本隊が集まって来ていた。

相手も確実に優子さんを仕留められるよう慎重なのか。十数人という一人を相手にするのは多すぎる人数で徐々に逃げ道を塞いでいく。不味い、これだけ相手にしたら優子さんでも確実に戦死してしまう！

「十、十一、十二……、さすがにこれだけの部隊で攻められたら……。抑えることはできても、突破は難しいわね……」

周囲の状況を確認しながら、優子さんは僅かに後ずさろうとしたところで、それができなないと気づき足を止めた。

背後はフィールドの召喚範囲外。ここで優子さんがフィールドを出てしまえば、敵前逃亡ということで失格。補習室送りになってしまふからだ。

本隊の後ろに控えた平賀君はすうっと手を掲げる。

まるで——配下の兵隊に命じるかのように。

「Dクラス本隊！ 全力を持って木下さんを討ち取れ——っ！」

『『試^サ獣^モ召喚——っ!!!』』

平賀君の号令の下、Dクラス本隊は一斉に召喚を開始した！

『Fクラス！ なんとしても木下を守りきれ！ 全兵力を持って突破口を開くんだ！』

雄二も負けじと後ろから良く通る声を張り上げて命令を下す。

「了解！ 試獣^{ササモ}召喚^{モン}！」

「木下さんは殺らせねえ！」

「Dクラスの思い通りになんてさせるかよお！」

Fクラスも召喚獣を呼び出し優子さんを攻撃しようとした召喚獣の間に入りかち合う。といえこの人数だ。向こうの方が戦力で勝っている以上、優子さんがいても不利なのは否めない。

いくらAクラスレベルの強さがあるうと、多人数を相手には分が悪い。

皮肉にも、さつきまで僕らがDクラスに対してやっていた作戦をそのままお返しされていた。

「うっ——このー！」

『やあー！』

「っ!？」

優子さんが召喚獣の持った武器で一体、敵召喚獣を葬ると同時に、背後から別の召喚獣の剣が背中に向けて剣を振り下ろす。

Fクラス 木下優子

世界史 241点

VS

世界史 84点

Dクラス 笹島圭吾

無防備な背中に攻撃を受けた所為で、優子さんの点数は著しく減っていた。

まだ召喚獣の操作に慣れていない弊害か。優子さんが同時に相手にできる数は二体が限度のようだ。

それを見計らったかのように、敵は上下左右から縦横無尽に攻撃を繰り返してくる。これでは避けるので精一杯だろう。

「優子さん——！ 試獣召喚——！」

急いで召喚獣を呼び出し、横方向から優子さんに攻撃を加えようとしていた召喚獣を木刀で受け止めた。

「くう——痛うっ」

痛つつ、や……やっぱりまとも武器を受け止めるとかなり痛いな……。

だが泣き言を言ってる場合じゃない。ここで優子さんを戦死させてしまったらその時点で僕達の敗北は決定するんだから——！

Fクラス 吉井明久

世界史 64点

VS

世界史 45点

Dクラス 斉藤信也

相手はすでにダメージを負っていたのか。僕程度の点数でもなんとか倒すことが出来た。

『Aクラス並の学力を持っていようが所詮は一人。数で囲めば怖くはない!』

「くそ! 数が多すぎる! 援護が追いつかないぞ!」

本隊の一人が苦しげにそんな台詞を漏らす。

確かに優子さんを護衛する人数が足りてない。誰か開いている味方はいないのか——
—?

救いを求めて周りを見回すと、全員各科目で敵と戦っている最中で、とてもじゃないがこつちにこれる余裕のある者はいなかった。

なんとか援軍を——と思い旧校舎に佇んでいる雄二の方へ視線をやるが、雄二はふるふると首を振って答えた。

そうだった。

雄二の周りの護衛を僕達に向ければ、今よりは多少状況は改善されるだろう。だけどそうすると今度は敵部隊が雄二の方を襲う。それじゃあ本末転倒だ。

かなり苦しいけど、ここは僕達だけの力で乗り切るしかない！

「ああもうっ。やりづらいわね！」

「胸が痛いけど、これもクラスの為！ 優子ちゃん、覚悟——っ！」

「っ！ 美紀!?!」

「やらせるか！」

「きゃあっ!?!」

優子さんに迫ろうとしていた召喚獣を木刀で弾き返す。

すると、召喚獣の主らしきおさげの女の子は驚いた顔で僕を見てきた。

「あ、アキちゃ……吉井君！」

「えっ？」

まるで僕を知ってるかのような声調で僕の名前を口にするおさげの子。はて、名前は分からないけど、どこかであったことあったのかな？

何故か隣で複雑そうな表情を浮かべている優子さんも含めて、妙に気になった。

だけど、今は深く詮索している余裕はない！

「僕を知ってるの？ でも悪いけど今は詳しく聞いている余裕はないんだ。申し訳ないけどここで戦死してもらおうよ——！」

召喚獣に木刀を真つ直ぐ構えさせる。

そして陸上ランナーを思わせる疾走で敵の眼前まで迫り迷うことなく敵召喚獣の頭に木刀を振り下ろした。

Fクラス 吉井明久

世界史 64点

V S

世界史 60点

Dクラス 玉野美紀

ぼうつとしていたのか、玉野という女生徒は一切抵抗せず、まるで吸い込まれるように木刀による攻撃を受けて点数をすべて失った。

「うっ。やられました。さすがアキちゃん——吉井君」

「あの、さつきから気になってただけど玉野さん、どうして僕のことをアキちゃんって呼ぶの?」

「でもいいの。アキちゃんに倒されるなら本望だから」

無視された!?

「玉野さん。君が何を言ってるのか全然理解できないんだけど……」

「今はそれでもいいんです。でもいずれは、私の作った(コスプレ用の)服を着てもらうから——! それで坂本君とツーショットを撮ってね!」

「良く分からないけどなんとなく否定しておいたほうがよさそうだね！」

とんでもなく不吉な悪寒に全身が震えた。なんだろう。彼女は一体何が目的なんだ……？

結局玉野さんはそのまま鉄人に連行されていき、この真偽は分からずじまいに終わった。分からないままっていうのもなんか逆に怖くてヤダな……。

まあ今それを気にしてもしょうがない。と意識を切り替えて周囲を観察する。

『ええい、くそ！ まだFクラスの包囲網を崩せないのか！』

『Fクラスの連中、点数は低い癖に妙に粘りやがる』

『まさか押し負けたりしないよね……？』

Dクラスから不安そうな声が入る。ははん、さては予定通り優子さんを仕留められなくて焦ってるな。

とはいえ先に進めないのはこっちも同じ。このままじゃお互いジリ貧だ。最悪両陣営全滅という結末になりかねない。

「……吉井君、聞こえる？」

その時、今も複数の召喚獣を相手に大立ち周りを演じている優子さんが小声で囁きかけてきた。

「うん、聞こえてるよ」

「……よかった。まだ戦死はしてないわよね？」

「なんとか。これでも結構危ない綱渡り状態だけど。それで、どうしたの？」

「Dクラスも相当焦ってるみたい。平賀君についている護衛の一部が前線に入ってきたわ」

「!? それってかなりヤバいんじゃないか!」

ただでさえいっぱいいいのに、これ以上の戦力増加は本格的にキツイよ!

「ええ。けど、そのおかげで平賀君自身の防備はかなり薄くなったわ」

「! で、でもこのDクラス本隊の壁を突破できないと、どっちにしる平賀君の下には辿り着けないよ?」

「分かってる。……吉井君、お願いがあるの。——今から本隊と連携してなんとかDクラスの包囲網に穴を開けるわ。そしたら味方を数人連れて抜け穴から直接平賀君のところへ乗り込んで。今なら吉井君は注目されていないから敵の意表をついていけるわ」

「っ。それじゃあ優子さんは——!?」

「アタシはガチガチにマークされてるから無理ね。その代わりここでDクラスの本隊を押しさえつける。その間に吉井君が平賀君を討ち取って」

優子さんの目の色が変わる——。防御から攻撃に移行する^{シフト}ように。

「——ここからは、落とす^{シフト}に行くわよ」

気配が変わった。ここにきて、優子さんの召喚獣は逃げから攻めの姿勢に切り替わる。

本気だ。彼女は自分が戦死する覚悟で、僕に道を開けてくれようとしてる。

「……わかったよ。自信はないけど、やってみる！」

「頼んだからね。Fクラスの勝利の鍵は、全部貴方に掛かってるんだから」

「う、そこまで言われるとちよつと重いかも……」

とはいえここで弱気になるわけにはいかない。みんなの為に——優子さんの為にも、ここでDクラスを落とす！

「みんな!! 戦力を一箇所に集中させて、全員一斉に正面に攻撃を加えて! 多少の傷を無視してでも、Dクラスの防御網を抉じ開けるわよ!」

「「任せろ!!」」

優子さんの激で近くににいるFクラスの部隊が訓練された兵隊のように集まっていく。

そして、それぞれ剣や斧、棍を真つ直ぐ持ち直し攻撃の構えを執る。その間にも小さい攻撃を受けるが、全員が知った事かと無視しスタート前のスプリンターの様に腰を低く下ろした。我ながらすごいチームワークだ。

その様はまるで大砲のように、自らを一個の弾丸として強固な壁に亀裂を入れる為、一斉に召喚獣諸共突進した。

「うおおおおおおりやああああああああつ!!!」

『なっ!! なんだ!! 自分から突っ込んできやがったぞ!』

『何考えてんだコイツら! この状況で捨て身なんて、戦死が怖くないのか!』

お生憎、いざとなれば仲間だろうが捨て駒にする。それがFクラスのモットーだ。

Fクラスの攻撃に面食らったのか、相手も状況判断ができず段々とDクラスへ向かう為の通路に隙間が出来始めていた。

このままでも突破はできるだろうけど、念のため僕も一手打っておこう。

周りが混乱している隙に、僕は壁に立て掛けてある消火器に手を伸ばし、その安全ピンを力任せに引き抜いた。

直後、プシャアアアア、という音と共に、周囲が真っ白に染まり始める。

『な、なんだこれ!! 何にも見えないぞ!』

『これ、もしかして消火器の粉か!』

『だ、誰がこんなことを!』

「うわっ、何をしてるんだ美波!」

保身の為の子芝居を一つ打っておく。これでみんな犯人は美波だと思おうだろう。

『美波? Fクラスの島田美波か!』

『許せん!』

『なんてヤツだ！　こんな酷いことをするなんて、校内のモテない女子ランキングに投票してやる！』

「え？　え？　なんでウチが罵倒されてるの!?　アキ！　あんた何言ったのよおつ！」

……なんだか逆に寿命を縮めかねない結果を生んでしまった気がする。

美波。君の犠牲は決して無駄にはしないからね！

「今だ！　敵が混乱している隙に包囲を抜けるよ！」

真つ白な空間の中で誰にでも大声で叫ぶ。これで何人かはついてきてくれるはずだ。

『さ、させるか——！　試^サ獣^モ召——！』

「貴方の相手はアタシよ！」

『つつつ!?!』

Fクラス　木下優子

世界史　96点

VS

世界史　98点

Dクラス　中川知美

「今よ吉井君！　Dクラスを突っ切って！」

包囲の後方から僕を狙おうとしていたDクラス部隊の一人の間に優子さんが割って

入ってくれた。これで僕を邪魔する者はいない！

「ありがとう優子さんっ！」

振り返らずに走る。

彼女がくれたその僅かの隙に、僕は最後の防衛網を抜け出してDクラス本隊を抜くことができた。

その先に——いた！ Dクラス代表、平賀君！ よし、今ならいける！

「んなっ！ お前は、吉井つつっ!? どうしてお前が！」

「勝負だ平賀君！ 氏家先生！ Fクラス吉井明久、Dクラス代表平賀源二に日本史勝負を——」

『Dクラス前田由紀、受けます！』

『坂上郁夫！ 吉井明久に召喚獣勝負を申し込む！』

「っ!? まさか、近衛部隊!? 代表の護衛か！」

突如目の前に男女の二人組みが現れ道を阻む。

くっ、本隊のほかはまだ護衛がいるなんて、なんて慎重なヤツなんだ！

「^サ試^モ獣^ン召喚！」

二体の召喚獣を前に、少し後ずさったところで、後ろから二つの召喚獣の呼び声が聞こえてきた。

Fクラス 木下秀吉

日本史 55点

V S

日本史 101点

Dクラス 前田由紀

Fクラス 土屋康太

日本史 31点

V S

日本史 99点

Dクラス 坂上郁夫

僕の前まで来た二人は、それぞれ正面にいる召喚獣を見据えて武器を構える。

「秀吉!? ムツツリーニ! 来てくれたんだね!」

「うむ。護衛はワシらが引き付けるのじゃ!」

「……………明久は先に行け!」

「二人とも……………ありがとう」

僕に背中を向けたままそう言っつて、近衛部隊を引き受けてくれた秀吉とムツツリーニに感謝し、僕は護衛の間を走って抜けた。

召喚獣勝負を挑まれた場合にも拘らず召喚しなかった場合、戦闘放棄と見なされて補習室行きとなるが、戦いを“交代”するならばルール違反にはならず済む。

本当、僕は良い友人を持ったよ。

『——っ、この程度の点数で、俺達に勝てると思ってるのか!』

「思っておらぬ。じゃが、別に無理してワシらにお主らを倒す理由はないのじゃ」「何?」

「……………明久が平賀を打ち取るまでの時間稼ぎ程度なら、俺達で十分」

「そういうことじゃ。悪いが、ワシらの最後の悪あがきに付き合ってもらおうぞい」「そんな……………」

すぐ後ろからそんな会話が聞こえてきた。

渡り廊下前の前線は優子さん達本陣のみんなが、代表の護衛は秀吉とムツツリーニが決死の思いで押し留めてくれている。

これでDクラス代表は丸裸も同然だ。後は、僕が平賀君を倒せば新学期初めての試召戦争は終結する——!

「ば、バカな……………」

「さあ、これで君を守る壁はなくなったよ。ここで最期だ。試獣召喚——っ!」

「くっ! 試獣召喚!」

呼び声に応えて、お互いの足元に幾何学的な魔方阵が現れる。その中から、召喚者をデフォルメされた召喚獣を姿を現した。

勝負科目は日本史。戦争終結間際のこの瞬間、ついに午前の猛勉強の成果を試す時が訪れた。

Fクラス 吉井明久

日本史 105点

V S

日本史 131点

Dクラス 平賀源二

召喚獣の頭上にお互いの名前と点数が表示される。

僕の点数は105点。優子さんにみっちり鍛えてもらったおかげで、今までに比べれば格段に良い点数だ。

だが相手はDクラスの代表、早々簡単に点数では勝たせてもらえないか。

「——ははっ」

僕の点数を見た平賀君が、焦りの表情から一転、頬を緩ませて余裕のある笑みを浮かべた。

「Fクラスにしては良い点数だが惜しかったな。この勝負、俺の勝ちだ！」

「……………そうだね」

「所詮はFクラス。バカの集まりだったってことだ。後はお前を倒した後に、消耗した木下さんを討ち取って代表の坂本を討てば戦争は終わりだ。いやー、惜しかったね。実に惜しかったけどこれがFクラスの限界ってことだよ」

「早すぎる勝利宣言は、逆に死亡フラグになるよ平賀君。僕はまだ負けていないし、雄二だってまだ生き残っている以上、勝負はまだわからないよ」

「ふんっ。——じゃあまずはお前から戦死させてやるよっ」

主の命令を受け、平賀君の足元に出現した召喚獣が僕の召喚獣を切り倒そうと襲い掛かってきた。

「危なっ！」

横に薙ぎ払う剣を屈んで回避する。

「えい、足払いだ！」

平賀君の召喚獣が次の攻撃態勢に入る前に、腰を低くしたままの姿勢で木刀で召喚獣の膝近くを横に一閃した。

「そして——追撃っ！」

足を崩され地面に倒れようとしている召喚獣に追い討ちを掛けるように、その後頭部に手を当てて床に叩きつける。

ゴンツ、と硬い音が倒れた召喚獣の頭に面した地面から鳴った。

「な……………えっ……………」

きよとんとした顔を浮かべる平賀君。目の前の光景に啞然としたのだろうか。

見れば、傍で戦っていた平賀君の護衛の二人も意外な物を見たような丸い目をしていてた。

『ど、どうして代表の召喚獣がやられてるの…………？ 点数は代表の方が上の筈なのにっ！』

秀吉の相手をしていた前田さんが自分の勝負も忘れて、僕達の方へ顔を向け叫ぶように疑問を口に出していた。

「まあ、一応《観察処分者》の数少ない利点ってやつかな」

「利点……………」

「ようするに、日々の雑用で召喚獣を使うのに慣れてるってことだよ」

今日初めて試召戦争を体験し、幾重もの戦闘を行って分かった事がある。それは召喚獣の操作が思った以上に難しいという事だ。

見た目形こそ人間と同じ召喚獣だが、その大きさや視界、足や手の長さから歩幅に至るまで細かい部分でいくつもの生身の人間との違いがある。

その召喚獣を自分の手足の如く思い通りに操作するというのは、簡単なようでもかなり

難しいのだ。例えるなら、4つすべてのタイヤに個別にハンドルがあるラジコンカーを操作するに等しい。

だからこそ、使い慣れていない人間の召喚獣はどうしても前後左右にしか移動できないなどの単調な動きになりがちになる。集中力が切れればまったく動かせない事もあるだろう。

その中で、僕だけは《観察処分者》として荷物持ちをしたりグラウンドの整備をする為は何度も召喚し、痛みや疲労を共有してきたおかげか、人より召喚獣を細かく動かせる。『走る』『曲がる』程度の操作では雑用なんてできないからね。

「そ、そんなくだらない理屈でっ！」

憤怒の形相で平賀君は召喚獣を立ち上がらせて剣を頭上に掲げ僕の召喚獣の頭に振り下ろそうとする。

だが、明らかに大振りな動きのおかげで、足を横に半歩移動するだけで簡単に避けられた。

空を切った剣はそのまま地面を打ち、キンツと金属音を立てる。

いくら操作性で勝っていても、点数は向こうの方が上だ。まとも打ち合えば武器ごと吹き飛ばされかねない。なので必然的に相手の攻撃は避けるか、受け流すしかない。

「そりゃー！」

攻撃を空ぶった召喚獣のわき腹に木刀を打ち込む。鎧の上からだから大したダメージにはならないだろうが、数回も続ければ確実に点数は底を尽く——っ。

Fクラス 吉井明久

日本史 105点

VS

日本史 89点

Dクラス 平賀源二

表示された点数を見ると、すでに彼我の点数差は完全に逆転していた。

「そ、そんなバカな……」

今度こそ、平賀君は渴いた声で動揺の言葉を吐いた。

「偶々ここまで来られた吉井にどうして苦戦する………？ いや待て、そもそも特別得点の高い日本史というFクラスの都合の良い科目での勝負だって考えてみればおかし、あの状況で細かい作戦を考える時間はなかったはずだ。なのに偶然がこんな都合よく重なるわけがない。………まさか」

「あ、気づいた？ うん。実は——優子さんに敵本隊を引き付けさせて、僕がここで平賀君と戦うのは、すべて予定通りだったんだ」

「何だと——!？」

「平賀君達が前線部隊を囿にさせて優子さんを誘い出したのと同じように、僕達——というか雄二もDクラスが優子さんを狙ってくるって言うのは分かってたらしいから。ていつてもさすがにあの本隊の数には驚いたけど」

開戦前最後の作戦会議の際、雄二は、確実にDクラス代表を倒す手段である優子さんを、集中して狙ってくるかと読んでいた。

だから、あえて試召戦争の途中の折に優子さんを戦線に出し、Dクラスのターゲットを優子さんに絞らせる。そしてわざと優子さんを守らせるような命令を聞こえるように言い放ち、Dクラス本隊の矛先を優子さんに一人に向かわせた。

読み通り、Dクラスは優子さんを討つ為に躍起になった。

僕達にとって、それこそがDクラスを無力化させる為の鳥籠であるとも知らずに。

後は優子さんに群がった召喚獣をFクラスの本隊で足止めし、その間に敵代表の下まで向かうという作戦だった。

優子さんさえ戦死させてしまえば勝てると思っているDクラスにとって、Fクラスの有象無象などほとんど問題視していない。

だからこそ、その意表を突く為に、召喚獣の扱いに慣れ、午前中みっちり勉強させられてある程度の点数を持った《観察処分者》の僕が、Dクラス代表の執行者に選ばれたというわけだ。

「木下さんが囷なんて、そこまで冒険するか普通……………?」

「それは同感。正直そんな都合よく行くのかなってずっと疑問だったんだけど、雄二つて本所に頭良かったんだね。伊達に昔神童なんて呼ばれてただけのことはあるってことか」

「……………じゃあ俺達はずっとお前達の掌の上で踊らされてたってことなのか……………」

「いや、Dクラス本隊に囷まれた時は本気でピンチだったよ。あの時は優子さんに氣を利かせてくれなかったら僕ずっとあそこで死ぬまで戦ってたと思う」

「Fクラス風情に、そんな——っ!」

結局、平賀君は慢心していた。

Aクラス並の学力を持った優子さんを倒すことに固執するあまり、完全にF^バクラスを見落としていたんだ。

「確かに僕達はバカだよ。勉強はできないし人に誇れるものも何一つ持ってない問題児の集団だよ。———だけど、それでも譲れないものがあるんだ」

召喚獸に木刀を水平に構えさせる。

「そして、これがF^バクラスのカ^カの力だ」

そして、敵の首に木刀を振りかぶった。

自分の策がすべて読まれていたことに呆然自失としていたのか、平賀君は防禦の構え

を取ることもなく、木刀の一撃を受け点数をすべて失った。

0点になった召喚獣は、自分が倒されたことすら気づいていないかのように、両手に剣を持ったまま消え去る。

こうして戦いは決着し、初の試召戦争はFクラスの勝利で幕を閉じた。

問13 終戦会議

Dクラス代表が戦死したことで戦争は終結し、僕達はその後すぐに戦後対談の為Dクラスに集まっていた。

周囲には二つも上のランクのクラスに勝利したことで歓喜の絶叫を上げるFクラスと、自分達の負けを知らされて悲鳴を上げたり、意気消沈と落ち込むDクラスの二つが不協和音を奏でている。

勝利者の代表である雄二は、その中でつい先ほど、僕に敗れガツクリと項垂れていた平賀君の下に歩み寄っていた。

「さて、この戦争、俺達の勝ちだ」

「……分かってている。まさかFクラスにこれほど狡猾な策を巡らす代表がいようなんて思いもしなかった。下位クラスだからと侮った俺達の完全な敗北だ」

「褒め言葉として受け取っておこう。勝利者の俺が言ってもなんの慰めにもならんだろうが、Dクラスもかなりのものだったぞ」

「そう言ってもらえるだけで、いくら心が軽くなるよ」

ようやくショックから立ち直ったのか、平賀君がゆっくりと立ち上がり雄二と向き合

う。

「ルールに則りクラスを明け渡そう。だが今日はもうこんな時間だ。移動作業は明日でも構わないだろうか？」

二人の代表は極めて事務的にこれからの戦後処理に相談に入った。

きつとこれから平賀君は教室内で息苦しい毎日を過ごす事になるだろう。

試召戦争での責任はすべて総大将であるクラス代表に返る。これからDクラスは敗戦期間の三ヶ月間、あの畳と卓袱台の汚い教室で肅々と過ごさなければならぬ。

その不満、怒りを平賀君はこれから受け止め続けなければならないのだ。それに関しては少し彼に罪悪感を覚えてしまう。

「勿論だよ。それでいいよね雄二？」

これ以上の無理をさせることもないと思いき横から雄二に進言する。

ところが、

「いや、その必要はない。クラスの移動はしなくていい」

雄二は頭を振ってそんなことを言い出した。

「え？ 移動しないって、どういうこと雄二？」

「そのまんまの意味だ。設備の移動はしない。俺達はこれからもあのボロい教室のままだ」

疑問に思う僕に、当たり前のように雄二はそう言い返した。

設備の交換をしないって、それじゃあ苦勞してDクラスに勝った意味がないじゃないか！

「じゃ、じゃあどうしてDクラスと戦ったのさ！　せつかく普通の設備を手に入れられるのに！」

「俺達の目標はAクラスを落とすことだ。Dクラスの設備で満足してどうする」

「それならはじめからAクラスに攻め込めばいいじゃないか！」

「少しは自分で考えろ。それだからお前は近所の小学生に『バカなお兄ちゃん』と呼ばれるんだ」

「ぐぬう……」

くつ、本当に言われているだけに反論の言葉がない……。

「……俺達としてはありがたいが、本当にいいのか？」

「勿論条件付きだ」

あ、やつぱり。そういうこと。そうだよね。でないとなまでの頑張りが全部無駄になるわけだし。

雄二の言葉をその部分だけ受け取っていたら、今頃クラスメイトが大暴動を起こしていただろう。無論僕も包丁を片手に雄二を襲うことも吝かではない。

「設備を交換条件に出すほどのこととなると、よほどの無理難題でもふっかけてくる気か？」

ホッと安心する僕に対し、平賀君が疑惑の念を言葉に現す。

「そう警戒しなくてもいい。要件は単純だ」

そう言つて、雄二はDクラスの窓際に視線を向けた。

「Dクラスの窓の外に設置してある室外機。アレを俺が指示した時に壊してほしい」

「室外機？ ……あれはBクラスのエアコンを動かしているヤツか。でもどうしてそんな」

「無論、次のBクラス戦に勝つ為に必要だからだ」

僕も感じた疑問を問うた平賀君に、口元に悪役のような笑みを作つて答える雄二。

Bクラス戦……と雄二は言った。Dクラスに勝つて浮かれている僕らと違つて、雄二はすでに先を見据えているらしい。

予想外の提案だったのか、平賀君は若干面食らつた様子で雄二の動向を伺っていた。

「本当にそれだけで良いというなら、こつちとしては願つてもない提案だが、いいのか？」

「学校の設備を壊すんだから、当然教師連中には睨まれる可能性が高い。だが、悪い取引ではないだろう？」

向こうが断れるわけがないと分かっているのに、雄二はあえて疑問調で言いかける。まるでヤのつく人のようだ。

うん。やっぱリコイツは悪役の方がよく似合う。

平賀君は僅かに逡巡した後、こくりと頷いて口元を綻ばせた。

「そうか。そういうことならありがたくその提案を吞ませてもらう」

「時間とタイミングについては後日詳しく話す。今日はもう帰って良いぞ」

「ああ。ありがとう。FクラスがAクラスを倒す日を楽しみにしてるよ」

「無理するなよ。Fクラス風情がAクラスに勝てるわけがないと思ってるだろ？」

「ははは、そうだな。俺達Dクラスと戦うのとは訳が違う。社交辞令みたいなものだ。

だが、坂本ならそれでもなんとかしそうで、ちよつと恐ろしいな」

「当たり前だ。その為にこうして交渉しているんだからな」

「そうか。まあ期待はしておこう」

じゃあな。と手を振って平賀君は去っていった。

それに合わせて、他のDクラスの生徒もそろそろ教室を出て行く。

「みんな今日はご苦労だった！ 明日は失った点数の補充試験をやるから、今日はゆっくり休んでくれ！」

雄二が残ったFクラスに最後の号令を掛けると、みんなは雑談を交えながら旧校舎の

方へ歩いていった。これから帰り支度を行うのだろう。

「さて、俺達も帰るか」

「そうだね」

みんなに続いて、僕と雄二もD教室を後にする。

チヨイチヨイ

「ん？」

今、誰かが僕の肩に触った？

後ろに振り返ると、そこには筋骨隆々の教師が慄然と立っていた。

「待て吉井」

「げっ、鉄人!？」

「鉄人じゃない。西村先生と呼べ」

「そ、それで、何か用ですか？ 見ての通り僕達試召戦争を終わらせて疲れてるんですけど……」

「うむ、その試召戦争で残ったゴミの掃除をしてもらいたい。誰かは知らんが、学園の備品である消火器を無断で使用したやつがいたようだな。廊下が真っ白になっているのだ」

「消火器？ ……………あ」

そういうえば、Dクラスの目くらましの為にそんなこともしたような。

「何だそういうことか。それじゃあな明久」

「あ！　こら雄二！　自分が関係ないからってあつさり帰ろうとするな！」

「吉井。さっきの『あ』とは何だ？　何か知ってるのか？」

「え!?　や、やだなあ。僕が知ってるわけないじゃないですか！」

「そうか。それはともかく、廊下の掃除はきちんとしておくように。これも《観察処分者》としての責務だ」

「あの、西村先生。僕今すごく疲れてるんです。これ以上一步も走れないぐらい」
「む、そうか」

「はい！　そういうわけで今日はもう帰らせていただきま——」

「じゃあ少し休んでから掃除するように。以上だ」

「鬼！　悪魔！」

去つていく鉄人に罵詈雑言を見舞う。

くそお。せつかくDクラスに買って晴れ晴れしく帰れたのに。なんて空気の読めない鉄人なんだ。

雄二は雄二で先に帰っちゃったし。疲れているクラスメイトを放つていくなんてあの野郎、それでも僕の友人か！

問14 放課後の教室／前

あれから鉄人に命じられた廊下掃除を一時間に渡ってこなし、僕は、試召戦争の疲労で重たくなった身体を引きずりながらようやくFクラスに戻ってきた。

「つ、づかれたー……」

ガラガラガラ、と扉を引いて教室に入る。

時刻はすでに完全下校時刻寸前、夕焼けの日差しが教室を挿し、一瞬目が眩んだ。

「あら、吉井君」

「え……」

誰も居ないと思っていた教室内で突然名前を呼ばれ、僕は周囲を見渡した。

夕焼けに当てられた目が徐々に回復し視界がクリーンになると、赤く染まった教室の左隅の席に優子さんがペタリと座ってこちらを見ていたのが見えた。

「優子さん、どうしてここにいるの？ もう帰ったと思ってたよ」

「本当はそのつもりだったんだけど。今日の授業が試召戦争で全部中止になったじゃない？ その所為で遅れた分の内容の予習をしたのよ」

僕の質問に事も無げに答える優子さん。

が、一つ気になることがあった。

「あれ？ でも試召戦争で遅れた授業って、後で休みを返上してやるんじゃないかって
け？」

「そんな受身でどうするのよ。勉強は自分の為にやってるんだから自主的にやるのが当然
でしょ」

「そ、そうなんだ……」

そんなの初めて聞いたな……。多分Fクラスの誰に聞いても僕と同じ反応をするに
違いない。

「吉井君は？ どうしてこんな時間まで残ってたの？」

「僕はただの雑用だよ。さつきまで鉄じ——西村先生に言われて消火器で汚れた廊下の
掃除をしてたんだ」

「ああ、あれね。……まったく、あの時は火急な状況だったけどだからって学校の備品を
私的な目的に使っちゃ駄目でしょう」

「い、い、いめんなさい」

怒られてしまった。

なんだろう。最近こうして優子さんに駄目だしされることが多い気がする。やっぱ

り彼女がすっかりしていて僕がだらしなからなのかな。

ぐ~~~~

その時、僕のお腹が間抜けな音を立てた。

「あ」

「……今のは、お腹の音？」

「そういえば、今日パンの切れ端しか食べていないんだ……」

思い出した途端、強烈な空腹感と眩暈が襲ってくる。

くそお、試召戦争の時は緊張で忘れてたけどそういえば今日はずっと空腹だったんだ。

「うわとっつ」

平衡感覚が保てなくなり、前のめりに倒れそうになった身体を右足を前に出してなんとか支えなおすと、もう一度警告するように僕のお腹はぐくと鳴った。

お、お腹、空いた……………。拙い、このままだと帰る途中で倒れてしまいそうだ。

「ただだけお腹空いてるのよ…………。一体普段どんな生活——、——」

優子さんが何か言ってるが、耳が遠くなったのかうまく聞き取れない。

大体どうして僕はこんなに苦しい思いをしてるのか。僕は悪い事なんて何もしてないはずなのに。

気がつくくと、僕はことの発端と原因、そして元凶を探るため意識を内側に向け記憶を試召戦争前まで遡っていた。

そうして、一人の男が瞼の裏に浮かび上がる。……そうだ、これも全部約束を破った雄二の所為だ。

元凶が判明した途端、空腹に連動して雄二への憎しみと怒りが沸々と湧き上がる。あの野郎、明日学校で会ったらこの苦しみを十倍にして返してやる……！

「吉井君！」

そこでききなり肩がガクンと揺さぶられ、僕の意識は強制的に現実に取り戻された。「え、あれ……優子、さん？」

「そうよ。はあ、意識は戻ったみたいね。急に何も反応しなくなったと思ったら今度は念仏みたいにぶつぶつ独り言を言い始めるからついにおかしくなっちゃったかと思っただわ」

いつのまにか立ち上がっていた優子さんが僕の両肩を掴んで溜息を吐いていた。つて近い近い顔が近いよ!?

「ちよ、ちよちよちよ!?! 優子さん!?! ちよつとタンマ!」

猛烈に恥ずかしくなり慌てて後ろへ後退する僕。

「あっ」

その影響で肩に触れていた手が離れて、優子さんは驚きの声を上げていた。

僕が嫌が無理矢理手を払ったと思ったのか、優子さんは目を細めあからさまに不機嫌な表情で僕を睨む。

「……せっかく人が心配してあげたのに。そういう態度とるんだ、吉井君は」

「ち、違うよっ!?! これはなんというか不可抗力で。思春期特有の条件反射的な。とにかくごめん! 決して優子さんがどうこうとかじゃないから」

「ふーん、まあいいけど」

渋々、といった感じで優子さんは納得してくれた。許してくれた……のか？

まあ取り合えず睨む視線は外してくれましたのでよかったです、と胸を撫で下ろす。

が、大声を出した所為か余計お腹が減ってきた。

もう道に落ちてるゴミでも食べてしまおうかな……。今の僕の胃なら消費期限一ヶ月いないなら問題なく消化してくれるはずだから。

「は、早く帰って家に残してある秘蔵のパン粉を食べないと餓死してしまう」

「非常事態にパン粉食べるんかいアンタは。……もう」

呆れたように肩を落としていた優子さんは、僕から背を向けて教室にあるロッカーの扉に手を掛けた。

その中から自分の鞆を取り出して、留め金を外して中から何かを取り出していた。

それを持って再び僕の前まで戻ってくる、そして、その立体長方形の箱が入っているらしき包みを僕に差し出してきた。

「はい」

「? 何これ?」

「お弁当よ! アタシ、今日はあんまりお腹減ってなくてお昼残しちやったから、ほ、ほしいんなら、あげてもいいわよ……」

「……………」

思わぬ提案に目を瞬かせる。

待て、今なんて言った?

「お、お弁当? 僕に? 本当にくれるの?」

「あげるって言ってるでしょう。何、いらなの?」

「いります食べます頂きます!!!」

全力でお弁当を受け取る。やった! まさかこの一週間以内にまともな飯に二度もありつけるなんて! 今の優子さんは救いの女神に見えるよ。

さっそく近くの卓袱台の前に腰を下ろし包みを解いて女の子らしい小さめのお弁当の蓋を開く。

彼女の言う通りに、中には中途半端に残ったおかずとご飯が入っていた。が、今の僕

にはそんな瑣末なことなど気にならない。

夕焼けの太陽に照らされている所為か、はたまた空腹に飢えた僕の目に補正が掛かっているのか、目の前のお弁当が光り輝いて見えた。

お弁当と一緒に入っていた箸を手に持ち、いざいざこうとしたところで、僕はあることに気づいて視線を自分の右手に落とした。

「……………このお箸って、お昼休みに優子さんが使っていたやつだよ。ど、どうしよう！ 使ってしまったていいのかな!? このままだと関節キスということになっちゃうんだけど！」

優子さんは気づいているのか？と気になりそつと目だけを動かして正面に腰掛けていた優子さんの様子を伺う。

「……………? 食べないの?」

「えーつと、本当に食べてもいいんだよね?」

「? 良いつて言ってるでしょ。吉井君って意外と小心者なのね」

別にそういう意味ではないのだけど。……まあこの前の校舎裏の時と違って本人がなんとも思っていないようだし、さすがにお昼休みから時間も経ってるから時効でいいよね。

僕はそこで考えるのをやめて素直に生物の欲求に従う事にした。

「それじゃあ、いただきます！」

「……………」

優子さんがじーつとこつちを見ているのが少し気になるが、構わず箸を操りまずは卵焼きを口に運ぶ。うん、冷たいけど美味しい。

空腹は最高の調味料とはよく言ったものだ。今ならどんなものでも美味しくいただける自信がある。

「…………ど、どう?」

「ん? 美味しいよとっても」

「そうじゃなくて! ……この前のお弁当と比較してどうなのかを聞いたの!」

「この前って、校舎裏で食べたやつ?」

こくと優子さんは頷く。

どうしてそんな事聞くんだろうか。確か木下家ってお母さんがお弁当作っているんだよね?

何か気になることでもあったのかな。

「そうだね…………」

取り合えずれんこんのきんぴら、鳥の照り焼きとおかずを一通り食べてみる。

優子さんはそんな僕の様子を真剣な眼差しで観察している。なんか見られながら食

べるのって恥ずかしいな。

何やら妙な居心地の悪さを感じながら僕は食べたおかずを頭の中でリフレインさせた。

料理に明確な“百点満点”というものはない。

食べる人の好みもあるし、どれだけ高級な食材を使ったとしても食べる人の口に合わなければ意味がないからだ。

以前とはレパートリーが違うものも入ってるけど、この場は僕の好みと直感で答えてみた。

「んぐんぐ（ごくん）。んー、……個人的には、前のヤツのほうが良かったな」

「はぐっ!?!」

僕が感想を言うのと優子さんはショックを受けずーんと沈んだ。え？ え？ どうして!?!

「ちよ!?! 今僕何か悪い事言った!?!」

「……ふふふ、いいのよ。いきなりママに勝てるなんて思い上がってなかったから。ちよつと見栄を張ってみた結果がこれよ。大体——」

俯きながらぶつぶつと独り言を呟き始める優子さん。一体どうしちやっただ。

推察するにこれはどうやらお母さん作ではないみたいだけど。あれ？ それじゃこ

のお弁当って誰が作ったの？

「優子さん。これって——」

「そうよ。……それはアタシが作ったのよ。悪かったわね美味しくなくて」

「誰が、つてえええー……っ!?!」

衝撃の事実に驚きのあまり手に持った箸を落としそうになった。

そ、それじゃあ僕は今優子さんがその手で作ったお弁当を食べて。しかも本人の目の前で酷評してしまったことか！

バカ野郎!? 僕はなんてことをしてしまっただんだ！ 空気が読めないにもほどがある！ よりにもよって女の子が作ったお弁当を悪く言うなんて！ 異端審問会に掛けられたら極刑ものの大罪だ。

「ち、違うんだよ優子さん！ これは美味しくなかったとかじゃなくて寧ろすごく美味しいというかつ! 毎日でも食べられるぐらい丁度バランスがとれた味だったよって意味で！」

「ふん、いいわよお世辞なんて。あーあ、せっかく作ってきたのになんだか失敗だったわ」

「ううう……」

不味い。これは完全に拗ねてしまっている。どうすればいいのだろうか？

罪悪感から真つ直ぐと優子さんを見る事が出来なくなり途方にくれた視線が下に下がる。

すると、そこには丁度まだ残っているお弁当が入ってきた。……そうだ！

「優子さん」

「……何よう？」

「お弁当。二回も分けてくれてありがとう。僕すごく嬉しかったよ」

「え」

いきなりお礼を言われてきよとんした優子さんを横目に、僕は残ったお弁当の中身を一気に口に運んだ。

余り物だけあつて元々それほど量のなかつたお弁当はものの数秒で空になり、後には残ったお弁当箱だけ残る。

僕の行動に啞然としたのか。放心状態から復帰した優子さんはまくし立てるように叫ぶ。

「ちよ、ちよつと何してるのよ！ 美味しくないなら無理して食べなくてもいいから！」

「そんなことないよ。すごく美味しかった。優子さん、料理上手だったんだね」

「——っ!? 何よ。さっきは前の方が良かったって言ったくせに。種明かししたら都合よく掌てのひらを返すわけ？」

「そうじゃなくて。確かに味は前の方が少しよかったかもしれない。でもこれだって負けないぐらい美味しいかったから。これが僕の正直な感想だよ」

「――」

再びぼかんとする優子さん。んん？ 夕焼けの所為か少し顔が赤いような……。

「駄目かな？」

「ふ、ふん！ 仕方ないから騙されてあげるわ。ちゃんと残さず食べたみたいだし」

「勿論だよ。こんな美味しいものを残したら神様の罰が当たっちゃうからね」

「それは吉井君が極度の空腹状態だったからでしょ。まったく」

口調にはまだ不機嫌さが残っていたが、表情は存外悪くなさそうに薄い笑みを浮かべていた。よかった。なんとか機嫌を直してくれたみたいだ。

「お礼にお弁当箱洗って返すよ」

「ありがたいけどそこまでしてくれなくていいわよ。それがないと明日のお昼ご飯作れないし」

「あ、そつか。じゃあ別のお礼考えておくね」

「はいはい。期待しないで待ってるわ」

僕はもう一度最後に「今日はありがとう」とお礼の言葉を告げて帰り支度を始めた。

そろそろ完全下校時刻だ。早く帰らないとせつかく解放されたのにまた鉄人と対面

してしまおう。

この幸せ気分をあの暑苦しい筋肉教師に台無しにされるのだけは勘弁願いたい。

一通り支度を終えて鞆を提げて立ち上がると、僕は優子さんの方へ向いて今日最後になるであろう挨拶を告げた。

「それじゃ優子さん、また明日学校でね」

「ちよつと待つてつ」

「? どうしたの?」

「……………」

さつきとは打って変わって真剣な表情で僕を見据える優子さん。

二人きりという空間。そして狙った獲物を射抜くような鋭い視線を受け全身が妙に緊張します。まだ春先だというのに汗を掻いているのか少し暑い。

なんだろう。まだ何か言いたいことがあるのかな。

「試召戦争のことで、吉井君に聞かなくちやいけないことがあるの」

そうして優子さんは口火を切って語り始めた。

問15 放課後の教室／後

試召戦争の件で聞きたいことがある。

そう問いかけてきた優子さんに、僕はまず首を傾げた。

「試召戦争？ それなら僕に聞くより雄二の方が詳しいと思うよ？」

僕も試召戦争に関しては基本的なルール程度なら覚えてるけど、クラス代表の雄二ならもつといろいろなことを知り尽くしているだろう。

僕の知っている情報ぐらいなら当然優子さんも知っているだろうし、人選としては雄二の方が妥当だと思うのだが。

そういうニュアンスを込めて僕がそう口にする、優子さんは首を横に振って、「アタシが聞きたいのはルールとか設備の交換とかこれから戦う敵を攻略する作戦とか、そういうのじゃないの」

ふう、と優子さんはそこで一旦言葉を切って深呼吸する。

それから、今までずっと心に溜めていたものを吐き出すように言葉を紡ぐ。

「……坂本君から聞いたわ。吉井君が試召戦争を始めた理由」

「えっ」

「吉井君。吉井君はアタシの為にAクラスに勝とうとしてるの?」

「——っ?!?!」

どうしてそれをつ?!と衝動的に言いかけてなんとか踏みとどまる。

まさかこんなに早く優子さんに気づかれるなんて思わなかった。くっ……雄二のヤツ、また余計なことをつ。

「そ、それは——っ?! 一応、それも入ってる、かな」

照れくさくなり思わず優子さんから視線を逸らす僕。

なんだこれは。まるで隠し持っていた聖典エロ本が見つかった時みたいに気まずい。とにかく今すぐここから逃げ出してしまいたかった。

「どうして、そんなことするの?」

そんな感じに戸惑っていると、優子さんは真っ直ぐに僕を見据えてそんなことを聞いてきた。

ん? どういうこと?

「……どうしてつて、どういう意味?」

「アタシは確かに振り分け試験で倒れてFクラスになった。でも、それは吉井君とは何の関係もないでしょう」

「か、関係ないつて?! そんなこと!」

「あるの？」

「……………」

そう言われると、優子さんが振り分け試験の日に体調を崩した事と僕個人には何の関係もない。

でも、関係ないからって放っておける？ そんなのは絶対に否だ。

目の前に困っている人がいるなら、手を差し伸べるのが普通じゃないのだろうか？

「関係がどうのなんて僕にはわからない。でも、優子さんが困っていたから僕は助けてあげたいって思っただけで……………」

「……………吉井君、貴方勘違いしてる」

「かん、ちがい……………」

「ええ。アタシ、別に困ってないわよ」

「え……………」

驚いて僕は優子さんを見る。

そんなバカな。一昨日の昼休みの時間、僕は彼女の独白をしつかりと覚えている。

『世界で一人ぼっちになったみたい』と、そう語った優子さんの表情はまるで一人道迷って泣いている少女のようだった。

そんな彼女が、困っていないなんてありえないはずだ。

目を剥く僕に優子さんは何食わぬ顔で、まるで他人事のように単々と自分の現状を口にした。

「Fクラスになった時はショックだった。今まで努力してきた全部が否定された気がしたわ。……だけど、それだって結局は自分の非だもの。文句を言える筋合いなんてどこにもないし、する気もないわ」

鋼鉄のような硬く、強い意思がそこにあった。

その決意のありようは、何度も熱して鍛え上げられた鋼の剣のように見えた。

芯が強いとは、きっと彼女のような人間の事を言うのだらうと思えるほど。

「ましてや、それを吉井君に心配される謂れはないし、お門違いよ」

「けどそれじゃあ全部仕方ないって、どうしようもないって諦めていいの!？」

「諦めたんじゃない。受け入れたのよ。いつまでも届かない夢や希望を見て許されるのは小学生までよ。吉井君だったそれぐらいわかるでしょう」

「それはそうかも知れない。けど、優子さんはそれでいいの? ……僕は嫌だよ。頑張って頑張って。人から羨まれるほど努力した人にはちゃんとそれに見合う報酬がないと嘘だ。だから、僕は優子さんにはAクラスの充実した設備で勉強するべきだと思う」

「勉強ならここでもできるわ。場所の問題なんて瑣末なことよ。住めば都って言うで

しよ」

気負う様子もなく。優子さんはFクラスの室内を見渡しながらそう言った。

「……優子さんは強いね」

心からそう思った。

優子さんは大人だ。認めたくない現実でもしつかり目を向けて、前を向いて歩いてる。

それに比べて僕は子供だった。過ぎてしまった過去をいつまでも悔やんで今も足掻いている。まったく前を見ようとしていなかった。

目の前の優子さんが僕にはひどく眩しく見える。それはきつと夕焼けの所為だけではないだろう。

彼女自身がそう言う以上、今僕がやろうとしていることはまったく意味のないことだ。寧ろ迷惑にすらなるかもしれない。

僕は優子さんの意思を尊重し、ここですっぱりと『あの条件』を放棄するべきなのだろうか。

「……ごめんなさい」

僕が黙考していると、唐突に優子さんが申し訳なさそうに目を閉じてそんなことを言っていた。

「ど、どうして謝るの？ 寧ろ謝るのは僕のほうだよ」

「そうじゃないの。……アタシ、最初は吉井君を疑ってたから」

「え、どうして……？」

「だって何の理由もなく人を助ける人なんてドラマや空想の世界だけだと思ってたから。そんな都合の良い人なんて存在しない。だからきつと吉井君も裏で何か企んでいるに違いないって。そう勝手に思い込んでたわ」

「……………」

「本当は感謝しなきゃいけないのに、気づけば心の中は猜疑心でいっぱいだった。ほんと我ながら心が汚いわね」

「そんなことないよ！ 優子さんはすごく綺麗だよ！」

反射的にそう叫ぶ。

優子さんレベルで汚いなんて言ったら、僕や雄二はゴミクズ扱いで焼却処理されないといけないレベルだ。

「……前から思ってたけど、吉井君って純粹ね」

「そ、そうかな？」

「ええ。だから周りにバカだって言われるんだらうけど」

おかしいな。褒められたはずなのに胸が痛い。

と、そこでぴつと優子さんは人差し指を立てて言葉を紡いだ。

「でも、あんまり齒に衣着せぬことを言うんじゃないわよ。でないと絶対いつか女の子を勘違いさせるんだから」

「へ？ 勘違いさせるって何を？」

「つつ?!?! そ、そこにツツコミを入れなくていいの！」

「??」

急に赤くなったり怒り出す優子さんに首を傾げる。

何を怒っているんだろう？ 美波が僕に暴力を振るってくる時も思うけど、女の子の考えてる事って良く分からない。

「はあ……。とにかく、アタシは吉井君にお礼をしなくちゃいけないの」

「お礼？ 僕は何もしてないよ」

「したわよ。クラス——いえ学年全体を巻き込んで試召戦争を起してアタシをAクラスにしてくれようとしたこと。……………それと、振り分け試験の日に助けてくれたことも」

「えっ、あ…………」

そういえば、そんなこともあった。

あの時は先生の冷徹な態度にカッとなつてつい大声で叫んでたな。今思うと恥ずか

しい黒歴史だ。穴を掘って埋めてしまいたい。

僕と同じことを考えていたのか、優子さんはあの日の出来事を静かに語る。

「あの時はぼうつとして意識もほとんどなかったけど。周りの生徒がすごい奇異な目でアタシを見てるのがわかったわ。それだけですごく恥ずかしくてすぐにでもその場から逃げ出したくなかったけど、その時に吉井君が助けてくれた。見ているだけのみんなとは違って貴方だけが。ただそれだけのことだけど、アタシはそれで救われたから……」

だから、ありがとう。と。

優子さんは夕焼けを背に、恥ずかしそうに頬を赤く染めながらそう微笑んで言った。

僕は、自分の呼吸や瞬きが止まっている事にすら気づかなかった。

ただ純粹に、目の前のいるあまりに美しい、そして可愛らしい一人の女の子の笑顔に見惚れていた。

放っておけば、きっと僕はいつまでもその場で固まっていただろう。

それを、まるで魔法をかけられたように優子さんの一声で僕はハッと意識を取り戻した。

「吉井君？ どうしたの？」

「っ！ な、ななな何でもないよ！ ちょっと夕焼けが眩しくて目を眩んだだけだから！！」

いけない。危うく精神が天高く舞い上がるところだった。

まったくなんて破壊力だ。一撃で男性の心臓を停止させるほどの攻撃なんて、そんなの防ぎようがないじゃないか。

何？ 目を瞑れば良い？ バカを言うな！ こんな純真無垢な笑顔に目を閉じるくらいなら僕は潔く死を選ぶね！ それが男のプライドだ！

と、いつまでも慌てているわけにはいかない。落ち着け。心を穏やかにしろ。ゆっくりと深呼吸するんだ。

すう、はあ、すう、はあ。……よし、落ち着いた！

「あの時のことなら気にしないで。僕がそうしたいからやっただけのことだから。感謝されるようなことじゃないよ。それにお弁当も分けてもらったし、僕はあれだけで十分すぎるくらいもらってるから」

脳内の煩惱を一旦脇において僕は改めて優子さんと向き合う。

本当にお礼を言われるほどの事じゃない。感謝で言うなら寧ろ二度もお弁当を恵んでもらった僕の方が足し引きでマイナスだ。

それよりも、もう一度聞かなくちゃいけない事がある。

「でも、本当に良いの？ Fクラスのままで。この先一年間、ずっとこんなむさ苦しい男しかいないクラスで過ごすんだよ？」

僕が優子さんの立場ならそんな絶対には耐えられない。……あれ？ でも僕の場合周りが全員女の子ということになるから。何それすごい天国じゃないか。一年どころか一生暮らせるよ！

「仕方ないわよ。アタシの居場所はFクラス。それはもう決定事項なんだから。ここに居るしかないわ」

その一言に僕は確信した。

……やっぱり優子さんは無理をしている。

彼女は言った。ここに居たいでも、ここに居ればいいでもなく、居るしかないと言った。

だったら、やっぱり優子さんはFクラスにいるべきじゃない。彼女はAクラスになるべきなんだ。

「優子さん。僕は諦めないよ」

「え？」

「僕達は試召戦争でAクラスに勝って、絶対に優子さんをAクラスにする」

「な、なんでよ！ アタシがいつて言ってるんだからそんなことしなくてもいいじゃ

ない！ 吉井君、善意はありがたいけど行き過ぎる行為はただのお節介よ」

「お節介でも余計なお世話でもいい。もう誰かの為とかじゃない。僕は僕がそうしたいから優子さんをAクラスにする！ そう決めた！」

「なっ!?!」

優子さんが絶句する。

大体さつきから優子さんは妙だ。Aクラスになりたいならなりたいて素直にそう言えばいいのに、言葉を曖昧に濁してなんだかAクラスに行きたくないみたいいな素振りを見せている。

こうなれば強行だ。意地でも試召戦争に勝ち抜いて彼女をAクラスに突き出してやる。

それが僕の決意。試召戦争に望む理由だ。どうだ、あまりの自分勝手さに頭を抱えらるだろう。

「はあ……。やっぱり、吉井君ってバカだわ」

開き直った僕に優子さんは深い深い溜め息を吐いていた。

そして、数秒ほど俯いた後、何かを決心したように顔を上げて強い眼差しで僕を見据える。

……なんだろう。何か優子さんの纏っている雰囲気が変わった気がする。

具体的に言うと、少し荒っぽくなったような。

「少しは敬意の念も抱いて今までのままで接していこうと思っただけどやめた。アンタなんか気を使うなんてアタシのプライドが許さないわ」

「あ、あんた……?」

「アンタなんてアンタで十分でしょバカ。はあ……こんなヤツに猫被つてたなんてバカみたい」

「ゆうこ、さん?」

「これからは秀吉と同程度の扱いでいいか。その方がアタシも楽だし」

明らかに口調が乱暴なものに変わっている。な、なんだ。今の優子さんの背後に美波の姿が被って見えるぞ。

逆らうと関節の二、三本は持っていかれそうな迫力だ。

その優子さんが笑顔で僕を見る。さっきとは全然違う。殺気の籠った凶悪な笑顔だ。子供が直視したら泣いてしまうんじゃないだろうか。

「吉井君」

「は、はいっ!」

「そういうわけだから、これからもよろしくね」

「(くくんくくん) つつ!!!」

全力で首肯する。口答えしたら殺すと目が言っていた。

この世は弱肉強食だ。生物は自分よりヒエラルキーの高い生き物には絶対逆らわないのである。

無論、僕として例外ではない。寧ろ筆頭だ。『ヒエラルキー：(例) 吉井明久』と辞書に載っけていてもおかしくない。

僕の直情型平伏姿勢に満足したのか、優子さんは嬉しそうに首を縦に振った。

「うんうん。それでいいのよ。それと吉井君、今ご飯に困ってるのよね?」

「今ってどうか慢性的に我が家は食費不足だけど……。それがどうしたの?」

「アタシがお昼のお弁当、作ってきて上げましょうか?」

「え」

予想外の台詞に変な声が出た。

ていうか。え? い? 今なんと言いましたか?

「お、お弁当って優子さんがっ!? ほんとに?」

「なによ、嫌なの?」

「いや、いやいやいや! そんなことないよ!」

寧ろ大歓迎だよ。大手を振って迎え入れるよ!

「でもどうして? お礼ならさっきのでもう終わったはずじゃあ」

「別に。アタシの個人的気分よ。それに、吉井君がアタシの為に試召戦争で戦ってくれてるっていうのにアタシが何もしないわけにはいかないでしょう」

そんなこと気にしなくていいのに。本当優子さんは真面目だな。

どうやら彼女は猫を被っていたらしいけど、本質的なものは特に変わらないらしい。とにかく、本人がそう言ってくれるなら断る方が返って迷惑だろう。元より断る気なんてないけど。

「そういうことなら、お願いして良いかな？」

「ええ。……一応言っておくけど、期間はAクラスとの試召戦争が終わるまでだからね。それとあくまでこれはギブアンドテイクだから！ 変な勘違いとかしないように！」

「い、イエッサー……。勿論です。そんな淡い希望は一ミリたりとも持ち合わせておりません！」

本当は期待ありまくりだが、口に出した途端「さっきのやつばなし」とか言われそうだったので喉元で押さえ込む。

どうしよう。僕、今幸せすぎる。もしかすると僕は明日死ぬんじゃないかな。

「……ちよつとは気にしなさいよ。バカ」

そつぽを向いて何か言っている優子さん。独り言か？

「ん？ なんだお前達、まだ残っていたのか？」

なんて、若干ピンクムードの空間をぶち壊すかの如く、鉄人が僕の後ろの扉から入ってきた。

「西村先生。アタシ達もこれから帰るところです」

「そうか。もう最終下校時間は過ぎてる。寄り道せずに帰るようにするんだぞ吉井」

「先生。どうして僕だけ名指しなんですか」

「木下が寄り道をするとは思えんからな」

「……………」

納得できるだけに反論の言葉が出ない。くっ、また負けた！

「はい。今日はお疲れ様でした西村先生」

きらきらと星の浮かぶような綺麗な笑顔で優子さんは鉄人に別れの挨拶を告げる。

彼女の本当の性格を知ってしまったからだろうか、何故か今は優子さんの光るような

笑顔が怖くて仕方がない。

なんて危惧を覚えているのは僕だけのようで、件の鉄人は品行方正で礼儀正しい生徒に見えているようだ。

「うむ。また明日。すでに日も落ちているが道中気をつけて帰る様にな」

「それじゃあね吉井君。明日からまた頑張りましょう」

「う、うん。また明日ね……………」

軽く手を振って優子さんを見送る。

僕と鉄人の横を通り抜けて優子さんが廊下を飛び出すと、しばらくリノリウムを靴裏で叩く音が木霊しやがて聞えなくなった。

……さて、用事もないし僕も帰るか。

「じゃあ僕も帰ります。さよなら」

「ああ。——いや、ちよつと待て吉井」

「はい？」

「さつき霧島をここで見かけてな。なにやら吉井を探していると言っていたが、もうすでに帰ったと思ひ霧島にそう伝えておいた」

「霧島？」

霧島と言えば、Aクラス主席で代表の霧島翔子さんが一番最初に頭に思い浮かんだ。

でも、Aクラス代表が僕に用事？ どういうことだ？

「ともかく、明日霧島に会ったら——」

ガララ

そこで優子さんが出て行った教室の扉が再び開き、外から今話題に上っていた霧島さんが現れた。

「……あ、いた」

「おー霧島か。丁度よかった。実は吉井をここで見つけてな」

「……ありがとうございます。西村先生」

ペこり、とまるで涼風のように静かでゆったりした綺麗な声で霧島さんはお礼を告げた。

軽く頭を下げた事で、背中に流していた流麗な長い黒髪が流れるように肩の上を通り過ぎて行く。

……本当に綺麗な人だな。こんな人が一緒のクラスにいるなんてAクラスが羨ましい。

その霧島さんは、鉄人の横を抜けて僕の前まで歩いてきた。

「つー、な、何か僕に用かな霧島さん」

傍に寄られた瞬間、微かに甘い香りを感じ思わず言葉がどもる。

それに気づかなかったのか、霧島さんは「うん」と言った後、こう告げてきた。

「……吉井、明日お昼休み空けておいてほしい」

「え？ どうして？」

「……瑞希がお弁当を作ってくるから、それを食べてあげて」

「なんだって……？」

瑞希って、姫路瑞希さんのことだよな？

その人がお弁当作るから、食べて……だと。

……何で？

「……とにかく、伝えたから。それじゃあ」

「え!?」 ちよ、ちよつとまって霧島さん！ 僕明日のお昼は予定がつ！」

止める僕の声を無視して、あるいは聞えなかったのか霧島さんはそそくさと教室を出て行った。

……なんてことだ。明日から優子さんがお弁当を作ってくれる事なっているのに。この上姫路さんまでお弁当を作ってくるだど……。

これは緊急事態だ。もしこの事実がFクラスの人間に知られたら僕は間違いなく処刑される。

明日は慎重に慎重な行動を心がけねば。

「……優子さん。怒らないかな」

脳内に優子さんの姿を思い浮かべながらぼつりと呟く。

……だ、大丈夫だよ。最後はかなり粗暴になってたけど根は優しい人のはずだし仮に姫路さんと同席することになったって笑って許してくれるはずだ。そう信じたい。

頭の中で明日のプランを考えながら、長い一日を終えてようやく僕はとぼとぼと帰路に着いたのだった。

問16 FクラスとCクラスの対談

昨日の試召戦争で消費した点数を回復する為、今日もまた授業の時間を一部補充テストに回していた。

まだ新学期が始まって間もない今の時期から二つも上のクラスを倒した僕達Fクラスは一躍有名人のようになっていた。

どうやら昨日の今日でもうDクラスに勝ったことが知れ渡っているらしい。口コミって恐ろしいね。

だが僕達の到達点^{ゴール}はDクラスではなく学年最高成績者の集まるAクラスだ。Dクラス戦など僕達にとっては言わば前哨戦、試召戦争の慣らし程度のものでしかない。

Fクラス代表の雄二はその為の前段階として次はBクラスを攻めると言っていた。BクラスはAの一つ下、きつと昨日のDクラス戦とは比較にならないほどの苦戦を強いられる事だろう。

そんなことをずっと考えていると、ふと僕の前に影が射した。

顔を上げると正面には短い髪をワックスで持ち上げて野性味のある顔つきの男、雄二が僕を見下ろしていた。

雄二は僕を見据えると、いきなりこんなことを言い出した。

「明久、これからCクラスに行くぞ」

「Cクラス？ どうしてまた」

「俺達がこれから戦うBクラスの前にCクラスと不可侵条約を結ぶ為だ」

不可侵条約——つまりお互いの行動に一切干渉しない決まりを設けるのだろうか。

でもどうしてそんなことを？

「もし俺達がBクラスに勝つても疲労した隙を付かれてCクラスに攻め込まれて負けたら今までの苦勞が全部台無しになるからな。その可能性を潰すためだ」

疑問が顔に出ていたのか、僕が口に出す前に雄二は回答を答えた。

なるほど。確かに一理ある。

試召戦争はテストの点数を使う戦いだけど、思いのほか体力も消費する。点数を消費したら回復テストを受けるために教室と廊下を何度も往復しないとイケないし、召喚獣勝負では集中力も必要だから見た目以上に結構疲れるのだ。

その状態に攻め込まれたら本領を發揮できずに一方的に敗北する危険性がある。雄二の危惧はもつともだろう。

「わかったよ。でも僕は必要なの？ 交渉なら雄二だけでいいと思うんだけど」

「別にお前に表に立って相手を説き伏せるなんて言わん。お前程度の知能にそこまで期

待はしてない」

「本当に雄二は僕に協力を申し込みに来たの？ その言葉には悪意しか感じられないんですけど」

「ああ。悪意で言ってるからな」

ぶん殴ってほしいのだから。

「ってそんなことはどうでもいい。それより今はCクラスとの交渉だ」

「僕の方は全然よくないけど。まったく、あんまりひどいと本当に裁判で訴えるよ」

「やれやれ、器の小さい男だな。分かった分かった、今度コンビニでうまい棒を買ってやるから許せ」

僕への罵倒＝十円（税込み）。

僕も安く見られたものだ。

「後は——、ムツツリーニ！ 木下！」

「……………(´)(´)」

「何かしら？」

雄二が少し大きな声で呼びかけると、名前を呼ばれたムツツリーニと優子さんが僕の席の前にやってきた。

二人の視線の先にいる雄二は、先ほどと同じような説明を二人にする。

「これからCクラスと不可侵協定を結ぶための交渉に行く。二人とも俺について来てくれ」

「……………了解」

「不可侵協定……………ね。別に構わないけど、アタシ達は何をすればいいの?」

「そうだよ雄二。さっきは話が脱線しちゃったけど、僕らの役割って何なのさ」

「そうだな……………強いて言うなら交渉材料だ」

「なんですつて?」

「とにかくお前たちは何もしくない。話し合いは俺がするから、三人は俺の後ろで控えていてくれ」

それだけを告げると雄二は僕らに背を向けて歩き出した。

むう、相変わらず何を考えているか分からない男だ。まあ頭が回るアイツのことだから何かしら意味があるのだろう。

そう思い込むことにして、僕もすぐ後ろに続いた。

Cクラスは新校舎の端。Dクラスの対面にある。

Aクラスと隣接しているCクラスの教室は設備レベルが一般大学教室程度に広い。

ラウンジやロビーがあるBクラスやAクラスとまではいかないが、これはこれで十分立派な設備だろう。

Fクラスの木製の古い扉とは違い手で撫でるとさらさらと滑りそうなほど綺麗な扉の前まで来た僕達。

「失礼する」

先陣を切る形で雄二はその扉を開き中へと足を踏み入れた。

僕達もその後ろに続いて行く。

次の授業の準備をしていたり友達を雑談していたCクラスの生徒は僕達の来訪に何事かとこちらへ顔を向けていた。

「あら、誰かと思えば新学期早々に二つも上のクラスを倒した勇猛果敢なFクラスじゃない」

最初に声を発したのは、肩口程度の短い髪型の女生徒だった。

他の生徒のように驚いてはいないのか、彼女は突然の来訪者たる僕達に向けて薄い笑みを浮かべている。

「Fクラス代表坂本雄二だ。今日はCクラスの代表と話があつて来た」

一歩前に踏み出しいきなり本題に入る雄二。

「Cクラス代表は私よ」

「なるほど、じゃあお前が小山友香か」

「ええそうよ。よろしくね。Fクラス代表の坂本君」

最初に声を掛けてきた女生徒は笑顔のまま雄二と挨拶を交わす。この子が代表だったんだ。

「それで、Fクラスが何の用かしら？ ひよつとしてDクラスを倒した次は私達Cクラスへの宣戦布告ってこと？」

小山という女生徒はもつともらしい意見を言う。

確かに今の状況ではそれが一番可能性が高いだろう。Dクラスを倒してとなれば、次はその上のC。それがもつとも普通の発想だ。

しかし、雄二は首を振って言った。

「いや、むしろその逆だな」

「逆？」

「ああ。——俺達FクラスはCクラスと不可侵条約を結びたい」

その一言に、教室内がざわついた。

『不可侵条約？ なんだそれ』

『試召戦争はやらないのか』

『Fクラスの奴ら、なにを考えているんだ』

今まで静寂を保っていたCクラスの生徒が一斉に騒ぎ出す。

雄二の提案が意外だったのか。小山さんもさつきまで顔に貼り付けていた笑みを剥

し顔を強張らせていた。

「へえ——。宣戦布告かと思つたらそんなことを言つてくるなんて。どういうことなのかしら？」

「言葉のままの意味だ。俺達はCクラスの行動には一切干渉しない。代わりに以降俺達Fクラスに宣戦布告をしないでほしい。それだけだ」

「それで？ 仮に私達がそれを飲んだとしてFクラスはどう動くの？」

「Bクラスに宣戦布告する」

「——ぶっ」

小山さんが軽く吹き出す。

それから間髪いれずに笑い声が教室内に響き渡つた。

「あはははははははっ！ こ、これは傑作だわ！ まさかDクラスを倒した次はBクラス？ 何？ Fクラスは下克上でもしているのっ？」

「ありていに言えばそうだ。俺達はBクラスを倒し、そしてAクラスも倒す」
笑われていることに一切気にせず雄二は冷静な声で言葉を紡ぐ。

小山さんはつぼに嵌つたのか。お腹を押さえてひーひーと悲鳴のような笑い声を吐き出した後、咳払いをして姿勢を正した。

「こんなにあつたのは久しぶりだわ。坂本君って結構面白い人ね。友達になりたいぐら

「い」

「褒め言葉として受け取っておこう。それで？ 俺達との休戦協定は受けてくれるのか？」

「その前に私からも一ついい？」

「……何だ」

「坂本君。貴方、私がBクラス代表の根本君と付き合ってるって知ってる？」

「何だって!？」

驚きのあまり思わず声が出ってしまった。

Cクラス代表とBクラス代表が恋人同士!? そ、そんななんて羨まし——と違って妬

ましい!

いや、今は嫉妬してる場合じゃない。それじゃあ僕達の提案は彼氏を裏切れと言って
いるようなものじゃないか。そんなの受けられるわけがない。

しかも僕達はBクラスに挑むと宣言してしまった。もし小山さんから根本君へその
情報を流されていったらBクラスの方から逆に宣戦布告をされる可能性もある。

それは考えうる限りの最悪の事態だ。こっちが何も準備できていない状況で試召戦
争に突入してしまつたら成すすべもなくやられてしまう。

「ど、どうするのさ雄二!? このままBクラスに挑まれたら僕達一瞬で負けちゃうよっ」

「落ち着け明久。交渉はまだ終わっていない。いいからお前は余計なことは喋るな」
焦る僕に雄二はぴしやりと言いつつ。

むう。雄二がそうならきつと大丈夫なんだろうけど、ちよつと不安だ。コイツは一番大事なところでミスする時があるからな……。

一歩後ろの位置から僕は二人の代表の成り行きを見守る。

「俺はこの明久と違ってバカじゃない。事前準備もなしに他クラスへ乗り込もうなんて考えてないさ」

おお！ さすが雄二だ。だが一言多いぞ！

「ふうん。じゃあ私と根本君の関係も？」

「勿論知っていた。ウチにはその手の情報を集めるのが得意なヤツがいるんでな」

「……………」

雄二はちらりと後ろに目をやる。

その先にはムツツリーニが僕と同じく黙って雄二と小山さんを見据えていた。

この土屋康太がかのムツツリーニだという情報はまだFクラス以外には広がっていないはずだ。

その所為か、小山さんは雄二の微妙な視線の変化には気づかず話を続けた。

「そうなんだ。でもそれならどうして不可侵条約なんて言い出したの？ はじめから断

られること前提で話に来たわけ？」

「いや。それは本当だ。俺達はCクラスと争わない為にここに来てる」

「……分からないわね。なら貴方達は何がしたいの」

要領を得ない言葉に若干苛立ちを感じ始めたのか小山さんの声のトーンが少し低くなる。

それに雄二はわずかに肩を竦めて見せた。

「何、簡単なことだ。……単調直入に言おう。——小山、根本恭二を裏切れ」

「な——っ」

な、何——いいつつっっ!?

あまりにもあつさり。まるで近くのコンビニに行くような気軽さで、雄二は恋人を裏切れと言った。何言っちゃってるのこイツ!? 野生に帰り過ぎてついに頭がおかしくなったのか!?

案の定、そんなことを言われた小山さんは絶句して目を見開いている。多分僕もまったく同じ表情をしてるだろう。

「坂本君、どういうことなの」

驚いて声が出ない僕達に変わり、今までずっと沈黙を保っていた優子さんが雄二に問いかけた。

だが雄二はそれに応じず、顔を小山さんの方へ向けたまま口を開いた。

「ちよつと言い方が悪かったな。ようは根本には秘密で俺達と休戦協定を結んでほしいってことだ」

「随分と我儘な注文をしてくるのね。……ほんと、面白いわ貴方。だけどそんな都合のいい提案をはいそうですかと飲めると思ってるの？ だとしたらお笑い種なんですけど」

「勿論報酬は用意してある。それ次第で一考しても遅くはないはずぞ」

「報酬？ へえ、一体何なのかしら？」

「Bクラスの教室だ」

「……なんですって」

小山さんの目の色が変わる。

「というか雄二。それ僕も聞いてないんだけど一体どういうこと？」

「俺達の目的はBクラスの設備じゃない。だから俺達がBクラスに勝てば教室の設備はCクラスに明け渡すと約束しよう」

「貴方馬鹿なの？ 試召戦争は勝ったクラスが負けた相手クラスの教室と交換するルールなのよ。そんな勝手な条件学園長が許してくれるわけがないでしょう」

「だったら俺達の戦争が終わったすぐにCクラスがBクラスに挑めばいい。素の状態な

らともかく一度俺達と戦って疲弊した相手ならCクラスでもなんとかできるだろう？
仮に俺達が負けてもBクラスに損害は与えられる。Cクラスとしちゃあこれ以上な
攻め時もないと思うが？」

「……………」

小山さんは顎に手を添えながら黙って何かを考え始めた。

雄二の言葉が僕には悪魔の囁きに聞える。客観的に見たら間違いなく僕らが悪役だ
よねこれ……。

そもそも本当に小山さんと根本君が恋人同士ならどんな条件を突きつけられても応
じないと思うんだけど、どうするつもりなんだろう。

「大体根本の野郎のどこがいいんだ？ あんなの姑息で卑怯なだけの小物だろうが」
追い討ちを掛けるように雄二は思案している小山さんに悪態を吐く。

雄二の言う通り、根本恭二というのとはかく評判が悪い事で有名だった。

テストでカンニングは当たり前。喧嘩となれば刃物持参。学校行事などでは他校か
らガラの悪い男を何人か連れ込んで対戦クラスを脅して不戦勝をした等等。挙げれば
キリがない。まあ素行が悪いという意味では僕達も人のことは言えないが……。

しばらく思考していた小山さんは、雄二の言葉に顔を上げ僅かに口を緩めながら言葉
を返した。

「私はね。頭の良い男が好きなの。勉強ができるという意味じゃなくてね」

「根本のはただ小細工が好きなの。小心者だと思いがな」

「あら、勝つためには手段を選ばないって結構ステキじゃない？ 丁度、今の坂本君みたいな」

人を見下すような卑しい笑みを浮かべる小山さん。……この人も結構性格悪いなあ。

彼女の言う通り彼氏に黙ってほかの男と約束事を取り付けさせようとしている雄二も相当な外道だが。

「俺は根本の野郎とは違って手段くらいは選んでるつもりだぞ」

「どのへんが？」

「……俺達の調べた情報では小山友香は利己主義な人間だ。それも超のつくな。だから無茶な要求でも交換条件次第では俺達の協定にも答えてくれると踏んでいた。最初ここに来た時は半信半疑だったが、それもさっきのやりとりで確信できたしな」

「どうして？」

「お前、俺が最初に根本を裏切れて言った時。怒らなかつただろ」

そういうば、小山さんは雄二の滅茶苦茶な提案を最初『面白い』なんて言っていた。

小山さんにとつて根本君が本当に心から好きな人なら絶対そんなことは言えないはずだ。

「うーん、そうだったかしら」

「普通好きな異性を蔑ろにしろなんて見ず知らずの人間から一方的に告げられたら激怒するはずだ。だがお前はそうはならなかった。それはおまえ自身にとって利益に繋がるかもしれないからだ」

「……………」

「根本と付き合ってるのだから究極的にはそういうことだろ？ アイツから好意を受け取る事で小山自身が気に入らない人間は自分が手を下さなくても根本が勝手に始末してくれる。それは小山にとって十分な利益だ」

「…………ふふ、あははははははははは」

突然笑い出す小山さん。

「本当に！ 本当に面白いわ坂本君！ ああ、どうして貴方みたいなステキな人もっと早く出会わなかったのかしら。まったく悔やまれるわ」

「お褒め頂いて何よりだ」

「ええ。最大級の賛辞よ。ねえ、よかつたら私と付き合わない？ そしたら不可侵条約でも何でも受け入れてあげるわよ？」

「嬉しい申し出だが遠慮する。俺はまだ束縛されたくないし大体あの根本のお下がりにゃんてごめんだ。悪いが男探しは他を当たってくれ。取引材料ならBクラスの設備だけ

で十分元は取れてるはずだろ」

「そう……。残念」

心から残念そうに小山さんは顔を伏せる。

……取り合えず女性からの好意を受け取ってという事でこの件は後日異端審問会に掛けるでしょう。

おそらく雄二には満場一致で有罪判決が下るはずだ。きつとアイツは試召戦争が終わり次第クラスメイトの手によって人肉ミンチにされることだろう。

こんな粗暴で野蛮な男が女子から好意を持たれるなんて、神様が許しても僕が許さない。

後ろで殺意の炎を燃やす僕に気づかず、雄二は交渉を続けた。

「それじゃあ交渉は成立ってことでいいんだな。俺としてもこの件でことを荒立てたくないからできれば穏便に円滑に進めたいんだが」

「よく言うわ。脅しまでかけておいて穏便も何もあつたものじゃないと思うけど？」

「どういこうとよ」

小山さんの台詞に反応したのは優子さんだった。

すると、小山さんは一瞬驚いたように目を見開いた後、舐めるような視線を優子さんを向けた。

「何も気づいてないの？ それとも綺麗好きで頭の固いAクラスになるはずだった人には想像もできないのかしら？ 自分が脅しの道具に利用されてることなんて」

「アタシが、脅しの道具ですって……？」

「それ以外に貴方が今ここにいる理由はないでしょ。Dクラス代表を倒した観察処分者の吉井君、Aクラス並の学力を持っている木下さん。その地味そうな小柄の男は詳しく知らないけど彼は彼で何か変わった特技でも持ち合わせているからここにいます。そんな人達を無言で背後に控えさせるってことはつまりこういうことでしょう？」

「そっちが提案に乗らなければ今日にでも俺達はCクラスに攻め込むぞ」ってね」

「さあ、どうだかな」

茶化すように雄二は軽く肩を竦める。

その態度は誰が見ても小山さんの言う言葉が当たっていると理解できた。そうか。僕はそういう都合でここにいるのか。

別段意外でもない。去年から雄二とつるんでいた僕からしたら逆にそれだけなの？ と拍子抜けと思えるほどの分かりやすい理由だった。

しかし、僕とは違い優子さん小さな声で「……そう」と呟いた後、静かに元の位置に戻った。……その表情には少し陰りが見えている。

「いいわ。Fクラスの提案を受けましょ。私達CクラスはFクラスとは戦わない。それ

でいいのよね」

「協力感謝する」

「ええ。私は坂本君のことが気に入ったから。近いうちにお話でもできたらいいわね。二人つきりで」

「……考えておこう」

「ごめんね小山さん。多分その日は永遠に来ないよ。何故なら雄二はこの後異端審問に掛けられて処刑されるから。」

ふふふ、楽しみだなあ。教室に戻ったらよく切れるように包丁を研いでおかないと。

そんな「元」友人への素敵なプレゼントはさておき、取り合えずこれで僕達はCクラスと戦う必要はなくなった。

後はDクラス戦で失った点数を補充して、万全の体勢でBクラスに挑む。そして絶対に勝つ。

用事が終わったCクラスを後にし僕達は自陣であるFクラスへ戻る。

……ああ。今日はこの後もテストか。一日中テストだと精神的にしんどいなあ……。

問17 異端審問会

Fクラスにて――。

「では坂本雄二、覚悟はよいな？」

「暴論だあ！ あれはクラス間の交渉であつて決して逢引とかそんなのじゃない！ これは冤罪だぞ！」

「と、被告人は無罪を主張しておりますが、吉井検察官」

「被告坂本雄二はCクラス代表の小山さんから好意を持たれておりました。これは純然たる事実です」

異端審問が行われていた。

教室の中心には縄でぐるぐるに縛られた雄二が芋虫のように暴れている。その周りには覆面ローブの集団が円を築いていた。

「てめえ明久ふざげんな！ 一体どういうことだこれは!？」

「観念しろ雄二。ここが年貢の納め時だよ」

「……やれやれ、Cクラスから帰つて来たと思つたら忙しい連中じやのうまつたく」

「ほんと懲りないわねあんたら」

後ろで秀吉と美波が溜め息が吐いている気配を感じた。

カンカン

「静粛に」

裁判長（仮）の須川君が静かに一喝する。

周囲に静寂が訪れると、須川君は改めて雄二に視線を落とした。

「坂本雄二、遺言はあるか？」

「弁解の余地はないのか!? 待てお前ら! こんな裁判認めてたまるか! 大体俺と小

山がそんな雰囲気になったという証拠はあるのか!？」

「吉井検察官」

「はっ。カモン、ムツツリーニ」

「……………(すっ)」

しゅたっ、と上から降り立つ影の諜報員ことムツツリーニ。

今まで天井に張り付いて何かしていたかとか聞いてはいけない。

僕はムツツリーニの方へ振り向かず、前を向いたまま命令を告げた。

「——例のものを」

「……………Yes, my lord (びっ)」

『《坂本君》《ステキ》《私と付き合わない?》』

『《勿論》《小山》』

スピーカーから流れる偽れざる真実。

「有罪、死刑」

「〔異議なし!〕」

「ちつくしよー……………!?!?」

悪が滅びた瞬間だった。

「さあ、覚悟の決めなよ雄二」

「ぞけんなコラア! ていうか今の絶対ムツツリーニの持つてる小型レコーダーで音声加工してるだろ! 証拠の捏造だ! 訴えるぞこのバカ野郎!」

「往生際が悪いぞ雄二! いい加減諦めて異端審問会の裁きを受けるんだ」

「横溝、窓を開ける。このまま直接頭から落とすぞ」

「了解です須川会長」

「氷室はスコップを用意するんだ。裏庭の土は固いからな」

「はっ」

「く——っ、このままじゃマジに殺される。ま、待てお前ら。一つ大事なことを忘れてい
るぞ」

「何?」

「そこでえらそうにしている明久だつて最近木下優子と親密な関係にあるだろうが！
それを見逃していいのか！」

「なっ!!? 雄ニキサマー！」

「全員で吉井を捕らえろ」

「「Yes, my lord!」」

「ひいつ!!? みんなが一斉に僕の下まで!? 落ち着いてみんな！ これは雄二の狡猾な
罠だ！ 今処刑されるべきなのか坂本雄二ただ一人のはず！」

「へっ、俺だけ被害を被つてたまるか。死ぬ時は一緒だ」

「このクソ野郎っ！」

「……何をしとるんだ、お前達は」

なんて鉄人が呆れたやりとりとかいろいろあつて時間が経ち。

☆

朝からのテスト漬けが終わり昼休みが訪れた。

「……ふふふ、ついに、ついに念願の昼休みの時間が来た！ この時間の為に僕は今日の
これまでを必死に生きてきたと言つても過言ではないね！ 優子さんという最強幸せ

のスポンサーを得た僕にもはや食事の不安はない。これぞ夢見たユートピア！——
—なんて、言つてられないよね……」

はあ、と深い溜め息が漏れた。

原因の昨日帰り際にAクラス代表の霧島さんから告げられた言葉だ。

夕暮れの射す教室に突然やってきた霧島さんは『……瑞希がお弁当を作つてくるから、食べてあげて』といきなり約束を取り付けてしまった。有無を言わせぬ電撃作戦である。

瑞希さんとはAクラスであると同時に学年次席、二位の実力者である姫路瑞希さんのことだ。

それにしても一体どうして僕なんかが姫路さんに呼ばれたんだろう？ 小学校の頃から長い間一緒に学校だったけど、だからって別に仲が良かった訳でもないのに。

さっきの異端審問会の影響でFクラスも少しピリピリしているし、これ以上余計な刺激を与えるのは僕の寿命的によくない。

取り合えず、今は身の安全の為に一刻も早くこの場から離れることから始めるべきだろう。

「吉井君、お昼のご飯だけど……」

「優子さんこつちー！」

「えっ?! ちよつとなんなの——!」

手に巾着袋のようなものを持ってやってきた優子さんの手を掴んで一目散に走り出す。

「あ、アキどこ行くのよ!」

「鉄人に呼ばれてるんだ。また後でね美波!」

「え、ちよつ!」

何か叫んでいる美波の声を背中に受けながら教室を飛び出て、旧校舎から渡り廊下を経由し、新校舎の踊り間まで来たところで僕は足を止めて背後へ振り返った。追っ手は……ないな。よし!」

「はあ、はあ、何でいきなり走り出すのよ……」

「ご、ごめん優子さん。ちよつと急いでたもんだからつい。大丈夫?」

「これぐらいは全然平気だけど。……あの、そろそろ離してくれないかしら」

「へ?」

「手、さつきから握りっぱなしなんだけど……」

あ、どうりでなんか手に持っているものがさらさらで柔らかくて気持ち良いなと思っ
ていたら!」

「あわわわっ!? こ、これはつい弾みで! 決して邪な他意はないんで信じてください

!？」

慌てて手を離す。そうか。なんだかさつきから妙に周囲の視線が優しいなと思った。らそういうことか。

僕達旧校舎から新校舎の踊り場まで手を繋いで走ってきたんだもんね。うわあ恥ずかしい!？」

僕と同じことを思っていたのか、正面に立つ優子さんも顔を赤くしながらさつきまで繋がれていた手の甲をもう片手で撫でながらポソポソと言葉を紡ぐ。

「べ、別にアタシは良いんだけど……。それより急いでるって何のこと？ お昼休みに用事でもあったの？」

「それは……。えっと、実は今からAクラスに行かなきゃいけないんだ」

僕は正直に話した。こういう場合下手に黙っていると後で被害にあう確立が高いことは女の子を攻略するゲームで経験済みだ。

無論今から言ったって現状が変わるわけでもないが、何にせよ早く説明したほうが余計な誤解を与えずに済む。正直者は福を見るってね。これ、テストに出るから覚えておくように。

「Aクラスに？ どうして？ また試召戦争関係の話し合い？」

「試召戦争とはまた別の件で、昨日優子さんが帰った後すぐにね——」

僕は昨日霧島さんから告げられた内容を優子さんに説明する。

最初は普通に耳を傾けていた優子さんだが、話が進むにつれ段々と顔に不機嫌そうな表情が浮かんでいき、最後まで話終える頃には柔らかない微笑を浮かべていた。

「——と言うわけなんだ」

「……なるほど、話は分かったわ。そういうことなら仕方ないわね」

「分かってくれた？　はあ、よかったあ。僕怒られてご飯抜きにされるんじゃないかとひやひやしてたよ」

「バカね。そんなわけないじゃない」

「だよー。あははは」

「ええ。——ところで吉井君、右腕と左腕。どっちを折らりたい？」

「おかしい！　話がかみ合ってるようで全然かみ合っていない！」

「な、なんのこと!？」

「何のことですって……？　ふふふ、良いご身分なことね吉井君ったら。アタシだけじゃなく姫路さんとも約束しているなんて。どうしましょう、煩惱って頭を開いて中に直接バーナー突っ込んで炙ればなくなるのかしら」

優子さんは笑っている。笑いながら殺気を放っていた。

「やばい……。なんか僕、地雷踏んじやった感じ？」

「おお落ち着いて優子さん！ さつきからなんだか思考がいけない方向へ向かつてるよ
!?!」

「アタシは落ち着いてるわよ。それで？ 吉井君は圧死と感電死ならどっちがお好み
？」

「ひいつ!!? なんかもオプシヨンが増えてるう！」

こ、これはデンジャーだ。エマージエンシーコール！

つてさつきまで周りで僕達を眺めていたギャラリーが誰もいない!!? おのれ、いち早く危険を察知して逃げて行つたな！ なんて訓練された連中なんだ。

「悪気はなかつたんです！ どうか平にご容赦を!?!」

「……まあ、吉井君が悪いわけじゃないし今回は特別に許してあげる。まったく、本当に要領悪いんだから」

腕を組みながら溜め息と呆れた声を発して肩を落とす優子さん。僕はといえば、まったくその通りすぎるのでぐうの音も出なかった。

今回の件の場合、実状はともかく優子さんと先に約束していながら姫路さんとも約諾してしまつた僕が全面的に悪いのは事実なので、ここは素直に謝罪した。

「ご、ごめんなさい。もつと早く言っておくべきだったよね」

「そういう問題じゃあ！ ……はあ、もういいわ」

「?」

あれ? 報告するのが遅いから怒ってるんじゃないのかな?

「それより吉井君。貴方姫路さんとはほとんど交友関係なかったんじゃないの? その彼女がなんでお弁当なんて作ってくるのよ」

「そのはずなんだけど、僕にも分からないんだ。昨日も急に霧島さんが『お弁当食べてあげて』って言って来ただけだったから詳しい事情は僕にもさっぱりで」

「ふーん……」

歩きながら話す僕ら。優子さんはどこか気になるところがあるのか難しい顔で俯きながら何か考えていた。

Aクラスへ向かう途中、その優子さんがふと顔を上げて僕を見る。

「吉井君」

「うん? 何?」

「アンタ、姫路さんのこと好きなの?」

「ぶっはっ!」

吹いた。それも後方へ勢いよく仰け反るといっておまけつきで。

「なななな何言ってるのさ優子さん! そ、そんなことがあるわけ——」

「あるわけ?」

「——ない、と思うじゃないか」

「日本語がおかしくなってるわよ。あるのかないのかどっちなのよ」

半眼で睨まれる。ど、どっちって言われてもそんなの答えられるわけじゃないか。

確かに姫路さんは小学校の頃から知ってるし、頭も良くて可愛くて性格もよくて発育も上々——げふんげふん。

ともかくこの話題は危険だ。なんとか誘導回避しなくては回復不能な地雷を破裂させてしまいそうで怖い。

「だ、大体どうしてそんなこと聞くの?」

「……別に、もし吉井君が姫路さんに片思いしてるのならアタシ邪魔かなーって思っただけよ。吉井君って姫路さんみたいな人が好みそうだし」

「む」

顔をしかめる。姫路さんが可愛いというのには激しく同意だが今の台詞は反論したい。

「そんなことないよ。僕は今日はずっと優子さんの作ってくれたお弁当を楽しみに待ってたんだから。姫路さんと優子さんなら僕は迷わず優子さんと一緒にお昼を過ごすよ」

「つ!? い、いきなり何恥ずかしい事言ってるのよバカ!」

ぼふん、と顔を赤く上気させて怒鳴る優子さん。

何が恥ずかしいのか。優子さんの料理の腕は昨日の残り物のお弁当を食べた時に実証済みだし。どっちを選ぶかなんて安心して食べられる優子さんの方に決まってる。

「だって昨日もらった優子さんのお弁当すごく美味しかったもん。だからまた食べられるのすごく楽しみだったんだよ。姫路さんと優子さんなら（食べるなら）優子さんの方を選ぶに決まってるじゃないか」

「~~~~~っ!!!」

とたとたとたと物凄い早歩きであつという間にAクラスまで行ってしまふ優子さん。

うーん、ひよつとしてまた怒らせちゃったのかな。女心って難しいな。

「早っ！ ちょっと待ってよー！」

前途多難な不安を覚えながら僕は慌てて優子さんの背中を追いかけた。

問18 ランチタイム／明久side

Aクラスへ来た僕達。

少し遠慮しがちに教室に入り周囲を見渡すがやはりAクラスだけあつてかなり広い。おかげで姫路さんの姿がなかなか見つけられなかった。

「んー、どこにいるんだろ姫路さん」

「誰かに聞いたほうがいいんじゃないかしら」

「そうだね」

優子さんの言葉に従う事にして取り合えず話しやすそうな人を探す。

と、そこで丁度僕達の横を通り過ぎようとした女子を発見した。半ば条件反射的に僕はその子に向かつて声を掛ける。

「あの、ちよつといい？ 人を探してるんだけど」

「うん？ ボクのことカナ？」

振り返った子は陽気そうに僕達の方へ顔を向けた。

その子は優子さんよりも短髪で全体的にすらっとしたスレンダーなスタイルの活動的な印象で元気そうなイメージを感じさせる人だった。

足とかすごく細くて水を弾きそうな健康的な艶に悪いと思いつつもつい目がいつてしまった。きつと前は運動部とかに入ってたんだらう。

胸は……ちよつと残念な感じだけど、全体的なプロポーションがとても整っていてボーイツシユで綺麗な顔付きだった。

僕はその視線に気づいたのか、女の子はちよつと妖しい目で僕に近づいてきた。

「どうしたの？ 人の身体をジーツと見て。ソフフ、ひよつとして興奮しちゃった？」

「そ、そそそんなことないよ!? 初対面な人の身体をがん見するなんて無礼な真似するはずないじゃないか！」

「そんな緊張されて言われてもなー。………よかつたら、見る？」

言つて、女の子はスカートの手の爪先でちよいと摘まんて持ち上げる。僅かだがそれで綺麗な太ももの一部が目に入ってきた。え、ええええええーっつっ!?

「ほーら、もうちよつとで見えちゃうかも。どうしようカナー。君が見たいって言うならもつと上げても……」

「ぜ、是非っ!」

「ふんっ!」

「うぎい——っ!?!」

目の前の女の子のスカートに目が釘付けになっていると、突然左足に激痛が走った。

泣きそうになるほどの痛さに僕は攻撃された方へ首を振ると、優子さんが怖い笑顔を浮かべながら僕の足を串刺していた。

「……姫路さんだけじゃなくてまた別の女にもちよつかい掛けるなんて、一体何様のつもりなのかしら、ねえ！」

「痛っ!? ちよ、上靴の踵で足の甲をぐりぐりされると失神するぐらい痛いんですけど！ 痛い痛い痛いっ！」

「うるさい！ このまま千切れてしまえ！」

「だあああーっ!? もう足の先の感覚がなくなってるう！ これ以上は本気でヤバイよ!? ピンチピンチ！」

「アハハハハハ！ 面白いね君たち」

さっきまでスカート裾を掴まんでいた女の子が僕と優子さんを見て豪快に笑っていた。

「もう、ヒドイよ〜」

「ゴメンゴメン。あんまりにも反応が面白くてつい遊んじやった。あ、そういうば自己紹介がまだだったネ。ボクは工藤愛子だよ。よろしくネ」

「僕はFクラスの吉井明久。それでこっちは同じクラスの木下優子さん」

「ふうん、君が例の観察処分者なんだ。へえ」

珍しい者を見るような目で僕を観察する工藤さん。じつと見つめられるとなんだか恥ずかしい。

「アタシ達姫路さんに用があつて来たの。ここにいるかしら？」

そんな視線を遮るように、優子さんが僕たちの間に立つて用件を告げる。

「姫ちゃん？ うん。いるよ。ちよつと待つてて」

言うや否や工藤さんはくるりと回つて元来た道を引き返して行つた。

僕達は入り口の前から動かずじつとしてしていると、それから1、2分で、たつたつたと小走りのような軽い音が連続して耳に届き僕達の前で静止した。

「すみません。お、お待たせしました……」

肩で息をしながら遠慮しがちにそう言ったのは3日ぶりに見た姫路さんの姿だ。

腰までありそうな長髪と僕の肩程度の身長なのに自己主張の激しい大きな胸がアンバランスのようで実はすごいバランスがとれている。

まるでどこかお姫様のような可憐な容姿は百人に聞けば全員が綺麗と迷いなく頷くほど可愛い。

ただ傍に来ただけなのに、僕は思わず見惚れてしまいそうになった。

「う、ううん！ 全然待つてないから！ 大丈夫だよ！」

上ずつた声から僕の口から出る。思つていた以上に緊張してしまつたらしい。いか

ん、身体がガチガチになって動けないぞ。どうしよう！

「こんにちは、姫路さん」

「え。……あなたは、木下さん？ どうしてここに？」

「それはそこで固まつてるバカに聞いて。ほら、吉井君さつさと説明するつ」

「え」

いきなり首根つこを掴まれて前に立たされた。つい安心してしまつて話を聞いてなかつた。えつと、とにかく事情を説明すればいいのかな。

僕は言われた通りに昨日の事情から今日ここまでの経緯を掻い摘んで姫路さんに話す。

「——と言う事で優子さんと予定が被つちやつたんだ。ごめんね姫路さん」

「いい、いえー！ とんでもないです！ 寧ろ私も方こそごめんなさい。無理に吉井君をつき合わせてしまつて」

申し訳なさそうにしゆんとする姫路さん。

だけどそれは違う。姫路さんに悪いところなんてどこにもない。原因は僕の要領の悪さなのだから姫路さんが罪悪感を感じる必要なんてないのだ。

「そんなことないよ！ そ、それよりご飯にしよう。僕もうお腹ぺこぺこだよ」

「あ、そうですね。じゃあ屋上に行きましようか。木下さんもそれでいいですか？」

「アタシは構わないわよ」

「よし、それじゃあ行こっか」

僕が先頭に立ち姫路さんと優子さんを先導するように教室を出る。

Aクラスの室内から見えた空模様はとても晴れ晴れとしていたから、きつと屋上は日の光で暖かくなっている事だろう。

僕は弾む気持ち胸中に抱きながら、なるべくそのことを悟られないよう余計なものには目を向けず真つ直ぐに屋上を目指した。

☆

重たい鉄扉を押し開けると、眩い太陽の日差しが扉の隙間から差込み思わず目が眩んだ。

この学校には旧校舎と新校舎という二つの校舎が隣接してのだが、僕達がやってきたのは新校舎の方の屋上だ。

こっちの方が新しいだけあって屋上も綺麗で清潔感がありご飯を食べるのには適している。運がよく周囲には人影がなく僕達の貸切のようだ。

雲一つないどこまでも続いているかのように感じられる広い青空と頬を優しく撫で

る春の涼風に髪を揺さぶられる。太陽の光が眩い熱を発していてまるで全身を洗われているようでとても気持ちが良い。

「風が気持ちいなあ」

「わあ、いいお天気ですね」

右斜め後ろの位置で姫路さんが額に手を当てながら嬉しそうに太陽に顔を向けて笑顔を浮かべていた。

その隣では、優子さんも頬を少し緩ませている。

「本当、晴れてよかったわね。これならちよつとしたピクニック気分が味わえるんじゃない?」

「いいですね。なんだか楽しそうです。私シート敷きますね。ちよつと待ってください」

そう言って姫路さんは懐から青いビニールシートを取り出してコンクリートの床に敷いていく。確かにこれならちよつとしたピクニックだ。

僕は恐縮する気持ちで靴を脱いで上がりシートの上で腰を下ろした。その左隣に優子さん。真正面に姫路さんが座った。

「それじゃあはい。吉井君、これ」

優子さんが僕に向かって手を伸ばす。その先には教室でも見た巾着袋が握られてい

た。おそらくお弁当だろう。

「ありがとう優子さん。いただくね」

「ええ。少なくとも昨日より腕は上達してるはずだから、食べて驚けば良いわ」

自信満々に胸を張る優子さん。

手にお弁当を乗せてみるとずつしりと重い。平均的なサイズのお弁当箱だが中身は結構は充実しているらしい。これは食べ応えがありそうだ。

と、そんな僕と優子さんのやりとりを正面から見ていた姫路さんが少しだけ驚いたように目を見開かせた。

「え、どうして木下さんが吉井君にお弁当を渡すんですか？」

「えっと、そ、それは……」

「しばらくアタシが彼の食事の面倒をみるようになったからよ」

僕が言い淀んでいると優子さんはあっさりとその口にした。えーっ!? そんな簡単に暴露しちやつていいの! これってもつと溜めるべきところだと思っただけど!

「ど、どうしてですかっ!?!」

予想通り姫路さんは慌てた形相で疑問を投げかける。

それに対し、優子さんは至極当たり前の事項を語るように単々と告げた。

「どうしてって言われても、成り行きよ」

「……………」

「あ、でも勘違いしないでね。別にこの先ずつとつてわけじゃないから。あくまで試召戦争に関する問題が全部終わるまでの期限付きだから」

「そう、なんですか。試召戦争というと吉井君達のクラスは昨日Dクラスに勝ったんですよね」

「そうだね。姫路さんも知ってたんだ」

「はい、二年生の間では結構有名ですよ。遅れましたけどおめでとうございます」

「いやあ、ははは。ありがとう。でもまだDクラスは通過点だから喜ぶには早いかな」

「そうなんですか？　じゃあやっぱり吉井君たちはAクラスに挑もうとしているんですか？」

「まあ、そうなるかな……………」

Aクラスの生徒である姫路さんにAクラスに攻め込むなんて話をするのはなんだか気が引ける。

あまりこの話を続けるとせっかくなかき気持ちの良い空気が悪くなりそうだったので、僕は早々に話題を切り替えることにした。

「ところで昨日霧島さんに聞いた話だと姫路さんがお弁当を作ってくるってことだったんだけど」

「は、はいっ。……でも吉井君にはすでにご飯があるみたいですし、私のは食べなくても結構ですよ。元々私が無理を言ってしまったのが原因ですし……」

若干沈んだ面持ちで膝の上のお弁当箱に手をやる姫路さん。こんな顔をされては満腹状態で且つ腹痛の状態異常を負っていても食べないわけにはいかないだろう。

「大丈夫だよ。思春期男子の胃袋を甘く見ちゃいけないよ姫路さん。空腹状態の時ならお弁当の二つや三つ余裕で平らげられるから！ だから姫路さんのお弁当も食べさせたくないかな？」

「吉井君がそういうなら。でも無理はしないでくださいね」

おずおずとお弁当箱を差し出す姫路さん。こっちは女の子らしく小振りの角がまん丸とした小さな弁当箱だ。

うん。この量なら余裕でいける。ていうか超幸せ！ 二人の女の子からご飯を作ってもらえるなんて、これまで生きてきた16年で最高の日だ！

さっそく両方のお弁当箱を開けて食事にありつけようとした所で、突然姫路さんが慌てたように立ち上がった。

「あー、そういえば飲み物がないですよ。私買ってきますね」

「え、じゃあ僕が行くよ。二人にはお弁当をもらったんだし、飲み物ぐらいは僕が出して
も」

「吉井君はお金ないじゃない」

「そうだった。くそう！ 貧乏が恨めしい！」

「気にしないでください。吉井君達は先に食べてもらって大丈夫ですから。すぐに戻ってきますね」

「でも……」

「はあ、……仕方ないわね」

「そう言つて優子さんがすうつと立ち上がる。」

「優子さん？」

「木下さん？」

「アタシも行くわ姫路さん。三人分の飲み物を手で運ぶのは大変でしょう」

「そ、そんな、私なら大丈夫ですから。二人はご飯を先に」

「はいはい時間がもつたないから拘泥してる暇はないわよ。そういうわけだから吉井君は先に食べてて」

「うーん、せっかくのお弁当を一人で食べてもなあ……」

「じゃあアタシ達が戻ってくるまでにアタシと姫路さんの作ったお弁当を食べて感想を考えておくこと。いい加減なこと言ったらその口をタコ糸で縫いつけてやるから真剣に考えてなさい」

「なにぃーっ!? そんな!」

「それじゃあね。姫路さん行きましょ」

「は、はい」

優子さんに引つ張られるように姫路さんは昇降口へ向かっていく。

その途中、ふいに立ち止まり僕の方へ振り返って、

「あの、吉井君」

「な、なにかな姫路さん?」

「……感想、期待していますね」

これは、どうやら真面目に答えなければいけないようだ。

☆

それから一分後

「さあて、最初はどっちから食べようかなー」

「よお、やっと見つけたぜ明久……」

「っ! キサマ雄二! どうしてここに!?!」

「一応、ワシらもいるのじゃがな」

「……………(こくん)」

「秀吉!! ムツツリーニまで! 何でみんなして屋上に来るのさ」

「テメエにやられたままってのは俺の性に合わねえんだよ。さつきはよくもやってくれたな。ここであの時の借りを倍返しに——って何だそりや、弁当か」

「へ? ああうん。優子さんと姫路さんのお弁当だよ」

「ほお、何やら姉上が朝から忙しそうに台所で走り回っていると思っておったが、こういうことだったのじゃな」

「…………? 秀吉はお弁当じゃないの」

「姉上がワシに弁当なぞ作るはずがなからう。もしあつても中身がバランス栄養食とか、そんな手抜き全快の弁当じゃ」

「な、なんか大変そうだね…………」

「……………美味しそう」

「そうだな。どれ(ひょいっばく)」

「ああーっ!! 姫路さんのお弁当が! まだ僕も食べてないのに!」

「何言つてんだ。まだ卵焼きを一切れ摘まんだだけガハアツツ!!」

「ゆ、雄二っ!! どうしたの!」

「……………っ(びくびく)」

「ムツツリーニ！ 何ゆえ全身を痙攣させておるのじゃ！ しっかりするのじゃ！」
この5分後、新校舎の屋上には四つの物言わぬ死体が出来上がったとき……。

問19 ランチタイム／優子side

吉井君を屋上に残したアタシと姫路さんは購買部の自販機の前に立っていた。

「吉井君は——無難にお茶でいいか。アタシは紅茶で……姫路さんは何にする?」

「わ、私は自分で払いますから、どうぞ先に買ってください」

ふるふる顔を振って一歩後ろに下がる姫路さん。そんな事気にしないでいいのに。

「これぐらいの出費なんともないから遠慮しないでいいわよ。どうせ吉井君にツケるし予定だし」

「つ、ツケるんですか……」

「お弁当作ってやったんだから、飲み物ぐらい買ってもらわないと割に合わないでしょ。」

「……まあいつ請求できるのがわからないところが難点だけど。で、何がいい?」

「あはは。じゃあミルクティーをお願いします」

「はい、ミルクティーね」

自販機に小銭を投入し緑茶、紅茶、ミルクティーの順にボタンを押していく。

ガコン、ガコン、と出てきたそれを取り出し口に手を入れて取り出した後、ミルクティーを姫路さんに差し出した。

「どうぞ」

「ありがとうございます木下さん。そっちのお茶も持ちましょうか？」

「そう？　じゃあお願い」

「はい」

吉井君の分の緑茶を渡すと、姫路さんは開いている手でそれを受け取った。

……本当、いい子よね姫路さんつて。いつも笑顔で礼儀正しい。そして誰に対しても分け隔てなく接せられる包容力を持っている。

Aクラスで吉井君が謝った時も怒る素振り一つ見せず、すべて自分のミスだと論じた。今も吉井君やアタシに気を配って自ら率先して動いている。

少し気が弱くて引つ込み思案なところもあるけど、それが逆に彼女のお淑やかさを印象づける長所なのでしょうね。

それに顔も可愛いしアタシが男だったら一発で惚れて——つてそれじゃまんま秀吉じゃない。

何考えてるんだろうまったく。

「どうかしたんですか？　ひよつとして私の顔に何かついてます？」

「ううん、なんでもないの。それじゃあ戻りましょうか」

変な想像を振り払って歩き出そうとする。

「あの、ちよつと待つてください」

背中から姫路さんの引き止めるような声を受け、アタシは前に進みかけた足を止めて振り返った。

「? どうしたの? まだ何か用事あった?」

「い、いえ、そういうわけじゃないんですけど……。あれからまだほとんど時間が経っていないですし、あんまり早すぎると吉井君が感想を考える時間がないんじゃないかなと思つて」

視線を左右にやりながら消極的な調子で言う姫路さん。

確かに屋上からここまで降りて飲み物を買うまで五分も立っていない。

「そうね……」

思案しながら屋上がある遥か上の空を見上げる。

吉井君も今頃はきつと必死に頭を捻つて感想を考えている事だろう。そう思うとすぐに戻るのには姫路さんの言う通り面白くない。

「二方的に行つた手前すぐに戻つて煽るのもなんだか悪いし。じゃあ10分だけ時間を潰してそれから戻ることの良い?」

「はい、わざわざごめん下さい。それとありがとうございます」

「ふふつ、変なの。どうして姫路さんがお礼を言うのよ」

「……あ！　そ、それはっ!?　あのですねっ」

「はいはい、取り合えず座りましょ。丁度そこにおあつらえむきに開いてる席があるし」
購買部を出たすぐ近くに設置されているベンチを見つけ指差した。

買った飲み物を脇に置いてアタシと姫路さんはそのベンチに座る。

ここはあまり人気のない場所スポットだったのか、アタシと姫路さんのほかに人の影は見当たらない。

丁度いい。これなら人目を気にする必要がなくなる。

「木下さん。お聞きしたいことがあるんですけど、いいでしょうか?」

少しの沈黙の後、隣に座る姫路さんが意を決したように口を開いた。

「やっぱり。……なんとなくこうくるかなとは思ってた。」

「やっぱり吉井君のこと、気になる?」

「ど、どうして分かるんですか!?　私まだ何も言っていないのに!」

心の内が見透かされたように姫路さんは顔を真っ赤にして狼狽する。

どうしてもなにも、アタシと姫路さんの間で共通している項目といえればそれ以外に思
い当たらない。

「気にしないで。ただの勘だから。それで、聞きたいことって何?　アタシが知ってる

限りであれば何でも話すわ」

「はい……。そのですね」

もじもじと身体をくねらせて口ごもる姫路さん。

自分から質問内容を問うておいて、実のところアタシは姫路さんが何を知りたいのか大体予想できていた。

おそらく次に発せられる台詞は、『吉井君の好きな人』か『アタシが吉井君のことをどう思っているのか』の二択。

姫路さんが吉井君に好意を持っているのは、新校舎の廊下で吉井君から話を聞いた時点である程度確信できていた。

小学校から同じだったからといってほとんど話したこともない、それも異性相手にいきなりお弁当を作ってくるなんて理由はそれ以外考えられない。

そんな想いの最中、意中の相手の傍に自分とまったく同じ行動をとっていた人間が現れた。つまりアタシ。

初めてそのことを知った時の姫路さんは、表面上には出なくても内心はきつと気が気でなかっただろうと思う。

——そして、それはアタシも同じだった。

だから、アタシには姫路さんの気持ち的理解できるし、質問に対する返答もいくつかわりか用意していた。

少しだけ体に緊張が走りながらも、アタシは姫路さんが口を開くのをじつと待つ。恥ずかしそうに俯いて逡巡していた姫路さんは、思い切ったように深い息を吐いた後、顔を上げて言った。

「——吉井君は、男の子が好きなんですか?」

聞き間違いかと思った。

「……………えっ? ……ごめんなさいよく聞き取れなかったわ。申し訳ないけどもう一度言ってくれるかな?」

「吉井君は坂本君が好きなんですか!」

個人名まで指定してきた!

あまりに予想の斜め上すぎた内容にさつきまで体中にピリピリと感じていた神妙な空気が一瞬で吹き飛んだ。

坂本って坂本なんとかって女の子の名前じゃないわよね。普通に君づけしているし。ていうかこの質問つい最近もしなかったっけ!

「いや、いやいやちよつと待つて姫路さん。いろいろおかしいわよ。どうしてそこで吉井君が男性好きな話になるの! そこは普通女性じゃない!」

「だって……。私も吉井君は女の子が好きなんだって信じたんですけど。ここのとこ私の周辺で何故か吉井君は坂本君と恋人同士なんじゃないかって噂が流れていて」

「うわあ……」

流れてるんだ噂……。あの二人にとっては災難以外の何者でもないわね。

これから先、吉井君と坂本君が揃ってAクラスに行けば色眼鏡で見られること間違いなしだろう。

呆れと落胆と同情に肩を落とすアタシに対し、姫路さんの顔は真剣そのものだった。それが返って余計にやる気が下がる。

大体その噂は発信源は多分……。

「YESっ！ 吉井君は坂本君とすでに男と男のラブロマンスに突入しているんですっ！ これぞ真理！」

元凶登場

「だ、誰ですか!?!」

「おっと失礼、私玉野美紀と申します。吉井君——もといアキちゃんとは坂本君の恋を応援する会の0番会員and会長です」

ワープしてきたとしか思えないほど唐突に現れたおさげ少女玉野さん。

案の定姫路さんは目を白黒させて狼狽している。きつと目の前に鏡があつたらアタシも同じ表情になつてゐるだろう。

「会員？ そんな部活動があるんですか？」

「姫路さん、突っ込むべき点はそこじゃないでしょ」

「はあい。我らが会の活動はアキちゃんと坂本君の恋愛模様を観察、研究し神聖なる神祕の追求を目指すことを目的とした会なのですっ！」

「そんな設定初めて聞いたわ……。玉野さん、貴方最初に比べてキャラ変わってない？」

「そんなことはありません！ ちなみに優子ちゃんは1番会員、副会長ですヨ？」

「そんな会に入った覚えなんてないわよ！ アタシを巻き込まないで！」

「何を今更、すでに私達は同志じゃない。あ、勿論私のことは美紀でいいんだよ？」

「聞いてないわよそんなこと！」

「そもそも優子ちゃんって何!? ちょっと話した程度で馴れ馴れしいわね！」

「えっと……。木下さんと玉野さんは知り合いなんですか？」

「姫路さんが目をオロオロさせながら戸惑いがちに聞いてきた。う……正直答えづらい。
い。」

「知り合いつてほどでもないんだけど……。ちょっといろいろね」

「同好の士です」

「違うから！ 姫路さんに変なこと吹聴しないで！」

「ええー！ だって一昨日の放課後校舎裏で『男と男の付き合い方について』あれほど綿密且つ濃密に」

「濃密? 綿密?」

「美紀、その話はやめて。あれは不幸な事故だったのよ」

別にそういう趣味に興味がないと言えば嘘になる。だけど彼女とアタシのそれは根本的に違うのよ。そう、次元とか。

「そもそも吉井君と坂本君はそんな関係じゃないって昨日説明したじゃない」

そう。前日の試召戦争が終結した後、アタシは吉井君と会う前に美紀とFクラスで顔を合わせ『吉井君と坂本君の只ならぬ関係』について近くで観察したがあの二人の仲はあくまで友達の範疇でありそれ以上でも以下でもないと報告した。

あの時は『そうなんだ……』と沈んだ面持ちで納得したと思ってたのに、今の様子からするとどうやら全然信じてなかったらしい。寧ろ一周回って吹っ切れた?

「ちつつち、違うの優子ちゃん」

人差し指を左右に揺らしながら美紀は口元を綻ばせる。

「は? 何がよ」

「優子ちゃんのごとは信用してるの。確かに優子ちゃんの言う通りアキちゃんはまだフリーなのかもしれない。でもいいの。——だって、恋人じゃないならこれから恋人同士になればいいんだから!」

駄目だこの子。早く何とかしないと……。

「木下さん、突然頭を押さえてどうしたんですか!? ひよっとして頭痛ですか!」

「うん、そうね。いろいろな意味で頭痛が止まらないわ」

「大変です! じゃ、じゃあ早く保健室に!」

「大丈夫よ。これは多分そういう類のものじゃないから」

そして一々真面目な姫路さんにも調子が狂う。ここは一旦話を戻そう。

「とにかく、吉井君は男しか恋愛対象としか見れないとか坂本君に淫らな感情を抱いてるなんてことは絶対ないから。そこは安心して」

「今は、ね」

「美紀は黙ってて! これ以上話がややこしくしないで」

「そ、そうですか。よかったです……」

心底から安心したように姫路さんは胸を撫で下ろしていた。

その様はまるで昨日吉井君がノンケだと分かりホッとしたアタシを見てるようで、ちよっと複雑だった。

それから美紀は『あ! そろそろアキちゃん用の衣装を作らなきゃ!』と言うやそそくさと去っていったので、アタシ達もその場を後にした。

話していたのは丁度10分程度だったので時間的にはピッタリだった。なんか無駄に疲れた気はするけど。

屋上へ戻るため新校舎から階段を上がる。

その途中、歩きながら姫路さんが前を向いたまま横目で問いかけてきた。

「木下さんは、吉井君のことが好きなんですか？」

「えっ!？」

完全に不意打ちだった。

姫路さんの唐突な一言に、さつきまでの弛緩した空気の所為ですっかり忘れていた緊張感が一気に蘇る。

それが全身を駆け巡り、アタシの体中に鳥肌が立った。

「なにな何を言い出すのよいきなり——っ! だ、誰が誰を!」

「木下さんが吉井君を、ですけど。違うんですか? 私てつきりそうだと思って……。」

「ごめんなさい。早とちりでしたか?」

「あ、いや……。」

途端に気まずくなり姫路さんから目を逸らす。なんとかかうまい台詞回しを言おうにも頭の中が混乱して考えが全然まとまらず、何が何やらわけが分からなくなつて眩暈がした。

な、なんなのよこれ……。なんでアタシこんなに困惑してるのよ……!」

「ひ、姫路さんこそどうなの?! 吉井君のこと、どう思ってるのよ!」

「私ですか!? 私は……その」

階段の中央でオロオロしながら赤面している女子二人。

「……………ですよ」

その中で、小さな声でポツリと姫路さんが何かを呟いた。

「え」

「好きです、吉井君のこと……」

顔どころか首まで真っ赤にして、姫路さんは俯きながらそうはつきりと言った。

「——っ！」

アタシは思わず息を飲んだ。

自分が告白されたわけでもないのに胸の鼓動が激しくなる。頭にどんどん血が上り視界が歪曲したように歪む。

自分の気持ちをしっかりと自覚して、口にできる姫路さんに尊敬と、畏怖と、少しばかりの嫉妬心を覚えた。

「そう……。姫路さんはそうなのね」

「はい。——今までの私はずっと臆病でした。吉井君の事を遠くから見てるばかりでもAクラスになってからいろいろあって、もうそれはやめようって決めたんです。今度は私から歩み寄って行きたいって、そう思えたんです」

「……………」

「と言つても、根はやっぱり怖がりみたいで。結局これもまだ出せていないんですけど」
スカートから白い封筒を取り出して姫路さんは苦笑する。

今の言動からして、間違いなく吉井君宛てのラブレターなのだろう。

それでも、姫路さんの想いは痛いほど伝わってきた。それと同時に罪悪感がふつつつと身体の内側から湧き出る。

姫路さんは心から吉井君に好意を寄せていた。

じゃあ——アタシは？

アタシは、一体吉井君をどう思ってたのかな。

最初は振り分け試験で助けてくれた恩人。それから新学期に入つて、アタシなんかの為に学年中を巻き込んで試召戦争を始めた変な奴。

そして、今は——。

「姫路さん。アタシは」

「木下さんが、もし吉井君の事を好きだとしても私は負けません。それだけ、言いたかつたんです」

咄嗟に何か言おうとしたアタシの言葉を上から遮られた。

「姫路さん……………」

「時間取らせちゃつてすみません。そろそろ行きましょう」

止まっていた時間が再び動き出したように姫路さんは一人先に階段を上がりだす。

アタシは、すぐに後を追うことが出来なかった。

足は鉛のように重く、心は分厚いコンクリートの壁に閉じ込められているように息苦しい。

「アタシも、姫路さんみたいに素直になれたらいいのに……」

姫路さんの心根を知ってしまったことに後悔も羨慕せんぼもない。

ただ自分の言葉を最後まで言うことができなかつた残痕だけが胸に残った。

☆

時間は少し戻る。

「……じゃあ、このじゃんけんに勝った二人が優子さんの方。負けた二人が姫路さんのお弁当を食べきるってことでいいね」

「異論はねえ」

「右に同じじゃ」

「……………絶対に負けない」

「よし。それじゃあいくよ。せえのっ」

「じやあんけんつー!」↑明久&秀吉

「ぼん!」↑雄二&ムツツリーニ

チヨキ(明久)

パー(秀吉)

パー(雄二)

チヨキ(ムツツリーニ)

「やったあああつ!!」

「くっそおつ!」

「な、何故じやあ……っ」

「……………勝った! まだ、生きていられる!」

「約束通り雄二と秀吉が姫路さんのを食べること! あ、感想も添えてね」

「くっ、いいだろう。こうなりや自棄だ。やってやらあ!」

「これも運命、受け入れるしかないのう」

パクッ

バタリッ

「(ぎ)はあつ!?!」

「い、一撃!? やっぱり姫路さんのお弁当は凄まじい破壊力だ」
「……………恐ろしい」

「雄二! 起きて雄二! 最後の眠りに入る前に感想を!」

「う……………つ。き、綺麗なバラには棘がある……………(バタツ)」

「……………これは、棘というより毒じやのう(グツタリ)」

「……………逝ったか。さらば友よ」

「ありがとう雄二、秀吉。君達の勇士忘れないからね!」

「あれ? 人が増えてます?」

「一体何やってるのよアンタ達……………」

☆

同時刻、Cクラス

「——ということが、前の休み時間にあつたのよ」

「……………ちつ、坂本の奴。よくもやってくれたな」

「それで? 貴方はどうするの、根本クン」

「決まってる。このまま済ます気はないさ。目には目を。やられたらやりかえす。小学

校で習っただろう?」

「そう、頑張つてね。期待してるわ」

「ああ、見ててくれ友香。Fクラスのバカ共が後悔と懺悔に泣き叫ぶ姿を君の前で見せてあげるよ。それじゃあ」

「ええ」

「ふふふ。さあ、これからどう切り返すのか楽しみね。坂本君♪」

問20 根本恭二の策略

それは、本当にただの偶然だった。

「あれ？ 姫路さん……？」

前回の試召戦争で失った点数の回復をする為の補充試験が一通り終わり、僕は重たい荷物から解放されたような気分です。帰り支度を済ませ教室を出た。

その時、たまたま視界の隅に見覚えのある顔の女の子の姿が映った。

ここで会ったのも何かの縁。せっかくだし校門まで一緒に帰ろうと思えば僕は手を振る。

「おーい、姫路さん……っ!？」

そこで気づく。

姫路さんは一人ではない。よく見れば、彼女の隣には見覚えのない男子と一緒に歩いていた。

しかも二人は肩と肩が触れ合いそうなほど寄り添っている。

「な………に………っ!？」

ど、どういふことだ。

あの男は誰だ!? 姫路さんとういう関係!?

「いやいや待て。冷静になるんだ。授業はもう終わったんだからただクラスメイトと一緒に帰る途中なだけじゃないか……。そうだよ。なに動揺してるんだ僕は……」

異常に乾く喉に唾を飲み込んで潤す。衝撃の自体に思わず気が動転してしまった。

まったく僕としたことが、冷静沈着をモットーとしていたというのに何をやっているんだが。

「……………」

……。でも、もし仮に、仮にだ。

あの顔も名前も経歴も分からない男子生徒とAクラスの優等生の姫路さんが恋人同士だとしたら……。

もしもの想像を脳内で再生すると、徐々に胸の内に燃え滾るような熱いものが込み上げてきた。

人、それを嫉妬と言う。

「本当にそうなら、殺るしかない……!」

強く拳を握り締めながら歯噛みする。

異端審問会の名に掛けて、これは絶対に見過ごせない状況だ。

追いかけて。一先ず二人の関係性から慎重に調べる必要がある。裁くかどうかそ

の後だ。

そんなプランを考えていると、件の姫路さん達は何故か踊り場から階段を上り始めた。

「……………？ 帰るんじゃないのかな？」

普通下校するなら下に降りて玄関で靴を履き替えないといけないのに。ひよつとして何か違う用事だったのだろうか。

……………いや、深く考えても仕方ない。今はとにかく追いかけよう。

姫路さんから見えないよう距離を開けてから僕も踊り場へ向かおうとした時、いきなり後ろから何かに肩を掴まれた。

「何してるのよアキ？」

「うひゃあつ!! み、美波！」

驚いて振り返ると、そこには馬の尻尾のようなポニーテールを揺らし鞆を持って今にも帰ろうとしている美波がいた。ど、どうしてこんな時にっ！

「どうしたの!!? 僕に何か用事!？」

「何大きな声だしてんのよ。それにそれはこっちの台詞。アキこそ先に帰ったと思ったのに何でここで仁王立ちしてたの？」

「……………それは」

ええい！ 今は美波に構っている場合じゃないのに！

とにかくなんとか言い訳して美波を撒かないと。

「と、トイレだよトイレ！ いやーなんかHR後すぐだった所為か男子トイレが混んでるみたいでさー！」

「トイレはここじゃないけど……。一体どこで待つてるのよあんたは……」

呆れられた。しまった。これじゃただの阿呆だ。

「……ひよつとして、また何か悪いこと企んでるんじゃないでしょうね？」

「ひいっ！」

指をパキポキ鳴らしながらゆっくりと前進してくる美波。その背後に殺気が見える。

くっ、こんなところで死ぬなんてゴメンだ！ 大体まだ僕は何もしていないのに！

恐怖から一步、二歩と距離感を保って後ずさる。

……こうなったら、逃げるしかない。

後退が4歩目になったところで、僕は美波から背を向けて一目散に走り去った。

「さ、さよなら——っ！」

「あっ!? 逃げた！ 待ちなさいよアキ——っ！」

「待てと言われて素直に待つバカはいないよ！」

鬼の形相で追いかけてくる美波。しかし相手は女子。足の速さならまだ僕に分があ

る！

☆

「——で、どうして逃げたわけ？」

「く、苦しい……っ」

1分後、僕はあつさり捕まっていた。バカな、女子に足で負けるなんて……。

僕は屋上へ続く鉄扉の前で美波に首元を締め上げられていた。しかも片手。なんてバカ力だ。本当に女子か？ 胸もないし性格は男勝りだし見た目が女の子っぽいだけで本当は男子なんじゃないのだろうか。

なんて考えているとさらに首が締め上げられた。

「ギブ——っ！ ギブ……っ」

「今アキからすごく不快な気配を感じたわ」

なんて地獄耳。いや察知力。ニュータイプか。

まったく、美波には捕まるし結局あれから姫路さんの姿も見失うしで踏んだり蹴ったりである。

「それで、なんでウチから逃げたのよ」

「み、美波が追いかけてくるからだよ……」

「その前にアキが逃げたからでしょうが。何、ウチに言えない理由でもあるわけ？」

「そういうわけじゃあ……」

言葉に詰まった。その時、

『どうして、こんなことをするんですかっ!?』

「——っ！」

鉄扉の向こう側から、怒りの込もった叫び声が聞えてきた。

「な、何今の……?」

「この声……姫路さんだ」

「姫路さん? 誰それ?」

「ちよつとごめんっ」

首元を掴んでいる美波の手を振り払うと僕は重たい鉄扉をゆっくり開き、1センチほどの隙間から屋上を覗き込んだ。

そこには、ついさつき見た姫路さんと、例の男子生徒が何か話している様子が見えた。

「ちよつと、なんなのよもう」

「しっ! 声が聞える。——何やってるんだらう。なんだか穏やかじゃない雰囲気だ」

男子の方は何やらニヤニヤと気味悪い笑みを浮かべ、その対面では姫路さんが怒って

いるような剣幕で睨みつけている。

なんだろう。僕が思っていたような感じとは違う。想像よりも重たい空気が二人の間に立ち込めていた。

「アキ、ウチにも見せてよ。何がどうなってるの？」

「どうって言われても……。なんだか喧嘩してるみたいにピリピリした感じがある」

「どれどれ——ってちよつとアキ！ あれって——」

僕の下から同じように屋上を覗き込んだ美波が小声で驚いていた。

「うん？ ああ、姫路さんっていうのはあの女の子の方で」

「そっちじゃないわよ！ 男子の方、あれBクラス代表の根本よ！」

「なんだって!？」

思わず目を見開いてもう一度改めて男子の方を見る。

あれがBクラス代表!? つまり次の試召戦争で僕達が倒すべき相手。でもその根本君がどうして姫路さんと一緒にいるんだ？

状況がまったく分からない。だけど見た感じとてもじゃないが良い話をしているわけじゃないらしい。

僕はそこでCクラスとの交渉の時に話していた根本君に関する情報を思い出した。

「まさか、姫路さん根本君に何かひどいこと言われたのかな」

「取り合えず、話を聞いてみましょう。まだウチ達には気づいていないみたいだしチャンスよ」

「……そうだね」

正直すぐには二人の間に突っ込んで行きたい思いだが、今の美波の言う通りにした方がいいだろう。

無闇に割って入っても場の空気を乱すだけだ。根本君を糾弾するのは情報を集め終わった後でも遅くない。

生唾を飲みながらジツと僕は二人の姿を凝視する。

耳を澄ますと、小さいが会話の内容を聞き取る事ができた。

『別に無理な注文をしてるわけじゃないんだがな。俺はあくまで「お願い」してるんだぜ？』

『なら、先に手紙を返してください。お話はその後で伺いますから』

『そうしたいのは山々だが、これは交渉材料だ。今手放すわけにはいかないな。勿論、姫路さんが一言了承さえしてくればすぐにでも返すが』

『それは……。でも、そんなの不可能です。私一人の一存でクラスは動かさません』

『そんなことないさ。今のFクラスの暴れっぷりに迷惑してるAクラスの生徒もいるだろう。それを沈静化させると言えば乗ってくれるさ。別に俺達Bクラスが直接やって

も良いんだが、試召戦争は疲れるからな。やらないで済むならそれに越したことはない』

『……でも、Fクラスと戦うなんて……、私にはできません』

何？ Fクラスと戦う？ どういうことだ？

「——まさか、根本の奴、姫路さんを脅してAクラスをFクラスにぶつけるつもりなんじゃ」

「っ!? Aクラスが僕らと戦う!? どういうことなの美波!」

「話の感じからそうとしか思えないわ。もしかするとウチ達がBクラスに挑むって情報
が相手側に漏れたんじゃないかしら」

Aクラスを倒すのは最終目標だが、今はまだ準備段階だ。

ここで向こうから挑まれたら、僕らは成すすべもなく一方的に負けてしまう。

『なんでだ？ 別にFクラスなんかには遠慮なんていらないだろうに。あそこは最底辺の
クスが集まるゴミの掃き溜めだぜ？ 寧ろ無慈悲に一掃してやるのが優しさじゃない
のか?』

『そんなこと、ないです。Fクラスにだって素敵な人はいます』

『俺はとでもそうは思えないな。Fクラスのやつら、こともあろうに俺の恋人に彼氏を
裏切れと脅迫に来たんだぞ？ そんな非道なことをする連中にくれてやる慈悲なんて

ないじゃないか』

『それは、Fクラスのみんながそう思ってるわけじゃないと思います』

『ほお、……ひよつとしてこの手紙の相手はFクラスの誰かさんなのかな?』

『っ?!』

『そうかそうか! いやあ察しが悪くて申し訳ない。まさか学年次席の姫路さんがFクラスの生徒に片思いとは。想像もしていなかったよ』

根本君が懐から取り出した小さな封筒のようなものを見た瞬間、姫路さんの顔色が真っ白になった。

あれは……見たことある。三日前に玄関で姫路さんと会った時に持っていたラブレターだ。相手は確か……雄二。

つまり、なんらかの手段によつて根本君は姫路さんのラブレターを奪い。それを餌にAクラスに宣戦布告するよう脅しているという事か。僕らを貶める為に。

……なるほどなるほどそういうことか。やってくれるじゃないか根本君。

この野郎——、ぶっ殺す。

「ちよつと——」

「何してんのよ——っ!!」

何やってるんだ。と飛び出そうとしたら、その前に美波が顔を真っ赤にして叫んでい

た。え、ええーっ!

思わず出るタイミングをミスってしまい動けなかった僕を置いて、美波は单身根本君と姫路さんの下まで突っ込んでいっていた。

「美波、なんて男らしい……」

さつきは冷静に観察しようとして言っていたのには一番に現場に急行して行くなんて。ていうかどうしよう! 完全に出番持つて行かれちゃったよ! 今出てもなんか格好悪いし、こうなったらこつちも折を見て飛び出すしかない。

『——っ!? お前! 島田! なんでここに!』

『え? えっ?』

『そんなのどうでもいいわ! それより女の子のラブレターを奪って脅迫するなんて、噂に聞いてたけど本当に最低な奴ね!』

射殺するような鋭い目で根本君を睨みつけながら美波は姫路さんを庇うように二人の間に割って入る。

『大人しく手紙を返しなさい。さもないとここで会った事を全部先生に報告するわよ』
『ちっ』

突然の乱入者に度肝を抜かれた根本君はぼつの悪そうな顔をして一歩後退する。

しかし、手元にある姫路さんのラブレターに目を落とした瞬間、焦りの表情は一転し

口元には不気味な笑みが浮かんでいた。

『——いや、丁度良い。姫路さん、ここで宣言してやれ。AクラスはFクラスに宣戦布告すると!』

『そ、そんな……』

『根本! あんたねえ!』

『邪魔するなよ島田。俺は今姫路さんと話してるんだ。……中身、見られたくないんだだろう?』

ひらひらとこれ見よがしに手紙を揺らす根本君。

『私は……』

姫路さんの目じりにはうつすらと涙が浮かんでいた。

「姫路さん……」

拳を硬く握る。

……限界だ。これ以上ここで様子なんてしてられない。

今すぐにも根本君の下まで走ってその顔をぶん殴ってやる。

「ねも——っ!」

『分かったわ』

飛び出そうとした瞬間、またもや美波の声に邪魔された。

『根本、そこまで言うならあんたの思惑通りになってあげる。それでいいんでしょ?』
『……なんだと? 自分から宣戦布告するのか?』

『ええ。確か試召戦争のルールだと勝負を挑まれたクラスは原則拒否できないんだったわよね?』そして一度勝負を受けたら決着がつくまでほかのクラスとの戦いを同時に受ける事はできない』

美波は一瞬、目だけ僕の方を見た気がした。

『ウチ達Fクラスは根本、ここであんたとBクラスに宣戦布告するわ!』

ビシッ!と指を根本君に突きつけて、美波はそう宣言した。

『なっ!! なんだと!』

な、なんだって!? ここで宣戦布告っ!? 先週Dクラスと戦って補充試験を終えたばかりなのに早くない!? どういうつもりなんだ美波は!

驚き声を上げそうになった口を手を塞ぎながら目だけはしっかり美波の勇ましい姿を凝視する。

後ろで目を見開いている姫路さんと、真正面から宣戦布告されて驚く根本君の中心で、美波はさらに追撃を掛けるように告げた。

『これでAクラスはFクラスに宣戦布告することはできない。そうよね?』

『そ、それは——っ』

『開戦は明日の十時。そこであんたのその腐った性根を叩きなおしてやるわ。覚悟してなさい』

バツサリと切り捨てるように吐き捨てる。

かっこいい！ かっこいいよ美波！ なんて勇猛果敢な姿なんだ。立ち振る舞いからすでに男気オラのようなものが見えるよ！ Dクラスの清水さんが何故彼女に心酔するのか少し判った気がする。なんというか、すごく男らしい。

『ちっ、面倒なことを』

『さあ、これで姫路さんに何をしても意味はないわ。諦めて盗った手紙を返しなさい』
『はっ！ そうはいくか。これは大事な交渉カードだ。ここでやすやすと手放せるわけがないだろう——！』

『な!? 待ちなさいよ!』

『待てと言われて待つバカがいるか!』

一方的な言葉を言い捨てて根本君は二人を置いて走り出す。その先は、今僕のいる校舎へ続く扉だ。

根本君は僕がいることにまったく気づかず、全速力でこつちまでやってくる。

そして目の前まで来た途端、バツと僕は根本君の前で立ちふさがった。

「おっと、そうはさせないよ根本君」

「吉井!! お前までいたのか! ちいつ」

「ナイスよアキ! そのまま根本を捕まえて!」

「オツケー」

前方に僕。後方から美波に迫られて根本君に逃げ場はない。

とりあえずこのまま捕まえた後、姫路さんにひどいことをした罰に一発ぐらい殴つても文句はないだろう。

僕は動けない根本君の手を掴もうと手を伸ばす。すると、

「くそっ! そうはいくか——っ」

根本君は持つていた手紙を力任せに投げた。

ただの紙なのですぐに風の力に負けてそんな距離は飛ばなかったが、一瞬だけそつちに目を奪われた瞬間、根本君は僕の隣を一瞬で走り去つて行つた。

逃げられた!? ……いや、今はさきに手紙の確保のほうが大事だ。

ひらひらと中を漂う手紙をなんとかキャッチする。それと同時に怒つた美波が目の前までやってきた。

「アキ、なにやってるのよもう!」

「ぐ、ぐめん美波。ついこつちが気になつちやつて」

掴んだ手紙に視線を落しながら謝る。

美波はそんな僕を見て溜め息を吐きながら言った。

「……まあいいわ。もともとこつちが本命だったんだし。根本には試召戦争できつちりとお灸を据えてやりましょう」

「そうだね。それより美波、さつきはすごかったね。根本君に啖呵を切った時すごかつこよかつたよ！」

「そ、そうかしら……？ つい熱くなっちゃってあんまり意識してなかつただけど」
褒められて恥ずかしいのか頭の後ろを掻きながら赤くなる美波。そんな謙遜しなくともいいのに。

「うん！ すつごく男らしかったよ！——（バキツ）」

「あんたもウチに喧嘩売ってんの？」

おかしい。どうして褒めたのに指の関節を外さなければならないんだ。

「あ、あの。ありがとうございます」

そんなやりとりをしていたら、美波の後ろからひよこひよこやってきた姫路さんが頭を下げてお礼を言った。

「気にしないで。僕の方こそFクラスの問題に巻き込んだんじやってゴメンね。はい、手紙」
持っていた手紙を姫路さんに手渡す。

それを受け取ると、姫路さんは大事そうに両手で包み込むように手紙を握った。

そして、今度は美波の方へ向いて再度お礼の言葉を言う。

「ありがとうございます。えつと……」

「ウチは島田美波。大事なものだったら今度は盗られないようにね。世の中には根本みたいな最低な人間だっているんだから」

「はい。これからは気をつけます」

「……………」

「……………」

見詰め合う二人。なんだ？

「……………不思議。よくわからないけど、ウチ、貴方とはすごく仲良くできそう」

「本当ですか？ ……実は、私もそう思ったんです。なんなんでしょう」

「なんなのかしら……」

よくわからないシンパシーを感じあう二人、できればそれは僕に害のないものであつてほしい。

「えつと……、島田さん？ でいいんですよね？」

「美波でいいわよ。その方が親しみやすいでしょ」

「いいんですか？ それじゃあ私も瑞希でお願ひします」

「瑞希ね。瑞希……うん、覚えた。これからよろしくね瑞希」

「はい。よろしくおねがいます美波ちゃん」

笑顔で友達の挨拶を交わす二人。……むむむ、何がなんだかだが取り合えず仲良くなったみたいだしなによりだ。

できれば僕もその輪に混ぜてもらいたいが、女の子同士の会話ってどうも間に入りにくいんだよね……。

そんな風になり行きを見守っていると、美波は姫路さんが大事そうに持っている手紙に目を向けて質問した。

「それより、そのラブレターって誰に出すものだったの？」

「えっ!? そ、それはそのですねっ! あのお……」

ちらちらと僕を横目で何度か見る姫路さん。うん? なんだろう?

姫路さんと目が合うと、彼女はかあつと頬が赤くなり顔をぶんぶんと振った。

「や、やつぱり秘密です! ここでは言えません!」

「ちえ、残念」

「もお、美波ちゃんは意地悪です……」

「ごめんごめん。あ、そうだ。せっかく仲良くなったんだからこれから親睦も兼ねて遊びに行かない? ウチ『ラ・ペデイス』で新しく出たデザート食べたいのよねえ」

「美波、間食は太るよ?」

「デザートは別腹よ。ていうか女の子に太るとか言うな！」

「あの、……ごめんなさい。私これからお母さんと会う用事があるんです。だから……」

「あ、そうなんだ。じゃあ仕方ないわね」

「本当にごめんなさい。別の日であれば喜んで行きますので、また誘ってください」

「オッケー。楽しみにしてるわね瑞希」

「私も楽しみです。それじゃあ、今日は本当にありがとうございました」

ぺこりと頭を下げて姫路さんは校舎の中へ入っていった。ふう、取り合えず一段落つてところか。

まさかAクラスを刺客に差し向けようとするなんて思わなかった。今回はいろいろなラッキーだったな。

「それにしても、まさか根本君があんな方法を取ってくるなんてね」

「ホント、こうなると試召戦争で何してくるかわからないわね。アキ、明日の試召戦争絶対勝つわよ」

「勿論。——ところで美波一つ聞きたいことがあるんだけどいい？」

「なによ改まって」

うん。これは美波が姫路さんと話している辺りからずつと気になってたんだけど。

「美波って……、実は男子より女子の方が好きなんじゃあ——」

「僕の記憶はそこまでだった。

数時間後鉄人からの鉄拳で目を覚ますと、何故か顔が真っ赤に晴れ上がっていたことだけはここに明記しておこう。

問21 Fクラスの変わらない日常

翌日、僕は昨日起こった根本君の出来事をみんなに説明した。

「ほお、なるほどのう。そんなことがあったのか」

「まあね。ごめんね坂本、勝手に宣戦布告しちゃって」

「いや、それはいい。できればBクラスとの対決は来週に回そうと思っていたんだが予定が少し縮んだだけだ。今後の計画に支障はない」

謝る美波に雄二は柔らかい口調で答えた。

ちなみに雄二には一応代表なので、すでに昨日の時点でメールでことのあらましを報告済みなので本当にさした驚きを浮べていなかった。

「……………開戦予定が十時ということは、後一時間。あまり時間がない」

「そうね。坂本君、Bクラスに勝つための作戦はもう考えてるの?」

「勿論だ。と言つても、今回は至ってシンプルだけどな。ある意味Dクラス戦より単純で分かりやすい」

「?」 Dクラスより? 何で?」

雄二の台詞に首を傾げる僕。

BクラスはDクラスより二つも上のクラスだ。当然その分敵戦力もDクラスとは比べ物のにならないはず。

生半可な作戦では簡単にパワー勝負を押し切られそうなものだが、雄二は何を考えてるんだらう。

僕だけじゃなくこの場にいる全員が同じ事を思っていたのか、一様に皆雄二に視線を固定する。雄二はそれに臆した様子もなく、紙に書かれた文章を読むみたいに単々と作戦概要を話し出した。

「当たり前的事だが、Fクラスの力では絶対にBクラスに勝つことはできない。これは自明の理だ」

「そうじゃのう。では今回もDクラス戦のように搦め手で攻めるのか?」

「いや、真正面から特攻する」

「なんですつて? どういうことよ坂本。Fクラスの点数じゃBクラスの召喚獣を倒すのは難しいのよ」

「確かに明久レベルの点数じゃ難しいだろう。バカだからな。これはどうしようもない」

「確かにアキの点数じゃあ一発で終わりね」

「……………火の粉を払う程度の壁にしかない」

「あの、自然に会話の中に僕への罵倒を絡めるのはやめてくれない？」

こう、グサつとくるから。あと、君らも点数は僕と同レベルだということをしっかりと認識してるのかい？

「だが、バカな明久だけがFクラスじゃない。試召戦争は試験の点数だけがものをいう戦いではないことはDクラス戦で証明されている」

「キイツ！ 雄ニキサマ！ 真面目に作戦を話す振りをして僕に喧嘩を売ってるな！ 全部買ってやるから表に出ろ！」

さつきから人のことをバカバカ言つて。バカつて言う方がバカなんだぞ！

「落ち着きなさいよアキ。話が脱線しちゃうでしょ」

飛び出そうとした僕を羽交い絞めにした美波が諭すように言う。結構な力で抑え込んでいるようで手足を抜こうにもまったく動けない。

ぬう……。雄二の非礼は許しがたいが今は試召戦争の方が優先だ。この怒りはBクラス戦が終わってから存分に発散するとしよう。

僕は恨みを込めた目で雄二を睨みつけながら、続きを促した。

「で？ 雄二は一体どうやってBクラスに勝つつもりなの？」

「木下優子に最前線で暴れてもらう」

「……なんとなくそうなるかと思っただけど、やっぱりね」

「ああ。現状Bクラスとまともに張り合えるのは木下しかいないからな。下手に小細工を弄するより簡単かつ確実だ」

「でも優子さん一人でBクラスの全員を相手にするなんて無理だよ。Dクラスの時もあり危ない橋を渡つたし」

「当たり前だ。いくら高得点を取れてるからと言って一騎当千できるほど甘くない。無論壁役は用意する。連中がほかの召喚獣の攻撃を押さえ込んでいる間に木下が一体一体確実に敵を仕留めてBクラスまで押し切るんだ」

「すると今回ワシらは全力で姉上の援護をすればよいのじゃないか」

「そうだ。主戦力の木下が途中で戦死してしまわないように、護衛役には死ぬ気で木下を守ってもらう。いや、身代わりとなつて死んでもらう。Fクラス唯一の利点を生かした策だ」

「利点って?」

「雑魚は死んでもいくらでも補充かえがきく」

なんてこと。周囲に聞こえてたら暴動が起こりかねない発言だ。

「根本も一番警戒してるのは木下の存在だろうからな。向こうがどんな搦め手で来ようが一直線に攻められたら無視はできないだろう」

「それは分かるけど、そんな直線的な作戦で本当に大丈夫なの? 確実に分かりやすい

分、相手にも読まれてる可能性が高いと思うんだけど」

優子さんが腕を組みながら意見を述べた。雄二はそれに賛成するようにこくり頷く。「だろ。腐つてもBクラス代表。何か手を打ってくるだろう」

「なら——」

「だが、こつちにも考えはある。木下、今は俺の命令通りに動いてくれ。とにかく味方を盾にしながら前へ進んでくれるだけで良い」

「別に坂本君を疑ってるわけじゃないけど、……それで、勝てるのよね？」
「勿論だ」

値踏みする優子さんの視線を雄二は真正面から受け止め、そしてはつきりと断言した。

自信満々に勝てるかと告げた雄二に、しばし逡巡する優子さん。そして最後に溜め息交じりに了承の意を告げた。

「……………、わかったわ。アタシはアタシのできることをする。だからちゃんと指揮してよね」

「おう。まかせろ」

雄二はニコリと笑って力強く頷いた。

……うーん、今回は僕の出番はあんまりない感じだな。とにかく相手の召喚獣の攻撃

から全力で優子さんを守るだけだし。痛いのは嫌なだけど……。

「それじゃあ俺はDクラスに行つてくるから、後は開戦まで各自休んでいてくれ」

「Dクラスに？ 何をしに行くのじゃ？」

「例の室外機の件で話をつけに行く。予定が繰り上がって今日使うことになるからな。その旨と壊す時間を報告しに行くんだ」

「……設備を壊すのは賛同できないんだけど……」

雄二と秀吉の会話を聞いた優子さんはしかめ面で口を尖らせる。

（ワザとではないとはいえ）毎日のように問題を起しては何かしら傷を与えている僕達と違い、優子さんはついこの前まで真面目な生徒だったから故意に学校の物を破壊することに激しい抵抗があるのだろうか。

Dクラスの室外機を破壊すると言ったのは雄二だが、その理由は誰も知らない。わざわざ設備の入れ替えを交換条件にしてまでやるんだから何か重要な意味があるのだろうか、一体何に使うんだろうか。

「気にするな。仮に室外機を壊そうが教師にお咎めを受けるのは俺達じゃなくDクラスだ。そうでなきや教室設備の交換を免除した意味がない」

何食わぬ顔でそう言う雄二は教室の扉に向けて歩き出した。これからDクラスへ行くのだろうか。

「……そういう問題？」

残された優子さんは誰にでもなくポツリと眩く。多分……、雄二にとってはそういう問題なんです。

「僕達はどうしよつか？ まだ開戦まで時間あるし」

「そうじゃのう……」

秀吉が腕を組んで唸る。

休む暇がないっていうのも困るけど、中途半端に時間だけあるとそれはそれで困っちゃうよね。

緊張感を解す何か良い案がないかと考えていると、ちよいちよいと秀吉の肩を後ろからムツツリーニがタッチした。

肩に触れた感触に秀吉はわずかに瞳を大きくして、後ろに振りむきムツツリーニに顔を合わせる。

「なんじゃムツツリーニ？ ワシに何かようかの」

「……………（こくん）、姉吉も。二人に手伝ってほしいことがある」

「アタシ？ って誰が姉吉よ！」

「ま、まあまあ落ち着くのじゃ姉上。それで、手伝うとは何のことなのじゃムツツリー

ニ」

優子さんと宥める秀吉がムツツリーニに催促する。

ムツツリーニは懐からいつも持ち歩いているカメラを取り出すと、それを顔の前まで持ってきてシャッターを押しているようなポーズを撮りながら言った。

「……………二人の写真を撮らせてほしい」

「写真？」

「……………(こくん)」

カメラを構えたまま頷くムツツリーニ。なるほど写真か。ムツツリーニらしい粹な提案だ。

「いいんじゃないかな。せっかくだし撮って貰えば？ 思い出になるよ」

「ワシはかまわぬぞ。姉上は？」

「いいけど。でもなんでアタシと秀吉なの？」

「……………双子の写真はとても貴重。それに二人は容姿も平均以上だから間違いない見栄えが良い。クラスの士気も上がる」

「いろいろツツコミどころがあるのじゃが…………。大体士気を高めるのならワシでなく島田の方が適任じゃと思うのじゃが。男子より女子の方が受けはいいじゃろう」

「いやいや秀吉。美波の写真なんて見たらみんな怖がって逆にやる気が下がっちゃあれ？ 腕が変な方向に」

「アキ、あんたには一度思い知らせてあげる必要がありそうね……」

僕の右腕が変色するまで絞めている美波が口に邪悪な笑みを浮かべている。ほら、ね。怖いでしょ？

「時間はあるのじゃから全員分撮ればじやいいじやろうて。のう、ムッツリーニ」

「……………俺は構わない」

「土屋君っていつもカメラ持つてるけど、写真撮るのが趣味なの？」

ムッツリーニのカメラを見ながら優子さんが質問する。ムッツリーニは無言で一つ頷いてそれを肯定した。

「ムッツリーニはいつも写真撮ってるもんね」

「そうじゃの。ムッツリーニといえばカメラ。ワシらの間で周知のことじゃ。普段から使ってるだけあつて腕もよいぞ」

「へえ、すごいのね。ちよつと意外だわ」

「……………照れる」

「普段は何を撮ってるの？」

「……………」

黙る僕ら。

言えない……。いつも女の子ばかりターゲットにして胸やスカートの中とか重点的

に狙ってるなんて、言えない……っ！

「……………いろいろ。特に範囲は絞っていかない。撮りたいと思ったものを撮影している」

無難な回答を述べる。ナイスムツツリーニ。

その撮りたいものというのが主にエロ方面なのは僕達だけの秘密だ。

これ以上詮索されると危ないものが露見しそうなので、僕達はさっそく撮影に取り掛かった。

カメラは勿論ムツツリーニ。最初の被写体は木下姉妹（誤字にあらず）。僕と美波はムツツリーニの後ろで成り行きを見守っている。

畳の床にしゃがみ込んでレンズを覗く目に神経を集中しているムツツリーニは、何度か位置や角度を調整しながら、時折被写体に二人にいろいろ指示を出していた。

「……………もつと近くに。それだと枠に収まらない」

「ど、どれだけ寄れって言うのよ！ 十分過ぎるほど近いじゃない！」

「……………まだ腕一本分の隙間がある。中途半端の画は俺が許せない」

「くっ、何よそのプロ意識。ていうか秀吉も何でそんな平然としているのよ」

「ワシは演劇部じゃからな。見世物になるのは慣れておる。姉上こそ肉親なのじゃからそこまで恥ずかしがらなくてもよかろうに」

「見られてるのが嫌なのよ！」

「誰に？」

「だ、誰って……。全員よ全員！ ああもうとにかく早くして！」

はて、一瞬優子さんがこつちを見たような気がしたが、気の所為か？

「……………そこで手を繋いで。——そう、そんな感じ。顔をもつと寄せて。……………OK」

すごい凝り性だな。向こうの被写体二人がすごい扇情的な絵になつてゐる。

まるで恋人のように指と指の間を挟むように手を繋いで、頬と頬がぴったり引つ付き視線はカメラのレンズに注がれている。まるで合せ鏡を見ているようだ。こうして見ると改めて二人つてすごく似てゐるなあつて思う。見ているだけでムラムラしてきそう

だ。
ほんと、お互いの服装を入れ替えてもまったく気づけないんじゃないってぐらいそつくりな双子だな。まあ秀吉はいつもの無表情で優子さんは恥ずかしさに顔を真っ赤にしているから割と分かりやすいけど。

そんな感想を後ろで感じていると、無音のシャッター音と共に最初の撮影は終わった。

「……………撮影完了。ありがとう二人とも」

「うむ」

「……アタシは神経が削れたわ。もう二度とこんなやらないからね」

満足げな秀吉と反面、げっそりとした優子さんが対照的だ。

それぞれ感想を言い合っている中、僕はカメラの提げて立ち上がったムツツリーニの傍に駆け寄り、誰にも聞えないようひっそりと耳打ちした。

「……ムツツリーニ、今の予約一本入れとくよ。あ、あとできれば後でいいから優子さんピンのヤツも追加でお願いできないかな……？」

「……………物は？」

「……僕の秘蔵の聖典エロ本一冊」

「……………交渉成立」

やった！…密かに心の中でガッツポーズ。

「アキ。次はウチらで撮りましょ」

「ええ!? どうしてさ!」

「何よその反応! 嫌なの?」

「そ、そういうわけじゃないけど……」

「じゃあいいじゃない。ほらっ」

「ああ引つ張らないで! い、痛い痛い!」

「あ? 何やってるんだお前ら?」

Dクラスから戻ってきた雄二が僕らの様子を見て問いかける。

美波に腕を掴まれた僕とカメラの調整に集中しているムッツリーニは話せないので、代わりに秀吉が事情を説明した。

「皆で写真を撮ろうという話になってのう。こうして集まっておるのじゃ」

「ほお、それはまた粹な計らいだな」

「雄二もどうじゃ？」

「そうだな。せつかくだし俺も混ぜてもらおう」

雄二も参加し結局いつもの面子でわいわい騒ぐことになった。……結局、試召戦争前でも僕らはいつも通りだなあ。

問22 開戦／Bクラス

「ぶっ殺せ——っ！」

なんて、物騒な台詞と共に試召戦争が開戦した。

「Fクラス、行くわよ！」

「「おおお————っ!!」」

こっちは優子さんが周囲の壁——もとい味方の最前線メンバーに声援を送っている。

雄二の作戦通り、まずは優子さんを主体にBクラスを教室まで一気に追い詰める作戦が開始された。

前方に壁役の人員を四人、中央は優子さんを真ん中に据えその両端にも護衛を置きその後ろにも前列と同様の四人をつけたフォーメーションを組んでいる。すべて優子さんを守るための陣形。まさに鉄壁の防御だ。

さらに後方には僕を含めた予備の補充人員が十人ほど集まり雄二からの伝令や逆に現場を状況を逐一を報告する為の報告班もいる。

「来たぞー。Bクラスだ！」

最前線を走っている味方が警報のような大声を上げた。

目を凝らして奥の奥を見据えると、新校舎の踊り場から七人のBクラスがこっちに向かつて前進してきている。なるほど、まずは様子つてところか。

このままの調子でFクラスとBクラスが進むと丁度渡り廊下の中央ぐらいで勝ち合いうような気配だ。

最前線のチームに遅れないよう、僕ら補充班も一定の距離を保ちながら戦場へ足を動かす。

「Bクラスの奴ら、高橋先生を連れてるぞ」

「Fクラス近藤召喚します。試獣召喚——！」

『Bクラスも喚びます！ 試獣召喚——！』

渡り廊下——二つの校舎を結ぶ唯一の橋の上で召喚フィールドが展開される。そして掛け声と共にそれぞれの足元に幾何学模様が浮かび召喚獣が現れた。

Fクラス 近藤吉宗

総合科目 780点

V S

総合科目 1980点

Bクラス 野中長男

げっ!? なんて点数だ！ これがBクラスの力かつ。

「相手を戦死させようと思わないで！　今はとにかく耐える事だけに集中するのよ！

——試獣^{サモ}召喚^{モン}！」

圧倒的な戦力差にも関わらず優子さんは気圧されることなく召喚を開始しながら味方に指示を出す。

前の四人と両隣にいる二人も召喚を開始しBクラスの召喚獣と武器をぶつけ合い火花を散らす。四方で勝負が展開されながらも、味方の一撃により攻撃が弾かれたその小さな隙を逃さず、優子さんは僅かにダメージを受けながらもまずは一体の敵召喚獣を倒した。

『くっ、やはり強い……！』

『木下に気をつけろ！　奴らに渡り廊下を渡らせるな！』

Bクラスの側の新校舎の方からも声が飛び交う。

ここで確実に優子さんを戦死させる為か、向こうからさらに五人の生徒が教室から現れ召喚を開始した。

今の所はなんとか善戦しているが元の点数が低い僕達はすぐに持ち点が底をつきそうになり、数分の攻防で交代を余儀なくされている。

「くそっ、もう持たねえ！」

「新田、俺が交代する！　Fクラス氷室召喚します！」

「すまん、頼んだ！」

後方で待機していた氷室君が戦線に上がり、今までBクラスの召喚獣と必死に戦っていた新田君が補充試験を受けるために後退する。

実力で完全に負けている僕達では、ただ戦死しないようこうして交代しながら戦うのが今の精一杯だった。

その間に優子さんは召喚獣を縦横無尽に暴れさせ少しずつであるがBクラスの部隊を一人一人打ち倒し、一歩ずつ戦線を前進させていつている。

この調子なら僕もすぐに召喚しなくちゃいけなくなるな。準備だけはしておかないと。

『くっそ、Fクラスの癖になんてしつこいんだ。ほとんど点数もないのに』

『Fクラスの奴ら、マジで本気できてるな』

『これじゃ木下に近づけないぞ。俺達、本当にこんなクラスに勝てるのか……？』

『やばい！ 戦死しそうだ！ 誰か助けてくれ！』

段々押されてきていると感じているBクラスから戦きが聞えるようになった。

Fクラスの猛攻に驚いて少しだけ向こうの攻めが弱くなっている。よし！ 良い感じだ！

『き、木下っ、待ってくれ！ お願いだから補習室送りだけは——っ！』

「ごめんなさい。これは競争じゃなくて戦争だから。手加減はしてあげられないの。と言っても元からそんな気ないけどね」

『そんな——っ。鬼の補習は勘弁……ぎやあああつ?!』

群がる召喚獣の攻撃を壁役のみんなが分散して受け止めている間に優子さんがまた一体相手の点数をすべて消し飛ばす。容赦ないなあ優子さん……。

ちよつとずつだけど確実に戦線は前に進んでいる。雄二の提案した特攻作戦は思いのほか順調に進んでいた。

「……と言ってもこっちの被害も無視できないなあ」

パツと見では僕達がリードしているように見えるけど、よく見るとBクラスの召喚獣を一体倒す度にこちら側も一人から二人ほど戦死させてしまっているから、状況は五分五分だ。

点数では負けているというのに、それでもなんとか持ちこたえているのはひとえに前回の試召戦争で召喚獣を使った経験が生きているからだろう。

点数の差を経験で補う。まさにFクラスらしい戦い方だ。

……それでも、途中離脱して戦線を抜け補充試験を受けに行ったメンバーのことも考えると、やっぱりまだ僕達は不利な状態には違いない。

目標のAクラスの一步手前、Bクラスと互角に近い戦いを繰り返している光景に僕は

思わず手を強く握り締める。

白熱した戦いに汗を流しながら一部も見逃さないよう戦場を凝視していると、戦線の後方陣から僕に声がかかった。

「近藤がやられそうだ！ 吉井、交代してやってくれ！」

「了解！」

ようやく僕の出番か。よし、やってやる！

みんなの戦っている姿を見て火がついた僕の足はいち早く戦場に向かうべく力強く地面を蹴った。

なんていうか、みんなにぼつかりいい見せ場を作らせるわけにはいかないよね！

「近藤君、おつかれさま。ここは僕が受け持つから回復試験受けに行つてよ」

「ありがてえ。よろしく頼むぜ」

疲弊していた近藤君と持ち場を交代し近藤君を下がらせる。

『おい、吉井が出たぞ』

『Dクラス代表を倒したつて言うあの……』

Bクラス陣営は僕の登場に目を見開いて注目している。ふふ、なんだか照れるなあ。さて、じゃあそろそろ僕の本気を見せるとしようか。

「覚悟してもらおうよBクラス。試^サ獣^モ召喚！」

喚び声に応じて足元に幾何学模様が浮かび上がり、その中心からデフォルメされた僕の召喚獣が現れる。

品やかな体軀。

絹の糸ように風になびく髪。

かつてDクラスの代表を倒した剣が光に反射して妖しく光り輝く。

ここに最強の召喚獣が顕現する——っ！

『……なんだあれ？』

『木刀と学ラン？』

『不良か？』

『吉井の召喚獣は無視しろ！ 見るからに雑魚だ！』

『ひどい!!? セっかくカッコいいシーンになるはずだったのに!!?』

そりゃあ学ランに木刀じゃ威厳なんてこれっぽっちもないけどさあ！

「吉井君、邪魔！」

「え？ ぬおっほおおーっ!!?」

突然召喚獣の右腕とお腹の間から優子のさんの召喚獣を武器を突きつけて突進してきた。丁度僕の前にいて避けきれなかった敵の一人があっけなく戦死する。痛ったあ!!? ちよつと掠ったよ!!?

「優子さん僕まで殺す気っ!？」

「敵の間に立つアンタが悪いのよ。おかげで狙いが逸れちゃったじゃない」

「なんて横暴!？ それでもちゃんと点数を全損させている辺り、さすがだね……」

ていうか優子さん、強すぎ。

「もう結構戦ってるけど点数の方は大丈夫?」

「みんなが守ってくれたおかげであまり減っていないわ。まだ十分戦えるから心配しないで。それより、余所見しているとやられちゃうわよ」

言うや否や、一体の召喚獣が僕に向かって槍を突きつけながら走ってきた。

「おっとっと」

それを身体を右に少しだけ動いて回避する。ついでに木刀で足払いをかけて体勢を崩させた。

「あ、危ない……。Bクラスの点数じゃあ一発でも受けたらそのまま補習室行きになるよ」

「なんか見てて危なっかしいわね。吉井君の戦い方って」

「まあ基本逃げだからね……。僕の点数じゃあダメージもほとんど与えられないし。とどめは全部優子さんに任せるよ」

転んだ召喚獣の腕を両手で掴み、そのままぐるぐる回して遠心力を利用して勢いよく

投げ飛ばした。

召喚獣の力と観察処分者の雑用で身についた操作経験でこんなこともできるんです。

「優子さん、パス！」

「はい。どうぞ」

召喚獣が投げられた先には丁度優子さんが武器の先を向けていて、まるで輪投げでボールに輪つかを嵌めるように真っ直ぐ召喚獣が直撃した。よっし、これでまた一体撃破。

「やった！ この調子でガンガン攻めて——」

『『試獣召喚!!』』』

「!？」

少しだけ場の空気がFクラスに好転しはじめたと思われた時、新校舎からさらにBクラスが五人現れ一斉に召喚を開始した！

「増援が来たか。やっぱり簡単に進ませてはくれないね」

「そりゃあね。同じ状況ならアタシでもそうするし。Fクラスも戦力を追加するわ。後ろの待機している班も加勢して。ここから一気にBクラスまで進むわよ！」

「了解！」

Bクラスに合わせるようにこちらにも主戦場に人員を投入する。

現在渡り廊下の進行具合は七割ほど、このままの調子なら新校舎に突入するのも難しくくない。

これまでの優子さんの猛攻の影響でBクラスの勢いも大分減退しているし数で押せばFクラスの点数でもなんとか戦えるだろう。

召喚獣の数も増え、さらに激しい勝負が展開しそうなその時、待機班に混じって連絡係の須川君が血相を変えて走ってきた。

「大変だ！ Bクラスが後ろから攻めてきた！」

「なんですって！ どういうことなの？」

「突然四階からBクラスが六人ほど隊列を組んで襲ってきたんだ。今島田を中心に防衛してるが点数の差で俺達を押されてる！」

「四階？ じゃあBクラスは踊り場で二手に分かれていたのか……」

「……そう、それで彼らは新校舎に踏み入れられることを極端に嫌がったのね。アタシ達を挟み撃ちする為に」

「っ!? それってピンチなんじゃあ!?!」

「ああ。だから至急救援を頼む！ このままじゃあ旧校舎の部隊は壊滅してしまう」

「救援って言っても、僕達の方も数を増やされて丁度人手がほしかったところなのに……」

なんてタイミングの悪い奇襲攻撃なんだ。いや、もしかするとこれも根本君の作戦なのか？

「須川君。旧校舎で展開している教科は分かる？」

顎に手を当てて考える顔をしていた優子さんがふとそんな質問を口にした。

状況に急かされている須川君は早口言葉のように向こうの状況を語る。

「数学と日本史だが、それがどうかしたのか？」

「ありがたい。……吉井君、ここはいいから旧校舎の班の支援に行つて来てくれない？」

須川君の話聞いた優子さんが僕の方を見てそんなことを言った。

「え、僕？」

「そうよ。日本史なら吉井君でもある程度の点数は取つてるし、倒すとまではいかないまでもなんとか足止めはできるはずだわ」

「でもそれじゃあこの防備はどうするの？」

「それは須川君にお願ひするわ。須川君、構わないわよね？」

「ああ。俺なら大丈夫だ」

ふむ、それならいけそうだな。正直旧校舎の方もかなり心配だし、ここはお言葉に甘

えよう。

「分かったよ。それじゃあちよつと行つて来る！」

「頼んだぞ吉井」

「よろしくね。アタシが直々に指名したんだから向こうで戦死なんてするんじゃないわよ」

「うん。僕なりになんとか頑張ってみるよ」

優子さんと須川君の言葉を胸に、僕は戦線から離脱すべく身体を半回転させて脱兎の如く戦場を走り抜けた。

今の尚戦っている味方の間を何度も通り抜け、渡り廊下を全力疾走する。

旧校舎の踊り場は校舎の一番端にある。とにかくそこまで駆け抜けよう。待っていて美波！

☆

優子 side

吉井君から戦場から離脱して約三十分が経過した。

戦線の進行具合はあれからかなりリードできていて、すでに主戦場は渡り廊下から新校舎の踊り場まで進んでいる。Bクラスの教室は踊り場のすぐ傍なので教室はもう目前に迫っていた。

Fクラス 木下優子

総合科目 2096点

V S

総合科目 1630点

Bクラス 工藤信二

目の前に立ちはだかった召喚獣を手に持った武器で一突きし点数をすべて喪失させる。

「……大分点数も減ってきたわね」

最初に召喚した時と比べると千点以上消費している。いえ、むしろこれでもまだ抑え目の方ね。

周囲のクラスメイト達が盾になって守ってくれているおかげで順調と言ってもいいほどうまく攻め入ることができたんだから。チームワークの賜物だ。

反面、向こうは攻め崩されて陣形はバラバラに散っていた。今もFクラスの何人かが団体を組んで各個撃破に当たっている。ここまで来ればアタシが無理に暴れなくても教室まで攻めることができるでしょう。

そろそろアタシも点数を回復しておきたいし、ここは一旦みんなにこの場を任せて試験を受けに行きましょうか。

「須川君、点数がちよつと心配だから補充試験に行くわ。この場の指揮権はすべて貴方に任せていいかしら?」

「む、そうか。わかった。ここなんとしても死守するから遠慮せず行ってきてくれ」

「ありがとう。無理はしないであくまで今の状態をキープしてくれればいいから。それじゃあ後はお願いね」

須川君にこの場をすべて託しアタシは召喚範囲外である10m先まで戻るため地面を蹴る。

そうして走って渡り廊下を経由し旧校舎の教室まで戻る途中、どこからか話し声のよな音が聞えてきた。

『それで、どうしたって?』

『うーん、どうやら吉井みたいだぞ』

『?』

気にあるワードが耳に入りつい足を止めて周囲を見回す。吉井って吉井君よね? どうかしたのかな?

新校舎から渡り廊下は主戦場だけあって人が入り乱れていて、誰が話しているのは判別がつかない。

何の話をしているのか気になりあちこちをキョロキョロと探るアタシを置いて、先ほ

どの声は会話を続けた。

『旧校舎で戦ってる階段から落ちて頭を怪我したって、今保健室に運ばれたらしいぞ』

『出血もしてたってよ』

『うわあ……』

「!？」

聞えてきた会話の内容に思わず目を見開いた。心臓が驚きに反応して一段階大きく鼓動する。

吉井君が、怪我……っ!?

☆

僕が旧校舎に戻ると、そこではBクラスと思しき生徒六名とFクラスの仲間が二つの召喚フィールドの中で戦っていた。

その一つ、数学エリアには特徴のポニーテールを揺らしながら召喚獣を操る美波の姿もある。

数学は美波に任せておけば多分大丈夫なので、取り合えず先に日本史のエリアに飛び込み中にいた横溝君の声をかけた。

「横溝君、援護にきたよ！」

「おお吉井か、助かる。Bクラスのやつらかなり強さでもう二人やられちゃった。このままじゃ日本史が全滅して数学で戦ってる島田が挟み撃ちされてしまう」

「分かった。ここは任せて！ 試獣^{サモ}召喚^ン！」

喚び声に反応し足元から召喚獣が現れる。僕は召喚獣が完全に出現するのと同時に点数が表示される前に敵本陣へ特攻をかけた。

Fクラス 吉井明久

日本史 101点

VS

日本史 75点

Bクラス 鈴木次郎

どうやら前の戦闘で消耗していたらしく、僕程度の点数でも一撃を沈められた。

日本史フィールドには後三人のBクラス。その奥には数学のエリアで美波が二体の召喚獣を相手になんとか持ちこたえている。

自陣にはなんとか生き残っている者が三人、僕を合わせて計四人のメンバーがいる。ここさえ乗り切れば形成は逆転できる！

「みんな！ なんとしてもこの場を乗り切るんだ！」

「「おおーっ！っ！」」

発破をかけると、皆勇ましい声で答えてくれた。まだいけるな！

『くっそ。吉井まで来るなんて聞いてないぞ。何やってるんだ教室前の連中は』

『愚痴ってる場合か。点数では俺達が勝ってるんだ。冷静に戦えば負けるわけないだろ！』

『そ、そうだな。よしっ』

向こうも前向きな台詞をかけて味方の不和を押しさえている。こっちとしては動揺して滅茶苦茶に暴れてもらった方がやりやすいんだけどなあ。

『吉井っ、覚悟！』

「むー！」

真正面から剣を構えた召喚獣が走ってくる。

Fクラス 吉井明久

日本史 101点

VS

日本史 173点

Bクラス 吉田卓夫

直線的な攻撃だったので、召喚獣に横っ飛びをさせてこれを避ける。

あまり召喚獣に慣れていない彼は自分の攻撃が当たらなかつた事に驚いている隙に、胴と腕に一発ずつ木刀を打ち込んだ。

Fクラス 吉井明久

日本史 101点

VS

日本史 140点

Bクラス 吉田卓夫

全然減ってない！ やっぱり弱いよ僕の召喚獣……。

『くっそちよこまかと！ メタルスライムみたいなヤツだな！』

そこまで弱くない！

「吉井、ここは連携プレイだ」

「連携？ どうするの？」

横溝君の耳打ちで提案してきた。何かいい案でもあるのかな？

「まず、吉井が敵に向かって一直線に突撃する」

「ふむふむ、それで？」

「そしてその後ろから俺が吉井の召喚獣ごと敵を串刺しにする」

なるほど。それは効果抜群だ。

「ってそれ僕が一番大ダメージじゃないか！ 観察処分者は攻撃されるとフィードバックするんだよ！ 絶対に嫌だ！」

「四の五の言っている場合か！ このままじゃ島田が戦死するんだぞ！」

「その前に僕が戦死するよ！」

「大丈夫だ。俺は気にしない。お前の死は決して無駄にはしないからな」

「僕が気にするんだよ！」

「うるさいヤツだな。ええい、早く逝ってこい！」

横溝君の召喚獣が僕の召喚獣を背中を押そうを回り込む。そうはさせるか！

咄嗟に僕は横溝君の召喚獣の腕を手に取り、ちよつと前の要領で敵に向かって投げ飛ばした。

「な、なんだとお!？」

『な!?! 召喚獣を投げた!?!』

横溝君。召喚獣の扱いで僕と張り合おうなんて自殺行為だったね。やはり所詮Fクラス、おつむが足りてない。

強風のような勢いで、横溝君の召喚獣は相手に向かって一直線に飛んでいく。

度肝を抜かれたBクラスは抵抗する暇もなく、召喚獣はカミカゼアタックを受け後方へ吹き飛んだ。

「隙アリ！」

僕の召喚獣が最速で相手の下までダッシュし、横溝君諸共木刀で突き刺す。

Fクラス 横溝浩二

日本史 DEAD

VS

日本史 DEAD

Bクラス 吉田卓夫

「……横溝君、君の犠牲は無駄にはしないからね……………」

「いや、あきらかにお前が殺しただろう……………」

なんのことだかさっぱりですな。

「さあ、あと二体だよ！」

これで三対二。形成は僕達に有利だ。

『つ、お、おい。ここは一旦引いた方がいいんじゃないか？』

『馬鹿！ Fクラス相手に引き下がるか。おらあ！』

頭に熱が溜まった一人が召喚獣を突撃させてくる。狙いは田中君の召喚獣。

「へっ、この瞬間を待ってたぜ！ 福村！」

「おう！」

田中君が合図を送ると、福村君は敵の攻撃を避け右に飛んだ。

『なに?』

『お、おい!』

実は二人は向かい合わせの姿勢で戦っていて、福村君と田村君が突撃してきた召喚獣を交わすと、その先には丁度福村君が交戦していたBクラスの召喚獣がポカンとした顔でミサイルの如く飛んできた味方を見ている。

勢いを殺しきれない召喚獣の特攻は、そのまま味方に直撃し錐揉み状に転がった。

「チャンス、このまま畳み掛けろ!」

「オツケー!」

団子になった二体の召喚獣に福村君と田中君が武器を構えて突撃する。

Fクラス 田中明

日本史 67点

V S

日本史 108点

Bクラス 工藤信二

Fクラス 福村幸平

日本史 63点

VS

日本史 98点

Bクラス 高橋直哉

一方的に倒されるBクラスの召喚獣。

敵陣の召喚獣はこれで全滅し補習担当の教師に戦死者が連れて行かれた後、日本史のフィールドが解除された。

「やった！ これで美波の元にいける！」

『おっと、そうはいかないぜ』

「えっ!？」

「……アキ、ごめん。捕まっちゃった……」

向こうでもいつのまにか戦いが終わっていて、Bクラスの男子生徒の一人が美波の首に腕を回して拘束していた。

「美波!？」

『動くな！ そこから一步でも進んだらこの女を戦死させてやる』

もう一人が僕達に牽制の言葉を叫ぶ。

この距離じゃあどうやっても相手が美波に止めを刺す方が早い。くそ、Fクラスに数少ない女子をリタイヤさせることでこちらの士気を下げる事が目的だな。

人質なんて、なんて卑怯な。まるで悪役の代名詞じゃないか。

どうする？ 美波がいなくなると大事な戦力を一人失うことになって僕は暴力に怯える必要がなくなる。

……あれ？ 問題ないな。

「総員突撃いっ！」

『『な、何いっ!?!』』

「おいいっ!?! それでいいのか吉井!?!」

仕方ないさ。戦争に犠牲は付き物なんだ。美波には運が悪かったと思って苦汁を飲んでもらおう。

「それに。美波ならあの程度の拘束、力で無理矢理抜け出せるはず。つまり、あの美波は偽者だ!」

「な、なんでよおーっ!?!」

『ま、待て! コイツは本物——』

「バレた作戦に固執するなんて見苦しいぞ! 諦めて補習室行きになれ!」

『だから本当に——あああああっ!?!』

いつまでも言い訳のように繕い続けるBクラスの二人を三人で襲い召喚獣に止めを刺す。

二人はそのまま補習室へ連行されていった。さて、これで残りは……。

「あ、アキ……?」

この美波モドキだ。

「みんな注意して! いつどこから襲ってくるか分からないからね!」

「ちよ、ちよつとちよつと! さっきの演技じゃなかったの! ウチは本当に本物の島

田美波よ!」

「まだ白々しい演技を続けるか、この大根役者め!」

いい加減諦めて正体を表せ!

「ふ、ふふふ、フフフフフフ………」

周囲を包囲して最大限に警戒していると、突然美波モドキが顔を俯かせて不気味な笑い声を発した。ついに正体を現したか!?

「ねえアキ?」

「……うん?」

再び顔を上げた美波はとて素晴らしい笑顔を浮かべながら僕に問いかけた。

……なんか嫌な予感……。

「人間の首つて、何回ぐらい回せば千切れるのかしらね?」

「包囲中止! これは本物の美波だ!」

こんな物騒な台詞を言うのは美波以外にいない!

「美波、大丈夫だ——」

ヒュン——ッ

「……え?」

慌てて美波の元へ駆け寄ろうとすると、その直前で何か風の衝撃波のようなものが僕の頬を掠めた。

その後ドロリとした血の感触に思わず言葉を失う僕の前で、美波の左腕が振りかぶったかのように肩に沿って真っ直ぐ伸びている。

「……前から人を男扱いするわ同性愛者と勘違いするわ。さらには偽者呼ばわりするなんて、ここで一度しっかりアキを教育しなくちゃいけないみたいね」

「あ、あの、美波……?」

美波の背中から溢れる只ならぬ物騒な気配に思わず後ずさる。これは……いつもの比じゃない!

「そ、それじゃあ俺達は先に本陣に戻るからな。行こうぜ田中」

「そうだな。達者でな吉井」

「ちよつと待って二人とも!! 僕を見捨てないで!! しかも田中君、それはこの先しばらく会わない人に対する言葉だよね!!」

「……………」

「あれ？」

てつきり雄二からいつもの罵倒でも飛んでくるかと思いきや、教室内は異常なほど静まり返っていた。

気になり視線を巡らせると教卓の前では代表の雄二とムツツリーニが神妙な顔つきで何か話し合っている。僕が戻ってきた事には気がついていないみたいだ。一体どうしたんだろう？

取り合えず僕は二人に近づいて話を聞いてみることにした。

「雄二、ムツツリーニ。何かあったの？」

「……………明久か」

「おう、今までどこ行ってたんだ？」

「ちよつと凶暴な猛獣と鬼ごっこを……………」

「はあ？ この大事な時に何を遊んでるんだお前は。…………まあ今はいい。それより明久、お前木下を見なかったか？」

「へ？ 秀吉ならそこで補充試験を受けてるじゃないか」

「アホ。姉の方だ。木下優子が今どこにいるのか知っているのかと聞いたんだ」

「優子さんなら今も前線で戦ってるんじゃないの？」

「……………」

僕が答えると二人は再び真剣な表情で何かを考え出した。何だ？

「まさか、……優子さんに何かあったの？」

「……………」今、木下優子は行方不明だ

ムツリーニの台詞に僕は心臓が飛び出そうなほど驚いた。

「っ!? な、何で! どういうこと!」

「わからん。明久が来るちよつと前に教室に戻ってきたと思つたら何もせず出て行つたつきり戻つて来ねえ。前線の須川も姿は見えてないらしい」

「……………」明久なら何か知つてると思つたが」

「ううん、僕も何も聞いていない。優子さん、どこ行っちゃったんだろう」

「前線にも戻っていない。教室にもいない。そして明久も何も知らないとなれば……。可能性として上がるのは誘拐だな」

「誘拐っ!？」

それつてつまり誰かに攫われたつて事!? そんな、一体誰に!

いや……。今の状況でそんな真似をしそうな人物に一人だけ心当たりがあるぞ。

「ひよつとして、根本君が……?」

「……………」おそらく。確立として一番高い」

「だろいな」

雄二とムッツリーニは僕の立てた推測に頷いて同感の意を示した。

「詳しい方法はわからんが、とにかく根本は何らかの方法で木下を特定の位置に移動させて閉じ込めた可能性が高い」

「で、でも優子さんの点数ならBクラスに遅れをとることなんてないはずでしょ?」

「召喚獣ならな」

「え……?」

「……………一人の人間を捕まえて監禁するだけなら、男子の一人か二人入れば十分事足りる」

「そういうことだ。木下の召喚獣の存在を邪魔に感じている根本がそんな自爆行為をするはずがない。多分力づくで押さえ込んで空き教室のどこかに突っ込んだんだろう」

「——っ」

まんまとしてやられた悔しさや守ってあげられなかった不甲斐なさに思わずぎりつと強く歯噛みした。根本君、卑怯だ外道だと思っただけどこまでやるなんて。

居ても立ってもいられず、衝動に駆られ身体を反転させて教室から飛び出そうと走る。

「待て明久!」

扉を開き身を乗り出そうとしたところで、雄二の怒声に身体がピクリと震えて固まった。

「なんだよ雄二。早く優子さんを助けなくちゃ——！」

「それは結構だが。お前、木下優子が今どこにいるのは知ってるのか？」

「……あ」

そういえばそうだった……。場所が分からないんじゃないじゃあ助けようがない。

「どうしよう雄二！ 優子さんがどこにいるのかわからないよ！」

「だから落ち着けつつってんだ。場所はわからんが予想はできる」

「ほんと!？」

さすが雄二！ こういう時の頭の回転の速さは頼りになる。

「それで、優子さんはどこで捕まってるの？」

「今の時間、普通のクラスは授業中だ。つまり特別教室らへんは使用しているとは考え

づらい」

「………じゃあどこかの空き教室に？」

「いや、普通そういう教室は普段は鍵が掛かっている。可能性としては低い」

「そんなの職員室に入って鍵を借りてくればいいだけじゃないか」

「先生になんて言っって何にもない教室の鍵を、しかも試召戦争中に拝借するんだ。よほ

「どのことでもないと貸してくれないだろう」

「それは……」

「まあ、借りるんじゃないくて盗むなら話は別だがな」

「じゃあ空き教室は候補から外していいのかな。でもそれじゃあ優子さんはどこに囚われているんだ。」

「特別教室は駄目。普通の教室もアウト。後は更衣室とか体育倉庫や部室、そして保険室辺りしか思い浮かばないぞ。」

「更衣室とかはどうかな？」

「取り合えず思いつく限りの候補を挙げてみる。どうせ分からないなら消去法でとんとん選択肢を潰していくしかない。」

「僕が意見すると雄二は目を少しだけ大きくして関心したように薄い笑みを浮かべた。」

「明久にしては悪くない考えだ。確かに更衣室なら誰もいないから監禁室には打ってつけかもしれない」

「……………それはない」

「ムツツリー二はやけにきつぱりと否定した。」

「どうして？ 何か不都合でもあるの？」

「……………設置したカメラに木下優子の姿はなかった」

……この場合、僕は突っ込まなければならぬのだろうか。

「ああもう！　じゃあ優子さんはどこにいるんだよ！」

「屋上だ」

「へ？」

あつさりと断言した雄二に思わず首を傾げる。

「一階は窓から逃げられるリスクを考慮して除外する。主戦場の三階も見つかる可能性が高いからパス。残る二階と四階は授業をしている教師の目が行き届いている。そこに女子を引つ張っていく男子共なんぞ見つかったら一発で御用だ。とすると残るは屋上しかない」

懇切丁寧に説明してくれる雄二。

「なるほどね……。それじゃあすぐに助けに行かないと！」

「……………一人は危険。向こうには見張りがいるはず」

「だな。できれば少数で攻略したいところだ。前線の人員を割くのは正直厳しい。あとなるべく召喚獣は使わないようにしたい」

「ああ。一人二人程度じゃBクラスに勝つのは難しいもんね。でも、それじゃほかにどうするのさ。先生に報告するとか？」

「……………そうだな」

うーん、と雄二は目を閉じ顎に手を当てて考える。召喚獣を使わず、尚且つできれば穏便に優子さんを助ける方法を模索しなければいけないんだ。

三人で円を組んで何かいい案はないかと普段使わない頭をフル回転させて探し出す。

と、そこで突然ガララ——ツ！と扉が激しい音を立てて開いた。な、何だ!?

「おつまたせしましたああ——つつ!」

おさげの髪を風になびかせながら豪快な足取りで教室に入ってきたのは、なんとDクラス玉野さんだった。

「誰だ?」

「……………確か、Dクラスの玉野美紀」

ど、どうして彼女が?

それにおまたせしましたとは一体誰に向かって言ってるんだ?

「た、玉野さん!? なんでここに?」

「はい、玉野美紀です! アキちゃんようやく出来たよ!」

天真爛漫な笑顔で玉野さんとはことごとく歩いてくる。

よく見ると、彼女は両手で何か黒っぽい布のようなものを持っていた。出来たってなんだろう?

僕は玉野さんに何かを頼んだ記憶などない。そもそも玉野さんとは試召戦争以前の

接点がまったくくないのだ。

その彼女がこんなに嬉々として僕に届け物を持ってくるなんてわけがわからない。

驚きのあまり固まってしまった僕とムツツリーニの代わりにいち早く復活した雄二が玉野さんに一步近づいて声を掛けた。

「Fクラスに何の用だ？ 見ての通り今は試召戦争中だ。用件があるなら手短に言ってくれ」

「大丈夫。時間なんてまったく掛けないから。私はアキちゃんにこれを渡しに来ただけなの」

言って玉野さんは持っている布を僕に差し出す。

まだ事態をよく飲み込めていなかった僕は言われるがままそれを受け取ってしまった。

「……………これは、服か」

隣で見ていたムツツリーニに僕の手に収まった布を見て口を開く。

服？ つまりこれは玉野さんからの純粋なプレゼントってことでいいの？

な、なんかちよつと照れくさいな。女の子に何かをもらうのなんて始めてだし。ちよつとドキドキするよ。

でも服か。どんな服なんだろう。

時間はないけど見るだけなら、と決めて僕はさっそく服を広げてみた。

「……………」

「……………」

「……………」

両手を左右に伸ばした瞬間、僕を含めた周辺が一瞬で静かになった。

なんというか。それはフリフリだった。

黒を基調としたレースにフリルにリボン。それに下半身に穿くと思われるスカートのようなもの。

これがまた異様に横に膨らんでいてパニエか何かでも入っているようだ。

……端的に言うと、それはゴシッククロリータだった。

「な、なんじゃこりゃー……っつ!?」

思わず大声で叫んでしまった僕。ちよ、ちよ!? えー!

どういうこと!? なんで玉野さんが僕にこれを渡すの! 僕にこれをどうしてほしいの!

「ちよつと玉野さん!? なんなのさこれは!」

「ん? 見ての通りアキちゃん用の衣装だよ。私頑張って作ったの! 絶対アキちゃんに似合うと思って!」

「いやいやいや似合わないから！ 大体これは女の子の服じゃないか！ 僕は男子だから絶対無理！」

「あ、忘れてた」

「いや忘れるとかそういう問題じゃ……」

「はいこれウィッグ」

「全然わかってない!? 玉野さんは僕を女の子にしないと気がすまないの!？」

「何を言ってるの。アキちゃんをはじめから女の子じゃない。心が」

「身心ともに男だよ！」

ああもうなんか話がわけのわからない方向に向かっている!? 何なんだこの子!

「ちよつと雄二とムッツリーニも何か言つてよ」

助けを求めて二人にも話しを振る。

「……………」

「雄二？」

いつからか、雄二は難しい顔でまた考え事をしていた。

その視線は誰にでもなく、僕の持っているフリフリ衣装に向けられている。コイツ……何を考えているんだ。

その雄二が思案から戻つてくると同時に、よく見る悪いことを考えている時の笑みを

浮かべ。

「明久、作戦を思いついたぞ」

「え……？」

なんか、嫌な予感が……。

☆

新校舎の屋上の鉄扉を静かに少しだけ開くと、雄二の言うとおり優子さんが手を縄跳びのようなもので後ろに縛られ二人の男子がその傍に立っていた。

推測通り。こちらに気づいた気配もなし。ここまでは上々。

後は囚われている優子さんの身柄を確保しなければならぬ。

……嫌だけど。本当に心から嫌だけど！ ……やるしかないよね。

深い溜め息をついて、生睡を飲み込み気合を入れて僕は外の世界へと飛び出した。

……ゴスロリ衣装で。

「きゃあああ……っ!?」

そして開口一番、ありったけの音量で叫ぶ。

『っ!?』

「えっ」

悲鳴に近い大声に三人は驚いた顔で僕の方へ顔を向けた。

『だ、誰だあれ!?!』

「変態よお！ 女子を縛って悦に浸ってる変態がいるわあーっ！」

『なっ!?! ま、待て！ これには深い事情が！』

「変態変態変態ーっ!?! 先生に言いつけてやるー!?!」

言うだけ言うとすぐに身体を回して来た道を走って引き返す。

『今の、Fクラスの島田じゃなかったよな。ということは一般生徒か!? なんだ！』

今授業中なのに!』

『考えてる暇あるか！ 仕方ない！ 俺はあの女子を追うからお前は見張ってるよ!』

『わ、分かった』

一人か……。できれば二人ともついてくれればやりやすかったんだけど。仕方ない。後はムツツリーニの手腕に期待しよう。

取り合えず四階の踊り場までたどり着いた僕は、近くの壁に身を隠して相手が来るのを待つ。

先生に言うと言ったのがかなり聞いたのか、相手は肩で息をしながら走って追いかけしてきた。見ようによつてはちよつと危ない人に見えなくもない。

『くそ、どこに入った！』

キヨロキヨロと周囲に顔を振って探している敵に、僕はこっそりと近づいてその腰に両腕を回してがっちり固定する。

そこで僕の存在に気がついた彼はありえないものを見るような目で僕を凝視した
『なっ!?!』

「くたばれえー！ーっ!!」

『うおおおおおっ!?!』

抵抗する暇を与えないよう、すぐにその腰を持ち上げてバックドロップ。

リノリウムの床に叩きつけガツン！と首元で嫌な音がすると、同時に相手の力がなくなつた。気絶したみたいだ。

完全に意識を失つたことを確認して、僕は両腕を解放し手をパンパンと払う。

「ふう、これで仕返し完了。後はムツツリーニだね」

気絶した敵は一応転んで意識を失つたように見せかけて横にしてまま僕は再び屋上へ続く階段を駆け上がった。

そしてもう一度屋上へ出ると、ことはすべて終わっていた。

優子さんの手の縄は解かれていて、その横ではもう一人のBクラスの見張りだった人がグツタリと泡を吹いて倒れていた。一体何をやったのか非常に気になる。

あの敵を殺ったであろうもう一人の救出班であるムッツリーニは表情一つ変えず
単々と事項を口にします。

「……………任務完了。人質を確保。これより離脱する」

「つ、土屋君!!? どうしてここに」

「……………木下を助けに来た。明久と一緒に」

「えっ、吉井君? どこにいるの?」

あー、やっぱり気づいてなかったんだね。そりやそうだ今はウィッグで長髪だし。普段の僕とは似ても似つかない。

な、なんか出たくない。このまま顔を出したら僕は公衆の面前で平気と女物の服を着る変態というレッテルを貼られることになりそうだし!?

ここは見なかったことにして早々に教室に戻ろう。うん、そうしよう。そうすれば誰も傷つかない!

そんなわけでこんなところからはさっさと退散する為に回れ右して歩き出す。それじゃ!

「……………! (ふっ) ↑物凄い勢いでボールペンを投擲するムッツリーニ。

「ぶへっ!」↑スカートの裾にボールペンが刺さって思いつき転倒する僕(ついでにウィッグが外れる)

「あ」↑僕に気づいた優子さん。

ムツツリーニきさまああああああああああああああ

「……………バカめ。このまま逃げられると思ったか」

!!!!!!

「何するんだよムツツリーニ！ これ以上僕を辱しめてどうしようっていうの!？」
 僕のメンタルポイント（略してMP）はもうゼロなのにつ。

「……………きつと、こうするのほが面白いと思つてやった。後悔はしていない」

こいつ、いつか殺す。それが同じ目に合わせてやるからな！ 覚えてろよ！

「まさか吉井君にそんな趣味があるなんて、意外だったわ——つて普段だったら言いたくなるけど。さっきのわざとらしい悲鳴でなんとなく事情はわかったわ」

一方こちら、今まで敵に捕まっていた優さんは冷静に場の事情を一人で理解していた。

よかった！ 優子さんが（比較的）常識人で良かった。

「……………似合ってるわね（ボソ）」

「ん？」

僕は女装趣味の変態ではないことを誤解しないでくれたのは嬉しいけど、何でその割に優子さんはさつきから親の仇を見るような鋭い目で僕を睨んでいるんだろう……。

「……………秀吉といいコイツといい。何でこんなに似合っているのよ。男なのに！ 男

なのにつ！」

何かよく分からない理由で彼女は憤慨していた。秀吉がこの服を着たらすごく似合
いそうなのには同意だが僕まで似合っているというのはおかしいと思う。

それから暗い顔でぶつぶつと念仏のように小言を言い続けたかと思うと、ふと正気に
戻ったのか恥ずかしそうに顔を赤くしながら咳払いをして仕切りなおした。

「ごほん。ともかく助けてくれてありがとう」

「ううん。それより優子さんに怪我がなくてよかったですよ」

「……………何があつた？」

「……………ちよつと気になることがあつて。それを調べようと思つたらBクラスの待ち伏せ
にあつたの。どうやら偽情報を掴まされたみたい。おかげでクラス全体に迷惑をかけ
ちやつたわ。ごめんなさい」

自分がまんまとBクラスがしかけた罠に引つかかつてしまった事が悔しいと優子さ
んの顔色が語っていた。

僕も屋上で美波といふ時に根本君の卑怯な行動を一度経験しているからその気持ち
はなんとなく理解できた。

ともあれ過ぎてしまったことは悔やんでも仕方がない。それよりこれからどうする
かということを建設的に考えるべきだろう。

「失敗は誰にでもあるよ。そのことを反省するのも大事だけど今はBクラスにどう勝つかを第一に考えようよ。終わりよければすべてよしって言うしね」

「……………明久にしてはまともな意見」

とことん失礼な友人だな。

「吉井君の言う通りね。試召戦争に勝ち抜くことがアタシ達の目的なんだから。頭を切り替えるわ」

「うん。それじゃあ教室に戻ろうか。多分雄二も何か作戦を考えてくれてるよ」

「……………俺は別の用事がある。悪いが二人で戻ってくれ」

「ありや、そなの？」

どうやらムツツリーニは別件がまだあるらしい。僕は何も聞いてないんだけど。何をするんだらう。

「土屋君。用って何なの？」

「……………クライアントとの情報は一切口外できない。雄二に会えば分かる」

「分かったわ。じゃあアタシと吉井君はこれから教室に戻るわね。あとはよろしくね」

「……………了解」

短いやりとりの後僕と優子さんはムツツリーニと別れ、この頃よくお世話になっていた屋上を後にした。

二人で静寂に包まれた校舎の階段を下りる。三階の喧騒はここまで届いていないらしい。試召戦争なんて変わったことをするだけあってさすがに校舎の防音関係はきちりしている。

……今更だけこの服装歩き難いな。中途半端に足が露出している膝の辺りがスー
スーするし、その癖ふとした拍子に足で踏んでしまつて転びそうになる。

早く男子の制服に着替えたいことこの上ない。

「……それにしても、よくそんな変——特徴的な服があつたわね」

僕が身に着けているゴスロリ服を上から下まで見ながら隣で階段を下りている優子さんはそんな台詞を漏らした。

「いや、これは学校にあつた物じゃなくて作つたらしいよ。その理由は理解できなかったけど……」

「作つた？ これを？ ……すごいわね。一体誰が？」

「Dクラスの玉野さん」

「……………ああ」

玉野さんの名前を聞くと露骨に苦い顔をする優子さん。玉野さんのこと知つてたの？

「優子さんって玉野さんと知り合いなの？」

「あ、いや……、そういうのじゃなくて、偶然あの子と話をすることがあつてその時彼女の事を知つたのよ。ほら、この前にアタシの下駄箱に手紙入つてたでしょ。あれよ」

「へえ。あれが。………ん？」

あれ？ ちよつと待つて。あの時に手紙つて確かラブレターじゃなかつたっけ？

あれも玉野さんが送つたの？ あれ、でも確か優子さん指定された場所に行つて告白されて彼氏ができたつて。でも手紙の差出人は玉野さん？ ん、んんん！？ やばい、頭が混乱してきたあつ！

「ちよ、ちよつとストップ！ 優子さん、あの時もらつて手紙つて男子からじゃなかつたの？」

「はい？ 違うわよ。あれは美紀が出したもののよ」

「………彼氏ができたつていうのは？」

「は？」

ポカンとする優子さん。

「何言つてるの？ そんなわけないじゃない。何かと混在してない？」

「え、えー——つつつ！？」

驚愕の事実には驚いた声が周囲に響いた。

いや、いやいやいや！ どういうこと!? じゃあ今までのつて、単に僕の思い………違

い？

「……さつきから何か変よ？　ねえ、大丈夫？」

「優子さん！　優子さんって今好きな人とかいないの！」

「ば……っ?!　い、いきなり何よ！」

途端に顔を真っ赤にして怒鳴る優子さんに攻め寄る僕。だが冷静に状況を分析している余裕はなかった。

これだけは今なんとしても確かめたい。僕は今までとんでもない勘違いをしていたのかもしれないのだから。

服装がゴスロリであることなどすでにどうでも良くなっていた。

頭の中でいい言葉の組み合わせを考える暇もなく。僕はただ思いつく限りの語彙を駆使して今一番言いたいことをそのまま打ち明けた。

「大事なことなんだ！　僕は優子さんの事が知りたいんだよ！」

「あ、アンタはそんなにアタシのこと………」

潤んだ目で優子さんは僕を見上げる。うん？　なんか様子がおかしいけどひよつとして何か間違えたか？

「~~~~~っつ?!　ちよつと待って！」

「え？」

「……試召戦争が終わったなら、話すから……それまで待つて。今はまだ気持ちの整理ができないもの」

「気持ちの整理？　よく分からないけど……うん。優子さんはそういうなら待つてるよ」

「……」

首まで赤くして子犬のように小さく頷く優子さん。

僕としては待ち望んだ餌を前に待つたを掛けられたようで焦らされるが本人がそういう以上この場で深追いはできない。

でも……そうか。もし僕がずっと勘違いしていたのなら、まだチャンスがあるってことだよな。

そう思うと不思議なことに僕は両肩に乗せられた重い荷物を下ろされたかのように開放的な気分以身を包まれた。

世の中すべてが楽しくて愛おしく感じる。今この瞬間を生きているのがこれほど嬉しいと思つたことはないほどに。

……ああ。もう認めるしかない。というか迷う余地も選択の余地もなく分かつていた。

僕つて、この人のことが好きなんだつて。

「……っ!!!」

自覚した途端、急に視界がぐにやりと曲がった。

やばい、顔が熱い。脳みそが沸騰しそうだ。心拍数はここにきて最高潮。Dクラス代表と戦った時と比べ物にならないくらい緊張してる。僕ってこんなに純情少年だったのか。

……そうだよ。大体最初から試召戦争をして彼女をAクラスに入れてあげたかったのもそれが一番の理由だったんだ。

好きだから助けてあげたい。これ以上に説得力のある理由がどこにあるのか。

結局、僕は僕が思っている以上に単純だった。

「……………」

「……………」

それからはずっと無言で階段を下っていく事になった。

近すぎず遠すぎない。そんな曖昧な距離感不思議ととても心地よくて。教室前まで着いた時には名残惜しいと思えた。

☆

ガララッ

「——お、戻ったか」

扉を開けると相変わらず教壇の上でノートと睨めつけていた雄二が顔を上げて僕達の方を見た。

その目が安心の色を浮かべると、すぐに疑問に変わった。

「つてなんだお前ら。なんかあつたのか?」

「な、何で……?」

「なんか……うまく説明できんが。余所余所しい感じつつーか。いや、いい。今はそれどころじゃない」

「坂本君、何かあつたの?」

「何も無い。ただこれ以上前線を維持できないというだけだ」

あつさりと言う。でもそれってかなりピンチってことなんじゃないの!?

「大変じゃないか! 早く救援に向かわないと!」

「分かつている。ここから俺と本陣の連中も出ないと抑えきれない。木下、戻った早々で悪いがもう回復試験を受ける暇はねえ。ここからは戦死覚悟で行ってくれ」

「分かつたわ。元々アタシがミスしたのが原因だもの。その責任は取るつもりよ」

「結構。——いいか。ここが最後の戦いだ。この場を乗り切った方がこの戦争に勝つ」

雄二の瞳はまじりつけなしの本気だ。コイツがそういうからにはここがBクラス戦最後の一番と見て間違いないだろう。

思わず生唾を飲む僕と今も必死にテストの回答用紙にペンを走らせているクラスメイトを一瞥した雄二は、手をパンパンと叩いて注目を集めた。

「みんな。テストはもういい。書き終わりそうなヤツ以外はテストを中断してくれ」

「よいのか？ もうほとんど点数がない連中もいるのじゃが」

今まで試験を受けていた秀吉が立ち上がった答えた。

「ああ。これ以上時間を引き延ばせない。使えるやつはどんどん使っていく」

ガラッ！

「見つけたわよアキいっ！」

壊れそうな勢いで教室のドアを開けたのはちよつと前に鬼の形相で僕を追ってきた美波。そうだった！ 僕はこの子に追われてるんだった！

「ひいっつ美波!?!」

「ナイスタイミングだ島田。お前も聞いてくれ」

「この場であんたの首を——って何？ 作戦会議?」

「そうだ。この試召戦争で最後のな」

殺気の塊と化した美波は雄二の言葉で徐々に冷静さを取り戻す。首を、の後に何が続

いたのか怖くて聞く気にもなれない。

そうして教室内のすべての視線が雄二に集まる。

それは、まさにクラスの代表という立ち位置に相応しいと思える風景だった。

クラス代表として前に立つ雄二がどれほどのプレッシャーを背負っているのか想像もできない。僕なら緊張して声が出ないほどだろうなんてぐらいには漠然と思える程度だった。

そんな針の筈に近い中で、それでも堂々と雄二は告げる。

「これから、最後の作戦を説明する」

問23 決着／Bクラス

本部であるFクラスを後に残し、雄二を含む僕らFクラスの全部隊は大挙して新校舎の最前線まで踏み込んだ。

これまで死にも狂いで戦線を後退させないよう頑張っていたみんなは僕達の姿を見ると一様に安堵の顔を浮かべていく。

「やっと来たかつ。遅せえぞこら！ 危うく突破されかけたじゃねえか！」

「なんでもいいから早く助ける！ もうこれ以上死守できねえ！」

「前線のみんな、今までよく耐えてくれた！ もう守りは終わりだ。ここからは攻めていくぞ！ 試召戦争の決着はまもなくだ！」

「うおおおおおつ!!!」

雄二の激励に一齐に活気付く。

召喚ファイルに入れるギリギリまで人数を投入した後、ほぼ同時に召喚の合図が合唱のように廊下を木霊した。

ドガガガガガガ——ツツツ!!と暴徒のように召喚獣が武器を携えて恐れ知らずと敵陣に突っ込んだ。

すでに激戦区だったBクラス前の踊り場がさらに激しく入り乱れる。特に怖いもの知らずなのはすでに点数が残り僅かな連中だ。

途中でテストを切り上げた人などはほとんど戦える力が残っていないが故に、もう戦死など微塵も恐れてなどいない。

結果として、そうした彼らの捨身の特攻がBクラスを再び慄おのかせるのに十分な材料だった。

『お、おい、やばいんじゃないのか？ まさか突破されないよな……？』

『何言ってるのよ！ Fクラス相手にそんなのありえないっ』

『Fクラスの野郎共、点数が残ってない味方ごと俺達を狙ってくるぞ』

『バカ！ そいつらは困だ！ 構わずに叩け！』

勢いで負けじとBクラスも発破を掛け合って次々と召喚獣の点数を奪っていく。

その様子を少し離れた後ろで静かに見守っていた雄二が、首を動かさず隣に立つ僕達に合図を送った。

「明久、秀吉。もう少ししたら『プラン1』だ」

「オツケー」

「……(くくん)」

正面を向いたまま返事する僕と無言で頷く秀吉。

「いいか。今回の戦争のオーラスはお前達にかかっている。二人が戦死したら、それはすなわちFクラスの敗北と同義だ。それを肝に銘じて置けよ」

「あ、あんまりプレッシャー掛けないでほしいんだけど。なんか緊張するじゃん。足震えそう……」

「ちよつとぐらい神経質なぐらいが丁度いいんだよ。普段のお前は気が抜けすぎてるんだ」

雄二の発言についてむつとする。

そんなことはないと思うんだけど。さすがに試召戦争となればちよつとぐらい気を引き締めてるよ。

「陽動は俺と木下、島田が担当する。向こうも代表が相手じゃ無視するわけにはいかないだろうしな。その際にお前らは一気に戦線を駆け抜けろ」

「僕らはいいけど、雄二達は大丈夫なの？ 作戦が成功しても雄二がやられちゃったら意味ないんだよ？」

「俺を見くびるな。そう簡単に落とされるか。人の心配をする暇があったら自分の仕事に集中しろ」

ま、雄二が負ける場面なんて想像できないし。確かに考えるだけ無駄だ。

主戦場に立つべく、雄二と美波、優子さんは僕と秀吉に背に召喚フィールドに突入す

る。

その雄二の背中が最後に僕に告げた。

「明久、死ぬなよ」

「お互いにね」

さあ、最後の大事な事だ！

☆

『坂本だ！ 代表の坂本がいるぞ！』

Bクラスの誰かが声高に叫んだ。

『なんでFクラス代表がここにいるの？』

『罨か？』

『いや、普通に考えてもうFクラスには人員がいなくてことだろう。つまりもう敵は

瀕死だ』

『ようやく終わりか。長かったぜ』

『全員、坂本を狙えっ！』

召喚獣の矛先が一斉に雄二の方へ向けられる。

「全員！ 俺の前に集まれ！」

こちらも雄二の号令で陣形を切り替え、Fクラス側は雄二を後方に置いて縦三列横五列の計15人の防衛体制へ移行した。

実質、これがFクラス残存人員のすべてだ。

「……が正念場だ。Fクラス、死ぬ気で耐えろっ！」

雄二の号令を合図に、おおおおおオオオ——ツツという怒号と共に前列五人の第一陣が一拳に廊下を蹴って飛び出した。

両陣営が位置している丁度中間ぐらいの場所で召喚獣同士のぶつかり合いが起こった、武器と武器が火花を上げ、まるで爆発が起こったような激しい音が響き渡る。

攻防は点数の差で僅かにこちらが押し負けている状態だが、Fクラスの戦意は微塵も揺るがない。

寧ろこの土壇場での火事場の馬鹿力こそが僕達の最大の強さだ。

力こそ負けるものの、僕達にはそれを覆ってあまりあるチームワークがある。

——でも、それでもやっぱりBクラスとFクラスでもそもそも個々の戦力差に違いがありすぎる。

どれだけうまく連携を取りつつも、向こうは二撃程度僕らを倒せるのに対し、僕らの召喚獣では二人係でようやく一人。

人数が減った今では防戦一方という具合だった。

いくら雄二が直接指揮をとっているからと言って、個人の強さの違いはどうしようもない。

徐々に、少しずつ。Fクラスの召喚獣が倒され雄二を守る防波堤が崩れていくのにもそれほど時間は掛からなかった。

「……一旦下がるぞ」

不利な戦況とした雄二が後退の支持を送る。

『Fクラスの陣形は崩れた！ いいぞ。このままFクラスを突き崩せ！』

これを好機としたBクラスの指揮官らしき男子が大声で指示を飛ばした。

戦場がBクラス前廊下から新校舎の踊り場まで下がる。廊下という狭い一本道から多少フィールドが広くなった分この方がFクラスは戦いやすいだろう。

……さて、そろそろ僕も召喚を開始しよう。

試獣^{サモ}召喚^{モン}の合図と地面に幾何学模様が生まれ僕の召喚獣が現れる。

「明久、……頼んだぞ」

後ろの雄二が小さく、だけど確かに僕にそう言った。

あの捻くれ者で粗暴で乱暴でいつも僕を蔑ろにする雄二が真剣に切実に懇願するみたい。

なら、僕もこう言つてやろう。

「任せて」

短くも、目一杯の力強さでそう答えた。

完全に姿を現した召喚獣を操り廊下を蹴つて、味方の召喚獣の合間を通り抜けるように疾走する。

『吉井！ 俺と戦え！』

真正面から槍を構えた召喚獣が道を遮つてきた。

まあ、さすがに手ぶらで通してくれるわけないよね。

「よし、勝負だー！」

木刀を真つ直ぐに構え直し、僕は召喚獣に攻撃合図を送る。点数では負けてるけど操作技術では絶対に負けない！

目と鼻の先にまで迫つた槍を受けようと木刀を振り上げ……。

「——なんちゃって」

ひよいつ。と身を右に捻り槍を簡単に交わすと、足を軸に床を真つ直ぐに蹴り召喚獣ごと敵を飛び越えた！

意気揚々と戦う気満々だったBクラスの男子は「え……？」と目を丸くして自分の頭の上を抜けていく召喚獣を呆然と見送っていた。

別に驚くほどのことじゃない。召喚獣の力は人間の数倍以上。つまり、単純にジャンプするだけでも平均的な高校生を飛び越えるぐらいわけないのだ。

そしてもう一つ。『対戦を申し込まれたのに拒否した場合は戦死扱いとする』があるが。これは勝負に挑まれたのに無視して召喚フィールドを出ると失格という意味。

逆に言えば、戦いを挑まれたところで無視してフィールドの中を駆け回ったところでルール違反にはならないのである。

予想外の行動にBクラスの視線が一樣に僕の召喚獣に集中する。

「今だ！ 行こう秀吉！」

「っ！」

召喚獣に気を取られている隙に、僕と召喚獣を携えた秀吉が初速全力疾走でBクラスの陣形を隙間を掻い潜って踊り場を走りぬけた。

踊り場からBクラスの教室の扉前で止まらず猪のように直進する。やった！ うまく行っただぞ！

『よ、吉井と木下弟に抜けられた!?!』

『誰か迎撃を!』

『ま、待て。あいつら点数は大した事ない。向こうには近衛部隊もいるからそいつらに任せよう。それより坂本だ』

『そ、そうだな。分かった』

背後を取った僕らに向けられていた視線がなくなつた。

どうやら僕達より雄二を仕留める事を優先したらしい。

僕は一番近いBクラスの扉に手をかける。だけど扉がびくともせずガクガクと小さく揺れるだけだった。

「やっぱり鍵が掛かつてるな」

Bクラスの扉は前と後ろで二つ。Fクラスから近いほうの扉はロックされていた。

まあこれくらいなら観察処分者の召喚獣で壊すことができるんだけど。そこまでやらなくてもいいか。

今回、僕の役目は実質ここまでだしね。

『『試獣^{サモ}召喚^{モン}——！』』

Bクラスのもう一方の扉からぞろぞろと五人ほど生徒が出てきて召喚獣を喚び出してきた。

彼らが近衛部隊だろうか。多分、これがBクラス最後の砦だろう。

代表の根本君を守る為、クラスの中でも特に点数の高い五人を選抜した精鋭部隊に違いない。

『……』までだ吉井、木下』

『何が狙いだっただか知らないが、二人程度で俺達を抜く事ができないぞ?』

「うーん、確かに僕と秀吉じゃあここで終わりかもね」

相手の言うとおり。現状じゃ足止めが精一杯でBクラスの召喚獣を五人も倒すなんて現実的に不可能だ。

そう、僕と秀吉ならね。

「だから、後はお願ひするよ。優子さん」

「ええ。……」まででありがとう吉井君」

僕の隣に立つ秀吉だった人が柔らかい笑みと浮かべ前髪の髪留めを解いた。

そしてもう一度、さつきとは違う位置に髪留めを挿し前髪を整えなおす。

木下秀吉の顔から木下優子の顔へ。まるで手品みたいに一瞬で顔つきが様変わりした。

『なん……?』

『はい?』

呆気に取られポカンとする近衛部隊。うん、その気持ちですごくわかるよ。

正直、最初から全部わかってた僕もちよつとびっくりしているからね。

「ま、そういうわけだから。アタシと相手をしてくれるかしら? 試獣召喚!」

優子さんが掛け声をあげ召喚獣を呼び出す。

幾何学模様から人型の物体が現れ、彼女の足元には優子さん本人の召喚獣と、僕と共

にここまでできた秀吉の召喚獣の二匹がいた。

物凄く瓜二つな二匹の召喚獣は身にまとう衣装と武器が違うだけのまったく同じものに見える。

『な、なんでだよ！ どうして木下の召喚獣が二匹もいるんだ!?!』

『どうしても何も、アタシが秀吉とずっと入れ替わっていたからだけど?』

『じゃあ、はじめからいたその召喚獣は……』

「これは後ろでアタシに変装した秀吉がずっとアタシの近くにいるように操作していただけの罠。アタシがBクラスの包囲網を抜け出すためのね」

あつけらかんと、優子さんはネタをばらした。

僕達は先の監禁未遂で雄二と同等、もしくはそれ以上に今回の戦争でマークされていたのは優子さんだと感づいた。

そこで敵の目を欺く策として、双子の特性を活かし、二人の制服と髪型をそっくりそのまま入れ替えBクラスの包囲網を突破する作戦を立てた。それが雄二の提唱する『プラン1』の内容だ。

でもそれだけだと秀吉本人がパンチが足りないということ、本物の秀吉が先に召喚獣を呼び出し、秀吉に変装した優子さんの傍につかせる。

そうしてあたかも入れ替わった優子さんが秀吉の召喚獣を操っているかのように見

せかけていたのだ。

結果は見ての通り。まんまと騙された五人、いや後ろで戦っていた幾数人のBクラスの人間が目を丸くして優子さんの姿を視界に収めている。

『くそ 代表の下に行かせるか!』

『止める! 木下を止めるんだ!』

僕達の後ろで雄二の護衛班を相手にしていたBクラスの前衛部隊の三人が半ばやくそ気味でこつちに向き直り召喚獣で襲ってきた。

「させない!」

ブン!ブンツ!ブンツ!と僕は迫る召喚獣の足元を木刀で三度横薙ぎに振るい転ばせる。

まともに攻撃を当てたところでほとんど点数は減らないものも、時間稼ぎ程度ならこれでも十分だ!

「絶対、優子さんには近づけさせないよ!」

木刀を握りなおして喉から声を張り上げる。

ここが僕の正念場だ。ここから先は誰一人として僕の後ろを通すわけには行かない!

「……吉井君」

後ろから囁くように小さく僕の名前を呼ぶ声でした。

「——アタシの後ろは任せたからね」

短い言葉。

一息程度で言える程度のその簡単な台詞に、僕は背筋が震えるような衝撃を受けた。足の先から頭の天辺まで自分でもよくわからない鳥肌のような本流が駆け巡る。

目が熱い。動悸が激しい。手に力が入る。足が震える。

そうか。今僕は嬉しいんだ。

この人に、優子さんに頼りにされているということにたまらないほどの歓喜を覚えている。

召喚獣の5、6匹程度、なんてことないなんて思えてしまうぐらいに。僕は全身が高揚していた。

「うん！」

なら、答えないと。

期待に沿えるように、それが今の僕にできるすべてだ！

☆

根本恭二は憤慨していた。

「くそー！ くそくそくそつー！ なんでFクラスなんかを押されてるんだ!」

ダンダン！と床に地団太を打ちながら根本は強く歯軋りする。

底辺クラスだと思っていた。自分達なら片手で軽く捻る程度の労力で簡単に潰せると考えていた。

なのに、蓋を開けてみれば結果は散々。

戦線は教室前まで迫り。敵の切り札たる木下優子の無力化にも失敗。

現在進行形で窮地に立たされている状況に根本は当たりどころのない怒りに震える。

「くそお。あの無能共め。Fクラスなんかにてこずりやがって。それでもBクラスか
！」

近衛部隊が外で木下優子と交戦し教室内が手薄になったことをいいことに決して大声で言えないようなクラスメイト全員に対する罵倒が思わず口から漏れた。

しかも、根本が怒る要因はこの教室自体にもあった。

「しかも今日に限ってエアコンが故障だど？ まったくなんて不幸なザマだ。おかげで汗が止まらないじゃないか」

窓を全開にしても染み渡る熱気にうんざりした様子で根本はシャツの襟元を団扇代わりにぶらぶら扇ぐが正直あまり効果はない。

「……まだだ。まだ終わりじゃない」

根本は熟考する。いくら現状が不利だからといって、Fクラスの主戦力はあくまで木下優子一人。

彼女さえリタイアしてしまえば根本恭二を打倒する戦力はなくなりFクラスは自動的に敗北する。

ならば、多少の危険を冒してでも自分が近衛部隊に加わり木下優子を戦死させてしまえばいいのでなかろうか。

Aクラスの実力があろうと6対1ならこちらに負けはないといって良い。

「そうだ。簡単な話じゃないか。無力化できないのなら、力で始末してしまえばいい。いつも俺がやっているだろ」

自然と、口元に嫌な笑みが浮かべられた。

それは、Fクラスが敗北に帰した時の絶望の顔であり、Fクラス代表の坂本雄二が悔しさに顔を歪ませるところをあざ笑い身の程を思い知らせる。

そんな想像を現実に行けると思うだけで涎が垂れそうなほど美味な光景だった。

物事の全部が自分の掌の上で踊っているような支配感、優越感を覚える。

この場で腹を抱えて爆笑することを自制した自分を褒めてほしいほどだと根本は思った。

「く、くくく……。見てろよ。クズ共が。今にもその緩みきつた表情を絶望と空虚に変えてやる」

……その時。

ふわっと、Bクラスの窓の外で何か細い紐が上から降ってきた。

どこかでひっかけているらしく、それは途中で真っ直ぐに一本の綱になる。

視界の隅でそれに気づいた根本はその不審な紐に首を傾げる。

そして、彼は見た。

薄く細い、一本の紐に体を預け。棒すべりのように上から降って来た一人の生徒と一人の教諭の姿を。

「な……っ。お、お」

予想外にもほどある現象に根本は言葉にならない台詞を紡ぐ。

窓の外、しかも三階より上から消防者のようにやってきた二人は窓枠に足を置くと、ひよいつと身軽な調子で教室に降り立った。

「お前、は……っ!?」

「………プラン2完了。これより代表の根本を打倒する」

「む、む……っ!?」

「………土屋康太。根本恭二に保健体育バトルを申し込む」

「ムツツリイイイニイイイ——つつつ
 根本の絶叫とは無関係に、宣言通り保険体育フィールドがBクラスの教室内に展開された。!!!!!!????????」

「う……、こ、近衛部隊は何をしている!? まだ木下を仕留められないのか!」
 「あら、それならもうアタシ達が倒しちゃったけど?」

ありえないはずの声が教室の扉の方から聞えた。

そこには男子の制服を着て勝利を確信したと言わんばかりの表情を浮かべる木下優子が近衛部隊の残骸を背景に悠然と立っていた。

「き、きのした……!? 何で、何で!? ありえない!!」

「現実逃避する前に早く召喚始めた方がいいんじゃないかしら? このままじゃ試合放棄と見なされて失格になっちゃうわよ? まあアタシはそれでもいいんだけど」

「っ!」

必死に逡巡するが何もいい考えが浮かばない。

後方に土屋康太、前方に木下優子が召喚獣を構えた待ちかえる状況で大逆転ホームラン級のものなど一つたりとも思い浮かばなかった。

体中の熱がすべて放出されたような力ない声で根本は召喚の合図を出し召喚獣を喚び出す。

Fクラス 土屋康太

保健体育 420点

V
S

保健体育 199点

Bクラス 根本恭二

結果などものはや言うまでもない。

根本恭二が敗北することで、最後の試召戦争にピリオドが打たれた。

問24 吉井明久の決意

終戦後の少し時間をおいてからBクラスで僕らは戦後対談を始めた。

「最下級のFクラスに負けた気分はどんなもんだ？ え？ Bクラス代表さんよ」

「……………」

これ見よがしに挑発する雄二に根本君が無言で睨む。

明らかに憎しみ全開の怖い目だけど、正面に立つ雄二はまったく響いていない。

むしろ心地よさげな調子で勝者な笑みを浮かべていた。これじゃどつちが悪役かわからないな。

「じゃあさつそく戦後対談といこうじゃないか」

「…………ふん。何が対談、だ。勝ったクラスは負けたクラスの設備を奪う。それだけだろ。」

荷物の移動でもなんでも好きにしろよ」

「本来ならそうなんだけどな。条件次第で設備の交換を免除してやってもいい」

「…………何？」

根本君の目の色が少し変わる。

雄二の発言に周囲の皆もざわざわと騒ぎはじめた。

「落ち着けみんな。俺達の目標をはAクラスだ。Bクラスはあくまで到達点に過ぎない。そうだろうか?」

「条件とはなんだ坂本」

「そう急くな。ではまず一つ目。これから一日、遅くても二日中にCクラスがBクラスに宣戦布告をするだろう。それに勝ってこい。これが第一の条件だ」

「なんだとっ!?!」

驚く根本君。そしてBクラスの面々にもあちこちに動揺の空気が蔓延していく。

「どうして友香——っ……Cクラスが俺達を狙うんだ!? 普通は試召戦争で勝ったFクラスだろう!?!」

「さあ、それは本人の口から聞いてくれ。とにかくCクラスを倒すんだ。この戦いは和平条約により終結という形にすれば試召戦争のルールには抵触しない」

「……もう一つは?」

「Cクラスを倒した後、Aクラスに試召戦争の準備があると宣言してこい。宣戦布告するな。それだと本当に戦いになっちまうからな。それを守れば設備の交換は免除しよう」

「それは……いや、しかし。もしもCクラスが宣戦布告をしてこなかったらどうする?」
「する。必ずCクラスはお前らに試召戦争を申し込む。これはもう確定路線だ。恋人の

小山を蹴り落とすのは忍びないだろうが、これもクラスメイトと自分の権力回復の為に思つて腹を括るんだな」

「……………くっ」

根本君は飽きられたように無言で項垂れた。

周囲にBクラスの皆が揃っている状況で『恋人を優先して設備をFクラスと交換する』だなんて口が裂けても言えない。そんなことをすれば袋叩きに合うのが目に見える。

これが原因で二人の間に亀裂が入るかもしれないが、根本君も今まで相当悪い事をしてきたので自業自得と割り切ってもらおう。

根本君の無言を肯定と受け取り、雄二はクラスの皆に声を掛けた。

「よし、それじゃ引き上げるぞ。今日はもう帰つて最後のAクラス戦まで英気を養つてくれ」

解散の号令でFクラスの面々は散るようにBクラスから出て行く。

Fクラスがいなくなったことで少し広くなったBクラスから最後に僕達も教室を後にした。

放課後の時間になった新校舎の廊下を歩きながら、僕はさっきの会話で気になったことを隣を歩く雄二に質問してみた。

「雄二、Aクラスを挑発するのはともかくなんでCクラスまで倒す必要があるの？ Cクラスと交渉した時に僕らとは試召戦争をしない代わりにBクラスの設備を渡す予定だったんじゃない？」

「条件を間違えているぞ明久。俺はBクラスの設備を渡すなんて一言も言っていない。ただちよつと弱らせるから攻めるチャンスだと促しただけだ。その役目はすでに終わった。これからCクラスがBクラスに勝てるかどうかは小山の手腕次第だ」

「ならあんな条件を言ったのは何でさ」

「Cクラス代表の小山は短気で挑発に乗りやすいが馬鹿じゃない。仮に俺達がこれからAクラスに勝ち設備を手に入れたとしてもそこをCクラスがピンポイントで狙って俺達に宣戦布告してくる可能性は高い。Aクラス戦後の宣戦布告は不可侵条約の対象外だからな。そういう不安な目は潰しておいたほうがいいだろう？」

「ああ。なるほど……」

「言わんとするところは理解できたけどそれって完全にCクラスを騙してるよね……。さすがにちよつと気の毒に感じる。」

「相変わらず血も涙もない詐欺師みたいなヤツだ。」

でもその雄二の知略のおかげで僕達はここまで勝ち上がって来れたんだから、文句を言える筋合いもなかった。

「坂本君って悪の大王みたいね……」

いつのまにか隣を歩いていた優子さんが呆れた様子で言う。

とても褒め言葉とは言えないが雄二はどこか誇らしげだった。

「なんとでも言ってくれ。これが俺流の戦略だ。俺達みたいな弱小クラスが上の連中と張り合おうってんだからどこかでイカサマでもなんでもして開いた隙間の帳尻を合わせなきゃいけないんだ」

「雄二の場合結果が伴ってくるから、尚更何も言えないよね。さすが元神童」

「……だが捌め手が通用するのもここまでだ。次のAクラス相手に回りくどい策を練っても確実に真正面から崩される。ここからクラスとしても力より個々の実力の底上げをしていかなないと」

「底上げって、まさか今から勉強するの……?」

僕はついげんなりしてしまう。

それは、ちよつと……なんか疲れるから嫌だなあ……。

「馬鹿言うな。CクラスとBクラスの試召戦争で少し間が空くといつてもたった一日二日で劇的に成績があがるか。そんなことする必要はない。そもそも俺達がAクラスレベルに合わせてやる必要がどこにある? んな煩雑なことよりもつと確実に安全な方法がある」

「安全？ どうするつもりなの坂本君？」

「何、俺達がAクラスに追いつけないなら、……………逆にあいつらの方からFクラスのレベルに合わせてもらえばいい」

「??」

何を言っているのかよく理解できない。

雄二の方もあまり詳しく話す気はないのかFクラスの教室に着くとさっさと一人で自分の席まで行ってしまった。

まあ今更雄二の力を値踏みする気はない。DクラスとBクラスを打倒した実績は信頼に値するには十分だ

「お、戻ってきおったな」

「……………今日はおつかれさま」

そんなことを考えていると先に教室に戻っていた秀吉とムツツリーニが雄二と入れ替わる形で僕らの前にやってきた。

「秀吉、ムツツリーニ！ おつかれ！ ついにBクラスも倒せたねっ」

「そうじゃな。Fクラスのワシらがまさかここまで勝ち続けられるとはちよつと感動ものじゃのう」

「……………確かに、すごい成果。自分でも信じられない」

「もう、今から喜んでどうするのよ。アタシ達はまだこれからAクラスとも戦わなきゃいけないんだからまだ感動するのは早いわよ」

「……………木下優子は空気が読めない（ボン）」

「あん？　なんか言った土屋君？」

「ま、まあまあ！　Bクラスに勝てただけでも奇跡のようなものなのじゃから姉上もそう気負わなくとも良いではないか」

「秀吉の言うとおりだよ。みんなに勝利を祝うのに回数制限なんてないんだから今はBクラスに勝てたことを素直に喜ぼう。ね？」

「……………まあ、べ……………別にいいけど」

照れくさそうに顔を逸らして呟く優子さん。ホントは一緒に祝いたいのに強がっている感じがひしひしと伝わってくる。素直じゃないなあ。そんなところも可愛いんだけど。

「しかし、これで残るのは最後の皆Aクラスじゃな。これに勝てばついにワシらはこのボロい教室からおさらばできるのじゃ」

教室を見回しながら秀吉は感慨深そうな調子で言った。

「……………システムデスク、プラズマ液晶、ジュース飲み放題。天国のような日々はもうすぐ」

「……なんかこのままAクラスの設備に変わってもただ騒ぎまくる光景しか想像できないわ。学校は勉強するところだっていう大前提を完全に忘れてるわね」

「……………はは、そうだね」

溜め息交じりに紡がれた優子さんの台詞に僕は勝利の余韻で暖まっていた体の体温が急激に下がった感じがした。

これまで意識的に考える事を避けていた問題がついに現実で直面しようしていた。

この先、もし僕らがAクラスに試召戦争を挑み、勝つたとする。

そうすればAクラスの設備は実質的に僕達Fクラスのものになり、最低でもこれより半年は安寧な学園生活を送ることができる。

だけど、それはFクラスの事情。

ただいい設備で遊んで暮らしたいというFクラスと共に優子さんがAクラスの教室を手に入れても、その中にあるのは馬鹿だらけのFクラスだ。

つまり、彼女にとつてはただ勉強する教室が移動しただけで、本質的な部分は何も変わっていない。

試召戦争で負ければ当然設備は今のまま。……いや、もしかしたらさらにランクダウンするかもしれない。

そう、このままじゃAクラスに勝つても負けても優子さんを取り巻く環境は一つも変

化しない。

僕が試召戦争をしようと思ったきっかけは優子さんにAクラスの設備でのびのびと勉強してほしかったからだ。

その為にはただ設備を手に入れるのではなく、優子さんをAクラスという枠組みに入れる且つ設備も手に入れなければならない。

まるで子どもの我儘のような要求だが、それが優子さんにとって一番であるのなら僕はそれを叶えたいと思ってる。

……………そして、その為の用意もすでにある。

「? 吉井君? どうかしたの?」

考えに没頭していた僕に優子さんは首を傾げて声を掛けてきた。

僕は不意打ちを受けたように肩を震わせてつい声が上がってしまった。

「あ!? な……………なんでもないなんでもない! ちよつとぼーつとしてた」

「疲れてるんじゃない? 今日は特に体力も使っただろうし早めに帰って休みなさいよ」

「そうだね。そうするよ。……………けど、その前に話しておかなきゃいけないことがあるんだ。みんなに」

「どうしたのじゃ改まって」

「……………試召戦争に関する何か？」

「一応……………」

緊張して言葉が尻すぼみになる。

これから言う事は、最悪僕がFクラスで孤立する原因にもなりかねない爆弾級のものだ。

いきなり全クラスメイトの前でなんて雄二のように鋼のメンタルでもないとしても言えないから、先の友達にみんなに話しておきたい。

帰り支度をしていた雄二も呼んでから、僕は体に入れて渴く喉に唾で潤し覚悟を決めて口を開いた。

「実は、この試召戦争に関することで僕は学園長とある約束をしたんだ」

数日前の話。

まだDクラスとの試召戦争の前に優子さんをAクラスに入れてくれるよう学園長に懇願した。

最初は相手にされなかったが、粘った末条件付きで要求を聞き入れてくれることができた。

優子さんをAクラスに入れる条件。

それは第一に、FクラスがAクラスとの試召戦争で勝利すること。

そして、優子さん自身が召喚獣勝負で学年主席、もしくは次席に勝つこと。

この二つができればもう一度優子さんにもう一度振り分け試験をしてもいいと学園長の口から直接言い渡された。

このAクラスという枠組みには当然教室も入っている。

なので、Fクラスが勝つても設備の入れ替えはできない。Aクラスの教室に入ることできるのは優子さん一人だけということになる。

僕達にとってはハイリスクノーリターン。苦勞して勝つたのに自分達に戻るものは何もないのだから、当然クラスメイトからの非難は避けられない。

だから、この直前まで誰にも話すことができなかった。

「「……………」」

僕の説明を聴いた皆は一様に無言だった。

その中、ただ一人顎に指を当てて考え込んでいる雄二が確認するように告げた。

「…………ちよつとヤバイな、こんなことクラスの連中に知れたら間違いなく暴動が起きる。試召戦争はおろかクラスの秩序を保つことすら困難になるぞ」

「ゴメン雄二。でも僕はどうしてもそうしたいんだ。この所為でたとえクラス中から非難されようともやり遂げたい。……駄目、かな？」

「本気か？」

「勿論」

刺すような視線と共に向けられた言葉に僕は目を逸らさず即答した。

「明久の覚悟はよくわかったが。こればかりは俺だけの意見で押し通すのは難しい。何せクラス全体に関わることだからな」

「やっぱり大変だよな」

「当たり前だ。——それを踏まえて話したんだろ」

「うん」

困難なのは学園長と取引をした時から分かっていたことだ。今更そんなことで折れるほど浅い決意じゃない。いざとなればクラス全員と喧嘩する腹づもりもある。それぐらいマジだ。

「……設備は惜しいが。ワシは、正直言って振り分け試験で姉上が倒れてFクラスなつてしまったことを気に病んでおった。じゃからもし明久の提案が実現できるならワシは明久の友として、姉上の家族として明久を支持したいのじゃ」

「秀吉……」

「……………友達とこれからも一緒にクラスでいられるなら俺はどこでもいい」

「俺は設備なんかには興味はねえ。ほしいのはAクラスに勝ったという確実な『実績』だからな。明久がした交換条件と俺個人には特に問題はない」

「雄二、ムッツリーニ、みんな……。ありがとう」

僕は感動して思わず目から涙が出そうになった。

こんなに自分勝手な望みに、不満の一つも言わず賛成してくれる友達を持って僕は心から幸せ者だと思った。

感謝しきれないほどの嬉しさが体の中で爆発的に膨れ上がる。

顔がニヤけないよう頬の筋肉に力を込めるのが大変だ。みんなの為にも、絶対に成功させたい。

再び和気藹々としそうな雰囲気の時、雄二は顔がある人の方へ向けた。

「お前は何か言う事はないのか、木下優子」

四人の視線が優子さんを集まる。

「……別に。吉井君がそうしたいんじゃないんじやない？」

ある意味この話の中心人物であるはずなのに優子さんの話し言葉はまるで他人事のようにだった。

「ずいぶん軽いな。それだけか？」

「吉井君の目的は前にも聞いてたし、今更アタシが何を言っても吉井君が考えを変えることはないって分かってるもの。なら言うだけ無駄でしょ」

ふんつと鼻を鳴らす優子さん。見るからに怒っている様子だがその顔は不機嫌とい

うより何か拗ねているような感じだった。

まあ、優子さんがなんと言おうとやると言ってしまったのは自分だし、元より感謝など求めていないんだからこの返答は当然だ。

「そうだな。こうなった明久は頑固だからな。俺達は何を言ったって無意味だ」

「失礼な。そこまで猪突猛進じゃないよ僕は」

「じゃあ俺達が断るって言ったら素直に諦めたのか？」

「……………」

雄二の台詞に思わず黙り込む。

「だろ。どうせお前に『やらない』なんて選択肢が初めから頭の中に入っていないのは分かりきってる。だったら勝手にあれこれさせるより近くで監視していた方が安全だ」

「明久のことじゃからたとえワシらに拒否されても裏で学園長と結託して実行に移しちゃうじゃの」

「……………（こくん）、一人でもやるに違いない」

「秀吉、ムツツリーニまで…………」

むう。実際にその通りのことをしたかもしれないのだから反論ができない。

「いや、みんながそう思ってるならそれでいいよ…………」

「安心せい。そこが明久の魅力でもあるのじゃから。のう姉上」

「な、なんでそこでアタシに振るのよっ」

「いやなに、ここまで自分の為に尽くされたておるのじゃから何か思うところがあつても不思議じゃなからうと思つての」

「それは……ないこともないけど」

ちらちらと僕の方を見ながら歯切れ悪く呟く優子さん。

うっ。そんな風に見られるとなんかこそばゆいなあ……。理由もなく照れてしまう。

「……………」

「……………」

目を合わせたまま沈黙しあう僕ら。

な、なんだこのぬるい空気は。

体もなんだか段々と熱くなってきたし、頭もくらくらしてきた。

この程度で動悸が早まるなんて。僕はまだ未熟者だ。

「あー、悪いがいちやつくのは俺達のいないところで頼む。胃がムカムカしそうだから」

「……………激しく同意」

「なっ、誰がいちやつくつてのよ！ 変な勘違いしないで！」

「そ、そうだよ雄二！ 僕は別にそんなやましいことなんて！」

急に何を言い出すんだコイツは！ 僕は動揺なんてしていないぞつ！

この心臓の高鳴りはただの武者震いだ。そうに違いない。

「今更何を取り繕ってるんだ。さっきの試召戦争の話で明久がどれだけ木下のことを大事に思ってるかは十分に伝わったんだからもうそんな瑣末なことで恥ずかしの必要はないだろうに」

取り付く僕達に雄二はからかうというより呆れた風に口を開いた。

あれ、そういう意味だったのか。それならまあ――。

「ちよつと！ 何言ってるのよ坂本君！」

「そっだよ雄二。そんなの当たり前じゃないか」

「――えっ？」

僕以外の全員の声が重なった。

そして一様に驚いた顔をして僕を見る。え、僕何か変なこと言った？

「?? どうしたのみんな。僕おかしなこと言った？」

「い、いや。そうではないのじゃが。明久よ、お主も存外大胆じゃな……」

「煽っておいてなんだが、まさかそんな返しがくるとは思わなかった。明久、お前意外とやるな」

「……………予想外」

「は？」

なんか会話の流れがおかしい。みんなの意識と僕の意識が乖離しているみたいに感じる。

「よ、吉井君、今のつてどういう意味……なの？」

優子さんは何故か今までにないほど顔を真っ赤にしてそう尋ねてきた。

「えと——意味と言われても」

なぜだろう。他意はないはずなのに言葉が尻すぼみになる。

まるで何かを期待しているかのような優子さんの瞳に見つめられていると、自分は何か悪いことをしているんじゃないかと錯覚してしまいそうになる。

「言つたままだよ。何か気に障る部分でもあった、かな？」

「っ!? そ、そういうことじゃなくて! 大体なんでそんな大切なことをこんなところで言うのよ! もつとこう雰囲気つてものがあるでしょ!」

「?? よくわからないけど。どこであろうと言う事は変わらないよ?」

「——っ!? 馬鹿馬鹿! このおお馬鹿っ! だからそういうのは二人つきりの時とかに言つてくれれば……アタシだって……」

痴癪を起したみたいにならぬと思えば、今度は花も恥らう乙女のように首まで赤くして俯いた。

——どうして優子さんがこんな状態なのか分からないのは僕が男だからなのだろうか……？」

「……俺達、出てった方がいいか？」

「うむ。なんだかいたたまれなくなってきたのじゃ……」

「……………息苦しい」

「え？ ちよつと待つてよ。まだ話し合わないといけないことがあるんだから、まだ帰らないですよ」

「そうは言っても。お前が急に惚気だした所為でもう話し合いなんて空気じゃないだろ」

「何ふざけてるのさ雄二は。僕がいつ惚気たつて？」

「……………筋金入りの鈍感」

「ここまでくるともはやわざとではないかと邪推してしまいうじや。明久の鈍感っぷりは今に始まったことではないが今日に特に磨きが掛かっておるのう」

「ああ。段々腹が立つてきたな」

「なんでさ!?!」

「今まで自分の言った言葉を反芻してみろ。そして冷静に意味を考えてみる。そこで借りてきた猫みたいに縮こまつてる木下を見ながらな」

「確かにさつきから優子さんの様子は変だけど。僕は普通に思ったことを言っただけなんだけどなあ」

「木下のことが大切だつてことがか？」

「??」だつてそうでしょ? これまで一緒に試召戦争を勝ち抜いてきた仲間なんだし、僕の目的は優子さんをAクラスに入れてあげることなんだから大事じゃないわけじゃないか」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

驚いたかと思えば今度は一斉に沈黙しあう一同。さつきからなんだ。意味が分からないぞ。

「待て明久。それはつまり、今までののは単純に仲間として大事つてことか?」
「決まつてるでしょ。勿論、秀吉やムツリーニのことも大事だよ」

……まあ優子さんに対しては今とは別とは別の”好意”もあるけど、さすがにみんなの前では恥ずかしくて言えないよね。

いや、二人つぎりの状況でも言える自信がない。

「あー。なんかスマン。俺としたことが明久の馬鹿っぷりを侮ってた」

「……………」

「お、落ち着くのじゃ姉上！ このぐらいで怒っていても明久と付き合ってはおれんぞ
！」

「……………帰る」

「へ？ 待つてよ優子さん。まだクラスの不満を抑える為の話が終わってないよ！」

「うるさい！ 帰るったら帰るの！」

「やけぐそ気味に顔を真っ赤にして憤慨した優子さんはそのまま鞆を持って荒々しい
足どりで教室を出て行った。」

あのお。……………結局、僕には一連の行動の意味が不明なままなんですけど。

「……………雄二、今のなんだったの？ ひよっとして僕もの凄く嫌われちゃった……………」

「さすがにちよつと木下が気の毒になったな……………」

「明久よ。姉上にはワシからよく言っておくからどうか姉上の気持ちにも気づいてあげ
てほしいのじゃ」

「??？」

優子さんの気持ち——？

「もう気にするな。終わったことだ。まあ最低限嫌われてはいないってことだけは確か

だぞ」

「え？　そ、そう？」

話の流れはさっぱりだけど、優子さんに嫌われてないんだつたらよかった。

「そんなことより試召戦争のことだ。明久が持つてきた条件を完遂するにはなんとかしてクラスを納得させる材料を持つてこないといけない」

雄二は話題を切り替え表情を改める。

そうだった。ちよつと雰囲気殺伐としちやつたけど。クラスの問題にまつたくいい案がないんだつた。

「——んだが。俺にちよつと考えがある」

が、ここで雄二がそんなことを言い出した。

「えつ、ほんと雄二？」

「と言つても別段特別でもなんでもないが。そもそも、明久の癖に俺に黙つてあのバア長に取引なんて生意気なんだよ」

「なつ!!?　なんだと！　僕だつて割りと真剣に——つ!!?」

「あーわかつたわかつた。とりあえず今から学園長室へ行くぞ」

「学園長？　これからゆくのか雄二よ？」

「たりまえだ。決めたからには即行動が俺のやり方だ。ほら行くぞ」

「ちよつ、雄二！ 後ろの襟首を引つ張られるとネクタイで首が……っ！ ギブ！ ギブ……っ!!」

意識を失いそうな状態のまま僕は雄二に学園長室まで連行されていった。

☆

「失礼します」

ノックもしないまま雄二は学園長室に進入した。

「順番を間違えてるよクソガキ。まずはノックをしてから入りな」

室内の一段とえらそうな椅子に腰を下ろす学園長は道のゴミを見るような目で僕達を一瞥する。

生徒をクソガキ呼ばわりなんて、相変わらず腹が立つババアだ。

「火急の用件なので省かせてもらいました。気にしないでください学園長」

「それはアンタが言う台詞じゃないよ！」

「すみませぬのじや学園長。実は折り入って学園長とお話したいしたいことがあるのじやがお時間はよいじやろうか」

「……ふんっ。言ってみな」

「この明久が学園長に持ち出した試召戦争の約束の話です」

「ああ。そういえばそんなこともあったね」

学園長が僕を見ながら思い出したように言う。まさか忘れてたのか!?

「その取引の内容を、少しだけ変えさせてほしい」

「何……?」

「ど、どうということ雄二!? 僕も聞いていないよそれは!」

「お前は黙ってろ。話がこじれる。心配しなくても別に悪いことにはしない」

「どうということだい? 言っとくけど条件を緩和してくれなんてことなら聞く耳もたないよ」

「それはわかってる。俺が言いたいのは報酬の話だ。明久から聞いた話じゃ、俺達が試召戦争でAクラスに勝てば木下優子にもう一度振り分け試験を実施してくれる。そう

だな?」

「ああ。そうだよ」

「それだが、木下だけじゃなくFクラス全員に実施してほしい。それだけだ」

問25 姫路瑞希の人生で一番の……

Bクラスと試召戦争をした翌日。

『ヤベー、昨日の試召戦争の疲れがとれね。眠みー……』

『俺なんて帰ってからゲーム8時間しかできなかったぜ』

『ガッツリやつてるじゃねえか。……ところでジャンルは何だ?』

『昨日は美少女女子高生を催眠術で操ってグヘヘアハハ』

『俺今日お前ん家行くわ』

先生が来るまでの自由時間各々が好き勝手やっている最中、朝のHRが始まる前に雄二は教壇に立って軽く教卓を叩きクラスの注目を集めた。

「みんな、聞いてくれ」

『うん? どうかしたのか坂本?』

「ああ。だがまずは最初に俺はみんなに労いの言葉を贈りたい。昨日の試召戦争よく最後まで諦めず戦ってくれた。今俺がこうして代表の席につけているのは一重にクラスメイト全員のおかげだ。ありがとう」

雄二は恭しく頭を下げる。

おお、あの雄二がこんなに素直にお礼を言っているなんてなんだかすごい珍しい。それほどまでに雄二にとつてもこの試召戦争は大事なものであるようだ。

そう思ったのは僕だけではないようで、馬の尻尾のようにポニーテールを揺らしながら美波は少し照れたような様子で言葉を返す。

「坂本が素直にお礼なんて、なんかむず痒いわね」

「俺もそう思う。だがこれは俺の偽れざる気持ちだ。ここまで来た以上絶対にAクラスにも勝ちたい。いや、必ず勝つ！ その為みんなの力を俺に貸してくれ！ そして先生共に勉強だけがすべてじゃないことを教えてやろうぜ！」

『おっしゃーっ！』

『やったるでー！』

最後の戦いに向けてクラスの気持ちの一つになっている。そんな気がした。

「さて、ここからが本題なんだが。……実は最後のAクラス戦に向けて、俺、正確には俺とそこにいる明久は学園長に一つ取引をした。もし俺達がAクラスに勝てた場合もう一度振り分け試験を全員に再考してくれることになった」

『振り分け試験を!?!』

『でも、その場合設備はどうなるんだ？ 俺達がAクラスに勝てたらこのボロ教室から

出られるんじゃないのか!?!』

教室がだんだん騒がしくなり始める。

壇上の雄二はあえてそれを静めようとはせず、自然に収まるまで無言で立ち尽くしていた。

そうして十分ほどでようやく場が落ち着いてから、再び口を開く。

「みんなの言いたい事はもつともだ。……だけど今一度考えてほしい。仮に俺達はAクラスに勝ちシステムデスクを手に入れたとしよう。Aクラスの設備は確かに良い。しかし、お前らはそれで本当に満足なのか？」

『なに?』

『どういうことだよ』

「……いいか。俺達がAクラスの教室に移動できても、そこに……女子はいない……」

『『な、何iiiiiiii——っ?!?!?』』

教室が絶叫で包まれた。

「あの、坂本、ウチらは……?」

「島田や木下姉妹でも三人だ。この何十もの生徒の中でたった三人だぞ! そんなので

お前らは満足なのか!」

『そうだった!?! 俺はなんて大事なことを忘れていたんだ!』

『女子のいない教室なんてルーのないカレーと同じじゃないか!』

『男子ばつかりのクラスなんてもう嫌だ!』

あちこちから絶叫の聲が飛び出す。

「ちよつと、何気に失礼じゃないかしら坂本君」

「ワシは男なのじゃが……」

少数派の女子陣が顔をしかめて抗議するが皆絶望に打ち震えていて誰も見ていない。

クラス中が葬式ムードに突入しかけた時、雄二は暗い空気を吹き飛ばすように一段と大きく教卓に両手を叩き落して声高に叫んだ。

「そうだろう! だが振り分け試験をもう一度行えば俺達は好きなクラスに行く事ができる。何もAクラスでなくてもいい。気になる女子が在籍しているクラスでもどこでも好きにだ!」

『そういうことか!』

『……実は俺Cクラスでちよつと目を掛けてる人がいるんだよね』

『俺は試召戦争の時にあるBクラスの女子に一目惚れした!』

『人生をやり直すチャンスキタコレ!』

「そうだ! Aクラスに勝ちさえすれば俺達全員の望みを叶える事ができる! これが真正正銘のラストバトル! みんなの願いを叶える為、クラスの力をあと少しだけ俺に貸してくれ! 目指すは理想郷! ここが俺達の分水嶺だ!」

『『『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお———つつつつ』』』』

雄二を中心に燃えるような大声が教室を覆った。

まるで新しい新興宗教のようだ。

ここままでやる気になったクラスメイトを実はまるごと騙してますなんて知られたら、僕と雄二は間違いなく殺されるな。ぶっちゃけ少しでも考えれば不慮の事故でFクラスになってしまった優子さん以外は完全に自分の実力でここにいるんだから、今更もう一回テストをしたってもう一度Fクラスに配属され直されるだけなんだから。頭の中はもうAクラスに勝った時のことばかりでそこまで考えてる人なんて誰もいない。

「アキ? 何安心したように溜め息ついてるの?」

「いや、クラスが馬鹿でよかったなあって」

「?」

「坂本君、もういいですか?」

「ん? ああ先生。はい、もう大丈夫です」

「そうですか。では席についてください。HRを始めますよ」

いつのまにか来ていた福原先生が雄二と入れ替わるように教壇に立ちいつもの時間に戻った。

授業を聞き流してる時間を過ごしているうちにすぐ昼休みになり僕らは二つの卓袱台を隣合わせに引つ付けてお弁当タイムに入っていた。

「最初はグー！」 ↑ 明久

「じゃんけん——っ」 ↑ 雄二

「ポンっ！」 秀吉&ムツツリーニ

グー（明久、秀吉、雄二、優子）

チヨキ（美波、ムツツリーニ）

「あああ、負けたあ!？」

「……………くっ、無念」

「やったあ僕らの勝ち！ それじゃあ僕は麦茶ね」

「俺はコーラを頼む」

「すまぬな。ワシも緑茶を頼むぞい」

「アタシは紅茶でお願い」

「はいはい。負けたものは仕方ないわね」

「……………行ってくる」

肩を落ししながら美波とムツツリー二は一緒に教室を出て行った。

何故こんなことをしているかというところ、昼休みになってからいつも通りみんなでお弁当を食べようとした時（僕以外の）みんなが一斉に飲み物を買に行こうとした。それで全員でそろそろ行くのは迷惑じゃないかということとせつかくだからゲームでもして負けたやつがみんなのジュースを奢りにしようぜ！ということに発展して今に至る。

ふう、危なかった……。ただでさえ残金がない僕が負けてしまったらこの歳で借金に手を出すところだったよ。

「しかしなんだかんだいって木下もFクラスに染まってきたな」

特に迷いもなく賭けじゃんけんに参加した優子さんを見て雄二はほつりと言う。

それが気に障ったのか優子さんは嫌そうな顔で反論した。

「……別に染まってないわよ。ただあの状況で一人だけやらなかったら感じ悪いみたい
に思われるじゃない。それが嫌だっただけよ」

「別にそこまでは思わんがの。参加するかは自由じゃし」

「そうだよ。僕なんて元々買う気なかったもん。結果的にタダで飲み物を手に入れられてラッキーだったしね」

「いいのよ。やろうがやるまいがどっちもみち秀吉に買いに行かせるつもりだったから」

「ワシはパシリ決定じゃったのか!？」

パシリ要員にされかけていた秀吉がシヨックを受けた顔をする。

なんだか最近優子さんの性格が人がいる状況でも普通に碎けてきているな。

それがいいのか悪いのか僕には計れないけど、こうして友達として和氣藹々とできるのは悪くない。

「みんなで楽しいことができるのはいいことじゃないか。ほら、住めば都って言うし」

「Fクラスはどつちかというと廃墟だがな」

「隙間風吹き放題。床はボロボロの畳。机は傷だらけ卓袱台。学園側もよくもまあこんな設備を設けたものじゃのう」

「こゝまでするとなんか時代が逆行してる感があるよな」

「旧校舎自体がもう古いもの。根元がもう駄目なんだから教室をどれだけ綺麗にしても新校舎と同じになんて絶対にならないわね。だからこそ試召戦争が重要なものよ。それにしてても教室を奪い合うなんてうまく考えたものね学園長も」

箸でお弁当を突きながらそれぞれ思い思いの意見を言い合う。

んー。今日も優子さんのお弁当美味しいなあ。これがあと少しで食べられなくなると思うと、試召戦争を始めたくないなんて邪な考えが思い浮かんでしまう。

いやいや駄目だ駄目だ。目的を見失うな吉井明久！ 僕がすべきことはAクラスに勝つて優子さんをちゃんとFクラスから送り出す事なんだから。道半ばで立ち止まっ

てどうするんだ。

「……何やってんだ明久。さっきから挙動不審だぞ」

正面の雄二が僕の顔を見ながらそんな指摘をしてきた。おっといけないいけない。つい顔に出てしまっていたみたいだ。自制しなきゃ。

雄二の発言に僕の隣に座っている優子さんは僕の様子を伺いながら声を掛けてきた。「ひよつとしてお弁当のおかずにおかずに変な味でもあった？ おかしいわね。ちゃんと下の段階から全部味見はしたはずなんだけど……」

「ち、違うよ！ 優子さんのお弁当はすごく美味しいから何の問題もないよ！ むしろ大満足なぐらいよく出来てる！ そつちじゃなくて、もうすぐAクラスと戦えるのかと思うとなんか緊張しちゃってさ」

「明久にしては珍しい反応じゃのう。じゃが気持ちは分かるぞ」

「おいおい今からそんなのでどうするんだ。まだ本番まで時間があるっていうのに」

「あはは、もう心配性だな雄二は。試召戦争が始まった真面目に戦うから大丈夫だよ。僕のメンタルは比較的強い方だからね」

「そうだな。サツカーボールみたいに表面硬くて中身スツカスカだもんな」

何故だろう。まったく褒められた気がしない。

「ちよつと。それは僕を馬鹿にしてるよね雄二。これでも僕は鉄の胃袋ならぬ鉄の精神

を持つて生まれたんだから本番には強い方に決まってるじゃないか」
「それを言うなら鋼の精神じゃないの？」

う……………つ、ちよ、ちよつと言いだ間違えただけだ！

「ど、どつちでも意味は通じるはずだから大丈夫だよ！ ……多分」

「明久。鉄の元素記号は何か分かるか？」

「え!? ……えつと……………ん……………、あ、て……………T e?」

「F eじゃ」

「……………り、理系は苦手分野なんだ」

「こんな基礎的なものに文理は関係ないだろ」

「あと補足しておくくとT eの元素記号はテルルね」

て、テル……………? それ何語……………? どんな意味?

「はあ……………。おい明久、いつもとは言わんがせめて試召戦争の間くらいはきちんと勉強しとけよ」

「……………はこ」

あれ、なんで僕昼食の場で怒られてるの……………?

「いいか。俺達はもう引き返せないとこまで来たんだ。……………特に俺と明久は今朝の話の件の真相がクラスに知れたら島流しどころじゃすまないしな」

後半から声を萎めて雄二は確認するように言った。

僕らもそれに合わせて少し声を抑えめにする。

「……あれで本当に良かったの？ 僕はなんだか根本的な問題がうやむやになってるだけな気がするんだけど」

「現状ではあれ以外に最善策は思いつかなかった。そもそもクラス全体が満足して且つ木下優子をAクラスに編入させることは100%不可能なんだ。言わば0か100の両極端。50対50にはできない。だから最後にはどちらか一方が妥協するしかない。その天秤を俺は木下優子の側に傾けただけだ」

「そしてその手段を振り分け試験という自分の実力如何でギリギリなんとかいけると思わせる手段を用いることで軋轢を少なくするのじゃな」

「設備の入れ替えと違って振り分け試験の場合、責任も結果も全部自分だけのものだからな。そりゃあ多少の文句も出てくるだろうが、一度自分から同意してしまった責から他人にだけ強くは責められない。これが今出来る俺からの最大限の譲歩だと思ってる」

「そうだね。うん。ありがとう雄二」

素直に礼を言う。

まったく、この試召戦争の数日だけで僕は雄二にかなり貸しを作ってしまった。これ

は後で何を要求されるかちよつと怖いな。

残り日数は少ないけど、僕もちゃんと勉強してみんなに少しでも多く貢献しなければいけないと心の内で改めて誓った。

「……吉井君。本当にこれでよかつたの?」

隣の優子さんが気持ち沈んだ声で僕に問うてきた。

「どつどつ、うん」と?」

「前に貴方は『僕は僕がそうしたいから優子さんをAクラスにする』ってアタシに言ったわよね。……あのときはつい滅茶苦茶言っちゃったけど、今はその気持ち嬉しいし感謝もしてる。でも、それって吉井君にとつてクラス全体を欺いてまでしなきゃいけないことなの? 吉井君自身の立場が悪くなるかもしれないのに。そうまでして吉井君に何が返るっていうのよ……」

優子さんの声は、怒っている様にも悲しんでいる様にも聴こえた。

ひよつとして僕を心配してくれてるのかな? だとしたら少し申し訳ない気分になる。

でも、一体なんて答えたものだろうか。ここで下手に誤魔化しなんてしたら引つ叩かれそうな心配だしなあ。

小細工できないなら、思ったことをそのまま伝えるしかないよね……。

「価値はあるよ。僕にも優子さんにも。優子さんはAクラスになれたら今よりも何倍も良い環境で勉強ができるんだ。それに比べればちよつとクラスで悪口言われるぐらいなんてことないよ」

「それで、吉井君には何があるの？」

「僕は、嬉しい」

「え……っ？」

「優子さんが、Aクラスに入ることが出来たら僕は嬉しい。………つてまあそれだけなんだけど、形あるものがすべてじゃないっていうか……。僕にとつてはたったそれだけでも十分な価値だよ」

「……………」

優子さんは目を丸くして意外なものを見たような表情で固まっていた。

うう、なんだか言つてて恥ずかしくなつてきたなあ。

美波達早く帰つてきてくれないかな。

「……それだけ？ 本当にそれだけなの——？」

「いや、強いて上げればこの学園の制度に対する反抗とかいろいろあるけど。一番なのはそれかな。優子さんだって、いつまでもこんな男子ばかりでボロい教室なんて嫌でしょ？」

「アタシは……」

その時、ガララつと音を立てて教室の扉が開いた。

「アキー！ お客さんよ！」

両手一杯に飲み物を抱えた美波が扉の前で大声で僕の名前を呼んだ。お客さん？

誰だろう？

「うんすぐ行くよ！ ごめん優子さん、今なんて言ったのかな？」

「……ううん。なんでもない。それより早く行って来なさい。せつかく会いに来てくれたのに待たせたら申し訳ないでしょう」

「ん、そうだね。じゃあちよつと行って来るよ」

僕は箸を卓袱台の天板に置いて立ち上がりみんなに背中を向けて教室を出た。

「あれ、姫路さん？」

廊下に出ると、すぐ近くにふんわりした長い髪と豊満な胸を持つAクラスの姫路さんがオロオロした様子でそこにいた。……お客さんって姫路さんのこと？

彼女は僕の存在に気づくとビクツと肩を驚かせた。

「よ、吉井君!？」

「そ、そうだけど……。僕にお客さんって姫路さんだったの？」

「はい……。あの、ご迷惑だったですか？」

「全然平気だよ！ 姫路さんに呼ばれるなんて嬉しいぐらいだし。それで僕に用って何かな？」

「それは、ですわね」

周囲をキョロキョロを見回す姫路さん。ん？ なんだろう。人に聞かれると困ることでもあるのかな。

「吉井君、今日の放課後空いてますか？」

「放課後？ うん、今日は試召戦争も何もないし大丈夫だよ」

「良かった……。それでしたらその時間、屋上に来てくれませんか？ ……その、聞いてほしいことがあるんです……………」

後半になるつれどんどん声小さくなる。最後はうまく聞き取れなかった。

「？ それは勿論良いけど。今じゃ言えないことなの？」

「い、今ですか！？ それは……ちよつと。ここでは人が多すぎますし……………」

ふむ、つまり姫路さんにとつては何か重要なことみたいだ。

「うん。分かったよ。それじゃあ放課後屋上で待つてるね」

「っ！ はい！ よろしくお願います！」

僕の返事に満点の笑みになるとペコリと頭を下げて姫路さんはウサギのようにささっと新校舎の方へ行ってしまった。

話って何なんだろう。雰囲気的に人に聞かれたくない類のものっぽいけど……。ま、まさか告白とか!? 好きです付き合ってくださいいななんて!?!……てさすがにないか。男の悲しいサガだよ。こういう場面だとすぐ勘違いしちゃう。

でも……うーん。最後に見せた笑顔、ちよつとグラつときたよ。いつまでもたつてもあの笑顔には勝てる気がしない。

「……しようがないよね。姫路さんは僕にとつて、初恋の人だったんだから」
それは、小学生の頃から想い続いていた懐かしくもある夢だった。

☆

約束通り、僕は放課後になると屋上のベンチで姫路さんが来るのを待っていた。

AクラスはLHRが遅かったのか、彼女が屋上に来たのは僕が来てから30分もした後だった。

「す、すみません吉井君。遅れてしまつて」

「僕は平気だよ。姫路さんこそ大丈夫? 肩で息しているけど体調良くないんじゃない? ……」

姫路さんは昔から体が弱かった。体育は休みが多かったし、病欠で休みことも結構

あったことを覚えている。

「い、いえ。これはただここまで来るのに走って来て疲れてしまっただけですから大丈夫です」

「え、ええ!?! それ全然大丈夫じゃないよ! 姫路さんただでさえ人より体が弱いんだからちゃんと自分の身を大事にしないと。何かあつてからじゃ遅いんだよ……?」

「あ……ごめんなさい。これからは気をつけます。……ふふつ、吉井君はやっぱり優しいですね」

「こ、これは……まあ小学生の頃から知つて覚えてたから」

急に顔が熱くなつて姫路さんから顔を逸らす。

姫路さん、今は距離が近いからなんか変な気分だ。しかもいい匂いまでするし。

姫路瑞希さん。容姿は背は小さく可愛くて胸も大きい。性格も見ての通り人を思いやることができ誰にでも分け隔てなく優しい。おまけに頭も学年次席になるぐらい良いというまるでチートのような完全無欠な少女。

あまり感情を表に出せず体が弱く運動があまり得意ではないというところがあるが、彼女の可愛さの前ではそれすらも長所に思えるぐらい魅力的だった。

「……そうですね。私と吉井君はそんな小さい頃からずつと近くに居たんですよね」

記憶の底の底へ、思い出という宝物を水面に汲み上げるように姫路さんは大空を見上

げながら呟いた。

それで僕も心の奥底に沈んだ昔の日記の断片が脳内に形になって現れた。

小学生の頃の姫路さん。中学生の姫路さん。そして今の姫路さん。

年齢が上がるにつれて段々と彼女に面と向かうのが恥ずかしくなつて、こうして正面から直接顔を合わせて言葉を交えることはほとんどなかったけど、それでも彼女は今と同じように僕の近く居たんだ。

「それで、話つてなにかな？」

姫路さんといるのは恥ずかしいというのは今でもあまり変わらないので、僕はつい急かすように言葉を放つてしまった。

「吉井君。吉井君は過去の自分が好きですか？」

「へ？ 自分？」

「はい」

予想外の質問に頭の中が真っ白になる。

昔の僕？ ……んー。あまり良い記憶はないかなあ。振り返つてみればいつでも馬鹿なことをしてただけな気がするし。

「僕はそうでもないかも。思い出すのも嫌になる記憶とかあるし。もしタイムスリップができたなら一発引つ叩いて更正させたいと思うよ」

「ふふふ、そうですね。私も似たような思い出があります」

「だよ。今思うとなんであんなことやっちゃったんだらうって記憶が山ほどあるよ」

あはは、うふふ。と過去の記憶を肴に笑いあう僕ら。

話をして緊張が解れた所為か。僕は徐々に居心地が良くなってきた。

「でも。嫌なこともいっぱいありましたけど、私は過去の私のことが好きです」

「姫路さん……?」

「だって。小さい頃からずっと抱き続けていたこの気持ち大きくなった今でも忘れな
いでいられたんですから。それは昔の私が間違えていなかった証だから」

胸に手を当て、すう、と姫路さんは息を吸った。

「私は、吉井君のことが好きです。小学生の頃からずっと、好きでした」

一際大きな風が吹いた。

あまりに強い風のおかげで、それは風の音と姫路さんの声がおかしな割合で混ざって
しまった結果耳にそう聞こえてしまったのかと邪推してしまった。

「え………………。ぼくが、すき…………？」

「は、はい。…………はう、予行練習はしたんですけど。やっぱり何度しても口にするのは恥ずかしいです」

「ほ、ほんとに…………？」

「ほ、本当です。マジです。真剣ですつ」

首から上を真つ赤にしながら、それでも精一杯喉から声を張り上げようとする姫路さんがすごく可愛くて、抱きしめたくなった。

「嬉しい。すごく嬉しいよ姫路さん…………」

…………あれ？ ここは両手を上げて盛大に大喜びするところじゃないの？

ずっと憧れ続けた姫路さんに告白されるなんて夢みたいなシチュエーションなのに、どうして僕は姫路さんに近づけないんだろう。なんでこの足はさつきから固まっているんだ？

心が痛い。

……………違う。それは明確に違う。

足が動かせないんじゃない。金縛りにあってもいないのにそんなこと起こる筈がない。い。

だとしたら、これは僕自身の意思で動かないようにしてしまったんだろう。

僕はこれ以上姫路さんの傍に寄れない。なんで？ どうして？

だって、僕はもう姫路さんとは違う人を好きになってしまったから。

単純に、たった一日前に、僕はそう自覚したばかりだった。

だから、彼女の気持ちには答えられない。

言わなきゃ。君とは付き合えないって。

だというのに、まだ僕の足は杭を打たれたかのように硬直したままだった。

分かってる。

その理由は、恐れ。

もし、この先僕が姫路さんを振って本当に好きな人に告白したとして、それにあの人が答えてくれる保障はどこにもない。自意識過剰な行動をした結果、何もかもなくなってしまうかもしれない。

それに比べ、目の前の姫路さんは僕を好いてくれている。

可愛くて、優しく、心穏やかでお淑やかなまさに理想の女の子が僕を好きでいてくれた。

なら、もうそれで満足すればいいんじゃないのか？

僕はあの人が好きだけど。それに負けないぐらい姫路さんのことも好きだった。

小学生の頃からずっと憧れ続けていたんだから、ある意味当然と思う。

ならここは姫路さんと恋人同士になることに何の問題もないじゃないか。

僕の中の天使は今すぐ姫路さんを抱きしめろと言う。

僕の中の悪魔は自分に嘘を吐くな。妥協するなと罵る。

「吉井……君？ どうしたんですか？」

いつしか黙考していた僕に姫路さんは下から覗き込むように見上げていた。

………

やっぱり駄目だ！ 自分の気持ちに嘘は吐けない。ここで安易の気持ちで姫路さんを選んだら……きつと僕は一生悔いを残して生きていく事になる。

言おう。君とは付き合えないって。ハッキリと言うんだ。それが彼女にとっても最大の誠意じゃないのか。

こんな僕を好きになってくれたんだ。せめて最後の時まで姫路さんの中の僕は男らしい人間であってほしい。

「姫路さん………」

「は、はいっけ………」

目を合わせると姫路さんはトマトみたいに顔を赤くしたまま今日何度目かの鞭打ちに合った。

僕は、頭を下げて——、

正真正銘、僕は情けない男だった。

「少し、考えさせてくれないかな」

問26 異端者には死の鉄槌を

気がつくくと、窓の外には日が昇っていた。

僕はベッドの上に横になったまま思いつきり鼻をすするとドロリとした粘液が出てきた。

「……………ずずう……………つ あ、鼻水だ」

……………あちやあ。ひよつとして風邪引いちやったのかな。どおりで体が重いわけだ。

僕はだるい体をベッドから持ち上げてティッシュに手を伸ばし鼻をかんだ。

結局、昨日は一睡もできなかった。

最初の方は「うわあ姫路さんに告白されちやつたどうしようー!? モテ期? ねえこれモテ期? いやっほおー!」とベッドの上でゴロゴロしながら大興奮して隣の人に壁を叩かれたりしてだが、段々と気持ちが悪くなり、ネガティブ思考に陥っていき次第に考えうやつて返事をすればいいんだと憂鬱になり、ネガティブ思考に陥っていき次第に考えるのも億劫になってきて気がつくると今の半死人のような容体になっていた。

「はあ……………、お腹痛い。頭痛い。喉痛い。あちこち痛いよお……………」

本当、史上稀に見る最低の朝だ。

こんな調子では学校にもいけないなど壁に立てかけてある時計に顔を向けると、すでに登校時間はとっくに過ぎていた。

どうやら僕は自分の思っていた以上に長い時間放心していたらしい。

なんだか何もかも馬鹿らしくなって、僕は学校の休みの連絡をする気も失せてしまい再びベッドに倒れこんだ。

「なんでさ……」

誰も居ない部屋で一人ごちる。

「女の子に告白されたら普通もつと嬉しいものだと思ってたんだけど。どうして僕はこんなにポロポロになっちゃったのかなあ」

汗だらけでベトベトになったベッドに顔を埋めていると、ふと机の上にある携帯がメールの着信を告げた。

僕はほふくぜんしん匍匐前進のようにうつ伏せに体勢のまま腕の力だけで這うように前に進んで携帯を掴む。

そしてディスプレイに表示された内容を見ると、意外な人から連絡が来ていた。

『From:木下優子』

To:吉井明久

Sub:学校来てないみたいだけど、何かあったの? 大丈夫?』

機械的に僕は『大丈夫だよ。ちよつと寝坊しただけ』と打って送信する。

「……………学校、行かないや」

休息を求める体に鞭を打ち着替え始める。

こんなジメジメした部屋にいるから体調も悪くなるんだ。きつと外の新鮮な空気を吸えば少なくとも今より多少は良くなるだろう。

何より、今日は姫路さんに昨日の告白の返事をする約束があるんだから。どのみち欠席するわけにはいかない。

用意をすべて済ませ家を出ると、朝の太陽が目には染みて視界が一瞬真っ白になった。思ったより今日は外の気温も高いようで予想より楽に僕は登校道を歩いていく事ができた。

☆

学校に着く頃には時間は二時間目の休み時間になっていた。

一応僕は寝坊で遅刻したということになっているので、ここは風邪だということ悟らせないよう元氣よく挨拶しよう。

「おはようっ！」

教室の扉を開けると同時に僕は快活に声を上げた。

「アキ。遅かったじゃない。寝坊なんてしてもしかして昨日ずっとゲームでもしてたの？」

一番最初に反応した美波は僕の姿を見るなりいつもと変わらない挨拶を告げた。

よしよし、体調不良のことはバレてないっほいな。

「あはは、まあそんなこと」

「おいおい、ちゃんと勉強もやっただらうな？」

「もうひどいな雄二は。僕だったきちんとやることはやってるよ。むしろその所為で寝坊しちゃったぐらいだよ」

嘘である。本当は昨日は姫路さんのことで頭いっぱい勉強はおろか教科書さえ開いていなかった。

秀吉やムツツリーニとも同じような言葉を交わした後、僕は自分の席に行つて鞆を下ろした。

ふう、と疲れを癒す老人みたいに溜め息を吐きながら畳の上に座り込むと、隣にいる優子さんが僕に向かって口を開く。

「おはよう吉井君。今日は随分と重役出勤ぶりね」

「おはよう優子さん。今朝のメールありがとね。あのおかげでなんとか朝に起きる事が

できたよ」

「まったく、朝の目覚ましセットし忘れたの？」

「ちゃんとセットはしてたはずなんだけど。いつのまにかスルーしてたよ」

僕の家の目覚まし時計はあまり性能が良くなく、平時でも僕が時間通りに起きられる確立が五分五分ぐらいだったりする。

当然買い換えるお金などないので、そんな不良品でもまだ現役として働いているけど。

「……アンタが一人暮らししてていいのか本気で心配になるわね。はい」

呆れながら優子さんは僕にノートを手渡してきた。

「何これ？」

「見ての通りノートよ。吉井君二時間分の授業サボって何もわからないでしょ。これに一応要点だけはまとめて置いたから時間がある時に写しなさい」

「そんな、いいのに」

「いいから早く受け取りなさい。吉井君に拒否権はないの」

はい！と優子さんは僕の胸にノートを押し付ける。

「あ、ありがとう。すぐに写して返すね」

わざわざノートを貸してくれるなんて。優子さんって結構面倒見が良い方だったり

するのかな。

さっそく僕は鞆からノートを取り出して自分の分と優子さんの二冊のノートを卓袱台の上に広げた。理由はともあれ貸しもらっている以上早めに返した方がいいしね。

そうしてチャイムが鳴り三時間目の授業が始まるまで、僕は風邪で少し朦朧とする頭を振り絞りノートの写し書きに集中した。

☆

「ようやくCクラスがBクラスに宣戦布告したようじゃの」

「……………(こくん)。開戦時刻は午後の予定らしい」

三時間目の休み時間、どこからかそんな情報を仕入れてきた秀吉とムツツリーニが僕らに報告した。

「そっか。考えてみれば僕ら以外がやる試召戦争ってこれが始めてだよね」

「今までは俺達が散々引つ掻き回してたからな。ま、今回はのんびり観戦といこうぜ」
壁にもたれながら雄二はどうでもよきそうに言った。

その気持ちはなんとなく理解できる。僕としても今は他所の戦争に関心を向けている場合じゃない。

僕が最優先すべきは今日の放課後までに姫路さんへの返事を考えいかなくちやいけ
ないことだ。ありていに言えば、うまく断る方法を……。

「アキ？ 何考え込んでるの？」

……………ああ駄目だ。こんなこと初めてだからいくら頭を捻つても何にも出て
こない！ もうどこかに恋愛のプロとかいないの!? 誰も良いから教えてベストアン
サー！

「ちよつとアキ！ 聞ってるの!?!」

「へ？」

いつのまにか目の前に怒った顔の美波が僕を睨んでいた。

……………そういえば、美波つて誰か好きな人っているのかな……………?

女心は女にしかわからない。美波は性格は男みたいだが生物学上は女性だという極
めてレアな人種だ。これはひよつとすると有益なヒントが得られるかもしれない。

「美波！」

「は、はい！ 何よボーつとしてるかと思つたら急に大声出して」

「ごめん。それより美波に聞きたいことがあるんだ。すごく大事なことだから真剣に答
えてくれないか」

「え!? え!? ちよ、こんな人前で何言う気よ！」

顔を赤くして。パタパタと両手をパタつかせる美波。

確かに雄二や秀吉の前なのはちよつと気にかかるが今はもつと大事なことがある。

何故だか僕が目を合わせる度にどんだん顔の赤みが増していく美波。もしかして美波も風邪なのかな？

「美波。美波は……」

「ひゃ、ひゃいつ」

「男に振られた経験って、ある？」

「……………は？」

「だから、好きな男子に告白して振られて経験があつたら教えてほしいんだ。できれば詳細にい——ぎやあああああああつ!？」

メキメキグチャ。と全身がとても痛い音がした。

「ふんっ！ アキの馬鹿！ 最低っ！」

肩を震わせながら美波は荒だたいしい足取りで教室を出て行く。な、何故……………。

「……明久。今のは新しいコントか？ それとも島田に殴られすぎてついに痛みが快感に変わってしまったのか？」

「ど、どつちも違う……………」

あう。ただでさえ風邪で体調悪いのに肉体的にも痛められるなんて、やっぱり美波は

苦手だ……。

「じゃが今の質問は本当になんだったのじゃ。好きな男子のことを聞くならともかく振られた経験とは」

「……………意味深」

「そ、そんなことないよ……。勘ぐりすぎだつてば」
「いかん。これは不味い流れだ。」

ここで詰め寄られてみんなに昨日のことがバレたら……。

1、雄二達に姫路さんから告白されたことがバレる。

2、雄二達からクラス全体へ話が浸透する。

3、僕、クラス中から恨まれる。

4、異端審問会発動。

5、僕死亡。

という最悪の5ステップを辿ってしまう！

それだけは阻止する。僕は最低でも姫路さんに会うまでは死ねないんだ！

「こ、この話はもうやめよう。ね？」

「そーいや明久。お前昨日姫路とどんな話をしたんだ？」

この状況で最悪の地雷投下されたー!?

「雄二！ キサマには空気を読むという機能がないのか！」

「はあ？ 何言ってるんだお前？ ……ははあ。さてはさっきの質問と昨日の姫路の話には関連性があるんだな？」

「ううう——っ!？」

コイツ!?! いつにもまして何でこんなに勘が鋭いんだ！

「ない！ ないない！ まったく関係ないって！ 気にしすぎだよ雄二！ 大体何でそんなことを追求するのさ。雄二にはまったく関係ないでしょ？」

「ないな。ないが……なんとなく面白そうだ」

よし。試召戦争が終わったら絶対に血祭りに上げてやる。

「ほら、さっさと吐いてしまえ。じゃないとお前が姫路とラブラブしてたって異端審問会に告げ口するぞ」

「く——っ。それだけは嫌だ。僕はまだ死にたくない！」

「……………説明要求」

「諦めるのじゃ明久。雄二とムツツリーニがこうなつてはワシでも止められぬ」

「ひ、秀吉までえ!!? こうなつたら、お願い優子さん！ みんなを止めて！」

「…………ごめんね吉井君。アタシも姫路さんと何を話したのか気になるの。だからそのお願いは聞けないかな」

「ぐっはあ!」

僕に味方などはじめからいなかった!? まさかの四面楚歌とは……っ。

こうなったらせめてもの抵抗で本筋からは少しずらして説明するしかない! 下手に嘘をついたら絶対に雄二に見破られるし。この僕の話術を駆使してこの局面を乗り越えてみせる!

「れ……。恋愛、相談だよ……」

「嘘だな」

「嘘じゃな」

「……………絶対嘘」

「……………ふーん……………」

バカな。一瞬で見破られた、だと……っ。趣旨としては決して間違えていないはずなのに!?

「本当だよ! 何で頭ごなしに否定するの!」

「おかしなことだらけだろ! 第一何で生まれてから一度も彼女がいらないお前に恋愛相談なんかするんだ。明らかに力不足じゃねえか」

「失礼な! そんなことないよ!」

「じゃあお前姫路にどんなアドバイスをしたんだ?」

「へ？ それは……………あ、愛さえあればどんな苦難も乗り越えられるさー」

「……………」

なんだろう。みんなが可愛そうな人を見る目をしているよ。

「明久よ。できないことはできないでよいのじゃぞ。大事なのはそれを恥じる心より受け入れてより努力しようとする姿勢じゃ」

「……………人間には得て不得手がある。明久に恋愛ごとは向いていない」

散々な言われようだ。

「明久が色恋沙汰に鈍感なのは今更だからどうでもいいが。姫路から明久に用事があつたのは事実。しかもわざわざ放課後屋上に呼び出してまでとは。まさか告白でもされたか？」

「あつ!? 馬鹿雄二!?」

ここでそんな台詞を言ったら!?

スパッ! ザクザク! (畳にカッターの刃が刺さる音)

『吉井明久。今の旨は真実か?』

「ほらあもう異端審問会が出てきちゃったよ!」

『『学園の風紀を乱す異端者には正義の鉄槌を!』』

すでに僕達の周りには黒いローブを着てカッター、ペン、定規、コンパスなどの武器

を構えた連中に囲まれていた。くそ！　なんて迅速な行動なんだ！　水道工事の業者さんもびつくりなスピード対応だよ！

「ち、違うんだよみんな！　今のは雄二の妄言であつて」

『では真実でないと。我らが主に向かつてそう誓えるか？』

「あ、えつと……」

思わず言葉に詰まってしまった。一応今でも異端審問会の一員であることへの気持ちちが言葉を飲み込んでしまった。

僕、吉井明久は基本的に嘘を吐くのが下手糞である。今、僕はそれをこの身を持って理解した。

正直者は馬鹿を見る。まったく言いえて妙だ。普段みんなから馬鹿だ馬鹿だと言われ続けている僕の為にあるような言葉じゃないか。

『捕らえろ。なぶり殺しだ』

『『サーツ！　イエツサー!!』』

「チクショー！　絶対捕まつてたまるか！　僕は姫路さんに会うまでは死ねないんだあ
！」

『『上等だーっ！　覚悟しやがれ糞があーっーっーっつっつ!!!』』

教室から一目散に走り出す。何なんだ何なんだ今日は！

風邪を引いて体調が悪いつていうのに現在進行形で命まで狙われてしかも姫路さんへの告白の返事も考えなくちゃいけないとかこれとだけ人生ベリーハードモードなんだよ！

「…………いや、まさか本当に告白されていたとは、さすがに驚いた」

「マジだったのじゃな。しかも今の時期にとは。明久もいろいろ大変じゃ。…………む？
いつのまにかムツツリーニの姿を消えておるぞ」

「あいつなら異端審問会の連中と一緒に明久を追いかけて行った。あいつも連中の仲間だからな。……………おい木下」

「何？」

「何ってお前…………。鏡を見てみる。顔、すごいことになってるぞ」

「……………なんでもないわよ」

問27 バカとテストと優等生

あれからなんとか次の授業のチャイムまで異端審問会から逃げ切ることができ、一先ず僕は命を繋いだ。

授業中はさすがに襲っては来ないけど、それでも殺気は今でもひしひしと全方位から突き刺さっている。

そんな剣呑な空気にもったく気づかず化学の布施先生はのんびりとした調子で出席を取り始めた。先生にはこの教室に毒素のように満ちる殺気が感じられないのだろうか。

「えー。では化学の授業を始めます。まず出欠を。——近藤君」

『はい。……吉井コロス』

「須川君」

『はい。吉井コロス』

「新田君」

『吉井コロス』

「氷室君」

『吉井ブッコロス』

「先生！ さつきから返事が僕への殺意になってます!？」

「吉井君。今はもう授業中ですから大声は慎んでください」

「もつとほかに注意すべきところがあるでしょう!？」

なんなの！ 出席は声さえ聞ければ台詞はなんでもいいの!？」

(おい。おい明久)

前の席に座っている雄二がわずかに顔を僕に向けてアイコンタクトをしてきた。

(どうしたの雄二?)

(どうしたじゃねえ。このままクラスが殺意の波動に目覚めてたら明日のAクラス戦に

も差し支える可能性がある。なんとかして連中の怒りを静めろ)

(無茶言わないでよ！ 僕だつてやれるものならやつてるよ！)

(つたく。大事な戦いの前に面倒ごと持ち込みやがつて)

あくまで口は使つてない。目瞬きだけの意思疎通。

去年から鉄人の目を欺くために身につけたコミュニケーションツールだ。

(ところで明久、お前本当に姫路に告白されたのか?)

(うっ。……い、今ここで聞く事なのそれ……)

(どうなんだよ)

(……はい。好きだと言われました……)

もう今更隠しても意味ないので正直に告げた。繰り返すが口は動いていない。

(そうか。ならまだ方法はあるな)

(えっ！ほんとに雄二！)

(ああ。お前が自分の罪を認めて素直に体を差し出せば良い。クラス全体の平穩の為の小さな犠牲だ。悪くないだろ?)

(悪いに決まってるだろ！)

なんでコイツは毎回毎回最初に僕を生贄にする作戦を考え付くんだ。

(もつとこう、穩やかに済むやり方がいいよ。具体的には僕が死なないで済むやつを……)

(だったら『姫路から告白は明久の勘違いだった』か『紆余曲折あつて結局振られてしまった』つて感じで姫路との関係性を白紙なものと連中に証明しなければならぬな)
(つまり、僕と姫路さんは友達以上の何者でもありませんつてことをみんなに証明できればいいんだね)

……この先の展開次第では友達でいられるかどうかも定かではないけど。とにかくやってみるしかない。姫路さんと恋人同士なんてことになってしまったら異端審問会に今度こそ完璧に僕は殺されクラスの安定は崩壊する。そうなったらAクラスに勝て

る可能性も同時に潰えてしまう。

ごめん姫路さん。二重の意味で僕は君とはやっぱりお付き合いできないみたいだ。

それから特に僕に肉体的損害もなく順当に時間が過ぎていき、授業も終わる間際になった。

「……それでは、今日の授業はここまでとします。お昼休みの時間になりますが、くれぐれも問題は起きないように」

パタン、と布施先生が出席簿を閉じる。

と、

「殺気——っ!？」

ヒュン——ッ

「っ!？ 卓袱台ガード！」

咄嗟に卓袱台の足を掴んで体全体を覆うように構えると、カツカツカ!と天板に何か刺さる音がした。この位置——完全に顔を狙ったな！

『『チツ』』

仕留めそこなったことを悔いる舌打ちがあちこちから聴こえた。今の攻撃が当たったら確実に僕の顔は穴だらけになっていたところだ。コイツら……。もはや僕を始末することに一片の躊躇もないな！

「けど、大人しく殺されてたまるか——っ！」

卓袱台を構えたまま僕は一目散に教室の扉に向かって走る。

『逃がすな——っ!! ヤツは我らが矜持に背いた反逆者だ! もはやヤツは異端審問会の一員ではない! 一切の容赦なく殺せ!』

『吉井いいいい——! 自分だけ幸せになれるなんて思うなよ——』

『アハハ。心配しなくてもいいんだヨ。吉井クーン。ちよつと手足がバラバラになるだけダカラ』

「ひいいいいいっっ!!」

扉の前で卓袱台を放り捨て廊下に飛び出すと、後ろからそんな怨嗟の聲が耳に入った。

人の幸せを妬んでいる暇があったら自分の幸せの為に行動すればいいのに! そんなだからお前らはFクラスなんだぞ!

「でも——からどう逃げよう。このままじゃ安心して昼食も取れないし」
渡り廊下をひた走りながら考える。

そもそも昼ごはんを食べるのには一旦教室に戻って優子さんからお弁当を受け取らなくてはならないんだが。今のクラスメイトの状態で教室にとんぼ返りするのは自殺行為以外の何者でもない。

はあ、これじゃ今日は昼食抜きかあ。本当に厄日だよ……。

「あつ！ あなたは——アキちゃん!!!」

新校舎まで走ってくる、ばったりとDクラスの玉野さんと出会った。

「げっ。こんな時によりにもよつて!? 僕この人苦手なんだよお。なんか関わると社会的にダメージを受けそうで。」

よし、ここはスルーするが吉。玉野さんには悪いが僕も命が掛かっているんだ。細かい気遣いをできる余裕はない。

「や、やあ玉野さん！ 奇遇だね。申し訳なんだけど僕今すごく忙しくて急いでるんだ。それじゃー!」

「うんわかっているよアキちゃん。後ろで怖い顔した男子に追われてるんだよね」

「そうだよ——って何で一目で分かったの!? そして何故腕を掴むのさ!」

玉野さんの驚きの理解力の速さに驚きながら両手で捕まれた腕を振りほどこうと上下に揺さぶる。でも玉野さんが相当な握力なのか僕が風邪で力が出ない所為か腕はびくともしなかった。

「離して玉野さん! このままじゃ! このままじゃ!」

「大丈夫だよアキちゃん。私に任せて」

そう言つて玉野さんは笑顔で僕の腕を持ったままズルズルとどこかへ僕を連れて行

く。

☆

……気がつくと、僕は狭い個室の中に玉野さんといた。

あ、あれ？　なんか一瞬で視界が変わったような……。もしかして風邪が悪化して意識が飛んじやったのか？

「あの、玉野さん。ここどこ？」

「うん？　見ての通りトイレだよ」

あーなるほど。確かに便器があるし。僕はトイレの個室の中に逃げ込んでいたのか。

「ここなら」男子は絶対入って来れないから。もう心配しなくても大丈夫でしょ」

「うん！　そうだね。ありがとう玉野さん！」

「きやあつ！　アキちゃんにお礼を言われるなんて照れちゃうよー」

いやんいやんと恥ずかしそうに頬を染めてくねくねする玉野さん。

さつきから怖いほど耳に入ってきた連中の恨み節もまったく聴こえない。多分僕を見失ってしまったんだろう。とりあえず助かった！　今回は玉野さんに感謝しなきゃね。

「ただど一個だけ注意しておかないと。」

「でも駄目だよ玉野さん。女の子なのに男子トイレになんて入っちゃ。ここは女子厳禁なんだから」

「……? 何言っているのアキちゃん。ここは女子トイレだよ」

「そんなまたまた。……え?」

ん? 玉野さん今変なこと言わなかった?

「ごめん玉野さん。どうも風邪で耳が遠くなっちゃったみたいだ。もう一回言ってくれませんか?」

「ここは、女子トイレだよアキちゃん。私もアキちゃんも女の子なんだから当たり前でしょ」

「……………」

「どうしたのアキちゃん。額に冷たい汗を流して。あと顔が青いよ?」

「どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう!!!」

「ここに来てまた問題発生とか! 僕はどれだけ不幸な星の元に生まれてしまったんだ!」

「某『不幸だー!』が口癖の主人公顔負けの不幸っぷりだよ!」

こんなところほかの女子に見つかったら、僕は女の子を無理矢理女子トイレの個室に連れ込んでいかがわしい行為をしようとした変態と思われてしまう！ そうなったらよくて停学&鉄人から鉄拳。悪いと退学プラスご近所さんからひそひそと噂されてもう町を歩けなくなってしまう！

とにかく今すぐここから出なきゃ！ でないと人生最悪のBADエンド一直線だよ！

「ちよっ！ 玉野さん！ すぐにここから出なきゃ！」

「あっ!? アキちゃん！」

何か言おうとした玉野さんに構わず僕は女子トイレの個室ドアを開く。

そしてすばやく身を抜け出そうとして。

「もお。ただのお化粧直しなんですから翔子ちゃんまでついて来なくてよかったですよっ。」

入り口の方で姫路さんの姿が目に入った途端、僕は勢いよく個室の扉を閉め鍵を掛けた。

「はあっ、はあっ、はあ……っ」

あ、危なかった！ 危うく姫路さんに僕が女子トイレに入ってしまったっている場面を見られるところだった。なんて間の悪いタイミングなんだ。本当心臓に悪いよ。

(玉野さん! ここから絶対に大きな声を出さないで! でないと僕の社会的命に関わるから!)

(よくわからないけどわかった。アキちゃんが言うならそうするね)

よし。これで声バレすることはなくなった。後は姫路さん達が自然にこの場を離れてくれるのを待つだけだ。

『……それで、瑞希は良かったの?』

扉に耳を当て音に集中するとさつきとは違う静かで大人びた声が聞こえた。さつき姫路さんが翔子ちゃんと言っていたからこれは多分Aクラス代表の霧島さんの声だろう。

『はい。あの場で返事を強要しちゃったら吉井君の本当の気持ちが変わりませんから。だから私は吉井君が本音を言ってくれるまで待つことにしたんです』

今度は姫路さんの声。これってまさか、昨日の告白の話!?

またよりもよってなんでこんな時に!?

『……そう。瑞希は本当にいい子。きつと吉井にもその気持ちが伝わってるはず』

『そうだと嬉しいんですけど……。やっぱり返事を聞くのは怖いです』

『……大丈夫。だって、瑞希は優しいから』

うう……。やめてよ霧島さん。そんなこと言われたらますます断り難くなっちゃう

じゃないか……。

『ありがとうございます。……でも、本当のことを言うと私、振られちゃっても良いんじゃないかなって思ってるんです』

『……え？』

『……っ!?!』

僕は思わず霧島さんと同じ反応をしそうになった。振られても良い？ どういうこと？

『……どうして？ 瑞希は小さい時からずっと吉井のことが好きだったんでしよう。私と同じように』

ん？ 私と同じように？ 霧島さんも誰か好きな人がいたのか？

『はい。好きでした。いえ、今でも好きですよ。……ですけど、それよりも私は自分の気持ちに決着を付けたかったんだと思います。吉井君に想いを伝える事で今までずっと溜めてきた気持ちをすべて吐き出してすっきりしたかったです』

やばい。ここから本当にやばい。早くっ。早く耳を塞がなくちゃ。

『……じゃあ、瑞希は吉井に振り向いてほしくないの？』

『そんなことないです！ ……勿論吉井君と恋人同士になりたいです。だってそれが子供の頃からの夢だったんですから。でも、それは私だけの夢ですから吉井君が嫌だった

ら無理は言えないじゃないですか……』

何やってるんだよ僕！ 早く耳を塞げ！ 何も聴こえないようにしろ！

『……瑞希はもつと我儘を言つて良い。私と付き合えて強引に迫つていけば』

『そうできたら良かったんですけど。やっぱり私には翔子ちゃんみたいにはできませんでした。私、弱いですから……』

『……そんなことない。瑞希は十分強い。ちゃんと吉井と向き合つて告白したんだから』

『ふふ、ありがとうございます翔子ちゃん。……私、吉井君がどんな答えを言つても素直に受け入れるつもりです。例えそれが私にとって不幸なことでも』

『……瑞希』

『あ、でも。本当に振られちゃったら、やっぱり泣いちゃうかもしれないですね……』
そのまま姫路さん達はトイレを出て行く。

個室の中で、僕は罪悪感に押しつぶされそうだった。

姫路さん、なんて優しい人なんだろう。こんな素敵な女の子の告白を拒否しようなんて僕はどれだけ残酷なことをしようとしていたんだ。そんなことできるわけがないっていうのに。

「はわあ。姫路さんも霧島さんも恋に燃えてるんだね。私もアキちゃん一筋だから安

心してね！」

暢気な調子で玉野さんが言う。彼女の中で吉井明久とアキちゃんとは別人ということになっていられるらしい。

いや、そんなことはもうどうでもいい。

もう僕は姫路さんの告白を断ることができなくなってしまった。

本当に、どうしよう……………。

p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i !!!

「あ、…………メールだ」

ポケットから携帯を出して画面を見る。

その表示内容に、僕は目を剥いた。

『From: 木下優子』

To: 吉井明久

Sub: お弁当持って待ってるから校舎裏まで来る事。拒否権はないから絶対来なさ

いよ』

☆

「……遅かったわね」

「ごめん」

指定された校舎裏に来ると、優子さんが仁王立ちで僕を待っていた。

その鋭い目が、僕の姿を写した途端困惑の色を宿らせる。

「って何その汚れ？ アンタ今までどこにいたの？」

「ちよつとここに来るまでにまた異端審問会の連中と鬼ごっこすることになって。その所為で到着するのが遅れちゃった」

「はあ……。ほんとFクラスは馬鹿ばかりね。遅れた責任をたつぷり追及してやろうかと思っただけでもないわ。時間もあんまりないし早く食べましょ。はいこれ吉井君の分」

ぶつきらぼうに手渡されるお弁当を受け取る。

「ありがとう。……あれ？ 優子さんはまだ食べてなかったの？」

「あ、当たり前でしょうっ。一人で食べたって寂しいだけじゃない」

「そ、そうだね……」

優子さん的には前にこの場所で独りで昼食を取ろうとしていた事はカウントされていないらしい。その辺にツツコミを入れるとまた睨まれそうなので僕は何も言わず壁に持たれながら地面に座りお弁当の風呂敷を解いた。

蓋を開けて中身を見ると今日も色とりどりなおかずが小さい箱にぎっしりと詰まっています。食欲を促進させる。ようやく身心共に落ち着ける安住の地にたどり着いたような気がしてさらに空腹感が襲ってきた。

「いただきます」

二人で手を合わせてお箸を動かし始める。

うん。今日も優子さんの作るお弁当は美味しい。今日一日でいろいろたいへんな出来事があったけど。これがあるだけですべて許せてしまいそうになるほど胸が満たされる気分だった。

なんだか僕は無性に嬉しくなって自然とお箸を動かす手が早くなる。

そうして今日始めての幸せ気分になりかけた瞬間、つい数分前の姫路さんと霧島さんのやりとりが脳内でフラッシュバックし、思わず手が止まった。

手に込めていた力が失われて、箸で掴んでいたから揚げがお弁当箱の上に着る。

「あ……」

そうだった。何暢気に昼ごはんなんて食べてるんだ僕は。

これから姫路さんに会って告白の返事を告げなくちゃいけないのに。

……でもあんなこと聞いちゃったらもう断るに断れない。姫路さんの好意に水を差せないとかそんなのじゃなく、純粹にあそこまで僕のことを想ってくれている姫路の気

持ちを踏み躪りたくない。

そう思うと今こうして優子さんの作ってくれたお弁当を食べているだけでずっと待っていてくれる姫路さんに悪いような気がしてくる。……そういえば前の姫路さんのお弁当を食べた時のあれはなんだったんだろう。姫路さんが実はとても料理ベタだっただけでは説明のつかないレベルの酷い味だった。あの時は突然出てきた雄二と秀吉に押し付けちゃったけどあれも姫路さんなりの好意の示し方だったのなら多少は無理してでも僕が食べべきるべきだったのかもしれない。……あれ？ 考えてみれば、僕って今までも結構姫路さんに失礼なことをしていないか……？

「吉井君？ ちよつと。——ねえ！」

「……………え？ な、何かな？」

「何じゃないわよ。さっきから全然お箸が進んでないけどどうしたの？ ……ひよつとして今日のお弁当美味しくなかった……？」

攻撃的な瞳に少しだけ不安を滲ませて優子さんは僕を見る。しまった。つい思考に没頭して手を動かすのを忘れてしまった。

「そ、そんなことまったくこれっぽっちもないよ！ 今日のも本当に美味しいよ。今はちよつとだけ考え事をしてぼーつとしてただだから！」

「考え事……？ それってさっきの姫路さんのこと？ ふーん……」

「あの……、その」

段々と優子さんの表情が不機嫌になっていっていくことに僕はまた顔に冷や汗が出た。やばい。なんだか暴力的な気配を感じるぞ!?

「……そう、吉井君はアタシと二人きりでご飯食べてる時にほかの女のことを考えてたんだあ。へえ、吉井君も随分と良いご身分になったものね。どうしましょう、アタシ今すぐ吉井君の関節を一本増やしたくなっちゃったわ」

やっぱりいつ!?

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい! 決して悪気はなかったんです! もう考えるのはやめるので許してくださいお願いします!」

「……じゃあ何考えてたのか言いなさいよ。そうしたら許してあげるから」

「うえ!! いや……それは、ちよつと」

関節を増やされたくないけど正直に話すこともできない。

ほかの女子ならともかく、優子さんにだけはこの問題を相談することはできないんだ。

「ごめん。今は話せないよ」

「姫路さんに好きって言われたことについて悩んでるんじゃないの?」

僕が口を噤むと前振りもなくいきなり核心をついてきた。え!?! 何で知ってるの!?

「え、ちよ、ちよつと待って！ 何で分かったの!？」

「あら、そうなの。勘で言ったみたんだけど本当だったんだ」

「へ…………？」

まさか、ハメられた…………？

「ひ、ひどいよ優子さぁん！」

「アンタが素直に答えないから悪いのよ。あともうちよつとポーカーフェイスの練習をすることね。そんな一々考えてる事が顔に出てるようだと、いつか詐欺に合うわよ」

「うう…………」

反論の余地もない意見にぐうの音も出ない。

「…………それで、姫路さんの告白になんて答えたのよ」

さっきの挑戦的な態度とは打って変わって今度は期を伺うように遠慮しがちに問いかけてきた。…………できれば秘密にしておきたいんだけど、ここまでバレてたらもう隠し通すことは不可能だろう。それにそんなこと今の優子さんが許してくれるとは思えない。

「いっぱい悩んだんだけど、結局昨日は決められなくて返事は保留ってことにして待ってもらっているんだ」

「なにそれ、ヘタレね」

「がはっ!？」

刺さった! 今僕の心に致命傷を負わず矢が何本もグサリと刺さったよ!？」

「さ、さすが優子さん……。一切容赦のない精神攻撃だよ。危うくシヨック死するところだった」

「何大げさに戦ってるんだか……。ていうかそれメンタル弱すぎ。昨日自信満々に言っていた鉄の精神はどこ行っちゃったのよ」

僕の心は外がガチガチ中はスカスカのサッカーボールで出来て……。。

「それで? 吉井君は姫路さんと付き合うの?」

「またもや唐突に核心に触れる優子さん。」

くっ、この話題は優子さんの前ではタブーなのに。このままじゃアレのこともバレてしまう!？」

「ひ……」

「ひ?」

「……秘密ってことじゃ、だめ?」

「吉井君、腕を出しなさい」

「その差し出した腕をどうするの!？」

満面の笑みで指をパキポキと音を鳴らして、本当に怖いですけど!？」

「はあ……。別にとつて食いやしないし誰にも言わないわよ。ただ……。ちよつと気になるだけ……。というか」

「いやいや、そんな恥ずかしそうに顔赤くしてしおらしく言われたつて腕は渡さないからね！」

「はい？ ——つて腕の話はもういいのよ！ ……ちゃんと話してくれたら」「つまり話さなかつたらとつて食うの!?!」

なんなんだ。優子さんは実は人を食う怪人だったの!?! それともついにFクラスの空気に汚染されちゃつて壊れちゃつたのか！

「ああもおーつ！ さつきから話が脱線してる！ 何なの!?! アンタ達Fクラスは一々場の雰囲気ギャグにしないと気がすまない人種なの!?!」

「いや、そんなことはないんだけど」

あと優子さんも今はそのFクラスの一員なんだよ。

「……もういい。一度仕切りなおしよ。話を一旦整理するわね。吉井君は昨日姫路さんに告白された。これは間違いないのよね」

「う、うん」

「そして吉井君はその場で結論を出せずに返答を繰り上げた」

「その通りです」

そんな芸のような光景をちよつと面白半分で見ている僕に、優子さんはキツと表情を引き締めて目を合わせる。その瞳にはもう動揺の色はなかった。

「吉井君。さつきも聞いたことけど今度は真面目な話だから真剣に答えて。じゃないと、怒るわよ……?」

「は、はいー!」

何者を寄せ付けけない牙のような目が僕を真つ直ぐに見据えて。

「吉井君は、姫路さん……好き?」

そう問うてきた声は、何故か少し震えている気がした。

「あ……えと……」

困った。出来れば全力で誤魔化したいところだけど、優子さんの真摯な顔と鋭い瞳の奥に眠る隠しきれない怖気を見てると嘘をなんてつけない。

「僕は、姫路さんのことが……今は好きじゃない」

僕はもう姫路さんの背中を追いかけていない。

なのに、初めて好きじゃないという言葉を口にする胸がどうしようもなく締め付けられて苦しかった。

「……(めんなさい)」

軽蔑されるか罵倒の応酬に見舞われるかと身構えてると優子さんは落ち込んだ様子

で謝ってきた。

「な、なんで優子さんが謝るの？ 何も悪い事してないのに」

「したわよ。……多分、アタシは今吉井君が言いたくなかった言葉を無理矢理言わせたんだと思うから。アンタの顔を見てればなんとなく分かる」

「……………」

顔か。あちやあ、またやつちやつた。

まったく、僕ってヤツは少しは無表情を貫けないのか。

けど、それはやっぱり彼女の責任じゃない。

「優子さんは本当に悪くないよ。どっちみちいつかは言わなきゃいけないことなんだから。今のは練習ってことにすれば一応意味はあるよ」

「それ、強引すぎ」

「やっぱりそうかな。あはは……………」

元氣付けようと思つて理由付けしたが、結局苦笑いになってしまった。

「今練習つて言つたわよね。それじゃあ放課後も姫路さんに同じ台詞を言うつもりなの？」

「それは……………」

一番痛い部分を突かれた。姫路さんと付き合えない。でもその言葉を姫路さんの前

で直接言う勇氣がどうしても持てない。

どれだけ練習しても、何百回予行しても、きつと姫路さんの悲しそうな顔を前にしたら僕は何も言えなくなる。確信以上の何かを持ってそう断言できた。

言葉にすべき台詞が頭の中に思い浮かばす無言でいると、優子さんはまた少し俯いた。

「ごめん。また野暮なこと聞いちゃった。そんなの決まってるのよね」

「……優子さんだったら、どうするの?」

「それはアタシが吉井君の立場だったらってこと?」

うん。と頷いて答える僕。

「アタシなら好きじゃない人からの告白だったらその場で丁寧^{ていねい}に断るかな。アタシ、その辺淡泊^{たひやく}っていうか冷酷^{こくご}っていうか、さっぱりしてるのよ。勿論それで嫌われないよう最低限のケアはするけどね」

「やっぱり優子さんは強いね」

「こんなの人の性格次第よ。受け止める側が変われば感じ方も変わるんだから、単純に強いかわりか物差しで計れる問題じゃない。アタシは別に強くな^なってないし、吉井君が弱いわけでもないわ。強いて言うならどれだけ他人の気持ちに共感^{きんかん}できるかじゃない?」

「共感?」

「そう。簡単に言えば相手と同じ目線に立つて気持ち理解できるってこと。アタシも結構人の目を気にして言葉を変えるタイプだけど吉井君はもつと深くて相手と同じ立場になって考える事ができるのよ多分。だから今は姫路さんの立場に立っていてその想いを理解できるから吉井君自身の言いたい事が言えない。違う?」

「……ううん。違わない。でも僕のはそんな難しいものじゃないよ。ただ単純に怖いんだ。もし告白を断って姫路さんに嫌われちゃったらどうしようって。考えるだけで動けなくなる」

「吉井君。残酷なことを言うようで悪いけど、相手が望まない事をしてるのに嫌われたくないっていうのは傲慢な考えよ。吉井君だって自分が傷つくようなことをされたら怒るでしょう? 相手の意見を殺して自分の意見を通す以上、相手に大なり小なり不満な思いをさせてしまうことは避けられないわ。それを許すか許さないかは吉井君には決められない。でも吉井君には相手がどんな気持ちを抱いてもそれを受け止める義務がある。それが責任っていうやつよ」

「責任……」

優子さんの言葉は一つ一つがすごく実感が持てて流れるように胸の中に入ってきた。

僕は臆病だから、姫路さんに嫌な顔をさせたくなくて告白された責任から逃げている

のかもしれない。

トイレの個室で盗み聞きしてしまった時も、姫路さんは自分を受け入れてほしいと想いながらも同時に振られる覚悟が出来ていた。足りなかったのは僕の覚悟だけだ。

「……ありがとう優子さん。なんか僕、ちよつとだけ勇気が持てたよ」

「そっか。力になれてよかつたわ」

僕が微笑みかけると、優子も一緒に柔らかい笑みで返してくれた。

「……じゃあ今度は、アタシの番ね」

「え？ 番？」

「どういう意味だろう？」

「吉井君が正直な気持ちを言ってくれたように、アタシも吉井君に本当のアタシを曝け出す。これでお相子だから」

「本当の、優子さん？」

「ここから言うのは、嘘偽りのないアタシの本音。だから一字一句見逃さずに聞きなさいよ。いい？ すごく恥ずかしいんだから二度は言わないからね」

そう言つて、

僕は座った体勢のまま、優子さんに抱きしめられた。

「……………え?」

現実に理解が追いつかない。さっきまで頭の中で渦のようにぐるぐる回っていた姫路さんへ葛藤や想いが一瞬で吹っ飛んだ。

今僕はどんな体勢でどんな格好をしているのかすら定かではない。

ただ、背中に回された優子さんの腕と、胸板に感じる柔らかい感触に、首筋に掛かる吐息を感じて一瞬で脳が沸騰しそうになった。

「ゆ、ゆゆゆゆゆ優子さん——つつつ?!?!? これは一体全体どういう冗談でございますのことでしょ?」

動揺はもはや言葉にならなかった。

やばい! やばいやばいやばい!

心臓がバクバク言ってる! 頭に血が上って意識がくらくらする。

優子さんに触れている部分ギリギリと感電したように強く刺激されている。

あまりの現実逃避した展開に二本の足で地面に座っているという実感すら気薄になつて、まるで空に飛んでいるあのような浮遊感が全身に駆け巡った。

「冗談でこんなことしないわよ。こっちは死にそんなほど恥ずかしい思いを振り切つて手を伸ばしたっていうのに吉井君の中では冗談扱いなの? それはさすがにひどくな

いかしら——ねえ！」

「お、おとおお——っ!？」

不気味な笑いを共に僕の首は段々と絞まっていく。

それも駄目だ！ 息苦しいとかもはやどうでもよくてそんなに力を入れたらもつとくっ付いているいろいろいけない部分に当たってるう!？」

「す、ストップ優子さん！ ごめんなさい！ 疑ってごめんなさい！ だからもつと離れて！ このままだと僕の理性が！ 理性が！」

両手を使ううにもこの体勢では優子さんの背中に回すようにしか動かせないため、成すすべもなくクラゲに刺されて痺れたように空中でブルブルと震えているしかない。

傍からみたらいへん滑稽な絵面だろう。

今だ心拍数は破裂するんじゃないかと心配するぐらい強く鼓動しているが、何度も深呼吸を繰り返してようやく（表面上は）冷静さ取り戻した。

「ひ、一先ず離れないかな？ ほら優子さんの体がいり当たっちゃってるし……。こんなところ異端審問会に見られたらもう教室にも入れないよ？」

「こんなところまで来ないから大丈夫よ。吉井君がどうしても嫌っていうなら離れるけど……どうするの?」

「う……」

そう言われると……。

首に感じる腕と吐息の感触。

お腹から胸に至るまで余すことなく女の子の体を受け止めている実感。目の前で揺れる絹糸のようにさらさらな髪。そして鼻につく良い匂い。

結論、もつと堪能したい！

「……すみません。このまままでお願いします」

「正直者ね」

女子の体に興味のない男子はいないのです。

「吉井君。Bクラスと試召戦争のした時にした約束を覚えてる？」

「あ、うん。覚えてるよ。……そのこと？」

「うん……」

静かに肯定する優子さん。

「ここからは、アタシの勝手な意見」

僕の首に腕を回したまま、優子さんは語りだす。

「アタシは吉井君と姫路さんには付き合ってほしくない」

「え……？」

その台詞は僕にとって意外だった。

さっきの問答からして、優子さんは姫路さんの為を思って僕に話しをしてきたのかと思っていたから。まさか優子さんの口から姫路さんと付き合っただけじゃないなんて言葉が出るなんて予想だにできなかった。

「どうして?」

「……吉井君と姫路さんが仲良くしてる姿なんて見たくないもの。姫路さんだけじゃない。美波も美紀も、吉井君がアタシ以外の女の子と楽しそうにしている姿なんて嫌。見たくない聞きたくない。……ねえ、何でだと思おう?」

「あ……………」

普段から鈍感だの馬鹿だの言われ続けた僕でもこれで勘違いするほど愚かじゃない。俄かには信じられないけど、優子さんの気持ちは。

「優子さん僕のこと……………」

「多分…………うん、多分じゃない。アタシは——アタシも吉井君が好き。どうしてこうなっちゃったのか、いつからこうなったのかもわからないけど、今はもう自分で気持ちを抑えられないぐらい吉井君のことが好きなの」

「っ!?!」

僕は心臓の高鳴りを抑えられなかった。う、嘘。優子さんが僕を…………ええー! 再び動揺が襲う僕に構わず優子さんは先を続ける。

「アタシだけ見てほしい。アタシ以外見てほしくない。そんな自分勝手な嫉妬を今までずっと抱き続けてた。でも吉井君が姫路さんに告白されたって聞いてからずっと心が不安定になって、だんだん自分の中の衝動が抑えられなくなっていったの。こうして吉井君と一緒にお昼ご飯を食べる事もできないって思ったら怖くて耐えられなかった。もう自分でもどうしようもないほど吉井君を好きになっちゃったのよ！だから吉井君が姫路さんと恋人同士になるなんて認めたくない。クラス中、学校全体が賛美してもアタシは許せない！」

「優子さん……」

僕は今だ自分の感情を整理するので精一杯だったけど、優子さんの想いは痛いぐらいに伝わってきた。それと同時にここまでそんな気持ちを一人で抱えて戦っていた女の子の気持ちに気づいてあげられなかった自分を情けなく思う。

まったく、内心じゃ好きだと好きだと言っている癖になんて体たらくなんだろう。

「ごめん。気づいてあげられなくて。僕姫路さんのことで頭いっぱい優子さんに配慮する余裕なかった」

「……それは吉井君の責任じゃない。それにアタシもバレないように細心の注意を払ってたから、寧ろ気がつかなくて普通なのよ。じゃないとアタシはもう二度と猫を被れないわ」

優子さんは自嘲気味に薄く笑って言った。

「でもまさかこんなに好きになるなんて、自分でもびつくり。アタシにこんな想いさせたのは貴方がはじめてだったんだから」

「そ、それはなんとまあ……。光栄に思っているやらないやら」

「思っているのよ。アタシにとつてこれが初恋なんだから。もう一生忘れない思い出になるわね」

「そ、ままで!」

な、なんかその言い方は重いな……。

「吉井君……。吉井君が姫路さんに負い目を感じて自分の気持ちを口にできないなら、その責任はアタシも背負う」

「え? どういう……。こと?」

「アンタはいろいろ背負いすぎなのよ。アタシのこと。試召戦争のこと。姫路さんのこと。そして自分のこと。そんないっぱい一度に肩に乗せていたら崩れるのは当然じゃない。——だからその荷物はアタシも一緒に背負う。吉井君が自分勝手にアタシをAクラスに編入させようとして頑張ってくれたように、今度はアタシがそうしたいから吉井君を助ける。責任の重圧に一人で耐えられなくて押しつぶされそうなことでも、二人なら支えられるでしょ? 今まで吉井君がアタシを助けたように今度はアタシ

が吉井君の助けになるの。姫路さんの好意を無碍にしたことにみんなが吉井君を非難しても絶対にアタシが守るから。……だから、これからもアタシの傍にいて。おねがい……」

首に回された腕がより強く締めまりさつきより体が密着する。

それは痛いものではなく、消えてしまいそう何かを必死に捕まえたいと抗う力だった。

「……僕は、」

優子さんの語りを聞いているうちに動揺して真っ白になっていた頭は完全に冷え切っていた。早鐘を打っていた鼓動も正常に戻り状態は極めて安定と言ったところ。

その上で決断する。

僕は木下優子さんっていう一人の女の子のことが好きだ。

振り分け試験の日に助けた時からずっと密かに意識し続けて、Fクラスになってしまったと聞いてからはなんとかしてあげたいと願った。ずっと優子さんのことだけを考え続けていて、そうして守りたいっていう気持ちがいつかから恋に変わっていたというだけのどこにでもある簡単でありふれた話。

姫路さんへの罪悪感もある。申し訳ない気持ちもある。でも、今僕はこうしたい。

「あ……。吉井君……」

僕は今まで手持ち無沙汰だった両腕を上げて優子さんの背中に回した。

腕の中にすっぽりと納まった暖かくて柔らかくて小さな体を僕は愛おしく抱きしめて言った。

「ありがとう優子さん。優子さんの気持ち、体中に染み渡るぐらい伝わったよ。……僕も優子さんと同じ気持ちだよ。ずっと隣にいたい。僕も優子さんのことが好きだから」
「っ!? 本当!? ほんとに! 嘘じゃないわよね! 今ドッキリとか言ったらぶっ飛ばすわよ!」

「そこまでバラエティー心に富んでないつもりだけど……。本当だよ。でも告白するのが怖くて、振られるんじゃないかって思うと素直になれなかった。そうしているうちに姫路さんに告白されちゃって、どうしようもなくなったのが今の僕だったんだ……」

「……そっか。それじゃあ仕方ないわね。結局、アタシも吉井君も姫路さんもみんなタイミングが悪かった。これはただそれだけのことだったんだもの」

「そうかもしれないね……。でもさっき優子さんが言ってた通りやっぱり姫路さんのことは僕が背負わなくちゃいけない責任があるよ。だからこの件は僕が自分自身の手の方をつけるよ。それ……で……」

ふらっと意識が途切れる。景色が急に縦から横になった。

あれ？ 急に力が抜けて……。なんでだろう。なんか近くで大声が聞こえるけど声が出ない。

……ああ、そういえば今日僕風邪を引いていたんだった。

今まで異端審問会やらトイレ騒ぎ、姫路さんとの問題 e t c ですつかり意識から抜けていたけど今までのやりとりの中でようやく本当の安寧を取り戻したことで籠が外れたってことかあ。

度の高いメガネを掛けたみたいにはぼやける視界の中で思う。

……本当に、僕ってやつは最後まで締まらないなあ。

☆

目を覚ますと、視界一面が白に覆われていた。

まだ完全に覚醒したわけではないがかすかに薬品の匂いがある。

体に毛布を掛けられていることから、どうやら僕はここで寝かされているらしい。

「……………んっ。あれ？ ……は……………」

「あ、やっと起きた」

「え？」

耳に馴染む声をした方へ首だけ回すと、丸イスに腰掛けている優子さんが僕の方を半眼で見ている。

僕は少しだけ体を起して周囲の見回すと、身長計や体重計、そのほか3つほどベッドが並んでいるのが見えた。おそらく保険室だろう。

「優子さん。僕どうしちゃったの?」

「校舎裏で倒れたのよ。もう、風邪なら風邪つて最初に言いなさいよね! せっかくだいムードになったと思つたら急にぐったりして意識がなくなるから血の気が引いたじゃない! 本気で心配したんだからね! ここに連れてくるまで重かったし!」

「(ズ)、(ズ)めんなさい」

そうか、倒れちゃったのか。

できれば心配を掛けないように風邪のことは内緒にしていたんだけど裏目に出ちゃったなあ。

「僕、どれぐらい寝てたの?」

「40分ぐらいよ。今は五時間目の途中。丁度上ではCクラスとBクラスが試召戦争をしている頃ね」

「五時間目……。あれ、じゃあ優子さん授業は?」

CとB以外のクラスは平時通り授業の筈なのにどうして彼女はまだここにいるんだ

?

「……………アンタが寝てる間もずっと離してくれないからでられなかったのよ」

「へ？」

「手」

手？　　そういえばさつきから左手が何か掴んでいる感触があるなあ。

「……………あ」

僕が左腕を上げると、それに連動して優子さんの右手が持ち上がった。

「どうやら無意識の内に僕は優子さんの手を握っていたらしい。そっか。これじゃ確かに動けないよね。」

「ご、ごめん！　いやこれはしたくて握ってたんじゃないんですよ！　ただで僕が望んでしたわけじゃないんだよ！」

慌てて手を離す。は、恥ずかしい！　気絶してて意識のない状態なのにそれでも手が自然と優子さんの体を求めて動くなんて！

「べ、別にこれぐらいどうってことないわよ。どっちにしてもここにいてもいいつもりだったし……………」

右手を解放された優子さんは左手で包み込むように自分の右手を握り締めた。ずっと僕に握り締められていた右手は熱と汗で赤くなっていて、それと連動するように優子

さんの顔色も赤くなる。くわあ、可愛いじゃないかつ。

「そうだったんだ。看病してくれてありがとう。おかげでかなり楽になったよ」

「当たり前でしょう。もうアタシは吉井君のか……、か………彼女……なんだから」

「あ………そ、そうだね」

「………そうよ。だからその、アタシにはいくらでも甘えてくれていいんだから」

手を忙しく弄って目を何度も左右に動かしながらモジモジと呟く優子さん。

なんだこの可愛いすぎる反応は！ 今すぐ立ち上がって抱きしめたい！

うーん、それにしても優子さんが僕の彼女か……。なんだろうこの感じ。ずっと夢にまでみた光景なのに、まだ校舎裏の告白からほとんど時間が経っていない所為かイマイチ実感が持てないや。そういえばあれから異端審問会や玉野さんはどうなったんだろうか。BクラスとCクラスの試召戦争の様子も見てみたいし、姫路さんのことも心根に残っている。いろいろ気になることがありすぎて優子さんのことに焦点を当てられない所為か？

「……………」

それからしばらく無言の時間が続いた。

なんだろうこのピンク色の空気は……。まるで体中に農耕な蜂蜜を乗りたくられたような甘ったるい雰囲気。まだ校舎裏での余韻が僕らの中に残っているのかな。会話

は弾まないのに居心地が良いなんて感覚初めてだ。

「そ、そろそろ熱測ったほうが良いわよね！ アタシ体温計持って来るから！」

優子さんはイスから弾かれるように勢いよく立ち上がった。

そして今まで閉められていたカーテンを開き、保険医の先生の机の上に置いているボールペンなどが入れてある筒状の入れ物から体温計を引き抜く。

室内の様子から察するに保険の先生はどこへ行ってしまったまま帰って来ていないらしい。

「はい。デジタルで割といいヤツだから十秒くらいで計れると思うわ」

「ありがとう。やってみるよ」

体温計を受け取りさっそく電源を入れるとモニターの部分に電子番号の羅列が現れた。

僕はいそいそと制服の上二つのボタンを外し腋下にそれを挿入しようとしたところ
で……。

「……………」

じーつと真っ直ぐに僕を見つめる優子さんの視線に気づいた。

「……………あの」

「な、なにっ?」

「そんなに間近でじつと見られると恥ずかしくてやり難いんだけど」

「——っ!? そ、そうよね! ごめん、終わるまでアタシ後ろ向いてるから!」

優子さんは耳まで真っ赤にして僕に背中を向ける。

ああもお! なんなんださつきからこの砂糖を直接口の中にぶちまけたような甘々なシチュエーションは! ただ体温を測るだけのになんだかこれから如何わしいをこ
としようとしているみたいじゃないか!

一度目に体温を測った時は何故か以上に高い数値でびつくりしたけど、これは風邪とは違う意味の熱だと思う。

二度目に計り直したらさつきよりもかなり下がって平熱より少し高い程度に留まった。

「うん。これならあと一眠りしたら良くなると思うわ」

僕から受け取った体温計の表示画面を見た優子さんは表情を和らげながら言った。

「昼休みに散々走り回って汗を掻いたのが良かったのかも。これが結果オーライってヤツ?」

「馬鹿言つてないの。病人のくせに。本当はベッドで一日安静にしてなきやいけないんだからね。ちゃんと分かってる?」

めつとか言われそうな感じで叱られた。

「はい、分かっています。でも今日は」

「姫路さんと約束があるから休めない、でしょ？ 分かっているわよ。でもアタシは心配しているの吉井君の体のことよ。確かに約束を守るのは大事だけどそれで吉井君の体調に悪影響が出ちゃったらどうするのよ」

「いめん……」

僕は頭を垂れて謝った。

優子さんは真剣に僕の体を気遣ってくれている。なのに僕はまた姫路さんのことばかりで自分を蔑ろにしてしまった。まだ駄目駄目だな僕。

「僕、ちゃんと姫路さんに言うよ。君とは付き合えないって。それで謝る。許してもらえないかもしれないけど、それでも告白してくれた姫路さんへの責任を果たす」

「うん。アタシも待つてるから。全部終わるまで教室でアンタのこと。そしたら今日だけは何もかも忘れて一緒に帰りましょ」

「そうだね」

左手に柔らかくて暖かい感触を受ける。

いつからか僕の左手には、優子さんの両手が外壁を覆うように掴まれていた。

包み込まれた左手から感じるひんやりとした感覚が熱で絆された体に気持ち良かった。

その夢心地のまま横になろうと体を動かしたその時、

「……………」

いきなり、目の前に優子さんの顔が迫ったかと思つたら唇が一瞬で何か柔らかいものに塞がれた。

それは小鳥がついばむように一瞬だけの軽いキスだったけど、僕は一瞬で頭の中が空っぽになり何も考えられなくなるほどの衝撃だった。ようやく落ち着いてきたと思つた体温は再び急上昇する。

「ゆ、ゆゆゆ優子さん!!? いい今の子ってきききキス——っ!?!」

「ちゃんと姫路さんに顔を合わせて言える様にアタシからのお守り。…………い、一応アタシのファーストキスなんだからありがたく思いなさいよ——っ!」

「僕風邪引いてるんだけど。これってキスしたら駄目なんじゃないのかな!?!」

「もう熱もほとんどなかったから大丈夫よ。それに…………吉井君の熱なら、別にうつつてもいいし…………」

唇に手を添えて照れる優子さんはなんだかすごく色っぽく見える。

や、やばいよ。ついにキスしちゃったよお! どうしよう僕! 人間は生まれたときから幸と不幸を半分ずつ持っているって聞くけど、僕の幸運はここ数日で使い果たしてしまつたんじゃないのかと思うぐらい幸せすぎる!

しかもファーストキスってことはつまり僕が優子さんにとって初めての……ああー！
これはヤバイ！ 考えただけで脳みそが噴火してしまいそうだ！

「優子さん！ お願いがああるんだけど！」

「な、何よ……」

僕は精一杯の誠意のつもりで優子さんと真っ直ぐに目を合わせて告げる。

「も、もう一回、してほしいな」

「なっ!? もう一度!?!」

「さっきは一瞬だったから……。勇氣付けの為に、その……注入を」

「……うっ……」

茹でたタコみたいに首から上を真っ赤にしてブルブル震える優子さんは一度左右前方をちらり見回した後、瞳を潤ませて。

「もうすぐ先生が帰ってくるかもしれないから。……あと一回だけだからね」

「う、うん……」

再び僕は顔を近づけて、静寂に包まれている保健室の一室の中で唇を合わせた。

今度は一度目よりも強く——長く。

最後の舞台。夕暮れの屋上で僕は姫路に向かって限界まで頭を下げた。

「ごめんなさい！ 僕、姫路さんとは付き合えません！」

恥も外聞も脱ぎ捨てて対面に立つ姫路さんに僕なりの精一杯の誠意を示す為になりつたけの大声で謝罪の言葉を告げる。

視線からずっと地面を向いたままだから姫路さんがどんな様子で僕を見ているのかわからない。でもきつと悲しそうな表情を浮かべているであろうことは容易に想像がつく。そう考えると、やっぱり胸が苦しかった。

「……顔、上げてください」

「でも……」

「頭を下げられたままだとお話もできませんから。だから上げてください」

意を決して僕は言われたとおりに顔を上げて姫路さんと正面から相對する。

僕の予想に反して姫路さんの顔には柔らい微笑みが浮かべられていた。

まるで付き物が落ちたかのようなすつきりした気分みたいに。

「まずは、きちんとお返事してくれてありがとうございます。今までずっと返事がな
いまま今日が終わっちゃうんじゃないかなって不安だったんです」

「あ、当たり前だよ！ 約束したじゃないか」

「そうですね。吉井君は一度した約束は絶対に守る人ですから。知ってますか？ 告白した時つて、YESかNOの答えを言われるより曖昧な状態のまま待たされるのが一番不安なんです。まるでゴールのない海の真ん中を漂流したみたいに実体のない恐怖みたいなものがずっと体を蝕んでいくんですから」

「ごめん、姫路さんを待たせて」

「あつ、吉井君は違いますよ！ 吉井君はちゃんと返事を言ってくれました！ ですから吉井君は謝らなくていいんです」

こんな時でも姫路さんは他人を気遣える優しい人だ。

でも今はその優しさが僕には痛いと感じる。

「驚かないで聞いてくださいいね？ ……実はなんとなくこうなるんじゃないかなつて予感してたんです」

「え？ どうして」

「だつて吉井君。昨日私の告白を聞いたときもなんだか違うことを考えていたような気がしてましたから。多分、今の吉井君には私なんかよりずっと大事なことを抱えているんだなつてその時気づきました」

「それは違うよ！ 姫路さんのことだつて僕にとつては同じくらい大切だよ！ あの時は、いろいろ頭の中が混乱してて自分でも良く分からない状態だつたんだ……」

そうか。昨日の同じ場所で葛藤していた時、姫路さんにはそういう風に見えてしまっていたんだ。なんてことだ。本当に最低じゃないか……。

「姫路さんは聞かないの？ どうして僕が付き合えないのだった」

「聞きたいです。すごく聞きたいです。……でも聞かないでおきます」

「な、なんでさ！ 姫路さんには聞く権利があるのに」

「わかりません。もしかしたら知りたくないのかもしれないかもしれません。自分に振り向いてもらえなかつた理由なんて、今から知ってしまつてももうどうしようもできませんから。それならいつそ何も知らないほうが良いかなつて」

「姫路さん……」

「でも私、後悔はしません。吉井君を好きになつてよかつたつて今でも心から思つてます。残念ながら想いは実りませんでしたけど、私は私の気持ちを正直に好きな人に告げる事ができたんですから。それだけで満たされました」

そんなわけがない。姫路さんは嘘を吐いてる。僕でも簡単に見抜けるぐらいの簡単な嘘だ。その証拠にさつきから姫路さんはずっと笑つて……怒りも悲しみもせず、まるで一生懸命子供をあやす母親のような微笑をずっと浮かべ続けている。それが無理に無理を重ねて作つた嘘の表情だつていうことも分かつていた。

でも僕にはそれをやめさせる資格はない。

だってそれが姫路さんの優しさだから。

本当は悲しくて、崩れ落ちてしまいたいほど悲しいはずなのに。それでも彼女は僕のために泣かないように必死に外面を取り繕っているんだ。それを僕がやめさせるなんてどうしてできる……？

こんな痛々しい少女を目の前にただ頭を下げる事しかできない僕の方が泣きたい気持ちになった。

「本当に、ごめん……」

「もう、謝らないください。私に事情があつたように、吉井君にも事情があつたんですよ。今回はそれが偶々噛み合わなかつたつていうだけのことなんですから」

「それでも謝りたいんだ。そうじゃないと僕の気が治まらない」

いっそのこと罵倒して非難して殴つてくれればどれだけ楽だったか。もしこの場に僕がもう一人いたら激昂して僕をぶん殴つていただろう。

でも姫路さんにそんなことはできない。最後の最後まで姫路さんは僕の為に微笑を浮かべ続けることしか出来ないんだから。

僕にとつて、そんな姿を見せられるのは直接的な暴力よりも何倍も痛く苦しかった。

「それじゃあ、最後の一つだけ教えてもらつても良いですか？」

「!? 勿論！ 何でも答えるよ！」

「……吉井君には今、好きな人がいますか？」

「えっ！ それは……」

呼吸が一瞬だけ止まった。

何でも言うとか啖呵を切ったくせについ返答するのが躊躇われた。

くそ、成長しろ僕！ ここで止まったら今までと何も変わっていないじゃないか！

姫路さんが望んでいるなら、僕は姫路さんを傷つけてしまいうリスクを乗り越えてでも言つてあげないといけないんだ。

それが僕なりの姫路さんに対する責任であり、誠意だったはずだ。

「うん、いる。僕には好きな人がいるよ」

「……良かった。これで私に魅力がないから付き合えないわけじゃないってことです
ね」

「そんなわけないじゃないか——！ 姫路さんはすごく魅力的だよ！ 僕も、こんな人
に対する思いやりが深くて——何より可愛い姫路さんに告白されたことをずっと誇り
に思うよ」

嘘じゃない。本当に僕は姫路さんから好かれていたことを誇らしく思っている。

容姿も綺麗で頭も良くて性格も言うところがない完璧と形容できる少女の想いを一
度でも受ける事ができたのは僕の人生で二番目に嬉しいことだと断言できる。

傷つき、ボロボロになったはずの姫路さんは、最後まで気丈で勇ましく果敢な立ち姿で僕に微笑んだ。

「吉井君の想いは十分に分かりました。私も吉井君を好きになったことを忘れません。——きつと、これからも吉井君にはいろいろな苦難や問題が待っていると想います。でも吉井君なら絶対に最後まで乗り換えられます。残念ながらそれを隣で信じる事は私の役目ではありませんでしたけど。せめて”友達”として影から祈ってますね」
「姫路さん……。ありがとう」

止まっていた時間が再び動き出すように姫路さんは歩き出し僕に接近する。

そして——僕の頬に軽い口付けを交わした。

柔らかくてしつとり熱い感覚が頬を伝う。今の感触は、姫路さんの唇……？

「ひ、姫路さんっ!! 今のは……っ」

「……唇のキスは、吉井君の想い人の為に空けておきます。ですからこれが最後の私からお礼です。」

吉井君。

——私に恋を教えてくれて、ありがとうございました」

最後の最後まで、彼女は笑顔のまま言葉を紡いだ。

それから姫路さんは僕の返事を待たず軽快な足取りで屋上を後にした。

僕はまだ頬に感じる暖かさを感じながら、夕暮れに吹く涼風の緩流に煽られている。

「姫路さん。最後まで泣かなかったな……」

ポツリと独り言を夕焼けの空に呟く。

姫路さんの関係もこれですべて解消された。

許されるなら、これからも友達として姫路さんと仲良くしていけたらと思う。自分勝手な言い分だけど、それでも僕は姫路さんとまだたくさん話したい。一緒に騒いで笑い合って楽しいこといっぱいして、いつか今日の出来事を思い出として語り合える日はずっと望み続ける。

☆

Fクラスの教室に戻ると、中では優子さんが窓に射す夕焼けを眺めていた。扉が開く音に反応し、彼女の顔が僕の方に向くとその口元が少しだけ綻ぶ。

「終わった？」

その口が、たった一言を僕に問うた。

「……うん。全部終わったよ。姫路さんに僕の正直な気持ちを話して謝った。許してもらえるかどうかは分からないけど、僕に言えることを全部話したよ」

「そっか。……それじゃあ今日はもう帰りましょ」

あつさり与会話を打ち切つて僕と自分の分の鞆を持って優子さんは歩み寄つてきた。もう、僕には好きな人がいてこうして気持ちを通じ合う事もできた。

それでも姫路さんのことがまだ心根の奥に残つていてそのことがちくちくと僕の胸に罪悪感を訴え続ける。

「優子さん……。僕は——あ」

懺悔の句が出そうになつた口を優子さんは人差し指を立てて妨げた。

「言いたくない事は無理に言わなくて良いのよ。吉井君は何も間違つてない。だから今だけは何も考えないで。それは答えのない泥沼の淵だから」

「……ごめん。ありがとう」

「言つたでしよ、一緒に背負うつて。嬉しいことも辛い事も、吉井君が肩の荷に耐え切れなくなつて倒れそうになるならアタシが支える。これからもずっとね。綺麗に半分こにはできないけど、それで少しは楽になるでしょ?」

「——ははは」

自然と笑いが漏れた。

ほんと僕の周囲の女の子は強い人ばかりだな。それに反比例するように否応なく自分の弱さが浮き彫りになつて悲しくなる。

「うん、そうだね。今日はもう帰ろう。……帰ってゆっくり寝て体調を良くして、また明日にいつも通りの僕で学校に登校できるように」

「それが一番ね。というわけで——はい」

「??? これ、お弁当?」

いきなり鞆から取り出したお弁当箱を手渡された。

「結局昼休みの時はごちゃごちゃして最後まで食べ切れなかったでしょう。まだ中身余ってるからちやんと最後まで食べきる事。どうせ吉井君の家に晩御飯の用意も材料も残ってないんでしょ?」

「そういえばそうだったかも……。うん、ちゃんと食べて洗って返すよ。ありがとう」

「ん。それじゃ帰ろ……」

手を繋いで僕は教室から退室する。

この手の温もりを一生掛けて守れるように、僕は心を強くする事を誓って明日からの最後の試召戦争に挑むんだ。

問28 坂本雄二の戦略

「えーと、そういうわけで……」

「アタシ達、付き合うことになりました」

姫路さん。優子さんとの様々な想いが交錯した昨日から一日が経った翌日の学校の屋上で、僕と優子さんはいつものメンバーの前で恋人宣言をした。

「なんだ。俺はてつきり前から付き合っていると思ってたが違ったのか」

「え!? そんなに僕分かりやすかった……?」

「バレバレだ馬鹿。あれで隠してるつもりだったのか? まあとにかくおめつとさん」

「ワシは自分のことのように嬉しいぞい。身持ちの硬い姉上にもようやく心を許せる人ができたのじゃな」

「ちよ!? 秀吉アంతタなに言ってるのよ!」

「事実じゃろう」

「う……」

「ともかくじゃ。おめでとうじゃ二人とも」

「……………おめでとう」

みんな口々に祝福の言葉を掛けてくれる。最初は照れくさかったけど言つてよかった。

ちなみに場所を屋上に指定したのはクラスのみんなには秘密ということにしているからだ。今朝登校して一番に昨日姫路さんに振られたということとして異端審問会の攻撃を退く事であつた。だがこれでもし今度は優子さんと恋人同士になつたなんて知られたら今度こそ本気で殺しに掛かつてくるであろうことは想像に難くない。

なので友人の間にだけひっそりと伝えておこうと思つて今の様な場を設けたのだ。「二人が恋仲になるのは結構だが、教室でも度を越していちやいやするんじゃないぞ。いくら俺でも妬みでぶち殺したくなるからな」

「教室ではこれまで通りにするつて。じゃないと他のクラスの連中が怖いしね」

「……………つまり教室外ではいちやいやすると。盗聴器を増設する必要があるらうぞ」

「それは是非一度聞いてみたいのう」

「ムツツリーニ。撮れたら俺にも見せてくれよ」

「……………(こくん)」

「何を平然と君達は盗聴しようとしてるの!? 絶対見せないからね!」

「土屋君つて普段学校で何してるの…………?」

こいつらの手に掛ければ校内を隅々まで監視することなど朝飯前にやってのけてしまふからなあ。次から場所に気をつけて二人でいちゃいちゃしよう。

「……………」

「美波？ さつきから静かだけどどうしたの？」

「別に……………」

何故か一人離れたところでふてくされた美波に声を掛けると素っ気無い返事と共にそっぽを向かれた。なんだろ。自分が独り身だからこういうのはやっぱり面白くないのかな。

「ウチ、先に教室戻ってるから」

そんなことを考えているうちに、僕らを置いて美波は一人で校舎で戻ろうと歩き出した。やはり怒らせてしまったらしい。女の子って難しいな。

「待つてよ美波！ どうして先に行っちゃうの？ 僕何かした？」

「あんたは——っ!? ………………やっぱりいい。おめでどう二人とも。せいぜいお幸せにね」

激昂するかと思うと、まるで諦めるように嘆息して美波は僕らに背を向ける。

「美波、どうしちゃったんだろう……………」

肩を震わせて校舎に向かって歩く美波の後姿は、何故か泣いている様に見えた。

僕は心配になり駆け寄ろうと動き出した瞬間、隣の優子さんがそれを腕で阻んだ。

「吉井君はここにいて。美波とは……アタシが直接話をするから」

「そう？　じゃあ悪いけどお願いするよ」

「ええ。それじゃあアタシもちよつと抜けるわね。後は試召戦争なり話を進めておいて」

それだけ言い残して優子さんも校舎の中に消えていく。

まあ同じ女の子同士の方が話しやすいこともあるだろう。もしかしたらそう思つて優子さんは気を使つてくれたのかもしれない。

美波、機嫌治つてくれると良いな。

「修羅場だな」

「修羅場じゃの」

「……………血の匂いがする」

「三人とも何言つてるの？」

気のせいだろうか、さつきから背筋に悪寒を感じるんだけど……。

「島田のことは木下に任せるとして、俺達はこれからの話をしよう」

「試召戦争のこと？」

「そうだ。——昨日BクラスとCクラスが試召戦争をし俺達の予定通りBクラスが勝つ

た。結果としてCクラスは一段階下Dと同等の設備に落とされBクラスはそのままAクラスに牽制した。それが昨日の戦争の一連の顛末だ」

「ということは、今日にでもワシらがAクラスに宣戦布告することも可能なのじゃな」

「そういうことだ。秀吉の言う通り俺達は今日Aクラスに宣戦布告する。正真正銘、これが最後の戦いだ」

「そっか。いよいよなんだね」

「……………緊張する」

ムツツリー二と同じように、僕の体にも不思議な震えが走っていた。これは武者震いかな。

「ここまでできた以上、絶対に負けは許されねえ。その秘策も用意してある」

「秘策って？」

「それを今から説明する。まず対決の内容だが、これは科目を限定するつもりだ」

「限定じ？　つまり今までのような戦争ではなくて勝ち抜き勝負で挑もうと言うのか雄二よ」

「その通りだ。……はつきり言つて、俺達が正当法で挑んでも100%Aクラスには勝てん。だから根本的な勝負内容の変更をする。これならある特定科目については滅法強い生徒がいるFクラスにも勝機はある。木下の編入を加味するなら理想としては五

対五のシングルマッチがベストだ」

「保健体育のムッツリーニとかだね。……あれ？ でもそれ以外はどうするの？」

五対五ということはムッツリーニと優子さんともう一人誰かがAクラスを倒さなければならぬ。だけど僕達にはそこまで点数を持った生徒はいない。

「……………数学の島田は？」

「島田の数学は調子のいい時でも200点弱。Aクラスの下の中つて所だ。人数を限定する以上向こうも相当高い点数を保持している人間を起用してくるだろうから、島田ではちよつと力不足だな」

「じゃあどうするのじゃ？ ワシも古典は中々じゃがAクラスほどではないぞい」

「わかっている。だから最後は俺がやる。戦うのは俺と翔子だ」

雄二と霧島さんが一騎打ち？ なにをバカな。

向こうは学年主席。こっちは最低ランクFクラスの代表で落ちこぼれの元神童だよ？ そんなの戦う前から負けているじゃないか。

「明久。疑問が顔に出てるぞ。——確かに俺の点数はそれほど大したものじゃない。だからさつき言っただろ。科目を限定するって」

「それって雄二にもムッツリーニのような一科目だけ強いものがあるってこと？」

「いや、ない。俺のテストはほとんど点数は横並びだ。得意科目も苦手科目もないに等

しい。だが科目を限定するっていうのは単に教科を一つに絞るだけじゃないんだ」
「……………」

「俺が翔子に申し込むのは日本史。——それも小学生の範囲で100点満点の上限ありでな。召喚獣を使わない純粹な点数勝負だ。試召戦争つてのは積もるところテストの点数を使った勝負つてことだから、その範囲を逸脱しないものならルール違反にはならないはずだ」

「なんじゃと? じゃが小学生レベルじゃとどちらも100点を取れて当たり前じゃろう。それでは勝負にならんぞい」

秀吉は当然のように疑問を投げかける。僕もそう思う。

しかし、それを否定したのはムツツリーニだった。

「……………違う。逆に些細なミス一つで敗北するということだ」

「あつ、そうか!」

「……………なるほどのう。注意力が勝敗を別つのじゃな」

「そういうことだ」

「でもさ雄二。あの学年主席の霧島さんがそう簡単にミスしてくれないと思うんだけど」

「そこは織り込み済みだ。小学生レベルの問題程度あいつなら余所見をしながらでも満

点を取るだろう。だからただで勝負はしない。俺は翔子の弱点を知っている、これさえ突けば確実に勝てるものがない」

やけに自信満々に答える雄二。よほどの信頼性の高い手段なのだろうか。

「それは——大化の改心だ」

「大化の改心？ 誰が何をしたってやつ？ そんなの小学生の問題で出たっけ？」

「違う。そんな難しいものじゃない。もつと単純に年号を問う問題だ。大化の改新が起こったのは645年だが、いろいろ理由があつてアイツはこれを625年と間違えて覚えてるんだ。それさえ出れば俺は勝てる。確実にだ」

雄二は口の端を吊り上げてニヤリと笑った。

なるほど。理屈はなんとなく分かった。これで雄二が勝てば三対二で僕らの勝ちになるんだね。

「心配なのが姫路と木下の組み合わせなんだが。それはここで議論しても仕方ないからまた本人がいるときにでも話を聞かか」

「そうだね。——ところで雄二。さつきから気になることがあるんだけど」

「どうした？ 何か不安要素でもあつたか？」

「そうじゃなくて。雄二って霧島さんと仲いいの？」

さつきから翔子とかアイツとか妙に馴れ馴れしい呼び方をしている。ひよつとして

顔見知りなのだろうか。

……そういえば昨日トイレの個室で姫路さんと霧島さんの話を盗み聞きした時に霧島さんはいかにも好きな人がいるような感じの話をしていた。まさかそれが雄二なんてことはあるまいな……？

「ああ。あいつとは幼馴染だ」

「……………」

「どうした明久。なんとも言えない微妙な顔をして」

「そうか。幼馴染なのか……。僕がまだ異端審問会の一員だったら迷いなく刃を仕向けていたところだが、残念だな。」

「いや、雄二を異端者として断罪できないのがちよつと悔しいだけだよ」

「それやったらお前と木下の関係をクラスに暴露してやる」

「よし雄二。ここはお互い休戦協定としようか」

「懸命だ」

ひとまず僕の保身の為に（利用価値があるまでは）雄二との友情を高めあわないとね。「そういえば雄二とムツツリーニは明久と姉上の交際を宣言した時にそれほど暴れなかったのう。いつもなら明久の幸せは全力で妨害しておったのに」

秀吉が思い出したように言う。

明らかに友達としてありえない行動を平然と口にはしているが、僕らの間で割と普通のことだったのでそのことに関しては誰も驚かなかった。

「明久個人の幸せなら今まで通り全力で阻んでやったんだがな。今回は姫路や木下優子のことも絡んでいろいろややこしいから下手に突くと取り返しのつかないことになりそうのでやめておいたんだ。感謝しろよ明久」

「雄二。それはつまり場合によっては僕を処刑することに迷いはないってこと?」

「当たり前だろ。何言ってるんだバカ。俺がお前の幸せなんて許すはずないだろう」

「この野郎。試召戦争中じゃなければ全力で殺しに掛かっているとこころだ。」

「……………俺はそもそも許した覚えはない」

「なんだって?」

「……………明久。忘れていないか?」

「珍しいムツツリーニの真面目な顔。な、なんだ。コイツはなにを考えている?」

「ムツツリーニ。君は何を企んでいるんだ…………?」

「……………これを」

懐からポータブル機器を取り出すムツツリーニ。

カチッ

『ゆ、ゆゆゆ優子さん!!? いい今のってきききキス——っ!?!』

『ちやんと姫路さんに顔を合わせて言える様にアタシからのお守り。……い、一応アタシのファーストキスなんだからありがたく思いなさいよ——っ！』

ピッ

「よしムツツリーニ取引だ！ 僕の秘蔵のエロ本を十冊進呈しよう！ だから早くその機械をこつちによこすんだ！ ついでに外部保存したメモリーもすべて渡せ！ 僕と優子さんに関連する音声全部だ！ 家に置いてあるパソコンのハードディスクとDドライブの消去も忘れるなよ！」

なんてものを録音してるんだこいつは!? これが異端審問会に渡ったら僕の学園生活と優子さんとの華々しい恋人関係がまるごと潰れかねない戦略級の爆弾じゃないか！

これはなんとしてもすべて回収して僕の管理下に置かなければ。いざとなればコイツを殴り殺してでも奪いとる！

「へえ。明久と木下はキスは済ませてたのか（ニヤニヤ）」

「ワシは昨日姉上に聞かされておったので知っていたが、うーむ。なかなか可愛い会話じゃのう（ニヤニヤ）」

「そこ！ さつきから気味の悪い笑顔をしなさい！」

「照れる事はないぞ明久。これで一步大人の階段に上がったんだからな（ニヤニヤ）」

「その笑いがむかつくんだ！」

急に劣勢な立場に置かれてしまった。というか優子さんも何で秀吉に言っちゃつて
るのさ！

「いやいや良い物を聞かせてもらつた。これは後々までネタにできるな」

「くっ!? こうなつたら。雄二！ キサマも何か恥ずかしいエピソードを晒せ！」

「誰か晒すかアホ」

なんてヤツだ。ここは喜んで共に羞恥の地獄に落ちるのが友達であろうに！

「しつかしよりもよつてこの中で一番最初に彼女持ちになるのが明久だとはな。別に
彼女がほしいわけじゃないがその一点だけなんとなくむかつくな」

「ワシは元々姉上と同じような顔の所為で男子にばかり告白されて女子に振り向かれた
事はないし、ムツツリーニは女子と関われれば血の雨が降るのじゃからはじめから勝負に
ならんが、雄二ならその気になれば女の一人や二人作れるのではないか？」

「バカ言うな秀吉。俺はまだ自由でいたいんだよ。恋人なんて雲みたいにあやふやなも
んに縛られるのはゴメンだ」

「……………つまり好きな異性はいないと」

「ああ。いないし。これから作る予定もない」

きつぱりと断言する雄二。らしいと言えづらい返事だが。そんな傲岸不遜な態度

では一生彼女なんて出来ないと思う。

……雄二は霧島さんと幼馴染と言ってたけど、霧島さんはずっと雄二と同じ小学、中学、高校と通っていたんだよね。だとすると彼女は雄二のことをどう思っているんだろうか。

なんとなく雄二と霧島さんの境遇が僕と姫路さんに似ている気がして気になった。

問29 Aクラスへ宣戦布告

「俺達Fクラスは、Aクラスに代表同士の一騎打ちを申し込みたい」

代表の雄二に僕、優子さん、の三人は宣戦布告の為Aクラスを訪れていた。

「代表同士の対決……。一体どういうことだい？」

対する交渉相手は学年で三番目に学力が高いとされている久保利光君。

そして工藤愛子さんが傍に付き添っていた。

あれ？ さっきの作戦会議では科目を限定する為に五対五に持ち込むって言ったのに方針を変えたのか？

僕はひっそり雄二に耳打ちして疑問を問う。

（雄二雄二。どうして代表対決なんて言い出したの？ 五対五の一騎打ち勝負にするんじゃないかったの？）

（バカ。いきなりこっちの本当の目的を話しても何か裏があるんじゃないかって怪しまれるだけだろうが。ここはあくまで最初に無理難題を吹っかけて向こうが却下することによりこっちの要求が一部しか通っていないかのように見せかけなきゃいけないんだ）

(あ、なるほどね……)

(それだけでAクラス側にとっては俺達の作戦を妨害したと勘違いする。そして表面上はお互いの”妥協の末”に決定されたルールというシナリオを作り上げる。余計な疑惑を掛けられないためにもな。いいからお前は黙ってみてろ)

それ以上僕に何も言わず、雄二の目が僕からAクラスの交渉人側に向けられる。

「勿論俺達Fクラスが勝つための作戦だ」

「うーん。時間の掛かる試召戦争を手短に終わらせられるのは嬉しいケド。だからといってリスクを負ってまでする必要はないんじゃないかな」

「工藤さんの言う通りだね。Fクラスには義理も恩もないわけだし、わざわざ自分が不利になる条件を飲むわけにはいかないよ」

返事は当然のようにNO。

だけど雄二にとってはここまでは織り込み済み。寧ろこれからが交渉の本番だ。

「当然の判断だな。だがこつちも手放して交渉に来たんじゃない。Aクラスに納得してもらえようそれなりの”用意”がある」

「ほお。是非とも聞かせてもらいたいな。その用意とやらを」

「ああ。だけどその前に、昨日Bクラスから宣言は聞いたか？」

「Bクラス？——ああ、開戦の準備があるとか言ってきたアレのことか。あれも君た

ちの差し金かい?」

「さてな。それで? お前達はBクラスとやりあう気はあるのか?」

「そりゃあ挑まれたら戦うしかないケド。でもBクラスってFクラスに負けたんじやなかったっけ? 試召戦争って一度負けたら三ヶ月は再戦できないルールだったよね?」

工藤さんの言うとおりの。試召戦争のルールの一つとして『敗戦したクラスは三ヶ月間の宣戦布告の禁止』が言い渡される。

これは何度も同じくクラスが戦って泥沼化しないようにした学園側の処置だ。

「それは大丈夫でしょ。実際の結果はともかく、最終的にあの戦いは『和平条約により終結』という形にしているのだし。設備の交換もしていないのだからBクラスの宣戦布告の権利はまだ残っているわ」

優子さんが反論を述べた。

それはつまり、僕らの要求に応じなかったら容赦なくBクラスを差し向けるといふことで、これじゃ僕らの方が悪役だな。

雄二だけでなく優子さんも割と口が上手いのでこう言った交渉事には滅法強い。

この二人が入れば大抵の条件は飲ませてしまえるんじゃないだろうか。

「木下さん。それは脅迫のつもりかい?」

「相手に拒否権がある交渉を脅迫とは呼ばないんじゃないかな久保君? アタシ達はあ

くまでお願いする立場で来ているのだし。最終的な決定権はそっちにあるのよ。違うかしら？」

「なるほど。Fクラスには中々に口八丁な人が多いようだね。Aクラスにも木下さんのような人がいてほしかったよ。僕らはどうもそれらへんのリーダーシップを発揮できるような才能をもった人間が少なくてね」

「褒めてくれてありがとう久保君。——そうね。本来なら久保君の位置に立っていたのはアタシかもしれないと思うとちよつと皮肉だね。まさに運命の悪戯ね」

優子さんは自虐するように薄い笑みを綻ばせた。

そっか。もし優子さんが振り分け試験で倒れず、万全の力を発揮してAクラスになっていたとしたら、今こうして僕達と対面して交渉の席についていたのは優子さんだったのかもしれないんだ。久保君や優子さんの言うことも分かる気がする。

「それで僕達の条件は飲んでもらえるの？」

「ノンノン。結論を急ぐのは死亡フラグだよ吉井くん。それにBクラスの宣告ってだけじゃあまだ条件を受けるには足りないかなー」

「中々に身持ちが硬い。さすがに簡単には乗ってくれないか」

「当然だよ坂本くん。こっちは向こう三ヶ月間のクラス全員の学習環境が掛かってるんだから。そう安々とそっちの思い通りの案には釣られるわけにはいかないよ」

嘆息する雄二に軽快な笑顔で応対する工藤さん。

Aクラスともなればやっぱりそうあっさり乗せられてはくれないか。

伊達に学力最上位クラスってだけのことはある。

「なるほど。じゃあもう一つ条件を付け加えよう。少なくともこれはお前達にとっては悪い話じゃない」

「ふむ。なんだいそれは？」

「仮に俺達がAクラスに勝った場合。本来なら設備を交換するところだが、それに期間を設ける」

「期間？ 一体どういうこと？」

「もしFクラスが勝ってAクラスと設備の交換をしても、一週間でそちらに教室を返すことを約束しよう。要するにレンタルだ」

「……………え？」

久保君と工藤さんの表情が固まった。

その気持ちは分かる。試召戦争はクラスの設備を掛けて戦う行事だ。なのにその報酬を受け取った後で返すなんてまったく無意味な行為にしか見えなから。戦う意味そのものが失われていると思うのが普通に反応だろう。

しかも今回はDやBの中間に位置するクラスとは違い一番位の高いAクラスの話。

ここ以上にいい設備は学校に存在しないのだからそれをみすみす手放すなんておかしいと考えるはずだ。

「どうして？ Fクラスの目的はAクラスの設備を手に入れることじゃないの？ その為にDクラスやBクラスを倒しても設備の交換しなかったんでしょ？」

「それもある。だが俺達の到達点はそこじゃない。Aクラスに勝つという実績が今俺達に一番求められているものなんだ。ぶつちやけた話、設備なんて二の次三の次なんだよ。あつたら良いが別になくても困らない程度のものでしかない」

「だけど、それはクラスの総意なのかい？ 坂本君達が良くてもFクラスのみんなは納得しているのだろうか？」

「察してくれよ。だからこうして少数でお願いに来てるんだ」

「……………」

久保君と工藤さんは顔を合わせて視線を交錯させる。

きつと判断を迷っているんだろう。Aクラスにとつては勝てばそのまま。負けてもすぐに設備は元に戻すという失うものがほとんどない超好条件。

これだけAクラスを優遇した処置だ。さすがに無視はできないはずだ。

そうであつてくれないと僕らが困る。

「……………わかった。そつちの条件を飲もう。しかし代表同士の一騎打ちというのは変えて

もらえないだろうか」

「え？ どうしてなのさ久保君？」

「これまで二つもの上のクラスを倒した坂本君のことだ。何か霧島さんを打倒する策があってもおかしくないからね。霧島さんが負ける可能性などないと思うが用心に越した事はない」

僕の質問に久保君は状況を冷静に見定めた返答をする。

雄二の目論見通り、代表戦は避けてきたな。

「それなら一騎打ち五回の五対五でどうだ？ これなら俺だけが勝ってもAクラスが不利になる事はないと思うが？」

「五人対五人かあ。ウン。それなら受けても良いよ。ね、久保君」

「そうだね。形式上の条件はイーブンだ」

よし、これで第一条件クリアだ。

うまく対戦方法を五対五にもっていった。さすが雄二。頭脳戦はAクラスにも引けをとらない。

「感謝する。次は科目選択だが、この選択権はこちらで貰い受けたい」

「え、それは……」

工藤さんが言い淀んだ。その時、

「……受けてもいい」
「うわっ!？」

久保君と工藤さんの後ろから静かな足取りと腰まである流麗な黒髪をなびかせて霧島さんがやってきた。び、びつくりしたあ。気配がまったくなくなかったから一瞬幽霊か何かかと思つたよ!

「代表、いいの?」

「……その代わり、もう一つ条件を加えたい」

「なんだと?」

雄二の目が細まる。

Aクラスからの条件? 一体どういうことだ?

「霧島さん。条件つて何?」

「……勝つた方が一つ、なんでも言う事を聞くこと。それを受け入れるなら科目選択権はすべてそちらに譲つて良い」

「だ、代表! いいのそれで!？」

「……うん。それと」

霧島さんの視線が雄二から優子さん——そして僕へと移つて行く。

目線がそこで固定されると、霧島さんは真つ直ぐ僕の方へ歩いて近づいて来た。

「ぼ、僕……?」

「……質問がある」

「え? 僕に?」

「……そう。……吉井、どうして瑞希の想いに答えなかったの?」

その瞳には、明確な敵意が宿っていた。

「瑞希つて姫路さん!?! どうして霧島さんがそれを?!」

「……そんなことはどうでもいい。何故、吉井は瑞希を振ったの」

射殺するような鋭い眼で僕を見上げながら霧島さんは僕に詰め寄る。

いつものトーンの低く重い声が、今は静かな迫力と怒気を纏っているのが感覚的に分かった。

そうだ。昨日女子トイレの個室でも霧島さんは姫路さんと告白について話していたじゃないか。それならその結末だって姫路さんから聞いていてもおかしくない。

だったらここは下手に誤魔化すのは余計に霧島さんを怒らせるだけだ。正直に答えよう。

「それは……。僕が姫路さんを好きじゃないからだよ」

「……嘘。吉井が瑞希を好きじゃないわけがない。もっとほかに理由があるはず」

「ど、どうして!?!」

「……本当に瑞希のことをなんとも思っていないなら、最初の日のうちに返事ができたはず。なのに吉井はそうしなかった。それは吉井の中に瑞希と何か別のモノが心の中でせめぎあっていたから。違う?」

「……………」

的確すぎる台詞に思わず絶句してしまふ。完全に凶星だった。

まるで最初から全部分かっていたような言い方だ。霧島さんはエスパ―なのか。

「……吉井。あの返事の後、瑞希はどうしたと思う?」

「え?」

「……私も電話越しでしかわからなかったけど、それでもハッキリと伝わるぐらい瑞希は泣いてた。仕方がない。覚悟はしてたって……。でも最後は嗚咽ばかりでまともな言葉が出てこなかった」

「……………」

「……そのシヨックで今日は学校を休んでる」

そういうえば教室を見回しても姫路さんの姿は見えない。いや、意図的に見ないようにしてたのかもしれない。姫路さんと会うのはまだ少し怖いから。

見たことのない霧島さんの剣呑とした雰囲気にも周りの雄二や久保君達も口をはさめないでいる。

「僕は……」

僕は、霧島さんになんて弁明すればいいんだろうか。

姫路さんの想い、決意、そして責任は全部背負っていくと決めた。

なのに、それを人から責められるやっぱり胸に来るものがある。正直言っただけでちよつと泣きそうだ。

「……これは吉井と瑞希の問題だから二人の決めたことに私が口をはさめないことは分かっている。だけど……納得できたわけじゃない。吉井。貴方が何を考え瑞希の気持ちを受け入れない決断をしたのかはわからない。でも教えて。瑞希の何が駄目だったの？」

「違う。姫路さんは何も悪くないよ。間違ってたのは全部僕だったんだ。だから霧島さんの疑問は杞憂だよ……」

「……だったら。なおさら瑞希の好意を踏み躪った意味が分からない」

「……ごめん」

「……謝ってほしいんじゃない。ただ理由が聞きたいだけ」

「……」

射すような視線のまま。けれど微かに霧島さんの瞳は潤んでいた。

きつと今まで姫路さんと距離が近かった分、気持ちも同調しやすんだろう。

それとも、姫路さんに自分の境遇を重ねているのか……。

「それ以上アタシの『彼氏』に気安く近づかないでもらえないかしら。Aクラス代表」

その時、僕と霧島さんの間を割るように優子さんが僕の前へ出て霧島さんと向き合った。

「いくら大事な友達でも踏み込んだじゃいけない領域があるでしょう。それを土足で踏み越えてる自覚はあるの？」

優子さんの台詞に霧島さんが反応して意識が僕から彼女へと移っていく。

僕の位置では優子さんは後姿しか見えないけど、触れるだけで静電気を発しそうなビリビリとした雰囲気からして霧島さんと睨み合っているであろうことは察しがついた。

「……彼氏？ それじゃあ貴方が今の吉井の恋人なの？」

「ええそうよ。昨日付けでね」

「……昨日。そういうこと。じゃあ貴方が瑞希から吉井を奪った元凶なんだ」

「奪ったなんて言い方は心外だけど。結果的にはそうなるわね」

霧島さんの敵意を込められた憤りを軽く受け流して軽佻けいちように答える優子さん。睨みあう二人の間で重苦しい空気が充満していくのが気配で感じられた。

う……。工藤さんや雄二もなんだかちよつと居心地悪そうな表情になってる。これ下手したら試召戦争どころの話じゃなくなっちゃいそうだ……。

「……どうして？　そこまで理解できているのなら、少なくとも貴方は瑞希が吉井のことを好いていたことを知っていたはず。なのにそれを横から掠め取った」

「そうよ。アタシは姫路さんから吉井君を横取りした。言い訳はしないわ。けど、それがなに？」

「……どうして、そんなひどいことができるの……？」

「ひどい？　——ふざけないで。さつきから黙って聞いていれば瑞希瑞希って一方的に姫路さんを擁護して吉井君の気持ちも考えずに彼は悪者扱いの繰り返し。そっちの方がおかしいでしょ。吉井君はゲームの優勝商品じゃないのよ」

「……それは」

優子さんの反撃に初めて霧島さんが動揺した。

「……でも、吉井の中には間違いなく瑞希に対する想いがあつたはず。それを貴方が消してしまった」

「馬鹿なことを言わないで。消してないわよ。そんなこと、出来るはずないじゃない。姫路さんのことを忘れたなんて、そんな侮辱二度と彼の前で口にしないで。不愉快だわ」

「……それじゃあ、どうして」

「吉井君は姫路さんから気持ち告げられた日からずっと悩んで悩んで迷ってたわ。体

調を崩すほど苦惱してたの。でも最後は彼自身の意思でアタシを好きだって言って選んでくれた。それまで抱えていた姫路さんへの罪悪感と自責の念をずっと背負っていく覚悟を決めてね。それがどれほど吉井君にとつて心苦しいことだったか貴方に分かるの？ 何も知らない貴方が勝手に姫路さんを被害者扱して吉井君のことを批判しないで！」

落雷のような優子さんの号哭ごうきくに僕まで肩を驚かせてしまった。

優子さん、本気で怒ってる……。

まるで自分が辱められたかのように激怒していた。

その気持ちは嬉しい反面、衆目の場でこんなことを言わせてしまった彼女自身に申し訳なく思った。あとできちんと謝らないと。

「……違う。私は——っ」

「そこまですてくれないか。二人とも落ち着いてほしい。ここは勉強するための教室だよ」

久保君が椅子に腰掛けたままメガネのブリッジを指を上げて二人の静止を促した。

「……久保」

「霧島さんもちよつと熱くなりすぎだよ。この場では木下さんが正しい。姫路さんのことは僕も残念に思うけど最後に選ぶべきは吉井君の意思だ。それを他人が捻じ曲げて

はならないよ。……そう、誰と付き合おうともね」

なんだ。今背筋にブルツと寒気が……。

「……ごめん」

「アタシもちよつと熱くなりすぎたわ。ごめんなさい」

お互いに首を垂れる。

よかった。最初はどうなることかと不安一杯だったけど何事もなく終わって、

「……でも、認めたわけじゃないから」

「なんですって？」

ない！ どうして消えかけた火に油を注ぐんだ霧島さんは!?

僕と霧島さんの問題だったはずなのにいつのまにか優子さん対霧島さんの構図になっちゃってるよ！ もうこれ僕が入る余地なくなってるない!?

「は、話はもう全部終わったよね！ ね！ 雄二!」

「あ？ ああそうだな……。それじゃあ俺達はお暇するか」

「あ、ちよつと待ってヨ」

席を立つ僕らに工藤さんが声を上げた。なんだろう。

「試召戦争の開戦のことなんだけど、Fクラスはいつを予定してるの？」

「一応今日の午後に始めようと思ってるぞ」

「それなんだけど。来週の月曜日に回してくれないかな？ ……ほら、今日は見えての通り姫ちゃんがお休みだし……」

「あ……。そうだったね」

姫路さんは学年次席。つまり召喚獣の強さも学年で二番目なんだから相当なものだろう。Aクラス側にとつてはその彼女が不在の試召戦争は出来れば回避したいと考えるのが普通だ。

これは僕の責任でもあるから否とは言えない……。

「それぐらいなら、良いよね雄二」

「……そうだな。元はと言えばこの明久のバカが引き起こした問題なんだし。それぐらいの融通は聞こう。科目選択権も得られたしな」

「アリガトウ！ 来週は正々堂々戦おうネ」

「こちらこそ。よろしくね」

（表面上は）すんなりと要求が通り僕達はAクラスに宣戦布告を果たした。

用がなくなつたAクラスを後にして、僕らは新校舎から渡り廊下を通り旧校舎に戻るために三人横に並んで歩く。

「気をつけろよ」

その途中、歩きながら雄二が重たい口調で僕にそんな台詞を告げた。

「気をつけるって、何が？」

「翔子のあの様子だと、もし俺達が負けちまったら最悪お前と木下を別れさせるなんて言いかねないぞ」

「ええっ!？」

霧島さんがそこまで姫路さんのことを想ってるの!？ さすがにそれは困るよ!

「でしようね。なんとなくだけどアタシもそうなりそうな気がしてたわ」

「優子さん気づいてたの!？ じゃあ何でその時に止めないのさ! これでもし僕らが負けちゃったら……………」

「何弱気になってるのよ。勝てばいいでしょう。元々そのつもりで始めた試召戦争じゃない。今更負けられない理由の一つぐらいできても変わらないわ」

「それはそうだけど……………」

なんて豪胆なんだろう優子さんは。負けることを微塵も考えてない。

それとも僕は豆腐メンタルなんだろうか。

しかし、これでいよいよもって絶対に負けられない戦いになってしまった——っ。

「何で霧島さんはそこまでするんだろう……………」

「さあな。今の明久の境遇をどつかの馬鹿野郎に照らし合わせて気が気でないからなかつたんじゃねえか。アイツはアイツで外面ばかり硬くて内面は脆いからな」

「坂本君。それって——」

「あ、いた！ アキーっ！」

優子さんが何か言いかけた時、旧校舎の方からポニーテールを揺らしながら美波が走ってこちらに向かってきた。

「美波。どうしたの走ってきて。Aクラスの宣戦布告なら無事終わったよ」

「そう、良かったわ。——ってそうじゃなくて、こっちの用事よ」

「？ 用事？」

なんだ？ 妙に顔が赤いけど。走って疲れたのかな？

「アキ。今日の放課後ウチとデートしなさい！」

「……………え？」

一体どうしてこう次から次へと問題がやってくるんだらう……。

あんまりにも苦難が多すぎてそろそろ胃が痛くなるよ。

外の雲行きは、そんな僕の心情を表すかのように少しだけ雨模様だった……。

問30 島田美波の思い出／前

なんだかよくわからない展開が起こって美波とデートすることになった僕。

「さ、アキ。行くわよ」

「そうだね……」

放課後になった途端美波が僕の席までやってきて天真爛漫な笑顔で手を引いてきた。

ど、どうなってるんだ……。何で僕が美波とデート？ どうしてこうなった……。

改めて考えてもさっぱり理解できない。おかしい。僕には優子さんという立派な彼

女がいるというのに。何故僕は美波と手を繋いで立ち上がっているんだ。

これはまさか世界線が変わったのか……。

「じゃあ優子。ちよつとアキ借りるわね」

「好きに使って。楽しんできてね」

「うん」

二人の間で謎の取引が交わされていた。ちよつとちよつと！ 何で僕の知らないと

ころで僕の身柄の所有権の売買が行われてるのさ！

「優子さんこれは一体どうしたこと！ 何で僕美波とデートしなきゃいけないの!？」

「うーん。成り行き？」

適当だった。

成り行きであつちへこつちへと連れまわされる僕の人権はどこにいったのジーザス。

「ほらアキ。早くしなさいよ。時間がどんどんなくなつちやうでしょうが」

「で、でもさ美波。ほら見ての通り外は雨降つてるんだよ？ デートつて言つてもこれ

じゃ出来ないんじゃないかな？」

水滴に覆われた窓の方を指差して言う。

お昼頃から段々と雲行きが怪しくなつてきた天気は放課後の今になつて大雨に見舞われていた。これではとてもデートなど出来る状態ではないだろう。

「大丈夫よ。傘あるし」

「いや、そういう問題じゃなくてね。もつとこう、雰囲気的な……」

傘差してデートつてなんか変な感じじゃない？

「ああもう一々うるさいわね！ いいからアキは黙つてウチとデートすればいいのよ！」

「滅茶苦茶な上に横暴だ！ は、離して美波！ これじゃデートじゃなくて連行だよ！

ストップ！ ドクターストップ！ これ以上出費がかさむのは嫌あ——！」

抵抗も空しくずるずると引きずられていく僕。

何から何までわけがわからない！ 美波と優子さんの間で何があつたつて言うんだ。

pipipipipipipipipipi!

教室の外に連れて来られた辺りでポケットの中の携帯が鳴った。

「ちよつと待つて美波。メール来たから、一旦手を離してくれない？」

「メール？ しようがないわね」

ようやく腕を解放されて安心の息を吐くと僕は携帯を開いてディスプレイに眼を通す。

送つてきたのは——優子さん？ なんだろう。

『From: 木下優子』

To: 吉井明久

Sub: 急にこんなことになってごめんね。事情は後で話すから今は美波を楽しませてあげて。私のことは気にしなくて良いから

P. S. 言つとくけど浮気は厳禁だから。きちんと分別を弁えた行動をとるよう
に』

「……………どういふことか」

メールの内容の意味も優子さんの恋人に関する判断基準もさっぱりわからない。

取りあえず不順異性交遊を超えない範囲で美波と遊んであげればいいということだ

けは伝わった。

でもこれ……デートじゃなくて単なる友達同士の遊びだよな？

☆

昇降口に着いても外はやっぱ雨が降り注いでいた。

「アキ、傘持ってるの？」

隣で花柄の可愛い傘を持った美波が僕の方を向いて問いかけてきた。

「僕は折り畳み傘持ってるから。大丈夫だよ」

「そっか。じゃあこれはいらないわね」

「は？」

バキバキゴキツ

目の前で美波は何のためらいもなく突然花柄の傘を両手でへし折った。

何が起こったのか僕は咄嗟に理解できなかつた。というか、理解したくなかつた。

この場合美波があつさりと傘を折ってしまったことに対して驚くべきか、両手の腕力で傘を折ってしまう美波の怪力つぶりを驚けば良いのか判断に困る。

「ちよっ!? 何やってるの美波! 今日の様子がおかしいと思つてたけどついに正気ま

でなくしてしまったの!？」
凶戦士化!？」パーサーカー

さつきから意味不明な出来事の連続だ! もう僕の知りうる常識を完全に超えている。本当に今日の美波はどうしちやっただ!?」

その美波は驚愕する僕を無視して何故か恥ずかしそうに僕の手の折り畳み傘に眼をやっている。

「だ、だって。それがあれば傘二本もいらないでしょ……」

「それ? ——ひよつとしてこの折り畳み傘のこと?」

「……(くくん)」

頬を赤く上気させて静かに頷く美波。だからって別に壊す必要はないと思うんだけど……。

ん? 待てよ。てことはこれって……相合傘!? 僕と美波が!? そんなバカな!

「駄目だよ美波! そういうのは……恋人同士がやるものであって僕と美波はやつちやいけないと思うんだ!」

「優子のこと気にしてるの? 大丈夫よ。ちゃんと許可取ったし」

「許可!? そんなのあるの!?!」

てことはこれは優子さん公認のことなのか!?! ますますもって意味が分からない!

このデート(仮)は何の目的で行っているんだ。優子さんと美波は僕に何をしようと

してるんだ。

「……………」

ザーザーとうるさく振り続ける雨のグラウンドを二人で歩く。

結局、美波に押し切られる形で僕らは一つの折り畳み傘で雨をしのぐことになってしまった。

「み、美波……。近いよ。あとなんかいろいろ当たっちゃってるし……」

「し、仕方ないじゃない……。これ狭いんだから」

折りたたみの傘はあくまで緊急用の傘であって、普通二人も入れるようには出来ていない。なので必然的に僕と美波は密着して雨から逃れるハメになっていた。

う……。美波の体柔らかいな。いくら普段男っぽいと思ってもこうして肩と肩が触れ合うほど至近距離で美波に触れるとやっぱり美波も女の子なんだと無理矢理実感させられる。雨の所為とはいえこんな状況ではどうしても女の子の体というものを意識してしまう。僕にはもう心に決めた人がいるのに。優子さんごめんさい！

「アキ、濡れてない？」

「僕は大丈夫だよ……。美波こそ濡れないように気をつけてね」

「……………うん」

本当はちよつと肩がはみ出てるんだけどそれは言わぬが男のプライド。

「ところで、デートって言うからにはどこか行くところは決めてあるの?」

僕は美波の体の感触から気を逸らすため、適当な疑問を投げかけた。

「ないわよ」

あつさり言う。無計画であんなこと言ったのか……。

「そういうのって普通男が予定を決めて女子を楽しませるものじゃない? だからアキが決めてよ」

「いやいやいや。それは違うよ美波。それは男子から誘って且つある程度の予算があり、そして数日の猶予があつて始めてできることなんだよ? 今みたいに強引に引つ張られてどつか連れてけなんて言われたつてそりゃ無理だつて。僕、デートスポットとかまだ分らないし」

ちなみに僕の全財産は2544円(食費込み)だ。とてもじゃないが女の子を満足させてあげられるようなことはできない。不甲斐なくは思うけど、僕はこの残金で後二週間あまり過ぎさなくてはいけないのだ。無駄は極力なくしたいと考えるのが普通だろう。

「はあ? あんたそんなんで本当に優子と付き合えるの? デートもまともに出来ないなんて男として最悪よ」

「うぐつ それを言われると辛いけど。まだ付き合つて一日しか経つてないのにそこま

でカバーしきれないよ。これでも生まれて始めて彼女できたんだから男としてしつかりしないといけないことは分かっているんだけど。来月の仕送りがくれば今度はちゃんと計画して生計立てようと思ってるし」

「ふーん。つまり明日から本気だすってやつ？」

「それを言わないで！」

くっ!? 美波には痛いところばかり突かれる。ひよつとしてわざとなのか？

「それじゃ映画見ない？ ウチちよつと気になるヤツがあるのよねー」

「映画か……」

これから映画を見るとなれば学生割引でも1000円……。ちよつと厳しい。

できればもう少し財布に優しいところを選択したいな。

僕も美波も楽しめるような場所かあ。どこかあるかな？

あつ。そうだ！

「美波。あそこに行かない？」

「え？」

☆

そんなわけで僕らが訪れたのは学校からちよつと離れたゲームセンターだった。

「ゲーセンなんてウチ久しぶりかも」

店内に入った美波が物珍しそうに周囲のコインゲームやクレイジーゲームの台を見回しながら呟く。そのキラキラした目や表情を見てるとここのチョイスは間違えてなかったみたいだと確信できた。

「二人で来たんだし、せっかくだから対戦できるヤツがいいよね」

「いいわね。日ごろの鬱憤を晴らす良い機会だわ」

美波の鬱憤って何だろう。出来れば僕に関わりたくないことであると祈りたい。

「美波は何かやってみたいのとかある？」

「えーとね……。あっ！ これなんてどう？」

美波が指差したのはエアホッケーの台だった。大体どこのゲームセンターでもあるやつだ。ルールも相手エリアのゴールに丸いパックをシュートするだけの単純なものなので最初に遊ぶゲームに最適だろう。

「うん。じゃああれにしようか。ルールは分かってるよね」

「当然。アキになんて負けないんだから」

「ほほお。言ったね美波……。僕の実力を見せてあげようじゃないか」

「な、何よその得意げな顔は……。いくらゲームだからってエアホッケーに得意も不得

意もないわよね……。絶対勝ってやるんだから」

ふ、甘い。甘いよ美波。ことゲームで僕が負けるなんてありえない！」

学校とは違いこのゲーセンはいわば僕のホームグラウンド！ 勉強は出来ないけどゲームの腕なら僕は間違いなくAクラスだ。ここで一つ美波の悔しがる顔を拝見するのも悪くないな。

さっそくテーブルの左右の配置にそれぞれ付き百円を投入する。これでパン一個が買えると思うとちよつと悲しいけど今は考えないようにした。

硬貨を入れると中央のディスプレイに『0 VS 0』の表示が現れ、僕のところにパックが落ちてきた。どうやら僕が先行らしい。

マレットを右手に構えパックを盤面に配置する。

「美波、準備はいい？」

「勿論。どこからでも掛かってきなさい」

対面の美波もマレットを構えて僕のエリアのパックを凝視した。

ここで初心者なら外壁に反射させて霍乱を狙うだろうが、それは上手くない戦法だ。

どこに反射して軌道を描くか正確にわからない以上、自滅のリスクが大きい外壁の反射の利用は得策じゃない。寧ろここは一直線に、相手の反応速度越える勢いでゴールに

向かって打つのが最善手だ。

僕はパックを何度か移動させて美波の防御を掻い潜れる隙間を狙ってパックを打つた。

「はっ」

カンッ！（美波エリアゴール手前の壁に激突）

ガコン！（僕エリアのゴールにパックがシュートされる）

ポイント

僕 0

美波 1

僕の打ったパックは見事に美波のゴールちよつと横の壁に反射してそのまま僕エリアのゴールに入ってしまった。

「あれ……？」

「いきなりオウンゴールって。アキ、やっぱりエアホッケー苦手なんじゃない？」

ち、違う！ 今のはちよつとミスっただけだし！

「くそ。もう一回だし！」

取り出し口からパックを出してもう一度盤面に配置する。

さあ、今度こそ。いけ！

「やあっ！」

カンッ！

ガコン！

ポイント

僕 0

美波 2

「あの、ウチまだ一回も打ってないんだけど……」

「うわあんなんでー!?!」

またオウンゴールを決めてしまった……。どうして！ 僕の何がいけなかったの！
力も速度も完璧だったはずなのに！

「あーあ、この調子だと楽勝かもね」

「くっ……。本番はここからだよ美波。今のはちよつとしたハンデさ」

「目が泳いでるんですけど。ホントにアキってゲーム上手いの？」

拙い、美波に馬鹿にされている。勉強は駄目なのにこれでゲームでも美波に負けてしまったら僕の立つ瀬がない。ここからは本当に真剣に勝負しなきゃ！

パックを盤面に置き、僕は今度こそ美波のエリアの中央を狙ってマレットを弾いた。

「えいつ！」

その10分後……。

ポイント

僕 10

美波 7

「やったぁー！ 勝ったーっ！」

「あああ負けたぁーっ!?!」

中央の画面には僕の勝ちを示す『You win』の文字が表示されている。

対面側では美波がマレットを手にしたまま腰を落としてシヨックを受けていた。かなりぎりぎりだったけど、なんとか僕の得意分野の尊厳は守られてよかった。

「今の偶々よ！ 次は絶対勝つんだから」

「オツケー。じゃあもう一度勝負だ」

もう一度百円玉を入れて僕らはエアホッケーを再開した。

それから結局計三回ゲームやって、すべて僕が全勝した。やっぱりゲームでは誰であろうと負ける気がしないね。

「も、もう一回よ！ 次は負けないんだから！」

「ええ!? いや美波。せつかく来たんだからもつといろいろなものを見て回ろうよ。ホッケーだけやってても疲れちゃうよ？」

あと僕のサイフが薄くなっちゃう。

「何よ。勝ち逃げする気？」

「そうじゃなくって。一応これってデートなんですよ？ ならホッケーだけしててもお互い楽しいんじゃないかなって」

「デート!? ……そうだったわ、デートだもんね……。ウチとアキの……えへへ」
「？」

急に恍惚としてデート……デート……と独り言を呟き始める美波。

また様子が変になったけど。今更気にしても仕方ない。

エアホッケーのテーブルを後にして、次に僕らがやってきたのは古いゲームだった。適当にゲーム台を見て回っていた時に突然美波が「これやりたい！」と僕の手を引っ張って選んだゲームである。

「占いつて。美波、何を占うの？」

「いい、いろいろよ！ いいでしょ女の子は占いが好きなんだから！」

「そういうものなのかな。まあいいけど……。これって僕もやるの？」

「当たり前よ。これ二人用だし。どうせ100円なんだから試しに占ってみてもいいじゃない」

僕の返事を待たずに美波は百円を投入する。ま、美波が楽しいんならそれでいつか。
「えーつと、名前は島田美波で誕生日は……」

宇宙空間のような画面の中に現れた文字を必死に追いかけて入力する美波。

なんだかその表情がさっきのエアホッケーより真剣に見えるのは気のせいだろうか。

「ほら、次アキの番よ」

「え？ ああそうだね。えーつと……。名前は吉井明久で生年月日は10月18日で血液型……」

必要事項を入力し終わると画面の中で僕と美波の名前がくるくると宇宙空間の中を回転して、やがて中央で重なり合い眩いほど光り輝く。

『最後に、二人で中央の水晶に手を置いてください』

言われたとおり、僕と美波は水晶玉に手を置いた。

……今気づいたけど、こういうのって普通恋人同士がやるものじゃないのだろうか。

多分出てくるのも恋愛運とかそんな感じのやつだろうし。これで変に脈のある結果が出たら気まずいな……。

本来なら、僕の隣にいるのは美波じゃなくて優子さんのはずなのに、僕何やってるんだろう。まあこのゲームセンター結構面白いの多いし今度優子さんと一緒に来よう。

『結果が出ました。プリントアウトしますので少々お待ち下さい』

アナウンスと共に取り出し口の辺りから印字の音と共にレシートのような用紙が出力されてくる。

美波はいち早くそれを取ると、真面目な表情で中身を目で追っていた。

どんな結果が出たんだろう。

「どうだったの美波？」

「……んー。なんかよくわかんない。はいアキ」

イマイチな顔の美波から用紙を受け取る。どれどれ……。

— よしい あきひさ —

貴方は女の子の気持ちの機微に少しだけ鈍感なようです

きちんと本音を理解できるように、口にした言葉をそのまま鵜呑み

にせず、彼女の目や表情をよく観察することで本当の気持ちを理解してあげると、より親密になれるでしょう

—しまだ みなみ—

貴方は怒りっぽく照れやかな性格が災いし天邪鬼な言葉ばかり出てしまい中々本当の気持ちを伝えられずにいるようです。大事な場面ではその恥ずかしさを克服することできちんと彼に向き合い本当の自分を見せることが出来れば、今よりも彼との仲は進展するはずですよ

なんだこれ。本当によくわかんないな。

まあ占いなんて所詮こんなものだろう。

「はあ、ちよつとは期待してたのに。残念」

横では占いの結果に不満がある美波が肩を落として落ち込んでいた。

「まあゲームだし落ち込んでも仕方ないよ。気を取り直して次のゲームを探しに行こう」

「そうね。次はクレインゲームのあるエリアに行きましょう」

「了解」

美波に頷いて占いのゲーム台から離れる。

それから少し歩いて、レースゲームや格闘ゲームのコンテナを見渡しながらクレインゲームがあるエリアを探していると、近くで枕を思い切り床に叩きつけたような大きな音が僕の耳に届いた。これはパンチングマシンの音か。誰かストレス解消でもしてるのかな。

僕はついそつちの方に目を向けてパンチングマシンの台に視線を送る。

すると、そこには見たことのある男子生徒が力いっぱい拳を振るっていた。

げっ!? あれは!

「くそ! Fクラスの連中……特に坂本と吉井。あいつらの所為で俺は——はあ!」

Bクラス代表の根本君。彼が額に汗を掻きながら全力でサンドバックに拳を打ち込んでいた。なんでここににいるの!? ていうか何してるのあの人! こんなところで会うなんて予想外すぎる! しかもなんか僕と雄二の名前を叫んでるし。これは見つかつたら面倒くさそうだ。

「アキ? どうしたの?」

「隠れて美波!」

「きゃあっ!」

咄嗟に美波の体を抱えて近くのゲーム台の影に隠れる。

「ちよつと何なのよいきなり!」

「痛っ! 待つて待つて美波落ち着いて! 今向こうに根本君がいるんだ!」

「え……っ。根本!」

「うん? ……今吉井と島田の声が聞こえた気がしたが」

「っ!」

「……気のせいかな」

ふう、どうやら向こうは僕達のことが見えていないらしい。

あ、危ねえ……。ここで気づかれたら絶対絡まれるだろうな。根本君がゲームに熱中してる間にさっさと退散しよう。

「ああクソ! 全然取まらねえ。こうなったらこの記録を全部俺の名前で埋め尽くしてやる。あと18回プレイだ!」

なんだかおかしな方向に熱中し始めた根本君を置いて僕らはそそくさとその場から逃げ出した。

☆

根本君から逃げ出して僕らはようやくクレインゲームエリアにたどり着く。

さっきのアーケードエリアとは違って、こっちはカップルや女同士の友達の割合が多く、みんなぬいぐるみのUFOキャッチャーなどに目を光らせていた。

さて、僕らはどれをやるうかな。

「あ、ねえ見てアキ。これ見たことない？」

「うん？」

美波が一番最初に目を付けた台の中には、確かに見たことのある狐っぽいキャラクターのぬいぐるみがケースの中に散りばめられていた。

これは如月ハイランドのマスコットキャラクターだ。確か名前はノイン……だっけ。

前にこれの大きいやつを美波の妹の葉月ちゃんに買ってあげたことがあったからまだ覚えていた。

「美波。これやろっか。うまく取れたら葉月ちゃんも喜ぶんじゃない？」

「確かにそうかも。アキにしてはいいアイデアじゃない。よし、じゃあ一つチャレンジと行きますか！」

意気揚々と美波は百円を投入しレバーを操作する。

そしてケースの中でも一番大きいぬいぐるみの上で、美波はアームを降下させた。

しかしアームの力が弱いようで、うまく引つかかりはしたもののすぐに重さに耐え切れず外れてしまった。

「なんでよ！ 今ちゃんと挿んだのに！」

「美波、それじゃ駄目だよ。大体こういうクレーンゲームに入ってる大きい景品は最初から取れないようになってるんだ。だから取り出し口の近くにある小さいやつを狙うと良いよ」

「え!? そうなの!」

「うん」

今度は僕がお金を入れてレバーを操り、すぐに落とせそうな近くのちっこいぬいぐるみにターゲットを絞ってアームを落とした。

狙い通り。ぬいぐるみはうまくアームに引つかかりそのまま穴までうまく移動して落とすことが出来た。

「よし、一個ゲット」

取り出し口から掌に丁度乗る程度のサイズのぬいぐるみを手に取り、それを美波に手渡した。

「はい美波。これ葉月ちゃんにあげて」

「え、いいの？」

「うん。僕が持つてても意味ないし、葉月ちゃんなら喜んでくれると思うから」

「アキ……。ありがとう。……………アキからもらったぬいぐるみ。また一つ増えちゃった」

美波はまだぼつぼつと小さい声で独り言を呟き始める。

今日の美波は本当によくわからない。いや、優子さんもなんだけど。

今の所樂しんでくれるようだけど、これで本当にいいのかな。僕は美波に何をしてあげれば良いんだろう。優子さんは何を思って僕と美波をデートさせたんだろう。

「アキ、ウチも一つ取りたい。どれを狙えばいいの？」

「そうだね。あの口からちよつと後ろのやつとかいけそうだよ」

「よし。あれね。ウチだつてやつてやるんだから！」

ケースの中を凝視しながら慎重にレバーを動かす美波を微笑ましく思いながら、僕は美波の横姿を眺め続けた。

それから僕と美波は30分ほどゲームセンターで遊んだ。

問31 島田美波の思い出／後

ゲームセンターでたつぷり遊んだ後、僕と美波は近くコンビニでビニール傘を一本（美波経費）で買うことになった。

やっぱり男女二人が折り畳み傘一本で雨をしのぐには窮屈すぎた。

でもわざわざ買うなら学校で美波が壊した傘はまったくの無駄死にだ。……あの花柄の傘、可愛かったのにもったいなかったな。

「アキ、ちよつとお腹空いてこない？」

ビニール傘を差した美波が歩きながら聞いてきた。

「ん、そういえば結構体も動かしちよつと小腹が空いたかも」

お腹を摩りながら腹の空き具合を計る。

最近は優子さんのおかげでいくらか食事情が改善されたものの、朝と晩のご飯相は変わらないので常にお腹は空いていたりする。

まあいつてもやっぱりお金がないから我慢するしかないんだけどね……。

「じゃあそこ行かない？」

美波が指差した先には喫茶店が建っていた。店名に『ラ・ペーイス』と書いてある。???

意味はわからないけど一体何語なんだろう。

「いいけど。美波、僕お金ないよ?」

「……この甲斐性なし。いいわよ。ウチの分は自分で出すから、ほら、入りましよ」
ふてくされた顔で美波は店に向かって歩いていく。

カランコロン

「ん?」

「あ」

僕達が店に入ろうとした途端、店の扉が勝手に開き中から人が出てきた。

その人は僕と美波の姿を見ると、体を仰け反らせて驚く。

「君は、吉井君!」

「久保君じゃないか。奇遇だねこんなところで」

「そ、そうだね。確かに、これは運命のお導きだ」

何故か久保君は顔を赤くしてメガネに指を当てている。

言っている意味はよくわからないけど、まさか久保君とこんなところで出会うなんて
思いもしなかった。

「だれ? 知り合い?」

「Aクラスの久保君だよ。久保君はここで何してたの?」

「ちよつと来週の授業の予習をね。吉井君こそ、これからこの店に入るのかい？」
「うん。まあね」

「そうか。それは丁度良い。僕もこれから店に入ろうと思っていたんだ」
今店から出てきたような気がするんだけど僕の見間違いだったのか？

「まあいいや。それじゃいこつか」

小さいことは気にしないことにして僕は店に入ることにした。

——カランコロソ

僕と美波と久保君が店内に足を踏み入れるとカウベルの音に反応して店員さんが僕らの前でやってきて、

「いらつしやいま——お帰りください豚野郎」

「入店拒否!？」

ウエイトレス姿で髪をくるくる巻いたドリルのようなツートールが特徴の清水美晴さんが恭しく僕達に退店を催促してきた。店に入った途端に帰れと言われたのは初めての経験だ。

「美春!?! なんであんたがここにいるのよ!」

「きやあああ! お姉さまではありませんか! わざわざ美春に会いに来るために来てくれたんですね!!! 事前に教えていただければベッドを用意して御待ちして

おりましたのに——っっ!!!

「いらぬわよ！ ああこら抱きつくわよ！ あんたがいるって知ってれば来なかつたわよ！」

「またまた照れ隠しがお上手なんですから——。ここが美春の家だと知って来てくれた事などお見通しです！」

「え？ ここと清水さんの家なの？」

「誰が口を開いて良いと言いましたか豚野郎。……しかし確かにその通り、ここは美春の家兼父の経営しているお店です」

へえ。清水のお父さんが店長なんだ。世間は狭いつていうけど本当なんだな。

「いい加減離れなさい！ 美春あんた店員なんですよ！ さつさと案内しなさい！」

「おつとそうでした。美春としたことがお客様を入り口で待たせてしまうなんて。やはりお姉さまの魅力は凶悪です」

「もうなんでもいいわよ……」

「それでは——」

清水さんの視線が美波、僕、久保君と移っていく。

「二名様でよろしいですね」

「待つて清水さん！ その中に明らかに僕の存在が含まれてないよね！」

「失礼しました。二名と一匹ですね」

「ペット扱い!？」

なんで僕はこんなに清水さんに恨まれてるんだ……。

「現在席が混んでおりますので、お一人様だけ相席となりますがよろしいですか？」

「それぐらいなら、いいよね？」

「ウチはアキと一緒なら……」

「僕は大丈夫だ。問題ないよ」

「わかりました。それではご案内します」

いろいろ言いたいことはあるけどここはぐつと堪えて僕は清水さんの後に続いた。

それとなく店内を見回してみると喫茶店として結構広くファミレスぐらいの大きさを誇っていた。客層も学生が多く外は雨だというのに店内は大きな賑わいを見せている。どうやらここは学生に人気のお店のようだ。

「失礼します。お客様、こちらのお客様と相席させてもらってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。だいじよう——きやあああ——っつ!!!!」

コーヒーを飲みながらなにやら薄い本を読んでいたおさげの少女は僕達を見た途端顔を真っ赤にして悲鳴のような大声を上げた。何事!？」

「アキちゃん!!? こんなところで会うなんてこれは運命! デステイニーよ!」

「つて玉野さん!? よりにもなつて相席つて彼女なの!？」

さ、最悪だ……。清水さんだけでも僕の精神はガリガリ削られているのにこの上玉野さんまでいられたら僕は自分がどうなってしまうかわからない! 優子さん助けて!

「さあさあさあ座つて座つて! アキちゃんなら大歓迎だから!」

そう言つて玉野さんは自分の椅子から少しだけお尻をずらしてスペースを半分開けた。

なんで対面に開いている席があるのにわざわざ一人掛けの椅子に座らせようとしてるんだらう……。

「いや、僕と美波は隣のテーブルに座るから。久保君、悪いけど玉野さんと一緒にお願
い」

「僕は気にしないよ。それにこの距離なら指して会話に支障はない」

「うーん残念。でもいつか! アキちゃんに会えただけでも今日はラッキーデーよ!」

ポジティブな玉野さんに辟易としながら僕と美波はテーブルについた。

「さてと、何食べるアキ?」

テーブルの上にメニューを広げながら美波が声を掛けてきた。

僕も一覽に目を通してみると学生に人気ということもあつてどれもさほど高くない。

うーん、袖を振れば手が届きそうな値段なんだけど、やっぱり僕の財産から捻出する

にはちよつと痛いなあ。ちよつと惜しいけど水だけにしよう。

「お水をお持ちしました」

そんなことをしていると清水さんがトレイを持ってやってきた。

そしてそれぞれの前に水の入ったコップを置いていく。

コトツ↓美波の分

コトツ↓久保君の分

カタナンツ↓僕の分（犬の餌入れ）

「……あの、清水さん」

「なんですか犬野郎」

「どうして僕のお水だけ犬の食器に入れてあるの？」

「はい？ ……ああそうでしたね。美春としたことがうっかりしていました」

なんだ間違えただけか。よかった。

「犬用の皿をテーブルの上に置くのは不衛生ですね」

どうやら彼女は僕をとことんペット扱いしたいらしい。

「違うよ！ テーブルの上じや飲みにくいから床に置いてって言うてるんじゃないの！

もつと普通のコップに入れてきてよ！」

「嫌です。犬は犬らしく地面に這いつくばって舐めればいいのです！」

「もう僕嫌この店！」

「美春。アキはれつきとした客なんだからちゃんとしなさい。でないと店長に言いつけるわよ」

美波がキつとにらめつけると清水さんは溜息を付きながら、

「……仕方ありません。お姉さまが言うのでしたら今日だけは特別に人間扱いしてあげます家畜野郎」

「してないよ！ 全然人間扱いされてないよ!?!」

「メニューはお決まりになりましたか？」

スルー!? やっぱりペット扱い——いやそれ以下だ！

「ウチはチーズケーキとミルクティー」

「僕はホットコーヒーを」

「あ、美春ちゃん！ 私もコーヒーおかわりお願いね」

「かしこまりました。チーズケーキ一つとミルクティーとコーヒー二つですね」

「僕は水だけでいいや」

「冷やかしかですか。最低ですな屑野郎」

うん。もうその程度じゃ動じないようになってきた。慣れつつ怖い。

「では少々お待ちください」

ペコリと頭を下げて清水さんは下がっていった。

美波の言いつけはきちんと守るようでその後すぐに普通のコップに水を入れてきてくれたことだけは素直に安心した。

はあ……。なんで僕は喫茶店に来てるだけでこんなに疲れてるんだろう。ゲームセンターにいた時のほうがまだ楽だったよ。

「最近人気だつて言うから来てみたけどまさか美春の店だったなんて……。これ以上何かされないうちにさっさと食べて出なきゃ」

激しく同感です。

「ところでどうして吉井君と島田さんは一緒にいるんだい？」

隣の席の久保君がそんな質問をしてきた。

「そ、それは……。デート」

「遊んでたんだよ!! さっきまでゲームセンターでいろいろしてたんだけどちよつと小腹が空いちちゃってね! あははははは!!」

「なるほど。そういう理由か」

あ、危なかった……。久保君はこの中で美波を除いて唯一僕と優子さんが恋人同士であることを知っている人物だ。なのにここで美波とデートしているなんて知られたら僕は確実に鬼畜扱いされる!!

「そ、そういうえば玉野さん。僕君に聞きたいことがあるんだ」

話題逸らしの為、僕はターゲットを玉野さんに当てた。

「何！ 何々々!! 何でも言つて！ アキちゃんの為なら何でも答えちゃう！ 新しいお洋服のオーダー？ スリーサイズ？ 今日の下着の色？」

正直後半の二点は激しく興味があるがここはグツと堪えて僕はこれまで聞くに聞けなかつたことを質問した。

「前に玉野さん、優子さんに手紙を書いて下駄箱に入れたでしょ？ なんでわざわざそんな面倒な方法で優子さんと会つたの？」

ずつとそれが気になつていた。話があるなら直接教室まで来て話せば良いものを仰々しく手紙を書いて校舎裏なんて曰く付きな場所に呼び出した。その理由がずつとわからなかつた。

「そ、それは……。ちよつと人の入るところで話すのは照れくさくて……」

ここまで変態趣向をオープンにしている玉野さんがした恥ずかしい話か。ちよつと気になるな。なんとなく彼女の様子から相談した内容は恋愛関係だと推測できた。それなら同じ女子の優子さんが選ばれたのにも説明が付く。きつと手紙を書いたのも予行練習のつもりだったのだろう。

あれ？ ということは玉野さんの好きな人はFクラスの男子？

「それじゃあ手紙を他の女子に入れさせたのはどうしてなの？ ひよっとして鉢合わせするのが照れくさかったとか？」

「だって、アキちゃんの下駄箱なんて見たら自分がどうなっちゃうかわからないもの！」
「君は僕の下駄箱に何をするつもりなの!？」

やっぱり彼女は変態だ！

「確かに。その気持ちは分かるよ玉野さん。吉井君の靴箱は人によつては宝箱のようなものだからね。興奮するのも無理はない」

「久保君も何言ってるのさ！」

体中に激しい悪寒が走ったが深入りするとやばそうなので追及はしないでおこう
……。

「玉野さん……でいいかしら？ その薄い本はなんなの？」

美波が玉野さんのテーブルの上に置かれた冊子に目を向けて問いかけた。

「これですか？ ただの漫画ですよ。読んでみます？」

「んー。あんまりウチ漫画には興味ないんだけど、一回だけ見せて」

「どうぞどうぞ」

好奇心には勝てなかったのか玉野さんから美波へ薄い本が渡りぴらっと中を開いた。

その瞬間、

「……………つつつつつ?!?!?!? な、なんなのよこれーつつ!!」

火山が噴火したかのように、美波の顔が一気に彩度MAXの赤を浮かべた。

「お、おと！ 男同士が!!? その……あれを——つつ?」

「うわあ初心な反応ですねえ。ただのBL同人誌なのに」

なるほど。やっぱりあれはB Lの本だったか。彼女らしいチョイスだ。そしてその

ことに對してもあまり動じなくなってしまった自分が恐ろしい……。

「その本の見所は康久の《ピーツ!!》が明吉の《ドーン!!!》に《ズッキューン!!!》して《バッキューン!!!》するところなの！ もう何度見ても最高！ エクスタシーよ！」

「ストップ!?! ストップだ玉野さん！ 君は今公衆の面前で口にしていけない言葉を連呼している！」

僕は慌てて玉野さんの口を塞ぐ。

そして回りに目を配ると周囲の客が僕達を見てひそひそと話していた。うわあ!? もう僕このお店の近くを歩けない！

「玉野さん。吉井君の言うとおりだよ。こういった公共の場でそういう言葉は慎むべきだ」

久保君が常識的な対応で玉野さんに申す。

「しかしそれとは別にして、僕にもそれを読ませてもらえないだろうか？ 後学の為

役立つかもしれない」

久保君はBL同人誌から一体何を学ぶつもりなんだ……。

「お客様、お待たせしました」

そんなことをしていると、ようやく注文が届いた。

てつきりまた清水さんが持つてくると思いきや、やってきたのは中年ぐらいのガタイのいいウェイターだった。ひよつとしてこの人が清水さんのお父さん？

「こちらがチーズケーキとミルクティー、ホットコーヒーになります」

店長らしき男性の店員は丁寧にそれぞれのテーブルの上に皿とコップを置いていく。

その動作は一つ一つがとても鮮麗されていて、客を不快にさせないような音はまったく立てない気配りが行き届いていた。

「あの、貴方が美春のお父さんですか？」

「はい。私がマイエンジェ——美春の父です。美春のお友達ですか？ いつも娘がお世話になっております。美春は誰に似たのかちよつとやんちゃなところもあります。根は優しい娘なので、これから仲良くしてあげてください」

柔らかい微笑と共に美波の質問に答えたウェイター。やはり父親だったらしい。どうりで提供の動作が手馴れているはずだ。

一体どうしてこんな礼儀正しい父親からあんな性格の娘が出来たのやら。人類の神

秘つて不思議だ。

「は、はい……。こちらこそ」

そんな態度に当てられたのか、美波も恐縮してしまっていた。

「君も、美春の友達ですか？」

店長の視線が僕に向けられる。友達……、友達か……。

「と、友達つていうのかどうかわかりませんが……、いろいろな意味で仲良くさせてもらつてます……」

「そうですか。それはそれは……」

店長は温和な笑顔でうんうんと頷く。

——そして、エプロンのポケットからなにやら銀色に光るものを取り出して僕の後ろに回りこむと、

「——言つとくがうちの可愛いマイエンジェルに手を出したらどうなるかわかつてんだろうな？」

なんだ?! どうして僕は店長から首筋に凶器を突きつけられているんだ!?

「は、はい！ 僕は美春さんには一切恋愛感情を抱いていません！」

「美春だと？ 気安くマイ天使の名前を呼んでんじやねえ！ ぶっ殺すぞクソ野郎！」

「ひいっ!？」

やっぱりこの人清水さんの父親だあ!!!!

「誤解です！ 僕に清水さんに恋愛感情を持っていませんっつっつ!!!!」

「……本当だな？」

「神と仏と両親に誓ってありません！」

「……………」

すつと首筋から鋭利な感触が消えていく。た、助かった……？

「そうですかそうですか。ではお客様、ごゆっくりおくつろぎください」

ナイフを仕舞って柔和な笑顔に戻った店長は一礼すると奥の方へ戻っていった。

あの対応の後にごゆっくりなんて言われてもまったくくつろげない。むしろさつきからずつと命の危険を感じている。これだけスリル満載な喫茶店は世界広しと言えどここだけだろうなあ。

「まさにあの父親にしてあの娘ありって感じね……」

正面では美波がフオークでチーズケーキを切り取りながら苦笑いを浮かべていた。

店長の凶変はともかく、店の質は確かなようで美波はさつきから幸せそうな顔でチーズケーキを頬張っていた。

うーん、そんな顔をされるとこつちも食べたくなってしまう。どうしよう、いまからでも注文しようかな……。

「アキ、良かったら一口食べてみる？」

「え？ いいの？」

逡巡していると美波の方から願ってもない提案がきた。

なんとという僥倖。今だけは美波が女神に見える。

「うん！ ほしい！」

「そう。じゃあはい、あーん」

「へ？」

何故かチーズケーキを刺したフォークを僕に向かって伸ばしてくる美波。

な、なんで!? 普通に切った部分だけをくれればいいのにどうして美波は嬉しそうな

顔で僕の口にフォークを持ってくるの!?

「どうしたの？ 食べないの？」

「い、いや……。そういうんじゃない」

首を傾げる美波に僕はどうにもやりにくさを感じていた。今日の美波は変に無防備だ。これだと普通の女の子みたいじゃないか。

「~~~~♪」

「……………ふむ」

久保君と玉野さんはそれぞれ読書の方に夢中になっていて僕らに気づいていない。

優子さんのことが気にかかったが、相合傘同様許可を取っているのだろうか。

い、今ならいけるか……？

「ほら、あーん」

「……………あ、あーん」

なるべく美波の顔は見ないようにして僕はチーズケーキを口に入れた。

それが舌に乗った瞬間、溶けるような甘みが口内全体に行き渡り、噛む必要もないほどにやわらかな食感はそれだけでかつてないほどの美味を脳の深まで響き渡らせた。なるほど、これならこの店が人気になるのも納得だ。

「おおう、美味しいー！」

「でしょ。もう一つ食べる？」

「うんー！」

「じゃあはいっ、あーん」

再び近づいてくるフォーク。さっきと同じように僕はそれを口を開いて食べようとして、

ストンツ！

「ん？」

「え…………？」

僕と美波の差し出したフォークの僅かな隙間をものすごい勢いで何かが通り過ぎて壁に刺さった。

『コロシマス。お姉さまからあーんされるなんて、百度八つ裂きにしても足りません……』

カウンターの方から感じた殺気に目を向けると、そこには両手にフォークを構えて投擲体制に入っている清水さんの姿があつた。

「美春!?! あんた何してるのよ!」

「それはこちらの台詞ですお姉さま! そんな薄汚れた豚野郎にお姉さまがあーんをしてあげるなんて神様が許しても美春が許しません! 死ね害虫!」

「ひいつ!?! どうして僕は店員に殺されかかっているんだ!?! 助けてヘルプミー!」

「や、やめなさいってば!」

「お姉さまにあーんしてもらえるのは美春だけで十分です! 何せ美春とお姉さまはすでに愛し合った仲なのですから!」

「過去を捏造するな! ウチは美春と愛し合ったことなんてないわよ! そもそも女同士じゃ無理でしょうが!」

「性別なんて関係ありません! 大事なのは気持ちです!」

いや、性別は関係あると思うよ?

「——っ!? 性別なんて関係ない……か」

隣の久保君が清水さんの発言に感銘を受けていた。いけない、Aクラスの優等生が馬鹿の道に落ちようとしている……。

「そうよ! だから男同士が好きあつても何の問題もないの! というわけでアキちゃん! 来週このドレスを着て坂本君とデートしよう!」

「玉野さん! もう君は何も喋らないで! そしてこれ以上僕と雄二を変な目で見ないで!」

「そうだね。彼女枠がすでに埋まっけていても、まだ彼氏になることはできる。心配は無用だよ吉井君。僕はどんな君でも受け入れる」

「久保君がさつきから何を言ってるのか僕さっぱりだよ!」

「お姉さまああ—————!!!」

「だから抱きつくな—————!!!」

☆

「うう……、酷い目に合った……」

あれから30分ほど乱闘騒ぎを起して僕と美波はようやく店を出ることが出来た。

おかしい。喫茶店に立ち寄ったのはちょっと休憩するだけのはずだったなのに余計疲れるなんて。

やはり僕の周辺には常識を持った人間が欠如していると思えない。

「まったくよ。まさか美春と出会うなんて……。なんか思いつきり疲れたわ」

美波もビニール傘を差しながらぐったりとしていた。

外の雨足はそんな僕らの心情を表すかのように一向に止む気配を見せず、むしろどんどん強まっていつている。これは今日一日はずつと雨だろうな。

「もう6時か。ちよつと早いかもだけど雨も降ってるしそろそろ帰ろつか美波」

「そ、そうね……」

僕がそう言うと、美波の表情が少しだけ暗くなった気がした。

んー……。なんかいろいろ大変だったし美波は楽しめなかったのかな。だとしたらちよつと残念だ。今日は美波を楽しませてあげてって優子さんをお願いされたのにそれを果たせない自分に対して落ち込んでしまう。

「美波、今日は楽しくなかった……？」

「え？ な、なんでいきなりそんなこと言うのよ。そんなわけないでしょう。これはウチとアキのデ……デートなんだから……」

そういえばこれって美波の中ではデートってことになってたんだっけ。いろいろあ

りすぎて忘れてた。

「アキこそどうなのよ？　ウチと一緒にいて、楽しかった……う？」

「僕？　僕は……」

どうなんだろう。思えばこんなにいろいろなことをしたのは久しぶりだった。

正直「疲れた」という思いが一番強いけど、まあそれも含めて悪くはなかったんじゃないだろうか。……一部の変態思考の人たちを除いて。

「美波とこれだけ遊んだのって久しぶりだったし、僕は楽しかったよ」

「……そっか。よかった」

美波は嬉しそうに胸を撫で下ろした。その様子を見ると僕もちよつと心の重荷がとれたような気分になる。

「今日ね。ウチが優子に頼んだんだ。一日だけアキとデートさせてって」

「え？　どうして……？」

「………わかんない。なんか急にそんなことをしたくなつて。——でも、多分ウチは羨ましかつたんだと思う。普通に恋人になれたアキと優子のことが。ウチなんてずっと怖がつて前に進めなかつたのに」

「美波……」

顔を俯かせた美波の姿は、何故か泣いているようにも見えた。

美波が何に思い悩んでこんなことをしたのか今だわからないけど、このデートでその憂^{ゆう}苦から多少は解放されたのだろうか。

「その……僕でよければ相談してよ。役に立つかは分からないけど愚痴でも文句でもいいから、それで美波の気が晴れるならなんでも聞くからさ」

「……あんたつて。本当に無神経だわ」

「え？ え？ 僕何か間違えた？」

おかしいな。今回は美波のことを純粹に心配しての言葉だったのに。

それが逆に怒らせてしまうなんて。

「あんたは優子の彼氏なんでしょう！ だつたらウチのことなんて気にせず優子のことだけ見てればいいの！ ……………じゃないと、割り切れないじゃない…………」

最後の台詞は雨音にかき消されてよく聞こえなかった。

僕としては友達として美波の助けになればと思っただけど、美波自身にいららないと言われたらどうしようもない。

「……ハア……。なんでアキつてこんな中途半端に優しいんだか。いつもみたいに男みたいな扱いされて冷たくされてたらもつと簡単に諦められたのに」

僕つて普段そんなに美波に対して冷たい態度だったのか……？

まったく自覚してなかった。だから美波は僕に対してあんなに暴力的だったのかも

しれない。次からはもうちょっと丁寧に接することを心がけよう。

「あのさ美波」

「あのねアキ」

お互い顔を見合わせて声を被らせてしまった。な、なんか恥ずかしい!?

「あ、アキが先に言つてよ!」

「いやいや。ここはレディーファーストで美波が先に言うべきだよ」

「いやいやいやアキが先よ」

「いやいやいや美波が先だよ」

「……………」

「……………」

なんで僕らは雨の降る外の道端でコントみたいなことをしてるんだろう…………。

「なんかアホらしくなってきた…………。なんでアキと話してるといつもこんな風になるのかしら」

「僕に言われても…………」

多分これが僕と美波の関係性なんだろう。

「それで美波は何を言おうとしたの? 僕のは本当に大したことじゃないから言つてくれないかな?」

「……わかったわ。どのみちこのままじゃ終われないもの
ん？ 終われない？ 何を終わらせるつもりなんだ？」

「アキ、ウチね。ずっとアキに言いたかったことがあるの……」

「う、うん……」

「ウチ、ずっとアキが……」

「え、美波……？」

美波は僕を見上げるように首を伸ばして顔を真っ赤にしながら必死に一字一句を口から紡ぎだす。そんな彼女を姿を見ると僕も段々と胸の動悸が激しくなってきた。

この感じ、覚えがある。

学校の屋上。真っ赤な夕焼け。胸の高鳴り。歓喜。困惑。

そして夕日を背に佇む姫路さんの姿。

今の美波は、あの時の姫路さんの姿と重なって見えた。

「アキのことが……」

まさか、まさか美波は——っ。

「だい——っっ嫌いなっっ!!!」

僕のが嫌いだっただなんて――！

ん？ あれ……………？

「み、美波……………」

「何ヶ月も前から時からずつとアキのことが嫌いだった！ 嫌いで嫌いでしょうがなくて。友達でいるのがずつと辛かった！ ウチは誰よりもアキが嫌いだったはずなのに！ いつのまにかアキは優子と付き合うことになっててすごく苦しかった！」

そ、そうか。美波はそんなに僕のことを嫌っていたのか。ただ普通に嫌われてるだけかと思っていたんだけど。なんというか、すごくショックだ……………。

しかし、僕はなんて返事を返せばいいんだろう。

好きと言われたならともかく、ここまで公然に嫌いと言われて答えるべき言葉を僕は知らない。

「美波……………。僕は」

動揺するな。冷静になれ僕。こういう時こそ落ち着いて対応しなければ。姫路さんの時に学習しただろう。

……………そういえば、ゲームセンターでやって占いの言葉にこんなのがあったっけ。

僕は頭を働かせて脳内から占いゲームで出てきた美波との仲について書かれた句を思い出す。

— よしい あきひさ —

貴方は女の子の気持ちの機微に少しだけ鈍感なようです
きちんと本音を理解できるように、口にした言葉をそのまま鵜呑み
にせず、彼女の目や表情をよく観察することで本当の気持ちを理解
してあげると、より親密になれるでしょう

— しまだ みなみ —

貴方は怒りっぽく照れやかな性格が災いし天邪鬼な言葉ばかり出てし
まい中々本当の気持ちを伝えられずにいるようです。大事な場面で
はその恥ずかしさを克服することできちんと彼に向き合い本当の自
分を見せることが出来れば、今よりも彼との仲は進展するはずです

この結果の意味はずっとわからなかったけど、ひよつとして今がその時なんじゃないだろうか。

つまりさっきの美波の嫌いという発言は美波の本当に気持ちではなく、あくまで照れ隠しのな何かで本心は別にある可能性。

そもそも本当に嫌いな人間とデートなんてするだろうか。

これはあくまで僕の希望でしかないけど、美波は僕のことをそこまで嫌ってはいない……と思う。これまで半年以上美波と友達を続けている僕の勘がそう告げている。

ならば、ここは下手に嘘を迫及せずに僕は僕の本心を美波に言っただけだ。

心を決意した僕は気持ちを込めて美波の目を見つめながら本音を言った。

「僕は美波のこと……嫌いじゃないよ」

「え？」

「さっき僕が言おうと思っただけで、偶に男友達みたいな雑な態度で接してしまうこともあるけど、僕にとって美波はありのままの自分で話が出来て一緒に遊んでいると楽しい。僕にとって——この先、大人になってからもずっと仲良くやっていきたいと思ってる最高の友達だよ」

「——っ！」

美波はビクツ！と肩を驚かせて目を見開き僕を凝視した。

な、なんか思っていた反応と違う。少なくとも喜んでる風にはまったく見えない。

あれ？ もしかして僕また何か失敗した……？

「ごめん美波！ 僕また変なこと言っちゃった？」

「ち、違うわよバカ！ なんていうか。本当に……どうしようもないぐらいバカだわ。

このバカ」

「そんなバカバカ連呼しなくても……」

自分でもバカなこととは分かってるけど、さすがそこまで言われるとちよつと心に響く

よ。

「あーあ。アキが変なこと言うからなんかいろいろどうでもよくなつてきちゃった。――

――そうだ。アキ、ウチ一つだけアキに謝らないといけないことがあるの」

「謝るって何を？」

「このデート中ウチがずっとアキに嘘吐いてたこと」

「嘘？ 僕のことを嫌いって言ったこと？」

「そこじゃなくて、いやそこもなんだけど……。もつと根本的な部分よ。――実は最初

に言った優子に許可を伝々つていうの、本当はないの」

「は？」

思わず目が点になった。ん、それはどういうことだい美波サン……？

「ちよつと待つて美波！ じゃあ相合傘とか喫茶店でチーズケーキを食べさせてもらつたあれは——」

「うん。体を密着させてくつ付いたり、アキにアーンして食べさせてあげたのも全部ウチの独断。優子には話してないの。とうか寧ろ優子には必要以上に吉井君に近づかないで！ 念を押されてたかも。ゴメンね」

「……リアリイ？」

「なんで急に英語？ でもまあYESよ」

「……………」

待つて。待つんだ美波。

それはつまり。今までの行動は全部美波が自分の意思でやったことでそこに優子さんの意思は一切介在していないということ？

じゃあ、僕が美波にされた行為は……。

「へえ……。吉井君、アタシがない間にそんなことしてたんだ」

背後からありえないはずの聲がして、口から心臓が飛び出すかと思つた。

「お、おかしいな。こんなところで優子さんの幻聴が聴こえるなんて。ここには僕と美波しかいないはずなのに……」

「自分の彼女の声を幻聴とか言うんじゃないの。さすが優子、待ち合わせ時間ピッタリね。じゃアキ。ウチもう帰るからウチの分も優子に謝つておいて！ それじゃー！」

「あ！ こら待て！ いや待つてください！ この状況で僕を一人にしないで！」

「嫌よバーカ！ これまで散々ウチをコケにしてくれた罰よ。今までの仕返しも含めてたっぷり優子にお灸を据えてもらいなさい」

「この悪魔ー！！」

「騙される方が悪いのよ！ それじゃまた来週、生きてたら学校でね！」

やっぱり美波は僕のことを嫌いなんじゃないだろうか。

「吉井君……」

「は、はい」

ギギギ、と壊れたロボットのみたいなきこちない動作で僕は後ろへ振り返る。

そこには、鮮やかな赤色の傘を差して顔に陰を帯びさせている木下優子さんが幽鬼のように不気味で恐怖感のある立ち姿でいた。

「違うんだよ優子さん！ これは詐欺だよ！ 僕は美波に騙されたんだ！ 被害者なん

だよ!？」

「うん。それで?」

「え……? いやだから僕は決して他意があつて美波に接触していたわけではないという事を理解してもらいたくて。つまり僕は悪くないと」

「吉井君。アタシ学校にいる間にメールしたよね。きちんと節度を守れつて」

「あ……」

「そういえば……。これまでのごたごたで完全に頭から抜けてた……」。

「だつていうのに貴方は一時の感情に流されて『彼女』のアタシにもしてないようなことを『友達』の美波にしたつていうのね」

「……そ、それは……はい」

「やばい。足が震えてる。」

「僕の全神経が全力で逃げろと警告を告げている。動け! 動けよ僕の足!」

「吉井君、アタシつて結構独占欲が強い。だから本当は吉井君と美波を二人にするなんて嫌だったのよ。……でも美波は大事な友達だし他にもいろいろ事情があつたからアタシは身を切る思いで今日一日だけは我慢することにしたのにつ。蓋を開けてみれば……」

「……アーメン」

僕は心の中で十字を切った。神よ。せめて命だけは助けてください。

「この——浮気者——」

「つつつ」

「心の底からごめんなさい——!!?!」

「!!!!!!」

大雨だというのに傘を放り投げて怒りモードMAXになった優子さんにボコボコに殴り倒されて僕は道端の汚い染みになった。

問32 木下秀吉の煩慮

眩い光に目が眩んで意識が目覚めると、そこは見たことのない天井があつた。

「う、うん……？ あれ……？」

上半身を持ち上げて辺りを確認すると、本棚、テレビ、長テーブル、台所などが見えた。どうやらここは誰かの家のリビングのようだ。

僕はこここのソファに寝かされていたらしい。

確か僕、大雨の中で優子さんにボコボコにされて気を失つたはずなんだけど。どうしてここにいるんだろう。ていうか一体ここはどこ？

「痛っ」

頬を少し強張らせるピリツとした痛みが襲い掛かってきた。鏡が近くにないから確認できないけど、これは腫れてるかもしれないな。まああれだけ殴られれば無理もないか。

それよりも今の状況だ。どうして僕はこんなところにいるんだろう。

ひよつとして路上の染みになった僕を助けてくれた誰かが親切に介抱してくれたのだろうか。だとしたらすごくありがたい。早くお礼を言わなきゃ。

僕はほかの体の異常も確認してから適当に歩き回って家主を探そうと立ち上がる。
ガチャ

「ん？ お。起きたようじゃの明久」

「……秀吉？」

扉を開けて入ってきたのはとても可愛い微笑を浮かべた秀吉だった。

服装は制服ではなく栗色の長シャツとジーンズという私服姿。ちよつと珍しい格好だ。

「どうして秀吉がここにいるの？」

「何故も何もここはワシの家なのじゃから。ワシがいて当然じゃろう」

「え、ここつて秀吉の家なの？」

「そうじゃ。——まったく驚いたぞい。姉上が帰ってきたと思ったら全身ずぶ濡れで、尚且つ泥まみれのまま気を失っている明久を引つ張つてきていたのじゃからな。事情を知りたいが姉上はシャワーを浴びた後はさっさと自室に戻つてしまっておつたし。二人に一体何があつたのじゃ？」

「い、いやあ。いつもみたいに僕がバカなことしちゃつて優子さんを怒らせちゃつただけだよ……」

（故意ではないとはいえ）本当は浮気紛いのことをしてしまつたからなんだけど、さすが

に正直に話すわけにはいかないよね。

「なんじや痴話喧嘩か。まったく人騒がせなカップルじゃな」

「か、カップルって秀吉……」

「うん？ 明久は姉上と付き合うことになったのじゃろう？ ならおかしなことでもな

かろう」

「そうなんだけど。もうちよつと表現方法を婉曲にしてもらわないと恥ずかしいよ……」

「ところで服はどうじゃ？ 一応フリーサイズのものじゃからきつくはないと思うが」

「服？ あつ」

視線を下に落とすと、僕の服装が少しだけ変わっていた。き、気づかなかった……。

下は学校のズボンのままだが、上は黄色のTシャツになっている。

「これって、秀吉のやつ？」

「うむ。濡れたままの制服を着ていると風邪を引くかもしれないから。さすがにズボンを脱がすわけにもいかぬが、せめて上の服ぐらいは替えたほうが良いじゃろう思つて体を拭いてからワシの服を一着着せたのじゃ」

「ふ、拭いた!?! 秀吉が僕の体を！」

「そうじゃが。——つて何をお主は悔しそうに震えておるのじゃ？」

くう!？」 秀吉に直接体を拭いてもらえるなんてハッピーイベントの時にどうして寝ていたんだ僕は!」これは後悔してもしきれない……!」

「さて。では明久も起きたようじゃし、姉上が降りてくる前に治療を済ませておこうか」
そう言つて秀吉は戸棚からクスリ箱を取り出して僕のところまで持ってきた。

「秀吉がしてくれるの?」

「そうじゃが? なんじゃ、ひよつとして姉上にしてほしいのか?」

「い、いや!」 そういう意味じゃなくつて!」

そもそも優子さんがつけた傷なのにそれを優子さんが治すつてなにそのマッチポンプ。

「ごめん。お願いして良いかな?」

「まかせるのじゃ」

秀吉はクスリ箱から絆創膏や包帯、そして消毒液などを取り出して秀吉は僕の前で腰を下ろす。

「痛かつたら言うのじゃぞ」

「う、うん」

ゆつくりと、撫でるように優しい手つきで秀吉は僕の頬に手を当てる。

触れられた部分はひんやりと冷たい感触がして僕は思わず顔を引いてしまった。

「い、痛かったか？」

「違う違う。ちよつとびつくりしただけだよ。秀吉の手冷たいね」

「それならよいのじゃが。痛いところがあつたら言うのじゃぞ？」

再度秀吉は僕の顔に手を伸ばして怪我の状態を確かめる。

や、やっぱり秀吉の手柔らかいな……。僕の手とは大違いだ。これで同姓なんて言われても到底信じられない。

できればこのままずっと秀吉の手に触れられていたいな。

「あつ。秀吉そこつ」

「ここじゃな。……ふむ。確かにちよつと腫れておるな。湿布を貼るぞい」

「お願い。い、痛くしないようにね」

「わかつておる。動くでないぞ」

慣れた動きで秀吉は湿布薬のシールを外し、僕の左頬の部分に伸ばして貼ってくれた。

その部分から徐々に冷たい感覚が伝わってきてとても気持ちよくなってきた。

「どうじゃ」

「うん。すごくいいよ。秀吉は治療上手いね」

「ワシも何度か姉上に折檻されたりしておるからう。嫌でもこの作業が慣れてしもう

た」

溜息交じりに語る秀吉。

慣れるほどやられてるなんて、秀吉の（女性は暴力を振るわれない）ヒロインガードも姉の前では無力なんだな……。

それから額にももう一枚湿布を貼り、最後に所々絆創膏を貼って治療は終了した。

「はい、おしまいじゃ。さつきよりは楽になったか？」

「うん。すごく良くなったよ。ありがとう秀吉！」

「当然のことをしただけじゃ。明久はワシの姉上の彼氏じゃが。その前にワシの大事な親友なのじゃからな」

「秀吉……」

僕は今猛烈に感動している！ ああ、こんな天使のような人が僕に微笑みかけてくれるなんて。嬉しさのあまり今なら宗教も信じてしまいそう。秀吉教とかどうだろ
う？

「秀吉！ 僕と家族になってください！ 一生幸せにするから！」

「その場合まず姉上と結婚しなければならぬが」

「大丈夫！ 二人とも僕が養ってあげられるぐらい稼いで見せるから！ だから毎日僕にお味噌汁を作ってください！」

「それは嫁の仕事じゃ！ ワシはヒモになりたくない！」

またまた照れちやつて。もう秀吉は可愛いな。

「まったく。ワシは上に戻つて明久用のズボンを探してくるからここで待つておるのじゃぞ」

「うん。お願い」

リビングを出る秀吉に手を振つて送り出す。

さて、じゃあ僕はのんびりしてますか。

「そういえば、今つて何時なんだろう……」

氣を失つてから今まで大分時間が経つたような氣がするけど。あんまり遅いようだと帰るとき困るしなあ。

濡れたズボンから携帯を取り出して中を開くとディスプレイに表示された時刻は『19:37』と出ていた。あれから一時間半ほど経過していたらしい。なんだ、思ったよりは経つてないな。

次に近くの窓から外の様子を伺つてみる。

時間も時間なので当然真つ暗だが、思いのほか雨足の方は氣絶する前よりは多少小雨になつていた。これから帰るだけなら支障はないだろう。

ピンポーン！

「ん？」

突然インターホンの音が鳴り僕は窓から目を離した。誰だろう、お客さんかな。

「秀吉ー！ 優子さーん！ 誰か来たよー！」

取りあえず大声で二人の名前を呼んでみる。

しかし帰ってくる返事はなかった。うーんどうしよう。僕が出てもいいのかな？

そうこう悩んでいるともう一度確認するようにチャイムが鳴った。

「仕方ない。今は代替として出るしかない」

心に決めて、僕はリビングの扉前にある受話器を手を取った。

「はい……き、木下ですけど……」

『宅急便です。お届け者を持ってきました』

「は、はい！ すぐ行きます！」

どうやら来客は宅配だったようだ。これなら僕でも問題ない。

受話器を下ろし、僕は急ぎ足で廊下に出て玄関の扉を開いた。

「こんばんわ。こちらお届け者になります。あ、こちらの方にサインお願いします」

「はいはい。了解です」

この手の配達なら一人暮らしの僕には手馴れたものだ。

渡されたボールペンで『木下』とサインして僕は丁寧にビニール包装された荷物を受

け取った。

「はい。サイン大丈夫です。ありがとうございます。ごさいます」

「こちらこそ、雨の中おつかれさまです」

業者さんに劳いの言葉を言つて扉を閉め鍵を掛けなおす。

さて、あとはこの届け物だけど……。

「なんか、荷物にしてはやけに軽いな……」

片手どころか指一本でも持てそうなほど受け取ったダンボール箱は軽量だった。

これだと中に入ってるのはページ数の少ない本とかノートだろう。

えっと、宛て先は……。

「優子さん宛て？ てことは中身は参考書とかかな」

真面目な優子さんならそれぐらい十分にありえる。

今から上に上がつて直接届けてあげても良いんだけど、また怒られるのは怖いし降りてくるまで僕が預かつておこう。

「明久？ どうしたのじゃこんなところで」

「あ、秀吉。今優子さん宛てに荷物が届いたんだけど」

「姉上にじやと」

「うん。でもこれすごく軽いよ。なんかの本じゃないかな」

「本……」

急に秀吉の顔に陰りが出来た。ん、どうしたんだ？

「明久よ。悪いことは言わんからその中身について姉上に言わん方がよいぞ」

「へ？ いや元から言うつもりはないけど」

「うむ。——それと、これはワシから言うことではないかもしれないかもしれぬがもし……その……姉上の変な部分を見てしまっても姉上を嫌いにならないでほしいのじゃ」

「変な部分？」

「いや変つていうほどでもないのじゃが……でもやはり人には理解しづらい趣味が、ちよつとのう……。明久よ、もしそれをお主が直視しても姉上を幻滅してあげないでほしいのじゃ。ほかの人ならともかく、今の姉上がお主に拒絶されたら本気で落ち込むと思うからの……」

なんか遠まわしの表現で何のことか分からないけど——

「何言つてるのさ秀吉。僕が優子さんを嫌いになるわけじゃないじゃないか」

——今の気持ち揺らぐことはありえない。

「……そうじゃな。うむ、明久はそうじゃな。ワシがわざわざ心配することもなかったのじゃ」

心なしか嬉しそうに秀吉は何度か頷いた。

「秀吉……？」

「荷物はワシから姉上に届けておこう。明久はリビングでこれに履きかえておくがよい」

ズボンと荷物を交換して、秀吉は二階へとんぼ返りして行った。

僕は渡されたタオルと長ズボンを腕に掛けて二階へ続く階段をぼーつと眺める。

「なんだったんだらう秀吉。……まあいつか。それよりさっさと着替えよう」

問33 ボーイ・ミーツ・ガール・ラブ

ズボンを穿き変え、僕と秀吉はリビングで他愛のない話をしているとドタドタと慌しい足音を立てて優子さんがリビングにやってきた。

「あ、優子さん……」

「待たせたわね」

二時間ぶりに見た優子さんの姿はピンク色のパーカーと短いタンクトップという出で立ちで髪も後ろにシュシュで一本結びにまとめているという始めて見る髪形だった。

……そういえば僕、今まで優子さんの私服姿って見たことなかったんだよね。なんか新鮮だな。そして良く似合ってる。特に生足がすばらしい。

——つて冷静に感想を述べている場合じゃない！

僕は今優子さんに浮気容疑を掛けられてるんだ。すでにあれだけボコボコに殴られた後だが、今だ彼女が僕を許してくれたかどうかはわからない。

つまり。

「……………」

「吉井君、なんでいきなり土下座するの？」

「いや、一応僕なりの精一杯の気持ちを伝えよう」と

言葉での謝罪は伝えた、なら後は態度で示すしかないだろう。

「……はあ……もう、バカ」

額に手を当てて呆れたと言わんばかりに溜息を吐く優子さん。

「反省してるんでしよう。ならもういいわよ。過ぎたことをいつまでもねちっこく責めても仕方ないじゃない」

「……? それじゃあ許してくれるの?」

「なに? もつと怒ってほしいの?」

「いやいや滅相ありません!」

僕は怒られて喜ぶようなMではない。

最近雄二達からも何故か僕は受けだと思われている風潮があるが、なんとしても改善したいところだ。

「なんじゃ。明久と姉上は喧嘩しておったのか?」

「喧嘩じゃなくて、吉井君が一方的に浮気しただけよ」

「ちよつと待った!?!」

その意見には反論したい!

「た、確かにいろいろ不味いことはしちゃったけど、最初に美波とデートしろと僕に指示

したのは優子さんでしょ！」

ここはきつちり言っておかないと僕はただの最低野郎に成り下がってしまう。

「う……。で、でも相合傘したり食べあいつこしたりしろなんて言つてない！ ……アタシだって、まだしてないのに……」

「なんじゃ、つまり姉上は島田と明久が仲良くしているのを見て嫉妬したのじゃな」

「なっ!? 秀吉——っ!」

え? そうだったの?

「なんでそうなるのよ!」

「違うのか? 姉上の言い分を聞いてるとワシにはそう聴こえたのじゃが」

「ば、バカ言わないで! なんでアタシが嫉妬なんて……」

ちらつと、優さんは恥ずかしそうな赤面顔で僕を見る。

あのー、こつちを見られても僕はこういう時どうすればいいんでしょうか。

「えつと、ごめん優子さん」

「え? どうしてまた謝るのよ。美波のことはもう良いつて言つたでしょっ」

「それもあるんだけど。ほら……前に優子さん、僕が他の女子と仲良くやつてるのは嫌だつて言つてたからその分も——」

「きゃー!?! きゃー!?! つつ!? 何言つてるのよバカー!!」

いきなり優子さんは両手を大きく広げてバタバタを振りながら絶叫した。

「ぶっ！……あ、姉上は一途じゃのう……っ」

秀吉は体を震わせながら口元に手を当てて必死に笑いを堪えている。

手で隠されながら僅かに見えている顔は真っ赤に染まっているのが見えた。おおう、秀吉がこんなに表情露にしているのは初めて見るかも。ちよつとお得感。

「秀吉！ 何笑つてんのよ！」

「い、言つてもよいのか？ いやあ姉上は存外乙女じゃったんじやな。生まれてからずつと一緒に過ごしていたワシでさえも見たことのない素顔じゃったぞ。明久はとても愛されておるようじゃのう」

「くっ、そ、それ以上喋ったらその口をタコ糸で縫いつけるわよ！」

「さらつと惨いことを言うでない」

「ふざけたこと口走るアンタが悪いのよ！ 吉井君も余計なこと言わない！」

「は、はいっ」

真つ赤な顔で叱咤してくる優子さんに思わず萎縮してしまった。

うーん、余計だったのかなあ。あの言葉。僕は結構嬉しかったのに。

「もうっ、アンタの所為で話が進まないじゃないの」

「明久にあーんしてもらえなくて寂しいという話か？」

「吉井君、ちよつとその棚から針と糸出して。この減らず口しか吐かない愚弟の口を縫うから」

「駄目だよ優子さん。唇に針を刺したら痛いじゃないか!」

「それじゃあホツチキスにしましょう。それならちよつとマシでしょ」

「なるほど、それなら多少は大丈夫だね」

「全然大丈夫じゃないぞい! 余計酷くなっただけじゃ!」

「なんでだろう。時々優子さんの後ろに美波の影がちらつくんだよね。」

「つて秀吉のことなんてどうでもいいのよ。アンタもう二階行つて。邪魔だから」

「ひどい扱いじゃな!」

「アタシは元々吉井君に話があつたのよ。それをアンタが横から引つ掻き回したんでしようが。いいから出てつてよ。用事が済んだら呼ぶから」

「やれやれ……。しようがないのう。まあ姉上の横暴は今の始まつたことではないが。明久よ、弟のワシが言うのもなんじやが姉上の相手は大変じゃぞ」

「早く行けバカ!」

「はいはいわかつたのじゃ。まったく明久に向ける優しさの十分の一程度ぐらいワシにもほしいのう」

「は、ははは……」

秀吉はぶつぶつ言いながらも踵を返して扉の方へ歩いていった。なんか追い出したみたいでちよつと申し訳ない気分になる。ごめん秀吉。

「やつと行ったわね……」

「別に追い出すことはなかったんじゃない？ 秀吉だって悪気があつてしたんじゃないんだし」

「悪気のない悪意の方が百倍タチが悪いわ。アイツの所為でこれまでアタシがどれだけ苦労してきたか……っ。思い出しただけで腹が立つてくる！」

握り拳を作つて睨めしように吐き捨てた。なんだか優子さんは優子さんでいろいろ苦労しているみたいだ。

「た、大変みたいだね」

「ええ、前なんて学校でメイドの格好した秀吉を目撃されてあげくそれをアタシだと勘違いされて——ってもう秀吉の話はいいのよ！」

秀吉のメイド姿は多分僕（とムツツリーニ）の所為だろうけど、それは黙っておいたほうがよさそうだ。

「それより吉井君、明日と明後日の休日。予定何かある？」

もうすでに弟のことはまったく眼中にないと言わんばかりの優子さんは顔色を切り替えてそんなことを尋ねてきた。

「明日つて土日？ 予定は今の所ないけど。何かするの？」

聴きながら、僕は頭の中である一つの推測が思い浮かんだ。

はっ！ これはもしかしてデートの申し込みなんじゃないのか!?

付き合ってから一日。まだいろいろと経験浅い僕らだけど休日にデートするというのはいかにも恋人っぽい行動じゃないか。それならウエルカムだ。

最大の問題はお金だけど、せっかく好きになった女の子と人生で始めてのデートなんだから多少の無理は全然問題ない。ここで僕がうまく甲斐性を発揮できて優子さんを楽しませることが出来たら美波との件の清算も同時にやってのけられる。なんて一石二鳥なプランなんだ。

人波溢れる町中を私服姿で微笑みを浮かべる優子さんと手を繋いで歩いてく。そんな幸せなビジョンが頭の中に思い浮かんだ。

やばい！ 今からもうドキドキしちやってる！ 考えるだけで顔がニヤけそうだ。

「——なんか顔が不気味なんだけど、まあいいか……。それで土日の予定なんだけど、せっかくまるる二日時間があるんだからみっちり勉強しましよ。アタシと吉井君の二人で」

「——はえ？」

幸せなビジョンが音を立てて崩れた。

「べ、勉強？　なんで……？」

「吉井君はただでさえ学校の成績は悪いんだからこれを機に日頃から勉強する癖を付けるのよ。大丈夫。勉強だって慣れれば楽しいから」

純粹に心から僕を気遣うような優しい声だった。

それに反比例するかのように僕は一気に脱力してしまう。

そうだった。Fクラスに配属されて結構経ったから忘れそうだったけど優子さんは本来勉強熱心で真面目な人だったんだ。多分こういうタイプの人は合コンとか言ってもわからないだろうなあ。

「で、でもせっかくの休日だよ？　なのに勉強に使うなんてもったいなくない？　もつと他の有意義な使い方があると思うんだ」

「何言ってるの。休みだからってのんびりしてたらあつという間に周りから置いていかれるじゃない。勉強は上から言われて仕方なくするんじゃないやなくて自主的に進んで取り組むものよ。吉井君はまだその辺の意識が足りてないわね」

「なんかその台詞回し前にも聞いたことがある気がするよ」

優子さんの台詞は至極もつともかもしれないけど、Fクラスにおいてその信念はまったくの空回りと言わざるを得ない。何故なら自分から勉強するなんて殊勝な考えを持つ人間はそもそもFクラスにならないから。

「ここらへんの日常的生活面から見てもやはり彼女はFクラスには相応しくないのが分かるだろう。」

「それにアタシ達にはまだ試召戦争があるのよ。来週やるAクラスに勝つ為にもしつかり点数が取れるように勉強しておかないと駄目でしょ。万が一でも負けたら、アタシ達もAクラスの代表に別れさせられるかもしれないんだから」

「それは……そうだね」

「試召戦争の為だと言われれば嫌とは言えない。」

霧島さんが本当にそんなことを命令してくるのかはわからないけど、たとえ負けただとしてもそんな言う事を聞くわけにはいかない。元々雄二の戦略では僕は負けることになつてるけど、本番になつて作戦通りに行くとは限らないから僕も準備くらいはしておくべきというのもわかる。……といつても僕がAクラスに勝てる可能性なんて万に一つもないと思うけど。それでもやらないよりはやる方が万倍良い。

「うん、やろう。勉強は嫌いだけど今さらそんなことも言つてられないしね」

正直言つて優子さんと居られるなら勉強でも何でもやっていいやと思つてしまふ。

我ながらこれって完全に惚れた弱みだよな……。自覚してるのにそれでも構わないと考へてしまふ辺りもう末期と言つていい。

Aクラスに勝つて、優子さんにAクラスに行つてもらふ。最初に決めた誓いは今でも

この胸に深く刻み込まれている。

雄二やムツツリーニ、秀吉のみんなの助けのおかげでようやく来れたこれまでの成果を無意味にしないためにも。僕達は勝たなくちゃいけないんだ。

「絶対勝つて。優子さんをAクラスに連れて行くよ。その為に後もう少しだけ一緒に頑張ろうね」

「……うん、そうね」

激励したつもりが、優子さんの声のトーンは若干下がった。

「……どうしたの？ 何かまずい事でもあった？」

「そうじゃない、違うの。来週……勝ったらアタシはAクラスになれるのよね」

「？ うん、そうだよ」

ようやく自分に相応しい居場所にいける間際なのに、優子さんはあまり嬉しそうじゃなかった。どうしたんだろう。何か不安があるのかな。

そんな疑問を浮かべていると、唐突に優子さんはこちらに向かって歩みだし僕のTシャツの袖をきゅつと摘まんだ。そして顔を上げて僕を見上げる。

そんな女の子らしい仕草に思わずドキッとしてしまった。さっきよりも距離が近くなったことでパーカーの首元から少しだけ見える首から鎖骨の部分や服の上から僅かだけ山形に盛り上がっている胸、天井の光に反射して妖しく光る唇などについて目が

行ってしまう。

「ゆ、優子さんっ！ いきなりどうしたのさ？ 顔近いんだけど……っ」

「ねえ、吉井君はアタシがAクラスに行ってもいいの？」

「え」

質問の意図がわからなかった。

急にどうしたんだ。そんなことを言い出すなんて。

「言ってる意味がよくわからないよ？ 僕が試召戦争を始めた目的は優子さんをAクラ

スにする為で——」

「大義名分を聞いてるんじゃない。アタシは吉井君自身の気持ちを言ってるの！」

「——っ!？」

僕の、気持ち？ どういう意味なんだ。

わからない。優子さんが何を言っているのか。

「何を言ってるの……。Aクラスに行ければこれまでの埃臭い教室とは段違いの立派な設備で勉強できるようになるんだよ？ それはすごく良いことじゃないか。優子さんには今よりもより良い教室で過ごしてほしい。それが僕の本当の気持ちだよ」

「……確かにそれはそうかもしれないわね。けど、Aクラスに吉井君はいないじゃない」

「それは……」

「吉井君はアタシがクラスからいなくなってもいいの？」

「!」

その台詞は僕にとつてとても意外だった。まさか彼女がそんなことを考えてたなんて。

「……仕方ないよ。そもそも学力が天と地ほど違う僕達が一緒の方がおかしいんだ。それが元の普通の形に戻るだけだよ。大丈夫だよ。クラスが変わっても会いたい時はいつでも行くから。ね？」

「……そういう意味じゃないのに。バカ」

優子さんはむすつとした表情で捕んでいる袖を一層強く握る。

むむ、またしても僕は優子さんの機嫌を損ねてしまったのだろうか。女心はやつぱりわからない。

「もういい。吉井君はそういうヤツだつて分かつてたし」

「おおっと」

たんつと手の平で胸を押されて僕はそのまま数歩後ろへ後ずさつた。衝撃を受けた胸に手を当てて視線を下ろす。

その一瞬、優子さんから目を離した瞬間――。

「つ!? な、え……?」

風が吹いた。

そして、唐突に眼前まで優子さんの顔が現れて、すぐ傍に唇が迫ってきた。

抵抗も反応もする間のない一瞬の出来事だった。

僕は咄嗟に本能から身を引こうするが、全身の筋肉が凍りついたみたいに体がまったく動かない。

「ど、どどどどどうしたの優子さん!? 僕の顔に何かついてる!?!」

「……うるさい。ちよつと黙って」

小声だが反論は許さないと言わんばかりの圧力が感じられる声に口が固まる。

な、なんなんだ――。

優子さんの様子も変だし。なによりさつきから体が密着していろいろ当たっちゃってるんですけど……っ。

前回の校舎裏の時といい。優子さんには抱きつき癖でもあるのだろうか。

いけないと分かっているのに、鼻をくすぐる女の子の香りと服越しに感じる柔らかい体の感触にドギマギしてしまう。

と――。

「んんう……」

「はひっ!?!」

今度は僕の首筋に顔を摺り寄せてすりすりと摩ってきた。さらに腕に力を入れてきてさつきよりも体の密着度が上がる。

う、うおおっ!? これは何だ!? まさか僕の忍耐力が試されているのか——っ!

「ちよ!? 何々! 何なのこれは!」

ううう……。引き剥がさないとまずいの引き剥がしたくない。どうして僕はこんなに苦しんでるんだ。

これはひよつとして僕からも抱きしめてやるべきなのだろうか。

でもそれをやってしまうと自分の理性が保てる自信がない。

「と、とにかく離れようっ。こんなところ秀吉に見られたらっ!」

「嫌」

ええ、何で!?

「ふん。……アンタが悪いんだから。アタシのことを忘れて美波と楽しくデートして……」

「ええ!! あのことは許されたんじゃないの!」

「それとこれとは別なの! ちよつとは分かりなさいよ、この朴念仁」

っーんとした態度で告げる優子さん。

なんなのだろう。分かれと言われても僕には優子さんが美波の件でまだ怒っている

ようにしか見えない。

それ以外にどんな思いを抱いてるのやら……。

ん？ 怒ってる——？

「——あ」

ふいに頭の中であることを閃いた。

あまり自信はないけどこの様子はもしかして、

「優子さん、ひよつとして美波に嫉妬してる？」

「……っ!? わ、悪い？ 今の吉井君の彼女はアタシなんだからそれぐらい普通でしょ

！」

文句あるの！と言いたげに至近距離から睨んでくる優子さん。

どうやら正解だったらしい。

「——そっか。そうなんだ。あははは」

刺すような視線に晒されながらも、僕は心は不思議と温かいもので満ち足りていた。

「?? 何よ笑い出して」

「いやごめん。別に優子さんを怒らせたいんじゃないよ。そうじゃなくて……うん、僕は嬉しいんだ」

「嬉しいって、なんで……？」

笑いたくもなる。むしろ大喜びしたい。だつて、

「妬いてくれるってことは、本当に僕のことを好いてくれてるんだなあつて分かったから。そりゃあ嬉しくもなるよ」

「——なつ、な……つ」

目をパチクリと瞬かせてどよめく優子さん。

今となつてはそんな細かい動作一つ一つが全部愛おしく感じる。

どうしよう、これって完全に惚れこんでるよね。

「それは……！ あの、……えとつ。——だから！」

「落ち着いて優子さん。日本語が成り立ってないよ」

「あ、アンタが変なことを言うからでしょう！」

八つ当たり気味に口罵る。怒っているんだらうけど、それすら僕には可愛く見えた。

「変じやないと思うけどなあ。おかげで僕、前よりもずっと優子さんのこと好きになれたよ」

「……あ、なつ!?!」

すでに優子さんの羞恥心のメーターはレッドゾーンを軽く越えている。

のぼせるんじゃないかと思うほど顔を赤くした優子さんに、僕は不覚にも見惚れて眩

暈を覚えた。

「……………もお、そんなこと言われたら何も言えないじゃない。ばか……っ」

甘えたような口調で僕に体を預けてくれる優子さん。

う……。僕から進んでやってしまった事とはいえ、これはかなり破壊力が高い。――

主に僕の理性方面に掛けてはこうかばつぐんだ。

僕がドキドキしていると、やがて優子さんは顔を上げて僕を見上げてきた。

「……………吉井、君……………」

「……………あ」

そして、お互いの吐息さえ感じ取れるほどの至近距離から、スローモーションのように唇が近づいてきて、

「……………っ」

寸前で動きが止まった。あ、あれ？ キスするんじゃないの？

あと半歩、いや指の先ちよつと動かすだけでキスできるのに。

しかもこの距離は近い、近すぎる。これじゃ心臓の動悸まで聞かれてしまいそうだ。

なんだこれは。ここまで来て何も出来ないなんて生殺しいいところだ。

いつのまにか僕の両肩には優子さんの手が添えられていて、その感触は昨日の校舎裏で抱きしめられた時のことを思い出させた。

顔だけでなく首から耳まで真っ赤になった少女が僕の目を釘付けにする。

「し、しないの……………?」

成すすべもなく硬直する僕の鼻先に、涼風のように優子さんの吐息が掛かった。

「……………前はアタシからしたんだから、今度は吉井君からしてよ…………」

その言葉に僕は頭の中で白い爆発が起こった。

そこにいたのは学校の優等生でも粗暴で乱暴な姉としての姿でもなく、別の恋する女の子だった。

痛いほどに胸が高鳴る。

本能が理性を食いつぶし、僕の体は勝手に動いて空いている両腕を迷わず優子さんの背中に回して最後の一步を踏み出した。

「あ……………ん、ふ……………っ」

視界を閉じた途端にふんわりした弾力と熱を唇から感じた。

三度目のキス。

同時に、腕の中にいる熱くて柔らかい体を強く抱く。

「ん……………っ」

「ちゅ……………あん、んんん……………」

当てる、擦って、吸い付く。

一度経験したとはいえ、あまりに現実味のない感覚に頭の中が真っ白になった。さすがに、今の気持ちうまく言葉に言い表せない。

いつ唇が離れたのかすら分からなかった。

気がつけば、僕は体を離しとろんと半開きになっている優子さんの目を見つめていた。

その顔が、突如緩んでにへらと笑う。

「えへへ、また……キスしちゃったわね」

その妖艶な表情は学校での堅苦しくて刺々しくも真面目で優しい優子さんの面影はまったくない。まるでほしい玩具を買ってもらった子供のように無邪気な笑顔だった。

ああ、駄目だ。これは駄目だ。

こんな可愛い彼女がいるなんて、これじゃあ僕の理性が何時まで耐えられるか。

健全な男子高校生にとっては目の前で大きく写る優子さんの姿は理性を溶かす毒以外の何物でもなかった。やばい、もう一度抱きしめたい。キスしたい。でもこれ以上進んだら僕は理性のタガが完全に外れてしまう。

まだ恋人同士になってから一日しか経っていないのにそれは早すぎる。

つい優子さんの体に手を伸びてしまいそうになるギリギリのところ、僕は必死に欲求を押さえ込んだ。

「……もしかして、この為に秀吉を追い出したの？」

「だって、さすがに見られながらなんて出来る訳じゃないじゃない……」

「そ、そうだね……。でもやっぱり恥ずかしいよ」

「アタシだって。多分アンタの何倍も恥ずかしいわ……。でも」
「？」

「好きだから、嬉しい気持ちの方が大きいかな」

「な——っ」

僕は生唾を飲んだ。

好きって!? ああっ! こっちが全神経を注いで耐えてるのにどうしてそんな誘惑するようなことを言うんだ! まさか誘ってるのか。

キスをした感触も、パーカー越しから感じる女の子の体の肉感も全部まだ残ってるのに。さらに僕を魅了するようなことを言うのはやめてほしい。

こっちはさつきから心臓が爆発しそうだっていうのに、これ以上我慢しろだなんてひどすぎる。

耐えろ。耐えるんだ僕の中の獣——っ!

「う、うん。僕も嬉しいよ。優子さんみたいな素敵な人が彼女になってくれて。僕はすごい幸せ者だよ」

「??? ……ならどうしてアタシから離れるのよ」

暴走しないためです。わかつてくださいこの男心！

「そ、それより明日から勉強頑張ろうね！ 僕も一生懸命やるからさー！」

「へ？ そ、そうね」

急な話題変更で優子さんの気を別な方向へ逸らす。カムバック優等生バージョンの木下優子さん！

「やるのは日本史だけでいいんだよね？ 一騎打ちなら他の科目は使わないだし」

「……まあ、試召戦争だけならそれでいいけど。時間はあるんだし日本史を重視してほかもやりましょ」

「やるって、どこまで？」

「もちろん、全部♪ 安心して、ちゃんと手取り足取り教えてあげるから」

おお……、どうやら僕はまた選択肢を間違えてしまったようだ。

左右どちらかが天国かと思つて飛び込んだら、なんと両方地獄だったとは。

さつきまでの溶けるような甘い雰囲気は払拭できたけど、これはこれでやりづらいな……。

「ははは……。それじゃお願いしようかな」

「ええ、任せなさい。アタシが吉井君の成績を上げて先生達を驚かせてやるんだから」

ガッツポーズをとる優子さんに苦笑してしまう。

まあ、別にそれでもいいやって思ってしまう当たり、本当に僕は優子さんのことが好きなんだなあ。

絶対に勝とう。Aクラスに。

——いつからか、外の雨は止んでいた。

問34 Aクラス戦開幕

「それではこれより、AクラスとFクラスによる試召戦争を始めます」

そう告げたのはメガネの似合う知的美人が印象的なAクラスの担任教師、高橋先生。

場所はAクラス、今回は普通の試召戦争ではない特別ルールの戦いなのでFクラスよりこっちの方が断然広いという理由でAクラスの教室に集まっていた。ここならAクラスとFクラスの生徒を全員入れてもまだ余裕があるからね。

「両者共、準備はよろしいですか？」

「ああ」

「……大丈夫です」

両チームの代表である雄二と霧島さんがそれぞれ首肯く。

「それでは一人目の方は前へどうぞ」

「それじゃあウチが行くわ」

Fクラスチームから出る第一選手は美波。

一番手にもかかわらず特に気負った雰囲気はなく、軽妙な表情と軽快な足取りで中央ステージに向かって足を進める。

「美波、頑張ってね！」

「あ！ アキ！」

「うん？ どうしたの？」

唐突に体を反転させて僕の方を向いた美波は思い出したように声を掛けてきた。

「先週のゲームセンターでとったぬいぐるみ。葉月すっごい喜んでたわ。アキにありがとうって言ってお願ひされてたの」

「あーあれか。ううん、大したことじゃないから。それで葉月ちゃんが喜んでくれたなら僕も嬉しいよ」

「ウチからも改めてお礼を言うわ。ありがとねアキ」

素直に感謝の言葉を述べる美波。

あれは本当に苦労してないから気にすることないのに。でも葉月ちゃんが喜んでくれたなら僕も嬉しくなる。今度美波の家に遊びに行く時はまた持って行ってあげようか。

「うん。美波も試合頑張ってね」

「……まあ、やるだけ頑張ってみるわ。行ってくる」

適当な相槌を打って美波は僕から背を向けて歩き出す。

「それでは、私から行かせてもらいます」

Aクラス側から出てきたのはボブカットでメガネを掛けたいかにも頭のよさそうな女子。佐藤美穂さんだった。

「科目は何にしますか？」

「勿論、数学でお願いします」

当然と言った風に美波は答えた。まあ、それ以外の教科は壊滅的でAクラスに勝つことは100%不可能だもんね。

「分かりました。では召喚を開始してください」

「はい。試験召喚！」

「試験召喚」

喚び声と同時に二人の足元に召喚獣が現れる。

「ほかは無理だけど、数学なら得意なんだからAクラスでも負けないわ」

おお、やる気満々だ。これは期待できるっ。

「なるほど。島田さんは確かに帰国子女でしたね。それならあまり日本語を用いない科目を得手としているのも頷けます。——ですが」

Fクラス 島田美波

数学 198点

V S

数学 381点

Aクラス 佐藤美穂

「え……っ?」

「すみません。私の得意科目も理数系なんです」

二体の召喚獣が交錯する。

——勝敗は一撃で決まった。

「勝者、佐藤美穂」

……ああ、駄目だこりゃ。

審判役の高橋先生から無感情に告げられる結果に肩を落とす。

さすがはAクラス。ちよつと得意程度のレベルでは話にならない。

一瞬で終わった美波は落ち込みながら僕達の元へ戻ってきた。

「ごめん……。負けちゃった」

「気にするな。まだ一回戦だ。これからいくらでも挽回できる」

「そうだよ。あんな点数差じゃあ負けても仕方ないよ」

「……なんかアキに励まされると腹が立つわ」

「なんでさ!?! 慰めたのに!」

「では二人目の方どうぞ」

「……………俺が出る」

「じゃあボクが行こうカナ」

僕達のチームからは土屋康太ことムツツリーニ。

対して向こうからお気楽そうな調子でやってきたのはすでに何度か顔を合わせている工藤愛子さん。

スツとしたスリムな体型で凹凸の少ない体はパツと見少年のように見える風貌が特徴的な女の子だ。

「ん？ どうしたの吉井クン。ボクをじつと見て」

「え、いや……………別になんでも」

「あ、ひよつとして前みたいにまたスカートの中を気にしちやったりした？ ゴメンネー、ここは人が多いから前みたいに見せてあげられないんだ」

「ええ!!？ ち、違うよ! 何言ってるのき工藤さん!」

バカなことを言わないでほしい。前だつてきちんと見せてもらっていないというのに!

「……………落ち着け。騙されるな明久」

「ムツツリーニ?」

こういう展開だといの一番に鼻血を吹きながらカメラを構えるエロの伝道師である

ムッツリーニが妙に冷静な口調で僕を諭した。

どうしたんだろう。普段とは違って興奮していないみたいだけど。

「……………ヤツはスパッツを穿いている」

「なんだって!？」

そういうことか! ひどいよ工藤さん! 僕はこんなにドキドキしてたのに!

「あはは、気づいたちゃった? そっちの人は中々の洞察力があるね。名前は確か土屋クンだっけ? キミ、保健体育が得意なんだってね」

「……………だからどうした」

「実はボクもすごく得意なんだよ。——それもキミと違って実技でね」

実技!? 実技ってなんだ!? どうしてだか分からないけど今僕の胸が高鳴ってる!

「……………じ、実技っ(ぶっしやああっ)」

「おい、ムッツリーニが鼻血を吹いて倒れたぞ!？」

良かった、どうやら動揺したのは僕だけではないようだ。

「ムッツリーニ!」

「あから、なんだか戦う前からダウンしちゃった。大丈夫? これじゃボクの不戦勝になっちゃうなあ」

「くっ、エロに関してには想像力が常人の数倍以上あるムッツリーニになってことをっ」

僕でさえ興奮が抑えきれないというのにエロの伝道師と呼ばれているアイツが耐えられるわけないじゃないか！ 卑劣な真似を！

「なんなら代わりに吉井クンが出る？ ボクはそれでも全然構わないよ。……でもあんまり勉強得意そうじゃないし、保健体育でよければボクが教えてあげようか？ ——勿論、実技でね♪」

「じ、実技でっ!? ほんとに!?!」

なんて魅惑的なワードなんだろう。女性の方からこんな妖しいことを言われたら男としては受けずにはいられ——、

「吉井君、ちよつと外に出ましよう。二人つきりで話したいことがあるの」

——ないが、命には代えられないよね。

「工藤さん！ 僕を惑わせようとしても無駄だ！」

「アキ、ちよつと乗りかけてた癖に」

「まあ、明久だからな」

「……………」

何故か後方では雄二と美波が呆れ優子さんはジッと僕を睨みつけていた。

何を馬鹿な。僕の心は常に優子さん一筋だというのに。

「そろそろ始めてください。これ以上の延長はFクラスの不戦敗と見なしますよ?」

高橋先生がマニュアルに書かれた文章を朗読するように抑揚のない声で警告を告げる。

「大丈夫ムツツリーニ？」

「……………ま、まだいける」

足腰を震わせながらふらふらと立ち上がるムツツリーニ。

明らかに異常なレベルの鼻血が出ているが本当にいけるのだろうか……。

「あ、そうそう。さっきの話で言い忘れてたんだけど」

「??」

突然工藤さんが口を開く。なんだ忘れてたことって？

「今日はスパッツは穿いてるけど、朝バタバタしちゃってついブラをしてくるの忘れちゃったんだよねー。だから今日は——ノーブラなんだ」

「……………つつ?!?!」

「む、ムツツリーニいい——っ!!」

鼻から赤色のアーチを描きながら、見えない衝撃を受けたムツツリーニは後ろへ大きく吹っ飛んだ。

なんか顔が真っ青なんだけど?! これって本格的にやばくない?!

「あははー、ちよつとやりすぎちゃったかも。ゴメンね」

「土屋君は試合続行不可能なようです。Fクラスは誰か代替りの人を出してください」

「い、いや。俺達の不戦敗でいい」

「そうですか。それではこの試合は工藤愛子さんの勝利します」

無情な宣言と共にカタカタとノードパソコンを操作する高橋先生。

すると壁一面に設置してある巨大な液晶ディスプレイに試合結果が表示された。

Fクラス 土屋康太

生命活動 DEAD

VS

生命活動

Aクラス 工藤愛子

まだギリギリ生きてますとは言えなかった……。

取りあえずムツツリーニは観客席にいた秀吉と工藤さんが連れ添って保険室へ連れて行ってもらった。二人が入ればヤツは大丈夫だろう。それよりもこっちの状況の方が大変だ。

「どうしよう雄二!? これで僕らの二敗だよつ。あと一回負けたら終わりじゃないか!?」

保健体育においては無敵の強さを誇るムツツリー二は安全牌だと思っていたのが完全に裏目に出てしまった。

これで僕らは一気に不利になった。ここから全勝しないとFクラスに勝ちはない。絶体絶命のピンチだ。

「あの土屋が黒星なんてね……。ウチもびつくりだわ」

「俺もまさか保健体育でムツツリー二が負けるとは夢にも思つてなかったからな。正直ちよつと焦つてる」

保健体育以前の問題だった気がするけど、さすがの雄二も顔から冷や汗が滲み出ているみたいだ。

しかし、その目はまだ諦観ていかんしていなかった。

「だがまだ負けと決まったわけじゃないんだ。とにかく俺達は今出来る事をする。悔むのは敗北が確定してからでも遅くないだろ」

「そうね。諦めるのはまだ早いわ。坂本君はあの代表相手なら勝てる作戦があるんでしよう?」

「一応な」

先週の作戦会議で雄二は霧島さんを倒す方法を僕達に教えてくれた。

でも、本当にあんな方法でAクラスの代表に勝てるのかな……。

「でもそれってあと二回勝つことが前提だよな？ 代表同士の対決は最後に持つてくるだろうし」

「そうだな。木下はまだなんとななる可能性があるから保留にするとして、今は俺よりも明久の試合の方が問題だ」

「多分……、というか確実にアキの対戦相手は久保よね」

学年次席の姫路さんに続いて学力が高い久保君が僕の対戦相手だなんて正直自信がない。僕のアドバンテージといえばちよつと人より召喚獣を扱いが上手い程度でしかないし、ハッキリ言つてこのカードは絶望的だ……。

「いざとなれば色仕掛けで久保を籠絡するしかないな」

「美波が？」

「何でウチなのよ」

だって秀吉は今いないし優子さんが他の男に媚びる姿なんて見たくない。

だとすれば消去法で残る女子は美波しかない。

「安心しろ。久保を懐柔する役目は明久だ」

「何で僕なの!!」

「……………」

ちよ!?! 何でそこで無言! そこはかとなく嫌な予感がするんだけど!

「三回戦を始めます。各選手は前へどうぞ」

そんな話をしていると高橋先生の催促が聴こえた。

「……私が行く」

Aクラスチームから出てきたのは代表の霧島さん。

え、ここで——っ!?

『おい、Aクラスの代表が出たぞ』

『勝負に出たってこと?』

『ここでFクラスを完封するつもりか』

観客席側からもどよめきの声が木霊している。

てつきり最後の試合で登場すると思っていたのにこれは予想外だ。

決着は自分で。とでも考えたのだろうか。

「これはまた、随分と舐められたもんだ」

それを見ていた雄二は敵意を露にしていた。

どうやら霧島さんの登場を挑発と受け取ったらしい。

霧島さんが出てきた以上、こちらから出るのは雄二に決定だ。

「雄二、任せたよ。ここで負けたら後がないんだからね」

「わかってらあ。俺の威信に掛けてもこの戦いは負けられねえ」

威勢の良い台詞を言い残して雄二は中央ステージに歩いていった。

心配だ……。雄二は頭の回転は良いけどここぞという時にポカすることがあるからそこが不安でならない。

だがもう見送ってしまった以上、僕らには雄二の勝利を祈ることしか出来ない。

せめて自信満々な態度が死亡フラグでないことを願うばかりだ。

「坂本君。科目はどうしますか？」

「教科は日本史。内容は小学生レベルで点数は百点満点の上限ありだ！」

雄二の宣言に観客席が一斉にざわついた。

『小学生レベルだと?!』

『そんなの満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるな』

前に雄二は『俺達がAクラスに追いつけないなら逆にあいつらの方からFクラスのレベルに合わせてもらえばいい』と言っていた。それは多分こういうことだったんだろう。

高校生レベルでは勝負にならないだろうけど、これならまだ僕らにも勝機はある。

「わかりました。それではテスト問題を作らなければなりませんね。すぐに作成しますので少し待っていてください」

ノートパソコンを閉じて高橋先生は教室を出て行った。

先生がいなくなったことで今まで観戦していたAクラスとFクラスのみんなが好き勝手に喋りだして教室内が少しだけ騒がしくなる。

そんな喧騒の中、僕はふと中央ステージに目を向けると雄二と霧島さんが何か話しているのが見えた。

「……雄二、どうしてAクラスに勝ちたいの？」

「なんだいきなり。ただ世の中学力だけがすべてじゃないことを証明したいってだけだ。お前こそ、なんでこんな中途半端なタイミングで出てきた？ 勝ちに行くだけなら他のヤツに任せればいいだろうに」

「……別に。特に理由はない。どちらにしても結果は変わらないから」

「どういう意味だ」

「……吉井では久保に勝てないし。瑞希も負けるはずはない。……そして、今の雄二じゃ私には勝てない」

「言ってくれるじゃねえか。それはやってみないと分からないだろう。結果が出る前から決め付けるのはよくないぞ」

「……決め付けてるわけじゃない。ただ戦況を客観的に見て判断してるだけ」

「ふん、言ってる。——それはそうと翔子。お前、宣戦布告の時あんな条件持ち出して何

がしたいんだ？ 本気で明久と木下を別れさせるつもりか？」

「……それは瑞希の裁量次第。私には私個人の目的がある。その為に戦っているだけ」
「けっ……。まだ諦めてないのか」

「……私は諦めない。ずっと——」

霧島さんは雄二の眼を見ながら何か言っているようだが、それ以上先は周囲の雑音で掻き消されて聞こえなかった。

その後の雄二の曖昧な反応を見る限りだと雄二的に困る話なのかな？

霧島さんと雄二が幼馴染という話は前に聞いていたけど、二人の関係性がまだイマイチよく分からない。友達って感じにも見えないし、どっちかというと敵対しているっぽい？

「では三回戦、日本史を行います。坂本君と霧島さんの二名は視聴覚教室に集まってください」

30分ほどしてから戻ってきた高橋先生が二人に声を掛けた。

「……はっ」

「おう。じゃ、行ってくる」

短い相槌を打って雄二と霧島さんはAクラスを後にする。

「……ここがFクラスの分岐点だ。」

この試合で雄二が負けたら、その時点で僕達の敗北が決定される。

「皆さんはここでモニターを見ていてください」

高橋先生がノートパソコンを操作すると壁の巨大ディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

画面の向こう側では霧島さんと雄二はそれぞれ廊下側と窓際の席に腰掛けている様子が写っている。わざわざ離れた席に付かなくても良いと思うんだけど、やっぱりあの二人仲が悪いのかな……。

しばらくして、視聴覚教室の扉が開き廊下から日本史の飯田先生が入室してきて二人を一瞥した後、説明を始めた。

『それではテストを始めます。制限時間は五十分。満点は100点です。当然ですがカニング等の不正行為を発見した場合失格になります。その場合即座にテストは中断しますので留意してください』

そして裏返しにテスト用紙が配られる。

『準備はよろしいですか?』

『……はい』

『おう』

『では、始めてください』

先生の合図と同時にプリントを表にする。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

Aクラスの生徒もFクラスのみんなもディスプレイに釘付けになってさつきまで騒がしかった教室内は完全に無音になっていた。

誰もが真剣に一点だけを見つめて神経を研ぎ澄ましている。

この針のような剣呑な雰囲気に加えがあった。

——振り分け試験。

あの独特の空気が今このAクラスの教室に再び蔓延している。

誰もが固唾を飲んで見守る中、僕も動悸を少しだけ早くしながら画面を注視した。

呼吸する力すら眼球に注いで真つ直ぐ画面を見ていると、不意に僕の右手に冷たくて柔らかい感触が包み込むように感じられた。

「……………優子さん？」

手が繋がれた先を辿るとまわりと同じようにディスプレイに目をやっている優子さん姿があった。どうしたんだろう。

優子さんは顔を固定して画面を見据えたまま僕に声を掛けてきた。

「吉井君、この勝負勝てるかな……」

その口調にはいつもの何事にも強気で自信を持たせてくれる力強さはなく、不安と懸念が含まれた弱い声だった。

勝てばよし。でも負けたらこの試召戦争は僕らの敗北で終わる。

そうなったら、悲願は叶わず僕と優子さんは別れることになってしまうかもしれない。い。

せつかく気持ちを通じ合えたのに。ようやくお互いの想いが届いたのに。こんなところで離れるのなんて僕だつて嫌だ。だからこそ雄二にはなんとしても勝ってもらわないといけない。

「もしあの問題が出なかったら坂本君は……」

「集中力と注意力の戦いになるから。持久力で負けてる雄二には不利だね。そしたら、多分……負ける」

「……………」

握られた手がより強く締まった。

表面上では猫を被ってアグレッシブな態度と言動をとっていた優子さんでも、この窮地ではさすがに多少弱腰になってしまっているのが言外から読み取れた。

……いや、もしかしたらこれまでもずっと。Aクラスに負けることを一番煩慮していたのは僕でも雄二でもなく優子さんだったのかもしいれない。

だからこそ、二日分の休日を返上して勉強会を開いたり、無為に不安がらないよう今までずっと心根を隠していたのではないだろうか。ひたすら勉強して少しでも嫌な想像から気を紛らわす為に。

そう考えると、僕は無意識に繋がれている手を強く握り返していた。

「大丈夫だよ」

「え？」

「雄二なら絶対勝つ。だから、大丈夫だよ」

こんなの僕の勝手な思い込みかもしれない。

口に出た台詞も根拠も何も無い言葉だけの励ました。

だけど、今僕が優子さんにしてあげられることは、震えてしまわないようにただこの手の温もりを守ってあげることだけだ。

そんな些細なことでも、前に優子さんが僕を守ってくれたように今度は僕が彼女を支えたいと思った。

「……うん。信じる」

短く返事をする、優子さんは一度手を解いて今度は指と指を絡めあうように握り直

してきた。さっきまでの普通の繋ぎ方と違って余す所なくピッタリと手と手が引つ付く。

その仕草に内心でドキっとしながらも、そのまま僕らは再びディスプレイを見上げた。

画面の向こう側では今も二人が真剣な表情で鉛筆を動かしている。

大化の改新さえ出ていれば僕らの勝ちなんだ。

頼んだぞ雄二。絶対……。絶対勝てよつ。

《日本史勝負限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

V S

《Fクラス 坂本雄二 100点》

そして、奇跡が起こった。

問35 最後の戦い／1

「日本史限定テスト対決は坂本君の勝利です」

『うおおお——っ!!!』

ディスプレイに結果が表示された瞬間、Fクラス陣営から喝采が上がった。

「やったよ雄二！ これで僕らの一勝だ！」

「やるじゃない坂本！ 本当にあのAクラス代表に勝っちゃうなんて」

「ええ。これでなんとか首の皮一枚繋がったわね。おつかれさま坂本君」

「おう、みんなサンキュ」

視聴覚教室から戻ってきた雄二をみんなで労う。

信じてなかったわけじゃないけど、本当に霧島さんに勝つとは驚きを通り越して尊敬

すら覚えそうさ。

「ほんとすごいよ。今までの恨みを全部帳消しにしてあげてもいいほどの成果だよ！」

「お前に借金なんぞした覚えはないが、その言葉だけは受け取っておこう。——それよりも気になってることがあるんだが……」

言いながら雄二は僕と優子さんを交互に見る。

「……何でお前らは手を繋いでるんだ？」

「——っ！」

「あ……」

言われて僕はずっと優子さんの手をとっていることに気がつく。

そうだった!?! あまりにも雄二の勝利が驚愕すぎてつい忘れてたっ。

「あ、やつこれは!?!」

「……別にお前らの関係は今更どうこう言うつもりはないが、ここにはクラスの目もあることを忘れるなよ。ここで二人の関係がバレて連中が暴走して試合が中止、なんて笑話にもならないからな」

「う……っ」

忠告するように告げられた言葉にそろって口を噤むしかない僕達。

僕と優子さんが付き合ってるなんてクラスに知られたら試召戦争などお構いなく暴れだすであろう事は想像に難くない。

幸い今の注目は完全に雄二の方向へ向かっているから僕達のことには誰も見ていなかったようだけど危なかったな。次からは気をつけよう。

「さて」

もう用事はなくなったと言うように雄二は僕達に背中を向ける。

その視線の先には、先ほど一緒に教室に戻ってきた霧島さんの姿があった。

「……………負けた。私が」

霧島さんは表情こそいつも通りだが、発せられた声には若干の落胆が感じられた。

「俺の勝ちだな翔子」

雄二は霧島さんに近づきながら勝者の言を告げる。

そんなヤツを霧島さんは憤るわけでもなく関心するわけでもなく、ただ不思議なものを見たかのように顔を見上げながら口を開く。

「……………意外だった。まさか雄二がきちんと勉強をしてくるなんて」

「そうか？」

「……………うん、雄二のことだからきつと小学生の程度だと慢心して無勉強で挑むと思っていたから」

「……………お前の言う通り、俺はこれまでずっと勉強することから逃げていた。今回の限定テスト勝負だつて本来なら俺は油断して負けていたことだろうさ。お前達が姫路を氣遣つて開戦時期を延ばさなければな」

「……………！ それじゃあ」

「ああ。先週からの三日間の自由期間。せっかくAクラスの方から貰い受けた準備期間モラトリアムなんだ。活用しない手はないだろう？ 小学生レベルのテストならそれぐらいあれば

十分勉強できるしな。むしろありすぎるぐらいだった。昔俺がなんて呼ばれていたか、翔子ならよく知っていただろう？」

「……そう。所詮小学生程度だと侮った私の負け」

「そういうことだ。今回は俺の勝ちだ。——たとえお前がわざと回答を間違えたとしてもな」

「……………」

雄二と霧島さんはずっと二人で何やら話しこんでいる様子だった。

「雄二と霧島さん。何を言い合ってるんだろう？」

「人のことを気にしている状況じゃないでしょアキは。次はあんたの番なんだから」

「え、僕？」

「だってAクラスからもう久保が待機してるじゃない」

言われて僕はステージの方へ顔を向けると、すでに久保君が自陣から歩き出しているのが見えた。

「あ、ほんとだ」

「ほんとだ。じゃないでしょう。ウチらにとってはここが一番の正念場なのよ」

「島田の言うとおりだ」

話が終わったらしい雄二が歩きながら僕に向かって告げる。

「雄二——」

「さつき木下が言ったようにまだ俺達は首の皮一枚で繋がっているにすぎない。しかも大して点数もない明久が学年で三位の実力の久保を倒さなくちやいけない。お前は俺よりもずっとハードな立場にあるんだぞ」

雄二の言葉は僕の体に重たくのしかかった。

優子さんのように頭が良いわけでもなく、雄二みたいに知略に富んでいるわけでもない。ただ観察処分者として他よりちよつとだけ召喚獣に慣れているだけの僕が真正面から久保君と戦って勝たなければいけない。

ハッキリ言つて正面からの打ち合いでは100%無理だ。

ウサギと亀のレースの如く。一瞬で僕が抜かれて終わる。

そして、世の中努力を怠らないウサギはたくさんいる。久保君は丁度その例だ。

しかし——、

「分かつてる。それでもここまで来たんだもん。絶対に勝ちたいよ」

不思議と、負ける気は起きなかった。

昨日と一昨日。鬼のように勉強したおかげだろうか。

もしかしたら普通に考えて勝てる見込みのない戦いに自分でも自棄になっているかもしれない。

雄二のように必勝の策を持っているわけでもない。

優子さんのようにAクラスに勝る点数を持っているわけでもない。

それでも僕には勝たなくちやいけない理由がある。

絶対に成し遂げたい目的がある。

それだけで体を感じる重たい重圧は綺麗に消え去ってくれた。

「明久。ムツツリー二の保険体育や秀吉の変装術のようにお前はお前で他人より秀でている部分はある。俺はそこに期待している」

「雄二……」

「勝てよ明久。負けたら死ぬまでぶん殴ってやるからな」

薄く微笑む雄二。

こんな時でも雄二は雄二だった。

土壇場でもこの軽口。なんというか、緊張感が解れるなあ。

「アキ——！」

「美波？」

今度は美波がいつもの強面の表情で迫ってくる。

そしてびしっ！と僕を指差して、言った。

「ここで負けたら最高にかっこ悪いんだから、絶対に負けるんじゃないわよ」

「それ負けちゃった美波が言う?」

「う、うっさい! いいからさっさと行って手早く勝つてきなさい!」

肩を怒らせながら美波は僕に背を向けて下がって行った。なんだかなあ。

なんだか言いたいことだけ言って勝手に満足して行っちゃったけど、なんだか背中を叩かれたような気がして、おかげで気合が入った。ありがとう美波。

そして――、

「吉井君。――いつてらっしやい」

一言。

優子さんは、頑張れ。とも、勝つてきなさい。とも言わずに一言だけ、ありふれたごく単純な言葉で見送ってくれた。

胸に暖かいものが広がっていくのを感じる。

意味も理由もない普通の言葉なのに、それだけで覚悟は固まった。

――好きな人から送られる言葉なら、些細なことでも嬉しいんだってことが解った。

「うん。行ってくるね」

同じように、僕も短い相槌を打ってステージに足を向かせる。

さて、それじゃあ意識を切り替えよう。

ここからは僕の人生で一番本気にならないといけない時だ。

「それでは、第四回戦。吉井君と久保君の試合を始めます」

審判役の高橋先生が僕と久保君を見ながら宣言を告げる。

「教科は何にしますか？」

「日本史でお願いします」

すでに前三回繰り返し返された問答。

選ぶのは勿論昨日と一昨日に猛勉強した日本史だ。

「わかりました。それではフィールドを張ります。始めてください」

「解りました。——試獣^{サモモン}召喚」

「行くよ久保君、試獣^{サモモン}召喚——！」

喚び声に応え久保君と僕の足元に自身の姿がデフォルメされた召喚獣が姿を現す。

僕の元にはもう何度も見た学ランに木刀を携えた召喚獣。

そして久保君の傍には、僕の木刀よりも遥かに大きな鎌を両手に持った外見からして

迫力のある召喚獣の姿がある。

その姿は僕の普段やっているゲーム風に形容するなら、まさに最後の敵^{ラスボス}というに相応

しい出で立ちだった。

「うわっ——。なんだあれ」

明らかに装備の質が違いすぎる。方や攻撃力の低そうな木刀でもう方や切れ味のよ

さそうな大鎌ときた。

召喚獣の特徴や外見がオリジナルの人間を元にしているとはいえ、ここまで差がある
とさすがに学園長に文句の一つも言ってもやりたくないもの止む無しだろう。

Fクラス 吉井明久

日本史 142点

VS

日本史 350点

Aクラス 久保利光

召喚獣の頭上にお互いの点数が表示される。

……やっぱりAクラス。びっくりするほどの高得点だ。

いくら休日を勉強に費やしたとはいえ、久保君のような優等生は日常のように復習や
予習を重ねてやってきているんだ。それをたった二日頑張ったって追いつけるわけが
ない。そんなことは初めから分かっていたから今更驚くには値しない。

「吉井君。戦う前に一つ訪ねても良いだろうか」

久保君がメガネを押し上げながらそんなことを尋ねてきた。

「なこ？」

「君はどうして試召戦争を始めようと思ったんだい？ やはりここの教室の設備が目的

なのかい？」

「それもある。——いや。それもあつたの方が正しいかな」

「過去形……。ということは今は違うと？」

「勿論Aクラスの設備は魅力的だけど、僕よりもそれを使うに相應しい人がいる。……僕はただ、努力した人が報われてほしいだけだよ」

「——そうか。それは立派な目標だね」

久保君は声音は心からそう思ってくれているように聴こえた。

「できれば僕個人としては吉井君の手伝いをしてあげたいが、あいにく僕にもクラスとしての立場がある。申し訳ないが私情は省かせてもらおうよ」

それはつまり本気ってことか。

できれば優しい久保君のことだから手加減の一つでも期待していたがそれは叶わないらしい。

「それでは、始めようか吉井君」

「うん。それじゃあ行くよ久保君！」

互いの言葉を皮切りに召喚獣が動き出した。

久保君は驚く速度で一直線に真っ直ぐ僕の召喚獣の首を狙ってくる——！

「そんな大振りっ！」

頭上から繰り出される二本の大鎌を体を捻らせて回避し、相手の背後を通り抜けるように木刀で頭部に一撃を浴びせた。

そのまま飛び引いて久保君の召喚獣から距離をとる。

Aクラス 久保利光

日本史 321点

「——っ。やっぱりダメージは少ないか……」

表示されている点数を見て僅かに落胆する。

頭を狙ったつていうのにこの程度とは。さすがに200点も差があるだけのことある。

「やはりやるね吉井君。Dクラス代表を倒しただけのことはある」

先手を打たれたというのに涼しげな様子で久保君は賞賛の言葉を言った。

……だが、正直今のだって冷や冷やものだった。

何しろこっちはまともに一撃を受けたら終わりなのだ。

罅迫り合いなど不可。攻撃を受けとめようものなら召喚獣ごと吹き飛ばされる。

僅かな掠りが命取りの攻防では、必然的にヒットアンドアウェイの戦法で徐々に削つ

ていくしかない。

「これぐらい全然大したことじゃないよ。ダメージもほとんど与えられていない」

軽口を言いながら僕は召喚獣に木刀を構え直させる。

「僕は勝たなくちやいけないんだ。その為に今持てる全部の力をぶつける！」

「解つたよ。それならば僕も全力で相手しよう——！」

二体の召喚獣が同時に駆けた。

向こうは大鎌を水平に持たせている。予測される攻撃は鎌のリーチを生かしたなぎ払い。

——見極める。

久保君の召喚獣の武器の優位性、踏み込み、攻撃範囲。そして回避できる抜け穴を。

僕が久保君に勝っているのは召喚獣の操作技術だけ。唯一と言っていいその利点をどう使えば決して傾かない天秤を動かせるのか。

これまで観察処分者として鉄人にこき使われ続けて養われたこの操作性。今ならば存分に活かせる——！

「はっ——！」

僕は真横から振り抜かれる大鎌に対し、僕は小ジャンプで向かってくる大鎌を飛び越えた。

最小の跳躍でさつきまで自分がいた位置を大鎌が通過し攻撃が空ぶつていくのを確認すると、続けざまにそのまま大上段にさきほどと同じ位置に木刀を叩き付けた。

「つつつ!?!」

久保君が僅かに表情を歪める。

まったく同じ部分に攻撃が当たったんだ。さつきより多少はダメージ量が増えているに違いない。

そのことに過信せず、僕はすぐ久保君の召喚獣から飛び引いた。いつまでも至近距離で向き合うのは危険すぎる。

「……なるほど。そういう手で来るんだね」

こちらの攻撃を見て何かを読みきったのか久保君はなんと召喚獣の持っている両腕の大鎌を短く持ち直した。

どうやらこれまでの大振りの攻撃は通用しないと踏んだようだ。

次の攻撃に備え僕は回避ポイントを探していると、久保君は短く持った二本の大鎌をまるで翼を広げる鷹のように左右に広げた。

大鎌の切っ先を内側に向けて構える姿は獲物を捕食しようと機を伺っている肉食獣の牙を彷彿とさせる。

「吉井君の戦術が動き回ることによる霍乱なら、こちらはその動きを封じさせてもらうまでだ」

その姿勢のまま、久保君はまた一直線に僕の召喚獣に向けて飛んだ。

見た感じはただの突進。しかし左右には大鎌があるため横方向への回避は不可能。ならば上。……いや、頭の良い久保君ならこれぐらいの思考は読んでいるはずだ。つまりこれはフェイント。

上へ飛んで逃げるように差し向けて、予め短く持つて攻撃速度を上げた武器で串刺しにするのが本命——！

これまで二度の試召戦争を経験した僕なら、これぐらいの作戦は読める！

「なら——！——だ！」

僕は手持ちの木刀を左腕に持ち直す。

そして、徒手空拳になった右手で思いつきり床を殴りつけた！

「痛っつ——！？」

フィードバックに右腕から焼けるような激痛が走った。

あまりの痛みに一瞬意識を失いそうになったのを気合で耐える。

素手で硬い床を全力で殴りつけたんだ。普通なら指の骨が一、二本折れていても不思議じゃない。むしろわずかな出血で済んでいるのは僥倖と言えるだろう。

激痛を我慢して僕は召喚獣を少しだけ下がらせる。

「何故床を——。なっ!？」

それを見た久保君の表情が疑問から驚愕に変わった。

僕が全開の力で叩き込んだ床は衝撃で砕け僅かな“窪み”が出来ていた。

——しかも、それは久保君の突進の進行方向に。

さて。ここで、一つ召喚獣の特性について説明しなければならない。

通常召喚獣は現実の物に触ることが出来ない。

人間の数倍以上の力を持った召喚獣が簡単に物に触れたら危険意外の何者でもないからだ。

例外として教師の召喚獣と僕のように観察処分者に認定された召喚獣は雑用の為に物理干渉能力を持つことが出来るが、そもそもその観察処分者が歴代で僕しかない時点でこれは特例中の特例と分かるだろう。

が、これでは一つだけ矛盾することがある。

召喚獣が本当に物に触れないのであれば、第一に召喚しても意味がないのだ。

フィールドを張ったって、召喚獣が降り立つ床は物理的な物なのだから喚び出した所でズブズブと底なし沼のように沈んでしまうだけだ。

そうならないのはこの文月学園の床は召喚獣でも地に足が付くように特殊コーティングされているからに他ならない。

詳しい概要は分からないが、つまり、たとえ物体に触れられない召喚獣でも例外として地形の影響は受けるということだ。

その床を僕は破壊した。

僕のパンチでほんのちよつとだが開いたその“穴”に、止まることができない久保君の召喚獣の足が嵌る——！

道端の小石に躓いた程度の衝撃だが、召喚獣の扱いにまだ慣れていなかった久保君は回避することも上手く受身を取ることにも出来ずゴロゴロとボールのように転倒して転がった。

「今だ——!!!」

隙だらけになった召喚獣に僕は反撃される危惧を無視して突っ込み連続で五度木刀を打ち据えた。

すべて頭、首、胸と人体の弱点となる部分のみを絞つての攻撃。

とにかく当てる。当てて当てて当ててまくる——！

たとえ点数で負けていようと、これなら！

Fクラス 吉井明久

日本史 114点

V S

日本史 131点

Aクラス 久保利光

「転んだ時の衝撃と僕の連続攻撃で、彼我の点数差はいつのまにか拮抗していた。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

観客席は完全に呆然とした状態だった。

無理もない。自分でも今の結果に驚いているんだから。

点数が遥かに劣る僕にここまで追い詰められるなんてきつとAクラスはおろかFクラスの間でも思いもしなかっただろう。

だからと言ってまだ楽観するのは早すぎる。

この熱がまだ残っているうちに久保君を倒さないと、今の勢いが冷めたら逆転されてしまう可能性がある。まだ一分たりとも油断は出来ない。

「……正直、予想外だよ。まさか吉井君の腕がここまでのもとは」

顔つきは変わらないものの、久保君の目には驚きと焦りの色がある。

「僕だって伊達に試召戦争で勝ち抜いてないよ。集団戦だどこから攻撃が来るか分からなかったからね。視覚外からの攻撃にも対応できるように常に全方位に注意を向けないといけないんだ」

「経験の力だね。普通の試召戦争をしたことがない僕には持っていないものだ」

「知識の差を経験と実戦で補う。それが点数の低い集団であるFクラス流の戦い方だよ」

いける！と僕は確信を持ち始めていた。

波はこちらにある。今のままでいけば僕は久保君を倒せる。

「久保君こそ、このままじゃピンチじゃない？」

「いや、そうでもないよ」

「え——？」

思ったよりも冷静な久保君に眉根を寄せる。

どういうことだ？ ただの強がりか……？ それとも何か別の手があるのか。

「——っ！」

久保君の召喚獣が地面を蹴った。

今までと何も変わらない挙動、攻撃手段。これなら交わすのは容易い。

振り落とされる大鎌を僕は難なく回避する。

「……今のが久保君の策？ だとしたら残念だけど失敗に終わったね」

「そんなことはないさ。本番はここからだ」

久保君の召喚獣は空を切った大鎌を即座に振りぬき飛び退ろうとする僕の召喚獣を

追ってきた。

これが狙い？ いや、これぐらいの攻撃ならまだいくらでもやりようはある。

「やあー！」

横薙ぎに迫る大鎌に対し、僕は足元に打撃を与えてバランスを崩させようと動き出す。

狙い通り、足に直撃した木刀の衝撃により大鎌は狙いが逸らされて僕の召喚獣の頭上を通り抜ける。

——いや、通り抜けるはずだった。

「え……？」

その光景に、僕は思わず頭の中が真っ白になってしまった。

「う、受け止めた？ 足で……？」

相手を転ばせるはずの一撃が、その足に阻まれてしまっていた。

バカな。これまでの経験から言ってもこの攻撃を受ければ足場を崩されて転ぶはずだ。

万が一転倒しないまでも多少の仰け反りは発生してその隙に相手の武器を避けることもできるはずだった。

だというのに、久保君の召喚獣はまったく怯んだ様子はなく。

二本の大鎌は主に命じられたまま僕の召喚獣の胸を切り裂きにくる。

「あ——」

心臓が震えた。

やばい。

一瞬で全身の血を抜かれてしまったような寒気が走る。

鎌の向かう先は心臓のある位置。腹から肩までを切り裂く死の一撃。

このままでは確実に直撃コース。

これを食らえば終わる。回避はもう間に合わない。

まるでスローモーションのように、ゆっくりと大鎌が僕を切断しようと襲ってくる。

一秒先の死を幻視した。

「あ、ああああああああああああ——」

ざしゅ。と無機質な斬撃音が教室に響いた。

!!!!!!!!!!!!

☆

吉井明久の絶叫は、その後ろの観客席、そして待機している各クラスのメンバーの耳にも響き渡っていた。

「あ、アキ。まさかやられちゃったの……?」

「わからん。だが今の攻撃はまともにくらっちゃった。いくら明久でもあれは致命傷のはずだ」

「そんな……。それじゃあ試召戦争はウチらの負け……?」

「まだよ——!」

「優子?」

「木下、お前……」

「まだ吉井君は諦めてない。だから、まだ終わってない!」

☆

「はあ……はあ、はあ」

全身がだるい。

全力回避しようとした無茶な動きと久保君の大鎌の攻撃をもろに受けたにフィードバックが返ってきた影響で体中が火傷した様な痛みが僕を蝕む。

Fクラス 吉井明久

日本史 6点

VS

日本史 75点

Aクラス 久保利光

僕の召喚獣は、——まだ死んでいなかった。

「ぎ、ギリギリセーフ——！」

あ、危なかった。さっきの一瞬だけは本気で負けを覚悟したよ。

顔の冷や汗を手を拭いながら、安心のあまり弛緩してしまいそうな体を必死に支える。

「……まさか、今の一撃を受けて倒れないなんて」

必勝を誓った一撃を受けて耐えた僕を見て、久保君は戦っていた。

「吉井君の召喚獣のダメージ量、機動性、反射神経。そのすべて予測して導き出した絶対避けられない一撃を繰り出したはずなのに。体を無理矢理捻らせて急所を外すとは……」

「僕もびつくりだったよ。クールで真面目な久保君がこんなバーサーカーみたいな攻撃をしてくるなんてね」

ほんと驚きだ。久保君がこれほど好戦的だったとは。

「そ、そうか。……吉井君はこんな僕は嫌かな？」

「？ いや、全然良いんじゃないかな。ちよつと意外だったけど今まで知らなかった久保君を一面を見たことは悪いとは思ってないよ」

「！ ありがとう吉井君！ 僕も、君という存在に出会えたことを嬉しく思っているよ」
「そ、それはどうも……」

この背筋にぞわつと来る悪寒は召喚獣からのフィードバックなのだろうか。

「しかしこれは勝負だ。僕の個人的感情を差し挟むことは出来ない。出来れば観察処分者である吉井君にはなるべく痛みを負ってもらわないよう一撃を決めるつもりだったんだが、こうなつては仕方がない」

久保君の足元にいる召喚獣が再び武器を構え直す。

やっぱり、久保君はさつきの一撃をずつと狙っていたんだな。

今まで僕の攻撃を受け続けていたのは、僕がどれくらい召喚獣の操作性に長けているか見極めるための攻防だったんだろう。

そして僕の動きが硬直する一瞬の隙間を狙って必殺の一撃を見舞う。頭の良い久保君らしい頭脳プレイだ。策に嵌めているつもりが、僕の方が久保君に乗せられていたとは。

「ぐ……」

でもこうなつてはもう迂闊に近寄れない。

下手に接近で攻撃しようものなら今の久保君なら少量のダメージなら無視して反撃してくるに違いない。

すでに瀕死状態の僕には掠り傷程度の一撃すら当たれないんだ。

僕の方も、多分あと一撃が限度だ。

次の攻撃で仕留めきれなかったら、今度こそ反撃を受けて戦死するだろう。

でも、だからってどうすればいいんだ。

なんて弱気な声を僕は喉元でぐつと堪えた。

僕の動きはすでに見切られているから霍乱攻撃は通用しないと考えて良い。

床を利用した攻撃はもう見せてしまった。

もう使えるような障害物は何も無い。

何か使えるものはないのだろうか。

一瞬だけ、コンマ一秒でも久保君の動きを封じられればいいのに——！

「……ん？」

その時、僕はふいにある物が目に入った。

どこにでもあるのが当たり前すぎて、つい見過ごしそうになる”それ”を。

……もしかしたら、これならいけるかもしれない。

「……一か八か、やってみるか」

どの道もう策はないんだ。無策で飛び込むぐらいなら駄目元でやってみるしかない。生唾を飲んで腹を括り、僕は召喚獣の姿勢を少し低くした。

——意識を集中する。

——雑音はカットする。

——雑念は消去する。

絶対にミスらないように、全身の力を召喚獣に注ぎ込む。

重要なのは位置取りだ。

久保君の立っている場所ならどこが一番効果的か。それを見極める。

「——ここだっ！」

そのポイントを見つけ出し、僕は召喚獣を操り反復横跳びのような格好で左斜め前方に跳んだ！

「その方向では僕の召喚獣に届かないよ。フェイントのつもりだろうが、今の吉井君の点数なら確実に僕が押し切れる！」

久保君の召喚獣が僕の召喚獣に向かって疾駆した。

両腕を高く上げて振り上げられる大鎌。

僕に最後のトドメを刺そうと、その巨大の武器を振り下ろしに掛かってくる。

「よし、今だー！」

久保君の召喚獣が僕のいる場所に到達する前に、僕は足をバネにしてその場で大きく跳躍した。

その瞬間、足にビリビリとする感覚が体を襲ってくる。

何しろ前の小ジャンプとは違って今度は僕の身長を越えるほどの大ジャンプだ。

その分足に掛かる負担も半端ない。

けど、今はそんなこと構ってられるか——！

「飛んだだって?!」しかしそれだけの高さなら今からでも十分に対応でき——っ!」

久保君の言葉が途中で途切れる。

ようやく、彼も”それ”に気づいたらしい。

「吉井君の召喚獣が、見えない……?!」いや違う、これは教室の照明かつ!」

そう。僕の召喚獣が飛んださらに上には、Aクラスの天井電気がある。

僕のところからではよくわからないが、久保君の立ち位置なら丁度空を跳んだ僕の召

喚獣と天井の明かりが重なって見えている事だろう。

簡単な目眩でした。

太陽ほどの眩しさがなくとも、その光で刹那の一瞬のみ久保君は目が眩んで対象を見失う。

それだけの間があれば、十分だった。

「もらったあぁーっ！」

「しま——っ!？」

無防備になった久保君の召喚獣に、僕は落ちながら力いっぱい木刀を振り上げた。

久保君はこっちの作戦に気づき慌てて防御体勢を取ろうとするが、すでに僕の方が早い。

そして、ありったけの力と落下エネルギーが合わさった一撃を久保君の召喚獣の脳天に叩き付けた！

「ど、どうだ！」

明らかかな手応えを感じ取り視線を召喚獣が衝突したところに向ける。

そこでは、僕の召喚獣は辛うじて立ち上がって。久保君の召喚獣は床に倒れたまま動かなかった。

Fクラス 吉井明久

日本史 3点

VS

日本史 0点

Aクラス 久保利光

「しよ、勝者、吉井明久」

戻り際、雄二とハイタッチをする。

僕の役目はここで終わりだ。

あとは、ゆつくりと試合で傷ついた体を休めよう。

次の戦いは安心して見守れるだろうから。

「吉井君、体大丈夫？」

最後の選手、優子さんが僕の肩に手を置いて聞いてきた。

「うんなんとか。体中痛いけど保健室に行くほどじゃないよ」

「そう。良かったわ」

優しく微笑んだ優子さんは僕に背中を向けて歩き出した。

「優子さん！」

その背を呼び止める僕。

「なに？」

「えっと——。いつてらっしやい！」

「——！ 吉井君って変なところで律儀ね」

「そ、そうかな？」

「ええ」

すると、くるりと優子さんはこちらに反転した。

「行つて来ます」

☆

「それでは最終戦。姫路瑞希さんと木下優子さんの試合を行います」
そして、最後の戦いが始まる。

問36 最後の戦い／2

——ある女の子の独白。

私はその大事な試験の日、普段から人より体が弱いことや緊張でストレスを抱えていた影響で体調を崩してしまいました。

それでもその日は二年生の一年間を過ごす教室を決める大事な試験なので休むことが出来ず万全とは言いがたい状態でテストに挑むことになったんです。

当然、肝心のテストも集中出来ずあまり良い結果は望めそうもありませんでした。

そんな焦りや焦燥感が限界に近づいて、意識が朦朧と仕掛けた時。

ふいに二つほど隣の席からガタン！と大きな音がしたんです。

まるで目の前で風船を割られたような衝撃に体が驚いて音のした方に顔を向けると、肩ぐらいの髪の毛の長さの女の子が顔を真っ赤にして倒れていました。

その姿はまさに数秒後の自分を姿を見せられたような気分で、私は助けることも出来ずつい固まってしまいました。

すると、今度は倒れた女の子を庇うように私も良く知っていた一人の男の子が先生を相手に大声で啖呵を切っていました。

結局倒れた女の子とその男の子は教室を退室され、テストは続行されましたが、私は男の子の怒りに圧倒されてその後も動くことが出来なかつたんです。

結果的に、私はテストが終わった後すぐに保険室に向かいベッドで一時間だけ休ませてもらってことで体調が少しだけ良くなり次のテストを受けることが出来ました。

一科目だけ試験を休むことになりましたけど、なんとか成績の良いクラスに入ることが出来たんです。

ですけど、なんだかその女の子の犠牲の所為でテストを最後まで受けられた気がして、私はあの時倒れた人に申し訳ない気持ちになりました。

☆

《Aクラス専用モニター画面》

一戦歴一

Fクラス VS Aクラス

島田美波 ● 佐藤美穂 ○

土屋康太 ● 工藤愛子 ○

坂本雄二〇

霧島翔子●

吉井明久〇

久保利光●

木下優子□

姫路瑞希□

☆

「それでは最終戦。姫路瑞希さんと木下優子さんの試合を行います」

高橋先生の開始宣言の下、アタシと姫路さんはステージの上に立った。

「こんにちは、木下さん」

「ええ。こんにちは姫路さん」

廊下でふと会った時のように気さくな挨拶を交わすアタシ達。

どこにでもありそうな何気ないアクションに、アタシは少し後ろめたさを感じていた。

当然だ。何せ事実上、姫路さんの想い人をアタシは横から搔つ攫つたんだから、姫路さんには恨まれて当然だし、こうして彼女と顔を合わせて話すことに居心地の悪さとか妙なプレッシャーを感じてしまうのも仕方ない。主に罪悪感とかそんなので。

それでも、アタシの中にある意地とか見栄が姫路さんから目を逸らすことを許さなかつた。

「……不思議です。あれからそれほど時間が経ったわけでもないのに、こうして木下さんと顔を合わせてお話しするのが随分と懐かしく感じます」

しみじみと感じ入るように姫路さんは語る。

「そうですね。アタシもそう思う。あの時からいろいろ変わったものね。貴方も、アタシも」
「そうですね。変わりました。いろいろと」

「……もう、学校に來ても平気なの？」

「はい。いつまでも家の中で塞ぎこんでいても仕方ないですから。両親や友達も心配しますし、何より、そのことで吉井君に心配をかけたくないですから」

「——そう。優しいのね。姫路さんは」

「違いますよ。私なんて、ただ臆病なだけです」

薄く微笑みながら姫路さんはそう言った。

「……そうかな。アタシにはそうは思えないけど」

もう姫路さんはアタシと吉井君が付き合っていることを知っているだろう。

今更、吉井君のことで姫路さんに対して謝罪や申し開きをするつもりはない。

吉井君を好きになったことに後悔なんて微塵もしていないし、初めて彼に想いを告げ

た時のアタシの決断は今でも間違いないと信じてる。

そうじゃないと、アタシは自分の気持ちに嘘を吐いた事になるし。何よりあの時アタシを選んでくれた吉井君を侮辱してしまうから。

「木下さん。教科は何にしますか？」

「総合科目でお願いします」

高橋先生の質問に即答する。

姫路さんに苦手科目はないことは事前に知っていた。何より、学年次席と呼ばれた人の点数に興味があつたからという上の選択だ。

「わかりました。それでは召喚を開始してください」

「試^サ獣^モ召喚^ン！」

先生からの許可を得ると、アタシ達は同時に召喚の掛け声を叫び召喚獣を喚び出す。

すでに見慣れたアタシの召喚獣と、対面には重層な鎧と召喚獣の身の丈ほどの大きさの大剣を背負った姫路さんの召喚獣がフィールド内に現れた。

少し遅れてお互いの召喚獣の頭上に点数が現れる。

Fクラス 木下優子

総合科目 3999点

V S

総合科目 3999点

Aクラス 姫路瑞希

『ど、同点だぞ！ あの学年次席と！』

『すげえ。木下さんってあんなに頭良かったのかよ！』

観客席からどよめきや驚きに満ちた声が聞こえてきた。

姫路さんも同じように目を少しだけ大きくして点数を見ていた。

「同じ点数……。木下さんの頭が良いのは知ってましたけどここまでとは思ってませんでした」

「それはそうよ。アタシもこんな点数取ったの初めてだもの」

「え？ どういうことですか？」

意外そうな顔をして問いかけてくる姫路さん。

「不思議とね。自分じゃなくて他人の為に頑張ろうと思うと今までよりもいろいろと上手いくのよ。信じられないかもしれないけど」

「他人の……為ですか」

「ええ。多分、姫路さんなら分かるんじゃないかしら」

「……いえ、私にはわかりませんよ。今はFクラスじゃないですから」

自虐するようにはかんで姫路さんは否定した。

「……確かに、アタシが軽率だった。人の気持ちなんてその環境によりけりだもんね」

何を言ってるんだろうアタシは。こんなこと姫路さんに聞いても意味がないのに。

やっぱり意識してなくても、あの環境で生活しているうちにアタシもFクラスのお節介精神が伝染ってしまったのかもしれない。それも悪くないけど、今は忘れないと戦いに支障をきたしてしまう。

アタシは意識を目の前の試合に切り替えて召喚獣を操り武器ランスを構えさせる。姫路さんも同じように大剣を両手でしっかり支えいつでも飛び出せるよう握り切つ先をこちらに向けていた。

アタシには吉井君のような召喚獣の高い操作技術はない。

向こうとも点数が拮抗している以上、することはただ単純に召喚獣を正面に突っ込ませて向こうよりも早く標的を貫くこと。

つまり、この試合は一撃で勝敗が決まる。

「姫路さん。準備はいい?」

「はい。いつでも」

その台詞を皮切りに床を蹴り真っ直ぐに飛び出した召喚獣が激突し、ステージ中央で二つの影が一つに重なった。

「――」

音が止む。まるで神聖なる儀式を受けているかのように、呼吸することさえ躊躇らせる空気が教室内を支配した。

この結果如何で明確に勝者と敗者が決まる。

最後の激突によって皆が一樣に固唾を飲みその結末を活目しようとして教室が静まり返る中――。

Fクラス 木下優子

総合科目 2点

V S

総合科目 0点

Aクラス 姫路瑞希

姫路さんの大剣はアタシの召喚獣の肩を斜めに切り裂き、反対にこちらの武器が姫路さんの召喚獣の心臓に当たる部位を正確に貫いた。

召喚獣の生命力たる点数をすべて失い、姫路さんの召喚獣は動かぬまま霧が晴れるように消え去る。

やがて、止まった時間を再び動かすように、高橋先生が勝敗を告げる。

「しよ、勝者木下優子さん!!——以上、三対二により試召戦争はFクラスの勝ちです」
 『やったああああ——!!!』

Fクラス陣営から今日最大の歓喜の喝采が巻き起こった。

『勝つちまった! ほんと勝つちまったよ!』

『なんだこれ……。夢か。俺は夢を見ているのか……。』

『俺、今ちよつと泣きそうだ。やべえ感動した!』

『Fクラスサイコオオー!』

台風のような勢いで勝利を喜ぶクラスメイト達。

それを見て、アタシはちよつぴりと肩の荷が軽くなった気がした。

「やったわ! ほんとにウチ達Aクラスに勝つちやった!」

「ああ。俺達がただの無能集団じゃないってことが、ここに証明されたな」

「うん! 本当に夢みたいだ! Aクラスに勝てたんだ僕達!」

後ろでは吉井君と坂本君と美波が楽しそうに勝利の祝いに盛り上がっていた。

アタシもみんなの下へ行つて一緒に喜びを分かち合いたい。

だけど、その前に話さなくちゃいけない人がいる。

「……負けちゃいました。木下さんは強いですね」

「ええ。でも、アタシ一人の力じゃない。みんながいたからAクラスに勝つことが出来

たのよ。それにアタシには過去二回の試召戦争で召喚獣の扱い方がある程度知っていたから、その分の有利だっただけ。同じ条件ならどうなるか分からなかったわ」

「そうですね。ですけど私はこれで二度木下さんに負けちゃったことになります」

「……それは吉井君のこと？」

「はい」

儂げな表情で姫路さんは頷く。

「——負け惜しみのようですけど、私も一度だけ木下さんに勝った事があるんですよ。正確には勝ち負けの問題ではないんですけどね。……私は木下さんのおかげでAクラスになることが出来たんですから」

「え?!」

アタシの、おかげ? どうして?

何のことを言っているのか尋ねようと口を動かす。

と、その前に一人の影がアタシの傍に走り寄ってきた。

「優子さん、僕達が勝ったよ! これでもう一度振り分け試験を受けられるんだ!」

「あ、吉井君」

「? 振り分け試験? どうしてAクラスに勝つと振り分け試験が受けられるんですか

?」

「ひ、姫路さん……。えっと、その」

姫路さんに質問された吉井君が気まずそう顔を歪める。

それも仕方ない。彼の気持ちや立場からすればアタシ以上に姫路さんに負い目があるのだろうし。こういう時、横からフォローするのが彼女であるアタシの役目だ。

「アタシ達——というか吉井君が学園長と話し合いをしてAクラスに勝つことを条件に教室設備を引き換えに振り分け試験を再考してもらおうことになったの」

「そうなんですか？ でもどうしてそんなことを」

「……優子さんが振り分け試験で倒れた所為でAクラスに入れずに最低設備のFクラスになったことが許せなくて、それで僕がなんとかしてあげたいって思ったんだ」

控えめながらもぼつぼつと吉井君はこれまでの経緯を説明した。

それはいいんだけど、正直事情が事情だけに目の前で人に話されるとなんだかちよつと照れくさい。

なんなのかしら、嬉しいのに恥ずかしいこの気持ち……。

「そうだったんですか……。そんなことがあったなんて。これはやっぱり私の三戦三敗だったかもしれません」

「へ？ さんぽい？」

吉井君の顔に疑問符が浮かぶ。

それをスルーして、姫路さんは真剣な顔で、

「吉井君。もしも、もしもですよ？」

「う、うん。なに？」

「振り分け試験の時、木下さんじゃなくて私が倒れていたら……。私のことも助けられましたか？」

祈るのような響きが込められた姫路さんの問い。

「姫路さんだったら……。勿論助けたよ。当たり前じゃないか」

「……よかった」

「……………」

当然だと吉井君に言われ、心の底から安心するように姫路さんを胸を撫で下ろす。

そのやりとりを見てアタシは逆に体がちくちくと刺すような痛みが襲ってきた。

あの時の吉井君にとって、アタシを助けてくれたのは特別でもなんでもない。ただ彼の本能に従って行動した結果なこと。

それは最初から分かっていたしそれで感謝の気持ち薄らぐことはない。けど、それでもせめてアタシの中だけではあの出来事は吉井君と木下優子の特別であつてほしかったと思う気持ちからの嫉妬心が湧いてくるのは抑えられない。

なんだかこのままだと姫路さんに奪われるような気がして、つい人前なのにアタシは

吉井君の手を取っていた。

「優子さん？」

「……………」

「そうよ。コイツはもうアタシのものなんだから。絶対に誰にも渡してやるものか。」

「姫路さんを感じていた自責の念や良心の呵責もそれで吹っ切れた。」

「そんなアタシの行動を見て姫路さんは少し驚いた顔をしたけど、そんなことはもうどうでもいい。」

「むしろ見せ付けてやるつもりでぎゅっと手を握り締めてやる。」

「姫路さん。貴方には申し訳ないと思うけどアタシ達そういう関係だから。もうあまり」

「吉井君にちよっかい掛けないでね」

「え、えええ!! 優子さん何言ってるの! 姫路さん!?! これはその……っ!」

「いいんですよ。二人はもう恋人同士なんですから、手を繋ぐぐらい普通です」

「ニコニコと微笑みながら話す姫路さん。アタシには逆にその反応が不信に思えた。」

「?? もうちよっと何か変化があると思ったんだけど予想以上に淡白な返事ね。」

「ひよっとして振られたことでもう吉井君に対する気持ちは断ち切ってしまったの？」

「そんなアタシの懸念を他所に、姫路さんはさらに語りだす。」

「吉井君。私吉井君に振られちゃってからいろいろ考えました」

「それは、うん……」

「これからどうしようとか、どうやって吉井君に接していけばいいんだろうとか。考えたらキリがないぐらい考えて、それで決めたいんです」

「何を？」

尋ねる吉井君に、姫路さんはきつぱりと告げる。

「私、やっぱり吉井君のこと諦めません」

「え？」

アタシと吉井君の声が重なる。

ちよ、ちよつとちよつとどういうことよそれ！

「姫路さん、貴方何言ってるの！ 諦めないってアタシ達はもう付き合ってるのよ！」

「そ、そうだよ！ ……それにいくら言われても、僕はやっぱり優子さんが……」

「分かってますよ。ですから、木下さんのことが好きな吉井君ごと、吉井君を好きになることにしたんです」

「なっ」

今度こそ本気で絶句した。

なによそれ……。まったく意味が分からない。一体何が姫路さんをそこまで突き動かしているの。

「そもそもですね。一回振られた程度で諦められるほど私の気持ちは軽くありません！

ですから最後まで吉井君に迷惑をかけちゃうことにしました」

姫路さんにしては珍しい豪胆な台詞。

そして空いている吉井君の腕を取ってアタシと同じように握り締めた。

顔と顔がくっ付きそうなほど近い距離で姫路さんは恥ずかしそうに顔を赤らめて、

「吉井君は、そんな私じゃ嫌ですか……？」

「え、う……」

「!?」

「ッ、この女はあ——！」

「ちよっ！ 吉井君から離れてよ！ コイツはもうアタシのなんだから！ アンタも何

動揺してんのよ！ 男なんだからきつぱり断りなさいよ！」

「だ、だってこんなこと言われたらなんとも……」

「なんともじゃない！ ああもう！ なんてこんな時だけ優柔不断なの!?!」

「吉井君、よかつたら今日デートしませんか？」

「こらー！ 勝手に話を進めるな！」

「恋愛は押し過ぎるぐらいが丁度良いって翔子ちゃんも言っていました」

「それ間違ってるから！ あの代表も何言ってるの！」

「後は、胸を最大限利用しろと。……責任をとってくれるなら、触っても」

「この！ 待ちなさいそんな大きいものを吉井君に引っ付けないで！ あ、アタシだつてちよつとはあるんだから！」

「い、痛い痛い!! 腕の痛みと謎の柔らかい感触のミックスが僕の中で新しい刺激を築こうとしている!! 二人とも！ そんなに両方から腕を引っ張つたら千切れちゃうよ！ あ、あぁー!!」

ギヤーギヤーと騒がしいことこの上ないが、周りも同じように騒いでいる連中ばかりなので幸いそれほど目立つことはなかった。

くつ、それにしてもまさかこんな方法で吉井君に迫ってくるなんて思いもしなかった。

やっぱり姫路さんは最後の最後まで侮れないわ——！

☆

余談だが、今回の姫路さんの総合科目の点数は彼女の体調不良十一科目0点の結果の点数なので、もし彼女が万全の体勢で戦っていたら結果がどうなったかは分からない。

もう終わってしまったことなので、そんなI^{もしも}Fに意味はない。

それと同時に、姫路さんがFクラスになった場合の話もまったく別の物語なのでこの話には直接的関わりはない。

優子さんはFクラス、姫路さんはAクラス。

それがこの二人の物語であり主役である。

問37 バカとテストと召喚獣ⅠF (完)

「や、やっと自由になった……」

ふらふらになりながら一人重たい溜息を吐く。

姫路さんと優子さんは僕を解放した後も延々口論を続けていたので僕はなんとかその場を抜け出し教室内をうろろろしていた。

さて、他のみんなの様子はどうなったのかな。

「明久ー!」

「? あ! 秀吉! ムツツリーニも!」

「……………待たせた」

僕を呼ぶ声の方へ振り向くと保険室へ行っていた秀吉とムツツリーニがこちらに手を振って近づいてきた。

「すまぬな。出来れば試合が終わる前に戻ってきたかったのじゃが」

「そんなの全然気にしてないよ。それよりムツツリーニ、もう鼻血は平気なの?」

「……………大丈夫。輸血は済んだ」

はて、うちの学校の保険室に輸血パックなどあったのだろうか。まあ細かいことは気に

ないでござい。

「明久よ。クラスの連中に聞いたぞい。ついにAクラスに勝ったのじゃな」

「うん。かなりギリギリだったけどなんとか勝てたよ。これでついに僕らの悲願が達成されたんだ」

「……………みんなが勝っているところを見たかった」

「そうじゃな。ワシも明久の活躍している場面を見たかったのじゃ」

心から名残惜しそうに秀吉は呟く。

いやー。そんな風に言われるとなんだか照れちゃうな。

「して、姉上はどこへ行ったのじゃ？」

「優子さんなら離れたところで姫路さんと口喧嘩してるよ」

「……………一体なにがあったのじゃ」

「い、いろいろな複雑な事情があったんだよ……………僕もさつきその場所から逃げ出してきたところなんだ。あのままだと僕の両腕が引っこ抜かれるところだった……………」

「そうか。お主も中々たいへんな境遇になったのう」

秀吉の同情が胸に染みる。

「うん、女の子にモテるって何も嬉しいことばかりじゃないんだね」

「……………惚気にしか聴こえない」

「そうじゃな」

「本当だよ！ だからその両手のカッターの刃を収めてくれないかなムツツリーニ」

今ここで僕のプライベートルーム事情がクラスみんなに知られたら華やかな勝利の舞台が血の処刑場に様変わりしてしまう。

「今はせつかくのめであたい時なのじゃからムツツリーニも抑えるのじゃ」

「……………仕方ない」

「うむ。それでは改めて雄二のところに行こうかの」

「うん、そうだね」

満場一致で歩きだす。

「……………吉井」

その時、学年主席の霧島さんが長い黒髪を揺らしながら僕の名前を呼んできた。

「霧島さんじゃないか。どうしたの？」

「……………ちよつと、吉井にお願いしたいことがあって」

「お願い？ 僕に？」

「……………(くくん)」

無言で頷く霧島さん。Aクラス代表が観察処分者の僕にお願いってなんだろう。

「学年主席から直々の依頼とは。一体どうしたのじゃ？」

「……雄二のこと」

「雄二？ それって坂本雄二、だよな？」

「……そう。その雄二」

そういえば、雄二と霧島さんって幼馴染なんだよね。意外だな。こんな美人な女の子がああ雄二の知り合いなんて。まるで美女と野獣だ。

ちなみその雄二本人は今、クラス代表としてFクラスに勝利もたらした功績にクラスのみんなから胴上げされている。

『Fクラスばんざーい！』

『『ばんざーい！』』

「う、うおおお！ 高すぎだぞお前ら！ ちよつとは抑えろー！」

ま、それは置いといて。

「今も天高く持ち上げられている雄二がどうしたの？」

「……うん。えつとね」

霧島さんはゆつくりとした口調で僕ら三人に内容を話し始めた。

その五分後。

霧島さんの事情を聞いた僕達は思わず「ええー!?!」とそろって驚いて叫んでしまった。

「やれやれ。やっと下ろされたぜ」

「おーい、雄二！」

「ん？ おー明久。秀吉にムツツリーニも」

胸上げから解放されて疲れた様子の雄二が僕達の方へ顔を向ける。

そしてさらにその後ろについて来ている霧島さんの姿を発見すると「げっ」と露骨に苦い顔をしました。

「なんで翔子がお前らと一緒にいるんだ……？」

「……………成り行き」

「偶々そこで会ったのじゃ。もう明久」

「うん。秀吉の言うとおりだよ」

「本当か……？」

「……………雄二。私のことが信用できないの？」

「ああ。出来ない」

霧島さんの質問に即答する雄二。

本当。この二人って仲が良いんだか悪いんだか分からないな。

「とにかく。試召戦争は終わったんだから戦後対談をする必要があるでしょ？ その為に霧島さんが必要じゃないか」

「……まあ、それもそうだな」

雄二は完全には気を許していないまでもとりあえず納得してくれた様子。よし。これで話を進められるな。

「それじゃさつさとこれからの話し合いに入ろうか」

「……解ってる。宣戦布告の時にしたルールに則って私達Aクラスは一週間の間教室を貴方達Fクラスに明け渡す。それでいいの？」

「十分だ。短い期間だが存分に豪華設備を堪能するでしょう」

「……うん。それと、もう一つ」

「もう一つ？」

「……私から提案した条件。勝った方がなんでも一つ言うことを聞くっていう」

「ああ、あれか」

思い出したように呟く雄二。

「そういえばそんな約束もしたっけか。そうか。それじゃあ俺はお前に何でも言うことを一つ聞かせられるんだな」

「……何でもなんて、雄二のエッチ」

「なんでだ! 誰がそんなこと命令するかアホ!」

「……今いやらしい顔してたから」

「してねえよ! 勝手に変な想像するな!」

「こほん。と雄二は咳払いを打って、

「とりあえず。せつかくの何でも言うことを聞かせられる権利があるなら使わない手は

ないな。俺は——」

「ちよつと待って! 雄二、その命令権についてなんだけど」

「何だ? 何か命令したいことがあるのか?」

「うん」

何かを言いかけた雄二の言葉を遮って僕は二人の間に入る。

僕の様子を見て何か勘ぐったのか雄二は顎に手を当てて思案顔になった。

「そーいやお前は姫路とちよつと気まずい状態なんだったか。これを機会に仲直りしよ
うって魂胆か?」

「ま、まあね」

雄二の的外れな意見に僕は内心でガツツポーズをとった。

そうか。雄二はあの光景を見ていなかったのか。それなら都合が良い。

「だからその権利を僕に出来ないかな? お願ひ!」

「はあ。まあそういうことならしょうがないな」

「ほんとに！　ありがとう雄二。恩に着るよ！」

「よせやい。明久のくせに気持ち悪い」

「そう？　それじゃさつそく」

「うん？　待て明久。ここに姫路はいないぞ」

「姫路さん？　ああ。姫路さんとはさつき会ってきたから心配しなくて大丈夫だよ」

「……？　意味が分からん。どういうことだ？」

「まあまあ。言えば解るって」

首を傾げる雄二を適当にあしらう。

もうここまで来れば後は消化試合だ。

「気を取り直して命令するよ、霧島さん」

「……うん」

「は？　翔子だと？」

僕はすう、と小さく息を吸って。

「霧島さんはこれから雄二と恋人同士になること！」

「……………は？」

僕の台詞を聴いた雄二の目が点になった。

「はあああああああつ——!? なんじゃそりゃ! どういうことだ明久!! 説明しろ!」

激昂した雄二が僕の胸倉を力一杯に掴んで持ち上げてきた。衝撃が足が地面から浮いてしまう。く、苦しい。息が……。

「い、いやー。実はこっちに来る前に霧島さんをお願いされちゃってさ」

「何いつ!?」

雄二が驚くのも無理はない。

それにしてもこんなに綺麗な霧島さんが野性味溢れた雄二のことが好きだなんて。今でも信じられないよ。まあ雄二も背は高いし顔は悪くないから案外お似合いなのかもしれない。

霧島さんの気持ちはさつき十分に聞かせてもらった。彼女がどれだけ雄二のことを大好きなのかも。男としては不本意だけど雄二の友達として協力しないわけにはいかないよね!

「おい翔子! 何のつもりだこれは!」

「……本当は勝つつもりだったけど負けちゃったから、最終手段」

「何言つてやがる! こんな無効だ無効! 拒否権を行使する!」

「……もう駄目。何でも言うこと聞かないといけないから。私と雄二が恋人同士になる

の」

「ふざけんな！ こんな騙し討ちみたいな手段で言われたって納得できるか！」

「何言ってるのさ雄二。こんな美人な人が彼女になってくれるんだから普通は喜ぶべきじゃないの？」

「そうじゃぞ。これほどの眉目秀麗な女子おなじは今後一切現れぬやもしれぬからの」

「……………(こくん)。今を逃したらチャンスはない」

「違うぞ?! お前達は翔子に騙されてる！ コイツは！ コイツはな——！」

「……………もう決定したことだから。今からデートに行く」

「馬鹿言うな！ 俺は認めなアガガガガガ——!?!」

霧島さんに顔を驚づかみされながら雄二は教室の外に連れ出されていった。

「びしゃん！と扉が完全に閉じたところを見届けた後、僕はんー！と背伸びして体の筋肉を伸ばして大きな溜息を吐いた。

「いやー。良いことした後気分がいいな」

「うむ。若干雄二の反応が気がかりじゃったが……」

「大丈夫だよ。あんなの雄二なりの照れ隠しだから」

どっちかというと驚いたのは霧島さんの行動だ。

「宣戦布告の時から彼女とはいろいろあったから正直僕の中で霧島さんの認識は“怖

い人”だった。

でもあんな姿を見せられた今では微笑ましく感じる。あんなに一途に想われるなんて雄二は幸せ者だな。まあ羨ましいとはもう思わないけどね。

なんてみんなで感心していると、雄二と霧島さんと入れ替わるように扉が開いて外から学園長と鉄人こと西村先生が入ってきた。

「あ、学園長に西村先生」

「今坂本が霧島に引きずられながらどこかへ行ってしまったが、どうかしたのか？」

西村先生が僕達に尋ねる。そうか、すれ違ったのか。

「いえいえ気になくて良いですよ。単なる痴話喧嘩みたいなものですから」

「そうか。それならいいのだが……」

「西村先生、学園長もそろって一体どうしたのじゃ？」

秀吉が質問する。

「アタシはその吉井とした約束を果たしにきたのさ。まさか本当にAクラスに勝つとは思わなかったけどね。不本意だが約束通りお前さんの望みを叶えてやるよ」

「え、それじゃあ」

「ああ。振り分け試験をもう一度受ける権利を与えてやろうじゃないか。アンタ達はそれに見合う結果を残したんだからね」

「やったー！」

嬉しさのあまりその場でガッツポーズをとる。

これで本当に優子さんは自分に相応しいクラスへ行くことができる。ずっと願っていた目標がついに叶うんだ！

「それともう一つ」

「もう一つ……?」

「西村先生。頼んだよ」

「分かりました。Fクラス！ 全員集まれ！」

耳鳴りが起こりそうなほどの大声で西村先生はすでにリクライニングシートに腰掛けてくつろいだり教室の設備を勝手に使ってジュースを飲んだりしているクラスメイト達に集合をかけた。

『なんだ？ お、鉄人に学園長じゃないか』

『先生直々なんて。もしかして俺達がAクラスに勝ったから祝福してくれるのか?』

『へへ、なんか照れくさいぜ』

口々に言い合いながら集まってくるクラスメイト達。

それを前に、西村先生は筋骨隆々とした身体に息を吸い込み高らかに宣言した。

「先にAクラス勝利おめでとう。お前達は本当によくやった」

素直に賛辞の言葉を送ってくれる先生。な、なんかほんとに照れくさいな……。

「お前達が一丸となりこれだけ大きな目標を成し遂げたこと。担任として誇らしく思う」

いやあ、それほどでも。

……………うん？ 担任？

「ちよつと待つてください先生、今なんと？」

「うむ。それが本題なのだが。今までFクラスの担任は福原先生が担当だったが今日今をもってその役職を俺が引き継ぐことになった」

『な、何いっ——!?!』

クラス全員の悲鳴が上がった。なんで!?! どういうこと! 聞いてないよ!

鬼の補習担当と呼ばれたこのむき苦しい鉄人が担任なんて、そんなの嫌すぎる!

「西村先生を担任にしたのは、言ってしまうえば監視さね」

「監視？」

「そうだ。……お前達は確かに立派なことをしたが、それ以前にいろいろな問題を起している。特に吉井と坂本がな」

「うぐっ」

そ、そりゃあ確かに消火器壊したりDクラスの室外機を壊したりはしたけどさあ

……。いくらなんでもこの仕打ちはないんじゃないの？ 僕らは勝者なんだよ？

「そんな連中にAクラスの設備を自由にさせるのは危険極まりないという先生一同の合意の結果だ。安心しろ。俺が指導する以上お前達を死に物狂いで勉強させてやる」

「そんな!? 横暴だよこんなの!。大体雄二はともかく僕はそんな問題なんて——っ」

「吉井君! 吉井君は大きい胸と小さい胸ならどっちが好きなんですか!」

僕らの会話を割るように突然そんな質問をしてくる姫路さん。

「……………」

「吉井。問題なんて、なんだ?」

「いえ、なんだかここから巻き返すのは無理な気がするのでやめときます……」

即座に形勢は不利と悟り撤退する。姫路さん……。君は優子さんと口論をしていたはずなのにどうしてそんな結論に行き着いたんだい? 彼女達は一体どんな議論をしていたんだ……。

「ともかくそういうことだ。これからびしびし鍛えてやるからそのつもりでな」

気が重たくなる台詞を残して西村先生と学園長は教室から出て行った。

くうっ! 勝ったのは僕らのはずなのにどうしてこんなに憂鬱な気持ちになってる

んだ!

こうなったらなんとしても鉄人の目を掻い潜ってこれまでの楽しい学園生活を取り

戻してやる！

「よし、やるぞー！」

「それで、結局吉井君は大きいのと小さいのではどっちがいいんですか？」

「アタシも気になるわねー。吉井君がどんな好みを持っているのか。是非知りたいわ。ふふ、ふふふふ……」

……その前に、まずは目の前の難題から取り掛からないといけないようだけど。

☆

優子 side last

かりかりかりかり……

狭い教室内にくくつもの鉛筆を走らせる音が旋律のように耳に流れる。

試召戦争の後、学園長の計らいにより急遽振り分け試験の再試験が実施され、アタシを含め何人かのFクラスの生徒がテスト用紙に視線を落としながら必死に指を働かせていた。

懐かしくもなり、また試験の度に感じる身が引き締まるような緊張感の中でアタシも目を左右に動かしながら解答用紙につらつらと答えを書き込んでいく。

——よし

心の声で、アタシは密かに手応えを感じていた。

調子は良好。詰まった部分もなし。これまで通り。いや、これまで以上の確かな高得点が取れる確信が持てる。

これだけ解けたら十分Aクラス入りを果たせる。多少の回答ミスがあつたとしてもまったく問題ないレベルで答えられた自信がある。

あとはこれを提出すればアタシはアタシの望んでいたところへいけるだろう。あの日の失敗をこれを取り戻せる。

ようやくあの汚い教室からも出て行くことが出来るのね——。

「?——」

そこで、つい無意識にアタシは自分の言葉に違和感を覚えてしまった。

自分でもよくわからないもやもやが頭の中で湧いてきて、思わず鉛筆の動きが止まる。

あれ、アタシってAクラスに行くことを望んでたっけ……??

もやもやしていた疑念は確かな形となってアタシの脳内で波紋を広げた。

いや、それは違う。

大体アタシは設備なんてほとんど感心はないし、ただ自分の学力に見合うクラスに行きたかっただけ。Aクラスならアタシは何一つ不自由も不満もなく学生生活を送って

いけると思つたからそうするべきと効率的に判断していたに過ぎない。

——それじゃアタシは今までFクラスにいたことを不満に思つていたの？

これまで過ごしてきたあの古ぼけてカビ臭い教室のことを思い出しながらふと考える。

Fクラスはおかしな人達ばかりの変なクラスだったけど、あの賑やかな雰囲気は嫌いじゃない。代表の坂本君はFクラスとは思えないほどの知恵を持つているし土屋君も勉強ではない自分の好きなことに一生懸命にやっている。それは演劇をやっている秀吉も同じ。美波も帰国子女なだけで単純に頭が悪いわけじゃない。あのクラスは勉強はできないけど、それ以外のいろいろな特技や知識を持つている人達が一同に集まっているサーカスみたいな所だ。

学力だけが全てじゃないってあのクラスにいて直に感じ取れたことも何度かあった。

素直に言つて。なんだかんだでああいうクラスメイトといるのも面白かったと今なら断言できた。

それになにより……。最初の振り分け試験で失敗したからこそアタシは吉井君に会えて、初めての恋をして、キスも体験した。

初めてした時のドキドキと幸せな気持ちは今でも鮮明に——って何思い出してんのよアタシは!？ 今は大事なテスト中なのにつ。

ま、まあそれはともかく結果として、Fクラスは不自由ではあったけど、不満ではなかったというのがアタシの感想だった。

だったら、もうアタシが無理をしてAクラスに行く理由はないんじゃないかなろうか。勉強するだけならFクラスでも出来るんだから、何もほとんど知り合いもないクラスの中に飛び込む必要性はもうないような気がした。

Fクラスでも成績は上げられる。それは試召競争に勝つという原動力をバネに総合科目の点数が飛躍的に上がったことで証明されている。

それに、Fクラスに居ればこれからもずっと吉井君の傍にいられるんだし……。

「……………」

アタシは鉛筆を消しゴムに持ち替えて、氏名欄に記入されている自分の名前を「ごしごし」と擦って消した。

これで提出すれば名前無記名でアタシは0点。晴れてFクラスへUターンである。

そもそも、勝手にアタシをAクラスにするとか言って試召競争を起したのは吉井君なんだから、アタシが自分の意思でFクラスに留まるのもアタシの自由じゃないのかしら。

別に敷かれたレールの上を歩く必要なんてない。アタシはアタシのやりたいようにやる。これまでだってアタシはそうして人前で優等生の仮面を被りながら生きてきた

んだから。今回だって――。

☆

それから翌日。

見事Aクラスを手に入れた僕達は一週間という短い期間でありながらも存分に最高設備を満喫していた。

「見てみて美波。この椅子ふつかふかだよ！」

「ジュースも飲み放題！ 冷蔵庫もあるしまさに天国だわ♪」

「……………ノートパソコンがあるのはありがたい。データをすぐにまとめられる」

「リクライニングシートは楽だな。仮眠するにはもってこいだ」

「明久よ。菓子を持ってきたぞい」

「あ、ありがとう秀吉。いっただっきまーす」

秀吉が持つて来たお菓子のなかからポッキーをつまみかりかりと頬張る。

最高だ。この環境、広さ、そしてなによりも豪華な設備！ もう文句の付け所がないぐらい充実している教室はFクラスとは比べ物にならない。まさにこの世の天国と呼ぶべき空間だよ！

「やっぱり広いわねAクラスは。教室に入ってるのはFクラスの頃と同じ人数なのに全然スペースあまりまくってるもの。ちよつと寂しい感じもするけど」

紙コップを片手に美波は周囲を見渡しながらそんな感想を呟いた。

「Aクラスの広さは大体Dクラスの6倍だ。島田がそう感じるのも当然だろう」

「ほんと。Fクラスの頃とは天と地の差だね。僕もここに住みたいぐらいだよ」

「……………快適空間」

「本当じゃのう。Aクラスというのがどれだかすごいのか改めて実感できるのう」

「これであとは鉄人さえいなければなー」

「あはは、そうだねー」

「鉄人じゃない。西村先生と呼べ」

「うわあ!?!」

突然背後から聞こえてきた声に跳びあがる。何だ!?! 敵襲か!!

動揺しながら振り返るとそこにはゴリラのような体躯で腕を組んだ筋肉教師の西村先生が僕を見下ろしていた。

「に、西村先生……………。どうしたんですか? 朝のHRはまだですよね?」

「言っただろう。俺はお前達の監視だど。——まったく、珍しく早く登校したと思ったから予想通り学校の設備でだらけおって。ここはレジャー施設じゃないんだぞ」

「お言葉だが先生。もうすでにこの教室は俺達のもんだ。別に問題を起してはいないんだから自分の教室で何をしようが俺達の自由じゃないのか？」

「坂本、学校は勉強するところだ。設備はあくまで生徒が心地よく勉強できるようにと学校側から配慮して設置されているものなのにそれで墮落していたら本末転倒だろう。それにお前達がまた何か仕出かした場合にはすぐにでも教室の設備の使用を禁じるこゝとが出来ることを忘れないようにな」

「ぐっ」

もってもらしいことを言う先生。おのれ、せっかくの豪華の設備を使わなければ宝の持ち腐れじゃないか。

「——ちなみに吉井。さっきからお前ががつと食っていた飲み物やお菓子類の代金は月末に一括で請求書を送るからな」

「ええ!? これってタダじゃないの!」

「だつたら食べなかつたのに! どうしてもつと早く言わないんだよ畜生!」

「安心しろ。今の冗談だ」

「な、なんだ……よかつた。もう心臓に悪いこと言わないでくださいよ!」

「今の嘘だが学校から出される支給物は無限じゃない。それを心に踏まえながら利用するんだぞ」

「は、はい……」

言いたいことは終わったのか、それから西村先生は僕らに背を向けて教卓の方へ歩いていった。

「くそつ。これじゃまだ何の束縛もなかったFクラスの方が落ち着くぜ」

「まったくだよ」

「でもあと一週間したらウチらはまたFクラスに戻っちゃうんでしょ？ そうしたら西

村先生はそのまま担任を引き継ぐのかしら？」

「そう何度も入れ替えなどせんじやろうからおそらく今のままじやろうな」

「ええ……」

さ、最悪だ……。Fクラスのボロ教室+鬼の鉄人なんてツーコンボ。考えうる限り最低の組み合わせだ。正直生き残れる気がしない。

「ま、仕方ない。これは俺達が望んだ結末だ。そうだろ明久」

「……そうだね」

「……明久は本当にこれでよかったのか？」

「え？ どういうことムツツリーニ？」

神妙で顔をしたムツツリーニに問い返す。

「……別のクラスになったら、木下優子と会う時間も減る」

「あ……」

「優子がいなくなったら寂びしくなっちゃうわね。女子もウチ一人になっちゃったし」

「……………」

結局、僕達を除いた何人かが振り分け試験を受けたけど、優子さん以外は全員Fクラスに戻りになってた。今ここに彼女がいなくてことはきちんとして高い点数を取ってAクラスにいけたってことだろう。良かった。本当によかった。

「うん、ちよつとは寂しいけど。やっぱり優子さんはこのAクラスの充実した設備の中で勉強するべきだよ」

いつもみたいに教室で挨拶ができなくても、一緒に授業を受けることが出来なくても会いに行くことは出来る。優子さんと過ごした想い出は確かにこの胸に残されているんだ。後は僕が我慢すれば良いだけのことなんだからそんなの迷うまでもない。優子さんの為にはそれが一番だ。

「といつても、そいつらは今はFクラスだけだな」

「クラスメイトが変わるだけでも大分違うよ。僕らみたいに勉強出来ないクラスにいるよりはずっと刺激的だと思うな」

「それもそうだな」

「あ……………。明久よ。ちよつと良いかの？」

どこか気まずそうに秀吉は僕の顔を見ながらそう尋ねてきた。

「どうしたの秀吉?」

「姉上のことなんじゃがな。その……」

言い難そうに秀吉は頬を掻く。その時――、

「アタシのことが何ですって?」

「え?」

――教室の扉から、こつんこつんと足音を立てながらこつちに向かって歩いてくる優子さんの姿があった。

目の前の光景に理解が追いつかず意識が抜けかける。頭の中が真っ白になって僕らに近づいてくる彼女の姿を呆然と眺めてしまった。

「ゆ、優子さん! どうしてここに!?!」

「?」 どうしても何も今のFクラスの教室はここなんだから当然でしょ」

さも当然のように言う。いや問題はそこじゃなくて!

「Fクラスって、優子さんはAクラスなれたんじゃないの？」

「明久。それはじゃな！」

「いいわ秀吉。説明はアタシがするから」

口を開いた秀吉を制して、優子さんはまだ驚いている僕に視線を合わせながら話し始めた。

「——先に結果を言うからね。振り分け試験の結果Aクラスにはなることはできたの」

「……へ？」

「試験を受けてる途中はこのままFクラスでもいいかなって思ったんだけど、やっぱりせっかくAクラスにいけるなら行つたほうがお得じゃない？ FよりAの方が教師受けも良いし」

「ちよ、ちよつと待つて！ 話が見えないよ。それじゃあどうして優子さんはここにいの？ Aクラスの人達は今旧校舎の元Fクラスにいるんだよ？」

「だから、Aクラスに入れるんだけど”まだ”Fクラスなのよ」

?? 　まだ？

「……なるほど。そういうことか」

「ええ。貴方の考えてる通りよ坂本君。クラス変更にはいろいろ手続きとか召喚獣関連の設定変更やらで煩雑な作業が必要らしいわ。だからそれが完全に終わるまでアタシ

はFクラスってこと。今まで職員室でその話を聞いてたのよ」

「じゃあ優子はいつAクラスに行くの?」

「予定では一週間で用意が出来るって言ってた。だから少なくともあと一週間はみんなと同じクラスにいることになるわね」

「……………」

思わぬ事態にポカンとする僕。

しかし徐々に気持ちの整理が落ち着いて状況を理解することが出来た。

じゃあ優子さんはFクラスに戻されたんじゃないかと、しばらくFクラスにいるだけなのか。一瞬冷や汗を掻いたけどちゃんとAクラスへの切符は手に入れてたんだ。

「大体、アタシだって苦労して試召戦争を勝ち抜いてきたんだからみんなと一緒にこの設備を使う権利はあるはずでしょ。それとも何? 吉井君はアタシにさっさと出て行けって言いたいわけ?」

「……そんなわけじゃないじゃないか。嬉しいよ。ちよつとでもこうして優子さんと同じ教室で過ごせるなんて」

「そ、そう……。ならいいけど……」

照れくさそうに目を逸らす優子さん。

「うん! 本当に少しだけでもよろしくね。あとAクラス入りおめでとう!」

「——ありがとう。でも今のアタシがあるのは貴方のおかげよ。吉井君。新学期の初日に貴方がアタシに声を掛けてくれたおかげでここまで辿り付けたんだから」

「ううん。違うよ。僕だけじゃなくてここにいるみんなの力だよ」

「……なんだか言い回しが青臭いけど、たしかにその通りね」

「……………ハッピーエンド」

「うむ。そうじゃな」

「つたく、人前で公然と恥ずかしいことを言いやがって」

「しょうがないじゃない。アキはバカなんだから」

「えー、それはひどいよ美波！」

「ふふつ。————本当に、貴方達といると退屈しないわね」

優子さんは首を傾げながら自然な笑顔で僕に微笑みかけてくれた。

……たいへんなことも一杯あったけど、これからもこんな風に彼女の笑顔が見られるならどんな困難だって苦じゃない。

きつとこの先も様々な問題が起ころるだろうけど、優子さんと一緒ならそれすらも楽しいものになるだろうと、そう思った。